

お じま ほん でん い せき
小 島 本 伝 遺 跡 II

— C 地 点 —

あさひ お じま こ ふん ぐん
旭 ・ 小 島 古 墳 群

— 林 6 ・ 7 号 墳 D 地点 —

2 0 1 0

本 庄 市 教 育 委 員 会

序

本庄市は、埼玉県内においても特に数多くの古墳が築かれた地域として知られています。市内には本書で報告する旭・小島古墳群の他にも、埼玉県重要遺跡に選定されている大久保山古墳群、長沖・高柳古墳群、秋山古墳群、生野山古墳群などが所在し、古墳の総数は県内屈指のものであり、全国的にも注目される地域であると言えます。

本書は、個人住宅建設に伴う事前の記録保存を目的として実施した小島本伝遺跡および旭・小島古墳群林地区第6・7号墳の発掘調査の成果を記録したものです。小島本伝遺跡の発掘調査では、古墳時代の中・後期を主体とする集落跡が検出されました。小島本伝遺跡の南西には旭・小島古墳群が広がっていますが、この古墳群を造った集団の居住域は、これまで明らかではありませんでした。このたびの発掘調査によって、小島本伝遺跡における古墳時代集落の広がりが明らかになったことは、旭・小島古墳群の形成に携わった人々の姿を知るうえでも、大きな成果といえます。また、旭・小島古墳群の発掘調査では従前の発掘調査の成果に加え、林地区第6・7号墳の規模の把握に関して更なる情報を得ることが出来ました。

今後は、本書が広く一般に活用されるとともに、文化財保護意識の高揚と地域の歴史に対する理解を深めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、文化財の保護に対する深いご理解とご尽力を賜りました事業者の方々をはじめ、関係諸機関ならびに関係各位、多大なるご協力を頂戴しました地域住民の皆様にごよりの御礼を申し上げます。

平成22年3月

本庄市教育委員会
教育長 茂木孝彦

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市小島字泉坂876番1・877番1・878番1・879番1・880番1に所在する小島本伝遺跡C地点、同市小島字林77番地の一部に所在する旭・小島古墳群林6・7号墳D地点の発掘調査報告書である。
2. 調査地点の名称については、小島本伝遺跡が、昭和32年11月、国道17号線建設に伴う調査及び、平成4年12月7日より市道拡幅工事に先立つ二度の発掘調査が実施されており、平成4年度調査地点をB地点とし報告されている（太田他 2009）ことからこれに倣い、本調査地点をC地点と称する。
旭・小島古墳群については、本報告の2基の古墳が林地区第6・7号墳と称され、かつ各々C地点まで報告されている（太田他 2006）ことからこれに倣い、林6・7号墳D地点と称する。
3. 発掘調査は、個人専用住宅建設に伴う事前の記録保存を目的として実施したものである。
4. 発掘調査及び整理・報告書刊行に要した経費は、国庫補助金・県費補助金・市費である。
5. 発掘調査の期間は以下のとおりである。

小島本伝遺跡 平成19年5月21日～同年8月28日

旭・小島古墳群
林6・7号墳D地点 平成20年9月24日～同年10月3日
6. 発掘調査の担当は、太田博之ならびに大熊季広があたった。
7. 小島本伝遺跡の発掘調査に関する発掘基準点測量、遺構等の測量は株式会社測研に委託した。
8. 報告書刊行のための整理作業及び報告書作成作業は、整理作業参加者の協力を得て、太田・大熊・松本完が行った。
9. 本書の執筆・編集は、整理作業参加者および松本の協力を得て、大熊が行った。
10. 発掘調査及び本書作成にあたって、下記の方々や諸調査機関よりご助言ご協力を賜った。記して感謝いたします。
金子彰男 坂本和俊 外尾常人 田村 誠 中沢良一 長瀧歳康 丸山 修 矢内 勲
11. 本書に関する資料は、本庄市教育委員会が管理・保管する。

12. 本報告の発掘調査、整理調査および報告書編集・刊行に関する本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

発掘調査組織（平成19年度）

主体者	本庄市教育委員会	
	教 育 長	茂木 孝彦
事務局	事 務 局 長	丸山 茂
	文化財保護課	
	課 長	儘田 英夫
	課長補佐兼	鈴木 徳雄
	文化財保護係長	
	埋蔵文化財係	
	係 長	太田 博之
	主 査	恋河内昭彦
	主 任	松澤 浩一
	主 事	松本 完
	臨時職員	的野 善行
調査担当	主 任	大熊 季広

整理・報告書刊行組織（平成20・21年度）

主体者	本庄市教育委員会	
	教 育 長	茂木 孝彦
事務局	事 務 局 長	丸山 茂(平成20年度) 腰塚 修(平成21年度)
	文化財保護課	
	課 長	儘田 英夫
	課長補佐兼	鈴木 徳雄
	文化財保護係長	
	埋蔵文化財係	
	係 長	太田 博之
	主 査	恋河内昭彦
整理協力	主 任	松本 完
	主 任	松澤 浩一
	臨時職員	的野 善行
整理担当	主 査	大熊 季広

凡 例

1. 本書所収の遺跡全測図等におけるX・Y座標値は、世界測地系に基づく。また、各遺構における方位針は、座標北を示す。
2. 本書所収の地図のうち第2図は、1/10,000「本庄市全図」（平成16年発行）を、また第3図は・1/2,500「本庄市都市計画図5・6」（平成10年測量）を、第69図は1/2,500「本庄市都市計画図6」（平成10年測量）をもとに作成した
3. 本報告書の図中における各種遺構の略号は、下記のとおりである。

S I…竪穴住居跡

S K…土坑

S D…溝址

S T…古墳

4. 本報告書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則的に下記のとおりであるが、紙幅の関係からこれに当たらない場合は個別にスケールを付した。

〔遺構図〕

〔遺物図〕

竪穴住居跡…… 1/60

〃 カマド…… 1/30

〃 貯蔵穴…… 1/30

土 坑…… 1/60・1/40

古 墳…… 1/60

ピ ッ ト…… 1/40

土 器…… 1/4

土 製 品…… 1/2

石 製 品…… 1/2

縄文土器…… 1/3

弥生土器…… 1/3

5. 遺構断面図の水準数値は海拔高度を示し、その単位はmである。
6. 遺構断面図のスクリーントーンは、地山を示す。
7. 観察表におけるNo. 欄における数値は、各遺物中の番号・各遺物出土状況図中の番号、遺物写真図版中の番号に、それぞれ対応している。
8. 観察表中の単位は、法量がcm、重さはgである。また「-」は計測不能を、（ ）内の数値は残存値を示している。
9. 観察表中の胎土・色調欄における鉱物等の略号は下記のとおりであり、その含有量については、多量・中量・少量・微量をそれぞれ、多・中・少・微と略した。また、内・外はそれぞれ器外面・器内面を示している。
片：片岩、白：白色粒子、F e：鉄班粒、石：石英粒、雲：雲母粒、角：角閃石、M n：マンガン粒、白針：白色針状物質
10. 観察表中の備考欄における「残」は、残存率を示し、完形品を指標としたその比率値である。

目 次

序

例 言

凡 例

第 I 章	発掘調査に至る経緯	1
	第 1 節 小島本伝遺跡C地点	1
	第 2 節 旭・小島古墳群 林6・7号墳D地点	2
第 II 章	遺跡に地理的・歴史的環境	3
	第 1 節 地理的環境	3
	第 2 節 歴史的環境	4
第 III 章	小島本伝遺跡C地点の調査	8
	第 1 節 遺跡の概要	8
	第 2 節 検出された遺構と遺物	10
	1. 竪穴式住居跡	10
	2. 土 坑	34
第 IV 章	旭・小島古墳群林地区の調査	88
	第 1 節 遺跡の概要	88
	第 2 節 検出された遺構と遺物	89
	1. 古 墳	89
	2. 土 坑	94
	3. ピ ッ ト	96
第 V 章	ま と め	98
	参考文献	99

写 真 図 版

報 告 書 抄 録

挿 図 目 次

第 1 図 埼玉の地形…………… 3	第26図 第12号住居跡遺物出土状況図…………… 29
第 2 図 周辺の遺跡…………… 5	第27図 第12・13号住居跡掘り方平面・断面図…………… 30
小島本伝遺跡C地点	第28図 第12号住居跡出土遺物…………… 31
第 3 図 小島本伝遺跡の位置…………… 7	第29図 第14号住居跡平面・断面図、 遺物出土状況図…………… 33
第 4 図 小島本伝遺跡B・C地点全測図…………… 8	第30図 第14号住居跡床下土坑平面・断面図…………… 33
第 5 図 小島本伝遺跡C地点全測図…………… 9	第31図 第14号住居跡出土遺物…………… 34
第 6 図 第8・17号住居跡平面・断面図…………… 11	第32図 第14号住居跡掘り方平面・断面図…………… 34
第 7 図 第8・17号住居跡掘り方平面図、 第8号住居跡カマド平面・断面図、 第17号住居跡貯蔵穴平面・断面図…………… 12	第33図 第10～13号土坑平面・断面図…………… 35
第 8 図 第8号住居跡遺物出土状況図…………… 13	第34図 第14～17号土坑平面・断面図…………… 37
第 9 図 第8号住居跡出土遺物…………… 13	第35図 第18～21号土坑平面・断面図…………… 39
第10図 第17号住居跡出土遺物…………… 14	第36図 第22～25号土坑平面・断面図…………… 40
第11図 第9・16号住居跡平面・断面図…………… 15	第37図 第26～30号土坑平面・断面図…………… 42
第12図 第9号住居跡カマド平面・断面図、 貯蔵穴平面・断面図…………… 16	第38図 第31～34号土坑平面・断面図…………… 43
第13図 第9号住居跡遺物出土状況図…………… 16	第39図 第35～38号土坑平面・断面図…………… 45
第14図 第9・16号住居跡掘り方平面・断面図…………… 17	第40図 第39～42号土坑平面・断面図…………… 46
第15図 第9号住居跡出土遺物（1）…………… 18	第41図 第43～46号土坑平面・断面図…………… 48
第16図 第9号住居跡出土遺物（2）…………… 19	第42図 第47～50号土坑平面・断面図…………… 50
第17図 第10号住居跡平面・断面図…………… 22	第43図 第51～54号土坑平面・断面図…………… 51
第18図 第10号住居跡掘り方平面図…………… 22	第44図 第55～58号土坑平面・断面図…………… 53
第19図 第11・15号住居跡平面・断面図…………… 23	第45図 第60号土坑出土遺物…………… 54
第20図 第11・15号住居跡掘り方平面・断面図…………… 24	第46図 第59～62号土坑平面・断面図…………… 55
第21図 第11・15号住居跡遺物出土状況図…………… 25	第47図 第63～66号土坑平面・断面図…………… 57
第22図 第11号住居跡出土遺物…………… 25	第48図 第67～70号土坑平面・断面図…………… 58
第23図 第15号住居跡出土遺物…………… 26	第49図 第71～73号土坑平面・断面図…………… 60
第24図 第12・13号住居跡平面・断面図…………… 27	第50図 第74～77号土坑平面・断面図…………… 61
第25図 第12号住居跡カマド平面・断面図、 貯蔵穴平面・断面図…………… 28	第51図 第78～81号土坑平面・断面図…………… 63
	第52図 第82～84号土坑平面・断面図…………… 64
	第53図 第85号土坑出土遺物…………… 65
	第54図 第85・86号土坑平面・断面図…………… 66
	第55図 第88号土坑出土遺物…………… 67

第56図	第87・123、88・89号土坑平面・断面図	68	旭・小島古墳群 林6・7号墳D地点
第57図	第90～93号土坑平面・断面図	70	第69図 調査地点の位置
第58図	第94～97号土坑平面・断面図	71	第70図 林4・6・7号墳位置図
第59図	第98～101号土坑平面・断面図	73	第71図 調査区全測図
第60図	第102～105号土坑平面・断面図	74	第72図 林6号墳周溝平面図
第61図	第106～109号土坑平面・断面図	76	第73図 林6号墳周溝等高線図
第62図	第110～112号土坑平面・断面図	77	第74図 林6号墳周溝断面図
第63図	第113～116号土坑平面・断面図	79	第75図 林7号墳周溝平面・等高線図
第64図	第117～120号土坑平面・断面図	80	第76図 林7号墳周溝断面図
第65図	第121号土坑平面・断面図	81	第77図 第1号土坑平面・断面図
第66図	遺構外出土遺物（1）	83	第78図 第2号土坑平面・断面図
第67図	遺構外出土遺物（2）	85	第79図 第3号土坑平面・断面図
第68図	遺構外出土遺物（3）	86	第80図 第1～6号ピット平面・断面図

挿 表 目 次

小島本伝遺跡C地点

第1表	第8号住居跡出土遺物観察表	13	第8表	第12号住居跡出土遺物観察表（1）	31
第2表	第17号住居跡出土遺物観察表	14	第9表	第12号住居跡出土遺物観察表（2）	32
第3表	第9号住居跡出土遺物観察表（1）	19	第10表	第14号住居跡出土遺物観察表	34
第4表	第9号住居跡出土遺物観察表（2）	20	第11表	第60号土坑出土遺物観察表	54
第5表	第9号住居跡出土遺物観察表（3）	21	第12表	第85号土坑出土遺物観察表	65
第6表	第11号住居跡出土遺物観察表	25	第13表	第88号土坑出土遺物観察表	67
第7表	第15号住居跡出土遺物観察表	26	第14表	遺構外出土遺物観察表	86

図 版 目 次

小島本伝遺跡C地点

図版 1	小島本伝遺跡C地点遠景 (1) (北東から)	図版12	第16号住居跡完掘状況 (3) (南から)
	小島本伝遺跡C地点遠景 (2) (北東から)		第16号住居跡完掘状況 (4) (西から)
	小島本伝遺跡C地点遠景 (3) (東から)	図版13	土坑群遠景 (西から)
図版 2	小島本伝遺跡C地点全景 (1) (南から)		第11・12号土坑完掘状況 (東から)
	小島本伝遺跡C地点全景 (2) (北西から)		第14号土坑完掘状況 (1) (東から)
図版 3	第8号住居跡遺物出土状況 (1) (南から)	図版14	第14号土坑完掘状況 (2) (南から)
	第8号住居跡遺物出土状況 (2) (東から)		第18号土坑完掘状況 (東から)
	第8号住居跡カマドA-A' 断面 (南から)		第21号土坑完掘状況 (東から)
図版 4	第8号住居跡カマド遺物出土状況 (南から)	図版15	第25号土坑完掘状況 (東から)
	第9号住居跡A-A' 断面 (西から)		第26号土坑完掘状況 (東側) (東から)
	第9号住居跡B-B' 断面 (南から)		第28号土坑完掘状況 (南から)
図版 5	第9号住居跡遺物出土状況 (1) (西から)	図版16	第32号土坑完掘状況 (南から)
	第9号住居跡遺物出土状況 (2) (南から)		第34 (左)・35 (右) 号土坑完掘状況 (南から)
	第9号住居跡遺物出土状況 (3) (東から)		第38 (前)・40 (奥) 号土坑完掘状況 (東から)
図版 6	第9号住居跡遺物出土状況 (4) (南から)	図版17	第39号土坑完掘状況 (東から)
	第9号住居跡完掘状況 (1) (西から)		第42 (左)・43 (右) 号土坑完掘状況 (東から)
	第9号住居跡完掘状況 (2) (西から)		第48号土坑完掘状況 (西から)
図版 7	第10・14号住居跡完掘状況 (西から)	図版18	第49号土坑完掘状況 (南から)
	第11号住居跡A-A' 断面 (南から)		第50 (前)・51 (奥) 号土坑完掘状況 (南から)
	第11号住居跡遺物出土状況 (西から)		第52号土坑完掘状況 (中央奥) (南から)
図版 8	第12号住居跡遺物出土状況 (1) (南から)	図版19	第49号土坑完掘状況 (南から)
	第12号住居跡遺物出土状況 (2) (東から)		第54 (右)・55 (左) 号土坑完掘状況 (南から)
	第12号住居跡カマド遺物出土状況 (南から)		第56号土坑完掘状況 (南から)
図版 9	第12・13号住居跡完掘状況 (南から)	図版20	第59号土坑完掘状況 (東から)
	第14号住居跡A-A' 断面 (南から)		第60号土坑完掘状況 (南から)
	第14号住居跡B-B' 断面 (東から)		第61号土坑完掘状況 (南から)
図版10	第14号住居跡完掘状況 (西から)	図版21	第62号土坑完掘状況 (南から)
	第15号住居跡遺物出土状況 (1) (東から)		第63号土坑完掘状況 (南から)
	第15号住居跡遺物出土状況 (2) (南から)		第64 (前)・65 (奥) 号土坑完掘状況 (南から)
図版11	第15号住居跡遺物出土状況 (3) (東から)	図版22	第65号土坑完掘状況 (南から)
	第16号住居跡完掘状況 (1) (西から)		第66号土坑完掘状況 (南から)
	第16号住居跡完掘状況 (2) (東から)		第68号土坑完掘状況 (東から)

図版23	第69号土坑完掘状況 (中央縦位)	(南から)	図版34	第115号土坑完掘状況	(東から)
	第70号土坑完掘状況	(南から)		第116号土坑完掘状況	(南から)
	第72・73 (右奥) 号土坑完掘状況	(南から)		第118号土坑完掘状況	(南から)
図版24	第76号土坑完掘状況	(南から)	図版35	第119号土坑完掘状況	(東から)
	第77号土坑完掘状況	(南から)		第120号土坑完掘状況	(南から)
	第78号土坑完掘状況	(東から)		第121号土坑完掘状況	(南から)
図版25	第79 (中央)・80 (前右)・76 (前左) 号土坑完掘状況	(南から)	図版36	第8・9号住居跡出土遺物	
	第80号土坑完掘状況	(南から)	図版37	第9・11号住居跡出土遺物	
	第81号土坑完掘状況	(南から)	図版38	第11号住居跡出土遺物	
図版26	第83号土坑完掘状況	(南から)	図版39	第17号住居跡・土坑・遺構外出土遺物 (1)	
	第84号土坑A-A' 断面	(東から)	図版40	遺構外出土遺物 (2)	
	第84号土坑完掘状況	(東から)	旭・小島古墳群 林6・7号墳D地点		
図版27	第85号土坑遺物出土状況	(東から)	図版41	表土除去作業風景	(北東から)
	第88号土坑完掘状況	(南から)		遺構確認状況	(東から)
	第89号土坑完掘状況	(北から)		調査区全景	(西から)
図版28	第90号土坑完掘状況	(東から)	図版42	林6号墳周溝完掘状況 (1)	(西から)
	第93号土坑遺物出土状況	(南から)		林6号墳周溝完掘状況 (2)	(南西から)
	第96号土坑完掘状況	(南から)		林6号墳周溝完掘状況 (3)	(南西から)
図版29	第98号土坑完掘状況	(東から)	図版43	林6号墳周溝A-B断面 (1)	(南から)
	第99号土坑完掘状況	(南から)		林6号墳周溝A-B断面 (2)	(西から)
	第100号土坑完掘状況	(北から)		林6号墳周溝B-C断面	(西から)
図版30	第101号土坑完掘状況	(南から)	図版44	林7号墳周溝完掘状況 (1)	(北西から)
	第102号土坑完掘状況	(東から)		林7号墳周溝完掘状況 (2)	(西から)
	第105号土坑完掘状況	(西から)		林7号墳周溝完掘状況 (3)	(北から)
図版31	第106号土坑完掘状況	(南から)	図版45	第1号土坑A-A' 断面	(東から)
	第107号土坑完掘状況	(南から)		第1号土坑完掘状況	(東から)
	第108号土坑A-A' 断面	(東から)		第2号土坑A-A' 断面	(東から)
図版32	第108 (前)・109 (奥) 号土坑完掘状況	(南から)	図版46	第2号土坑遺物出土状況	(東から)
	第109号土坑完掘状況	(南から)		第2号土坑完掘状況	(東から)
	第110号土坑完掘状況	(西から)		第3号土坑A-A' 断面	(北から)
図版33	第112号土坑完掘状況	(南から)	図版47	第1号ピットA-A' 断面	(南から)
	第113号土坑完掘状況	(東から)		第3号ピットA-A' 断面	(西から)
	第114号土坑完掘状況	(東から)		調査風景	(南西から)

第 I 章 発掘調査に至る経緯

第 1 節 小島本伝遺跡 C 地点

平成18年4月3日、株式会社山東電業所 代表取締役社長 小林正幸氏より本庄市小島字泉坂876番1ほか6筆の土地、合計2,193㎡に事業所の計画があり、これにかかる『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』の照会文書が、本庄市教育委員会に提出された。これを受け、市教育委員会は埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに、同地が埋蔵文化財包蔵地に該当しているかどうか、確認を行った。これにより、照会地には周知の埋蔵文化財包蔵地 小島本伝遺跡 (No. 53-008) が所在することが判明した。

小島本伝遺跡は昭和32年11月、国道17号線建設に伴う掘削により古墳時代の竪穴住居跡が発見され、緊急の発掘調査が実施されている。また平成4年12月に市道拡幅工事に先立ち、本庄市教育委員会による発掘調査が行われている。これらの発掘調査の成果から、小島本伝遺跡は古墳時代の集落遺跡であるとともに、中世の遺構も確認された複合遺跡であることが知られていた。しかも照会のあった建設予定地は、平成4年度調査地点の東側隣地に相当し、その地形から古墳時代集落が続いているものと予想された。

市教育委員会では、上記のような状況をふまえ当該事業計画地について遺跡保護のための基礎資料を得るために試掘調査を行うこととし、平成18年5月9日から同10日まで現地調査を実施した。その結果当該埋蔵文化財包蔵地において、複数の古墳時代の竪穴住居跡や、多数の土坑等を検出した。

本庄市教育委員会では、以上の試掘調査の成果に基づき『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』を回答するとともに、1. 協議のあった土地については、周知の埋蔵文化財包蔵地である小島本伝遺跡が所在することから現状保存が望ましいこと、2. やむを得ず現状変更を実施する場合には、文化財保護法第93条第1項の規定により『埋蔵文化財発掘の届出』を埼玉県教育委員会に提出すること、3. 『埋蔵文化財発掘の届出』を提出の後は、埼玉県教育委員会の指示に従い当該埋蔵文化財の保護に万全を期すこと、4. 本回答後は、関係機関との協議を徹底することの旨を通知した。

その後、当該地を新たに取得し個人専用住宅建設を計画している五十嵐幸雄氏により、平成18年6月28日に『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』の照会文書が、本庄市教育委員会に提出された。この計画では、建設予定地を約1m掘削造成し、その後に個人住宅を建設する予定であった。建設予定地は、国道17号及び主要県道藤岡・本庄線建設による掘削の結果、孤島状に突出している状況であった。このため、日常的な利用の支障を回避するため掘削造成工事を行う計画であった。

これを受け、市教育委員会は先の試掘調査結果等をふまえ、五十嵐氏に『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』を回答するとともに数度にわたり協議し、現状で保存できるよう調整を行った。この協議の結果、工事計画の変更は困難であるとの結論に達し、やむを得ず発掘調査を実施し記録保存することとなった。平成18年8月1日付けで、五十嵐氏より『埋蔵文化財発掘の届出』が提出され、本庄市教育委員会ではこれを受けて、同届出を本教文保発第181号で埼玉県教育委員会あてに進達した。また平成19年5月11日付け本教文保発第54号で本庄市教育長から『埋蔵文化財発掘調査の通知』が埼玉県教育委員会に提出された。平成18年8月14日付け教生文第3-522『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』の通知があった。

第2節 旭・小島古墳群 林6・7号墳D地点

平成20年8月12日、長戸健一氏より個人専用住宅建設を予定している本庄市小島字林77番地の一部にかかる『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』の照会文書が、本庄市教育委員会に提出された。これを受け、市教育委員会は埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに、同地が埋蔵文化財包蔵地に該当しているかどうか、確認を行った。これにより、照会地には周知の埋蔵文化財包蔵地 旭・小島古墳群 (No. 53-171) が所在することが判明した。照会地はまた、その東側隣接地と南側の区画道路及びさらに南側の区域が調査され、これらの発掘調査の成果から林第6・7号墳(方墳)の周溝が及んでいることが予想された。

市教育委員会では、上記のような状況をふまえ当該事業計画地について、遺跡保護のための基礎資料を得るために試掘調査を行うこととし、平成20年9月5日に現地調査を実施した。その結果当該埋蔵文化財包蔵地において、林6号墳周溝の南辺の一部及び同7号墳周溝北辺の一部を検出した。

以上の試掘調査の成果に基づき、本庄市教育委員会では『埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』を回答するとともに、1. 協議のあった土地については、周知の埋蔵文化財包蔵地である小島本伝遺跡が所在することから現状保存が望ましいこと、2. やむを得ず現状変更を実施する場合には、文化財保護法第93条第1項の規定により『埋蔵文化財発掘の届出』を埼玉県教育委員会に提出すること、3. 『埋蔵文化財発掘の届出』を提出の後は、埼玉県教育委員会の指示に従い当該埋蔵文化財の保護に万全を期すこと、4. 本回答後は、関係機関との協議を徹底することの旨を通知した。

その後、長戸氏により地盤調査が実施され、その結果建築予定箇所の東側の地耐力の不足からこの部分の沈降が予想されるため、基礎部の設計が変更になったとの連絡があり、変更部分の設計図面の提出を受けた。この計画図によれば、建築予定区域全域にわたり、地下2mに及ぶ直径60cmの柱状改良を合計36箇所行う計画であった。

これを受け保存に向けた協議が行われ、敷地内における建設予定箇所の変更も検討されたが、予定箇所が最も遺構の該当する面積が少ない場所であることが予想され、他所の適地が無いこと、また地盤強度の問題から設計の変更は困難であるとの結論に達した。

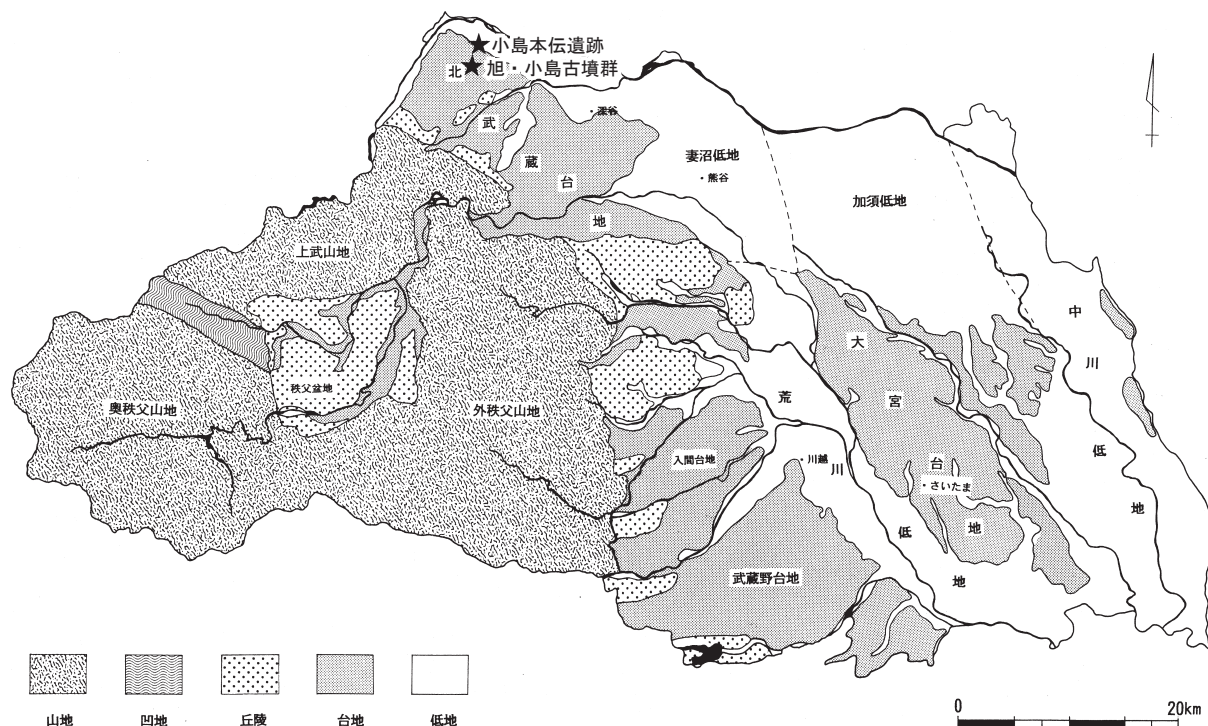
平成20年8月15日付けで、長戸氏より『埋蔵文化財発掘の届出』が提出され、本庄市教育委員会ではこれを受けて、同届出を本教文保発第135号で埼玉県教育委員会あてに進達した。また同年9月19日付け本教文保発第136号で本庄市教育長から『埋蔵文化財発掘調査の通知』が埼玉県教育委員会に提出された。平成19年9月29日付け教生文第5-614『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』の通知があった。

(本庄市教育委員会事務局)

第Ⅱ章 遺跡の地理的歴史的環境

第1節 地理的環境

本書で報告する小島本伝遺跡C地点および旭・小島古墳群林6・7号墳D地点は、JR高崎線本庄駅のそれぞれ北西方向約2.1kmと約2.9kmに位置している。両遺跡の所在する本庄市は埼玉県の北西部に位置し、東側は深谷市および児玉郡美里町と、西側は児玉郡神川町、南側は秩父郡皆野町および長瀨町、北西側は児玉郡上里町、北側は利根川を挟んで群馬県伊勢崎市と接している。本庄市の地形は、南東部分の山地および丘陵、中央部分に相当する児玉市街地から本庄市街地にかけての台地、北東部分の利根川右岸に展開する低地に大別される。市域における山地部分は、上武山地と呼称される。この上武山地は群馬県西南部の赤久縄山を中心とする地域と、埼玉県北西部の標高1,037.7mの城峯山を主峰とする地域の総称であり、南東から北西方向へと展開しているものである。丘陵部は上武山地裾部より南西から北東方向へと半島状に延び、児玉丘陵と呼称される。この児玉丘陵の延長には第3紀に形成された生野山丘陵・大久保山丘陵が列点状に並んでいる。台地部は、身馴川扇状地と神流川扇状地の複合地形であり、本庄台地と呼称されている。身馴川扇状地は北西側を、残丘状をなす生野山・大久保山丘陵に、南東側は松久丘陵および櫛引台地によって画されている。神流川扇状地は、群馬県藤岡市浄法寺付近に扇頂点をとり、扇端部は、児玉郡上里町金久保から本庄市鶴森にかけて段丘崖となり、低地へと移行している。低地部は、利根川の氾濫による自然堤防が発達し、同川下流の妻沼低地、加須低地へと続いている。本書で報告する小島本伝遺跡は、利根川右岸の低地および群馬県伊勢崎市および赤城山を望む、本庄台地の段丘崖上に所在している。また旭・小島古墳群は、本庄台地扇端部に沿って展開している。



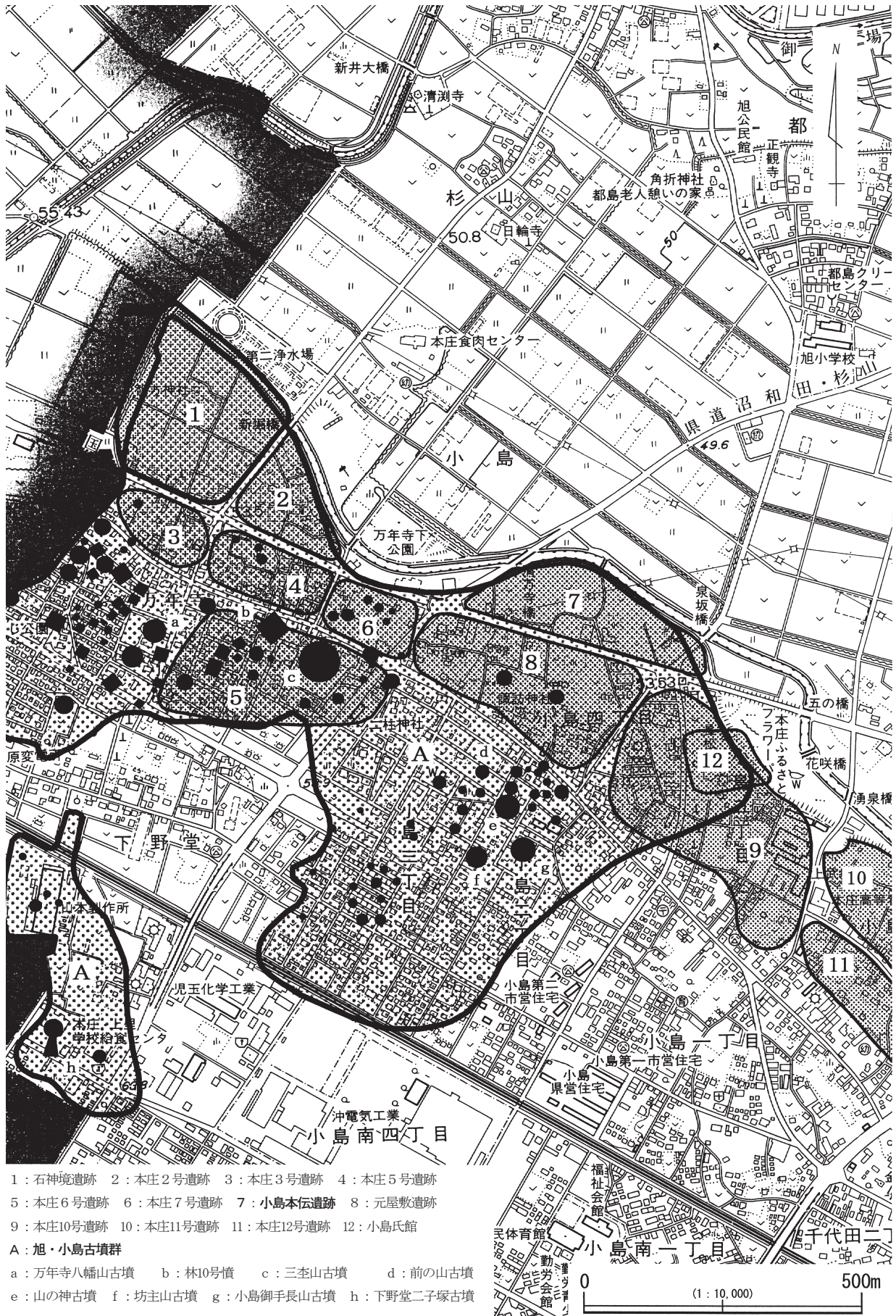
第1図 埼玉県の地形

第2節 歴史的環境

本書で報告する小島本伝遺跡は、古墳時代を主体とする集落遺跡であるが、今回の調査区内からは明確な遺構に伴わないものの、弥生時代の遺物も検出されている。周辺の弥生時代遺跡は、本庄市域内においては相対的に少ないながらも、中期は低地から丘陵部を、後期は丘陵およびその裾部に占地する傾向が窺える。弥生時代中期の遺跡は、低地部においては今井条里遺跡、本庄台地上の夏目西遺跡、大久保山残丘上の大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区において土坑および土坑群が検出されている。また、今回報告の小島本伝遺跡と同様に、遺物のみが確認されている遺跡として四方田遺跡、笠ヶ谷戸遺跡、児玉清水遺跡が確認されている。後期の遺跡は、大久保山残丘上の大久保山遺跡および同遺跡浅見山Ⅰ地区、塚本山遺跡、生野山残丘上の生野山遺跡、また大久保山残丘裾部の山根遺跡、飯玉東遺跡、雷電下遺跡等があげられる。これらの遺跡は、小規模かつ短期的な集落遺跡であり、大久保山遺跡・生野山遺跡からは、吉ヶ谷式土器が、山根遺跡・飯玉東遺跡からは樽式土器が、また塚本山遺跡からは二軒屋式土器が出土しており、該期における人・物の活発な移動、或いは交渉の様子が窺える。

古墳時代に至ると、集落遺跡の形成は前代と比較して急激な増加傾向を見せ、その占地も台地縁部と低地内の自然堤防、微高地上へと移動する。これらの集落遺跡からは、畿内系および東海西部系の外来系土器が出土し、その立地と併せて前時代からの一定の乖離が窺える。これらのことから生産基盤の整備・獲得および水田経営の新技术を有する集団の存在と、地域社会の再編成が推定されている（恋河内 1992）。

古墳時代前期の集落には後張遺跡、川越田遺跡、飯玉東遺跡、西富田・四方田条里遺跡、下田遺跡、七色塚遺跡、久下東遺跡、久下前遺跡、北堀新田遺跡等があげられる。さらに古墳時代中期には、前期から引き続き継続する集落と、女堀河左岸の微高地および台地内奥部に、新たに展開する集落が出現する。これらの集落遺跡には、雌濠遺跡、笠ヶ谷戸遺跡、弥藤次遺跡、夏目遺跡、夏目西遺跡、二本松遺跡、西富田新田遺跡等があげられる。本書で報告する小島本伝遺跡もその一つと考えられる集落遺跡である。該期の集落はいずれも、集落内における住居軒数がさらに増加し、この傾向は古墳時代後期へと継続するものが多い。このような現象は、古墳時代前期における生産基盤の整備・拡充からなる安定した地域社会の形成と人口の増加、そしてそれを背景とし、更なる生産基盤の獲得のための集落の拡散・拡大と捉えられよう。このような、従前において開拓されえなかった地域への進出はまた、それを可能とする新たな技術や道具の獲得をも想起させるものである。夏目遺跡においては、鍛冶に関する遺構や遺物、さらに畿内系土器や朝鮮半島系模倣土器が検出され、遠隔地との交渉の存在が推定されている。このような背景から、当該期において従前では成し得なかった、未開拓地の開発が進行したものと考えられる。集落内部に目を向けると、中・後期の集落遺跡は、各堅穴住居が重複或いは近接して検出される傾向が指摘できる。これらの集中する住居のあり方は、金佐奈遺跡等において見られるように、一定の空閑地を有し、この空閑地の間に住居跡が重複・近接して営まれるものと、空閑地を有さずに、住居が重複・近接するものとが認められる。前者のあり方は、空閑地によって画された、一定の継続的な居住集団が占有しうる空間と捉えることができ、なおかつこの空閑地を越えることの成しえない隣接集団との関係性、換言すれば、血縁的な一定の乖離を表象するものであろう。そして後者のあり方は、空閑地を必要としない集団の関係性、すなわち境界を必要としない集団の親和性を現すものと考えられ、近親的或いは血族的な集団として捉えることができよう。

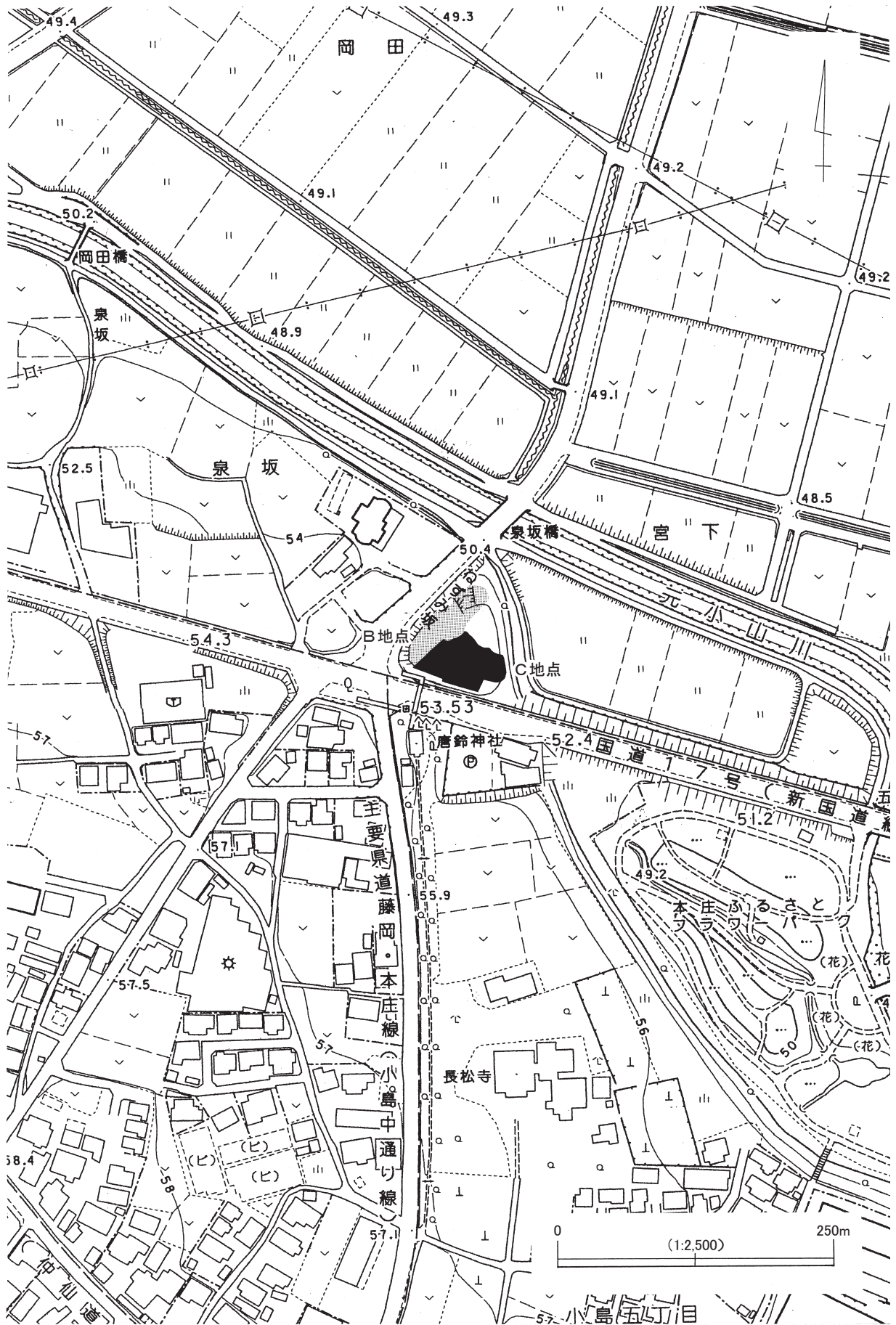


第2図 周辺の遺跡

ここで、旭・小島古墳群周辺の集落遺跡を見てみよう。古墳群の北方向から南東方向にかけての台地端部および段丘崖上に、石神境遺跡、本庄2～7号遺跡、小島本伝遺跡、元屋敷遺跡、本庄10～12号遺跡が所在している。これらのうち、本庄2号遺跡、本庄3号遺跡、小島本伝遺跡、本庄10号遺跡、本庄11号遺跡、本庄12号遺跡が古墳時代の集落であり、石神境遺跡、本庄5・6・7号遺跡は奈良・平安時代の集落遺跡である。これらの台地端部に占地する集落は、眼下に見下ろす利根川右岸の低地を、その生産基盤とする集団によって営まれたものと考えられるものである。

古墳時代の集落遺跡は、その分布状況から旭・小島古墳群北西側に位置する本庄2・3号遺跡と、同北東側に位置し、かつ小島本伝遺跡を最西とし、さらに南東方向へとつづく本庄10・11・12号遺跡に大別されよう。本庄2号遺跡と小島本伝遺跡間の距離は約250mを測り、この部分の地形は、現在においても元小山川の蛇行流路が台地部分入り込んでおり、これより南東側の台地端部は急峻な段丘崖を形成している。ところで、旭・小島古墳群はこれまでの試掘調査及び発掘調査の成果から、分布域の中央部に南南西から北北東方向へと伸びる埋没谷が存在することが明らかとなっており、古墳群の分布域はこの埋没谷を挟み、対峙するかのごとく大きく東西の二群に分かれていることが判明している。この旭・小島古墳群を画する埋没谷流末は、先に触れた古墳および集落遺跡の分布と併せ、旧中仙道と蛭子塚通り線との交差点の東側および国道17号線杉山交差点付近の台地上の等高線が、南側に入り込むように湾曲することから本庄2号遺跡から小島本伝遺跡の間と推定される。この埋没谷の東西に分かれた古墳群とその集落（群）は、それぞれの墓域とその造墓集団として捉えられるものであろう。西側の集落（群）はまた、その墓域の規模を勘案するならば、矮小と言わざるを得ないことから、さらに西側の児玉群上里町内に展開するものと推定される。

このような、集落遺跡の展開に併せ、古墳時代前期～中期からの墳墓の築造も活発に行われ、さらに後期へと継続している。墓域は、低地中の微高や丘陵上、或いは台地上に選地され、墳形も方形周溝墓や前方後方墳・前方後円墳および方墳等が築造される。女堀川中流域の微高地に築造された児玉地方において最古の古墳とされる鷲山古墳は、全長60mの前方後方墳である。大久保山丘陵上には、全長70mを測る前方後円墳である前山1号墳、これに続く、一辺43mの方墳である前山2号墳（5世紀前半）が築かれている。前山1・2号墳の北東方向の、北側へと樹枝状に伸びる尾根上に立地する宥勝寺北裏遺跡においては、7基の方形周溝墓が検出されている。また、前山1・2号墳の北西方向の丘陵上から裾部にかけて展開する大久保山遺跡浅見山I地区からは、11基の方形周溝墓が検出されている。女堀川下流域の、低地内の微高位に占地する北堀新田前遺跡では、前方後方形周溝墓1基および方形周溝墓2基が調査されている。中期には、この北堀新田遺跡の北西方向約600mの地点に、直径65mの円墳とされる公卿塚古墳が出現し、東富田古墳群の形成が始まる。同様に大久保山古墳群、塚本山古墳群などの群集墳の形成が開始され、終末期まで継続する。本書で報告する旭・小島古墳群の形成は、先述した西群中の方墳群の築造をもって開始されると考えられる。これらの方墳群の分布は西群中の林地区および杉ノ根地区に限定され、その始原は、出土遺物から一辺25mを測る万年寺つつじ山古墳に求められ、刀子、斧、直刃鎌、短冊形鉄斧などの石製模造品から前期末から中期初頭と考えられている。西群では、前方後円墳・帆立貝式古墳・円墳・方形墳（方墳）等の多様な形態の古墳の造営が継続し、奈良時代においても追加的な埋葬行為が確認にされている。本書所収の林6号墳は、林地区に所在し先述した、古墳群形成開始期の方墳群中の一基である。



第3図 小島本伝遺跡の位置

第三章 小島本伝遺跡C地点の調査

第1節 遺跡の概要

小島本伝遺跡は、本庄台地北端部の段丘崖上に相当し、南東から北西方向460m、北東から南西方向140mを測り、面積は約32,200㎡である。遺跡は直線的に走る国道17号から北側の、隅丸三角形形状を呈する。付近の標高は53.5～55mを測り、北側の元小山川・利根川により解析された低地帯との比高差は10～11mであり、さらに北側の赤城山南麓をも広く見渡せる、眺望に富む地点に位置している。本書で報告するC地点は、遺跡の南東端部を占めている。

本遺跡のこれまでの調査は、昭和32年11月頃国道17号線建設に伴う掘削により、竪穴住居跡が発見されたことに始まる。この調査では工事の合間を縫い、住居跡1軒が調査されている。これとは別に、前述住居跡の西約6mの地点で、古式土師器2点が発見されていることから、当該工事部分において2軒の古墳時代の竪穴住居跡が検出されている。(A地点)〔註1〕

平成4年12月7日より市道拡幅工事に先立ち、発掘調査が実施されている(B地点)。この調査では古代の竪穴住居跡5軒、土坑9基、溝跡5条、性格不明遺構1基が検出されている。〔註2〕

今回報告する調査地点は、上述したB地点の南東に位置している。検出された遺構は、古墳時代の竪穴住居跡10軒、土坑112基である。竪穴住居跡は、調査区中央西側から調査区東側にかけて、検出されている。これらの竪穴住居跡は、南北方向の一定の空閑地を介しながら集中して群在する傾向を見せ、重複した状態で検出されている(第4図 SI-9・16、SI-8・10・12～14、SI-11・15)。

このような一定な区域に偏在する竪穴住居跡群の在り方は、B地点においても、重複しない(同図 SI-7)、もしくはその可能性を残す住居跡(同図SI-3)はあるものの、同様と指摘出来よう(同図SI-4～6)。

土坑は、調査区南西側に集中して検出され、調査区中央から東側にかけては、散在して検出されている。

B地点においては散在する傾向を見せ、本地点南西部に特有の土地利用意識を見出すことが出来よう。これらの集中する土坑群は、長軸を北西から南東方向に有するものと、これとはほぼ直行し、長軸を北東から南西に有するものと大別されよう。また、覆土の観



第4図 小島本伝遺跡B・C地点全測図



第5図 小島本伝遺跡C地点全測図

察から人為的に埋め戻されたものと考えられるものである。各土坑の切りあい関係からは、古いものから新しいものへの主軸方位の変換といった一定の法則性は見出せず、作為的に場所・方位を変えて掘削が行われたものである。このような行為はどのような理由からなされたのであろうか。掘削後に時間を経ずして、短期間のうちに埋め戻されるものであれば同一場所あるいは同様の場所での同一方向の掘削がなされるであろう。しかしながら、掘削後一定期間埋め戻されず空間として利用される場合は、壁体の保持が要求されよう。厳密に同一場所を再掘削するのであれば問題は生じないであろうが、同様の場所での同一方向の掘削は、必然的に壁体強度の弱体化を招く。このことから本土坑群の、作為的に場所・方位を変えて掘削するという行為は、土坑の一定期間の空間的利用を前提とし、かつ限られた区域内において、埋め戻し後ある一定の期間は考慮されるものの、継続的に掘削される土坑の壁体の弱体化を最小限に抑制する目的と、合わせて前回の掘削位置情報の維持の元に成された行為といえよう。

なお、本書で報告する遺構番号は、B地点からの通し番号となっている。

〔註1『本庄市史 資料編』S51・3・30〕〔註2『雌濠Ⅱ・笠ヶ谷戸・小島本伝』本庄市教育委員会 2009〕

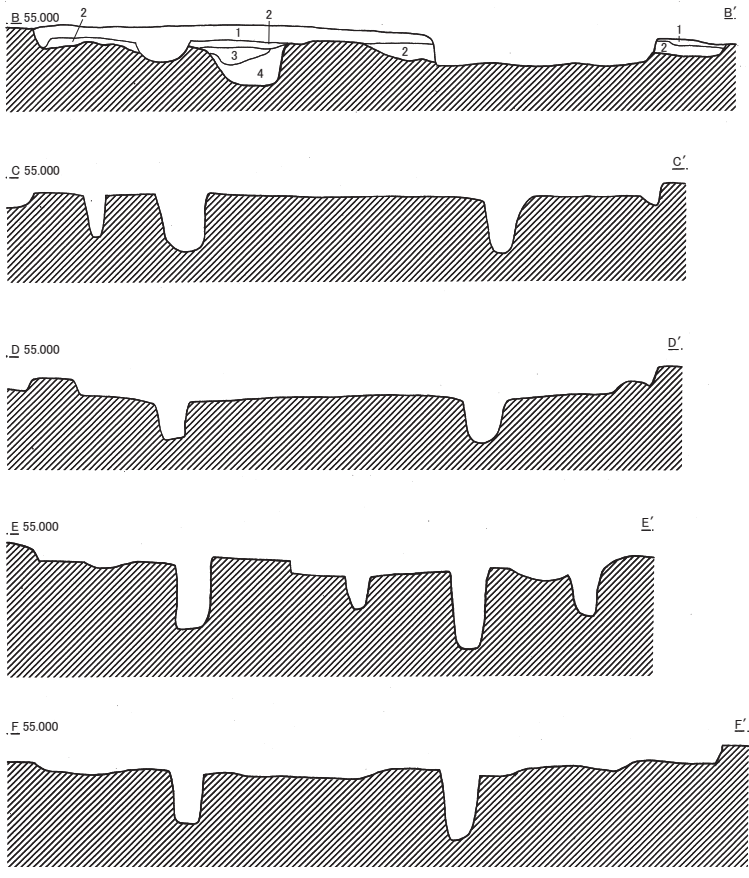
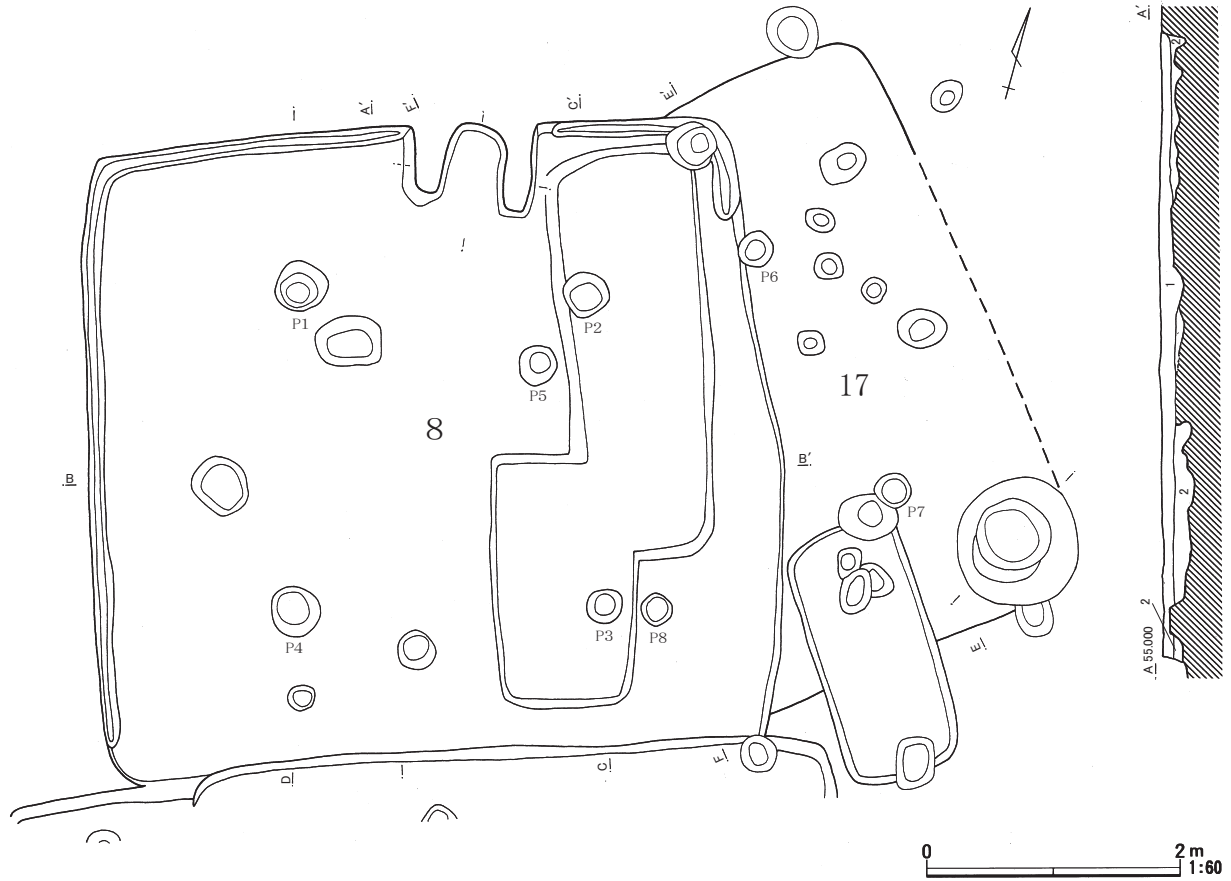
第2節 検出された遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

第8号住居跡（第6～9図、第1表、図版3・4・36）

調査地点の中央東寄りで検出した遺構である。南側壁部分を第104・105号土坑、住居跡内を第108・109号土坑により切られ、第12・13・17号住居跡を切って造られている。遺構確認面は黄褐色ローム層上面である。遺構確認面における平面形態は、ほぼ正方形であり長軸長は5m45cm、短軸長は4m98cm、主軸方位はN - 19.5° - Wである。北・西側の壁の立ち上がりが明瞭であり、直線的に立ち上がる。壁高は、北壁が8cm、西壁が17cm、南・東壁が6cmである。北・西壁と東壁の一部に壁溝が巡る。貼り床がなされ、硬化した床面は平坦である。支柱穴は、Pit1～Pit4の4つである。柱穴の規模は、Pit1が長軸42cm、短軸39cm、深さ44cm、Pit 2が長軸37cm、短軸35cm、深さ36cm、Pit 3が長軸30cm、短軸26cm、深さ32cm、Pit 4が長軸39cm、短軸38cm、深さ48cmを測る。掘り方は最浅部で7cm、最深部で35cmを測る。カマドは北壁の中央やや東寄りに設けられている。袖の全長は73cm、最大幅は1m5cmを測る。燃焼部奥は緩やかな弧状をなし、わずかに北壁より突き出して掘り込まれている。西側袖内面は、被熱により、赤化が顕著である。本住居跡の覆土は1層に分層された。暗灰褐色土を主体とするものであり、自然堆積層と考えられる。貼床の土層は3層に分層された。いずれも黄褐色ロームを主体とするものであり、暗褐色土の粗密により分けられた。

出土遺物は、カマド前面からほぼ正位を保ち、床からやや浮いた状態で坏（第9図1）が、カマド内及びカマド西袖外側から編み物石と考えられる棒状礫が3点検出されている。その他の遺物は、住居跡中央西側及び南壁寄りにおいて、土師器破片・礫石が検出されているが、いずれも床から浮いた状態であることから、本跡の埋没過程における混入と考えられるものである。出土遺物から、本跡は古墳時代後期、鬼高式期の所産と考えられる。

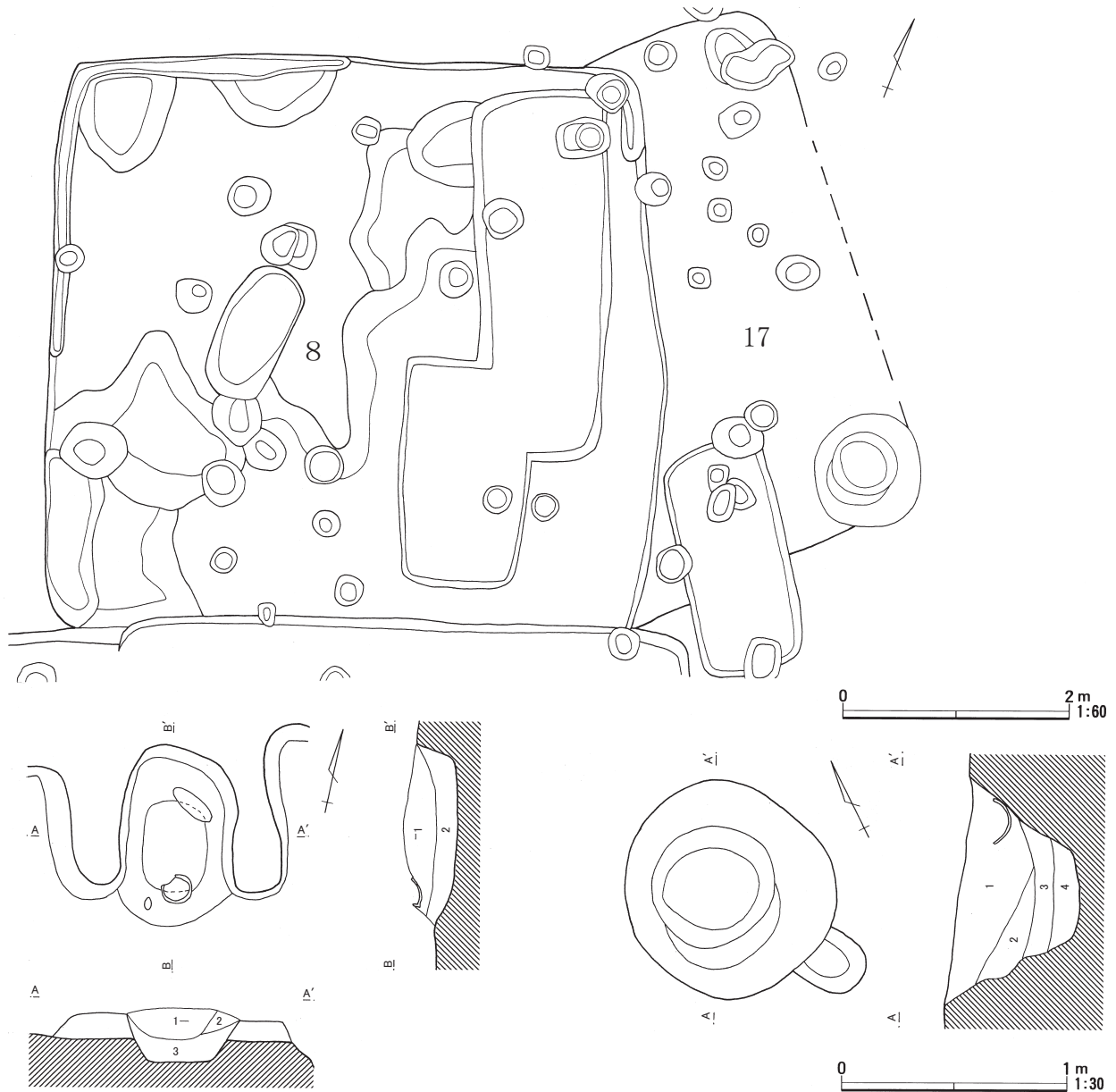


第8号住居跡土層説明

調査区北側壁面 (A-A')

- 第1層 暗灰褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子 (~0.5 mm) を中量斑状に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 (貼床) 暗褐色土を主体とし、ローム粒子 (~2 mm) ・ローム小塊 (~1 cm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 (貼床) 暗褐色土を主体とし、ローム粒子 (~2 mm) ・ローム小塊 (~1 cm) を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 (貼床) 暗褐色土を主体とし、ローム粒子 (~8 mm) を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第6図 第8・17号住居跡平面・断面図



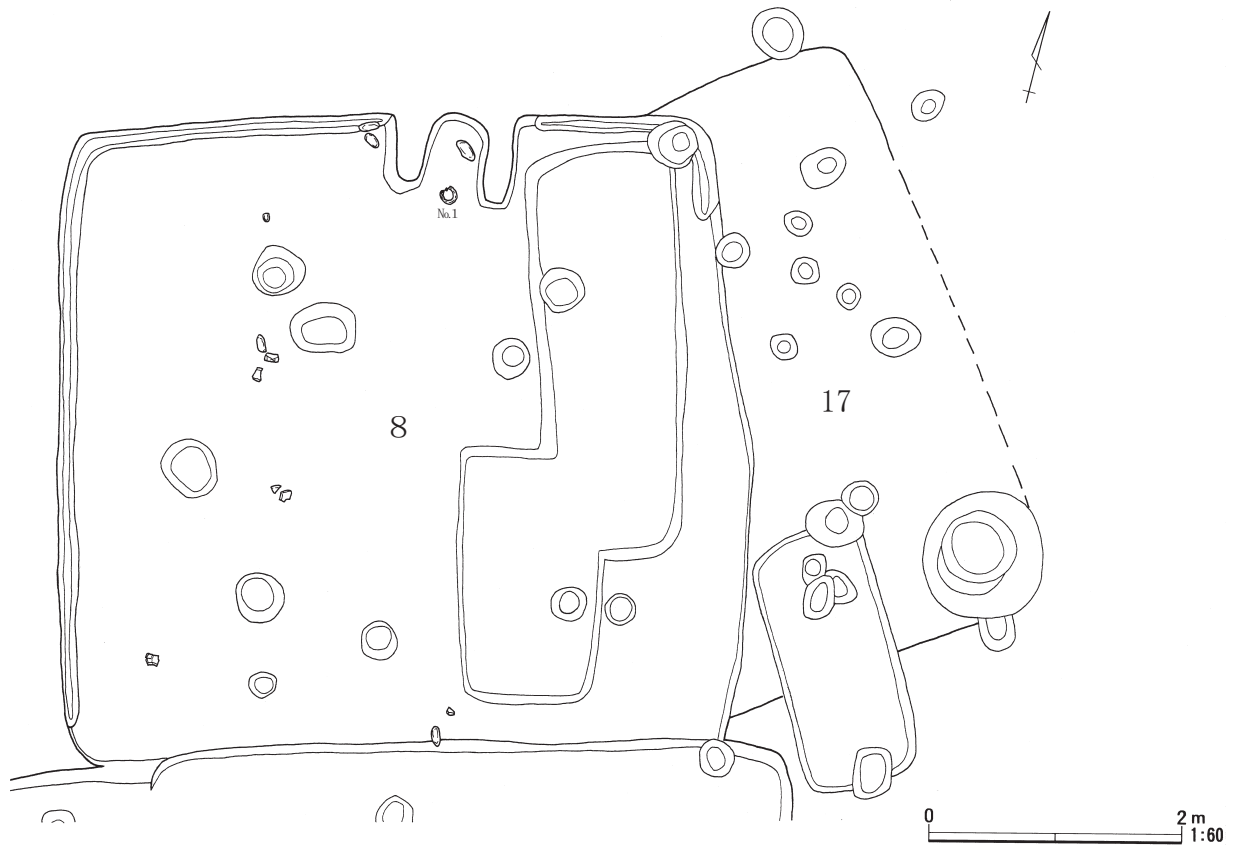
第7図 第8・17号住居跡掘り方平面図、第8号住居跡カマド平面・断面図、第17号住居跡貯蔵穴平面・断面図

第8号住居跡 カマド土層説明

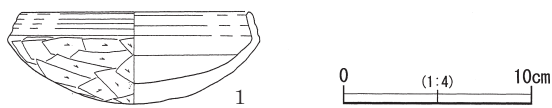
- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子 (~0.5mm)・ローム小塊 (~1cm) を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子 (~2mm)・ローム小塊 (~1cm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子 (~2mm)・ローム小塊 (1cm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第17号住居跡 貯蔵穴土層説明

- 第1層 暗褐色土 ローム粒子 (~1mm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 ローム粒子 (~1mm) を少量、焼土粒子 (~0.5mm) を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 ローム粒子 (~1mm) を少量、焼土粒子 (~0.5mm) を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 ローム粒子 (~1mm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第8図 第8号住居跡遺物出土状況



第9図 第8号住居跡出土遺物

第1表 第8号住居跡出土遺物観察表

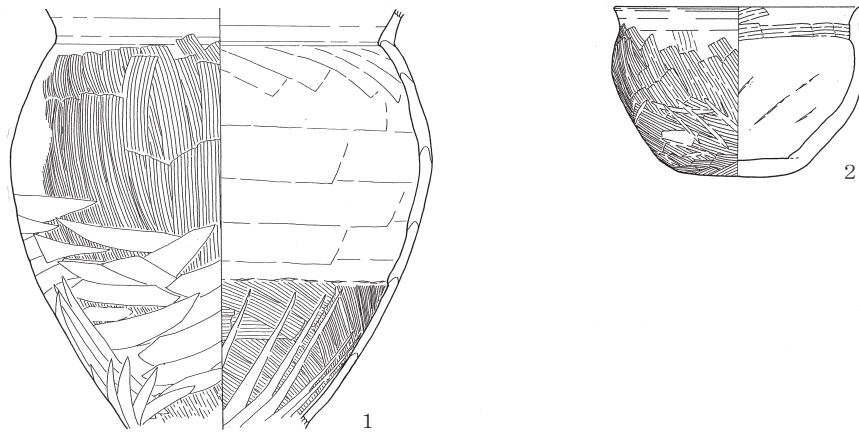
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 杯	口径 13.6 底径 — 器高 4.8	口端部は尖り気味である。口辺部は直線的に内傾する。丸底。	外面—口辺部ヨコナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面—口辺部～底部上位ヨコナデ。底部下位ナデ。	片・白 多 角・雲・Mg・Fe中 内外—橙褐色	残:90%

第17号住居跡（第6～8・10図、第2表、図版12・39）

調査地点の中央北東寄りで検出した遺構である。覆土及び床面は遺存していなかったため、調査当初は住居跡と認識しえず、貯蔵穴を土坑と捉え調査を進行した。この土坑の遺物の出土状態から、住居跡の可能性が考えられ、周辺の再精査と柱穴の検証を行ったところ、貼床充填土及び対応する柱穴が確認しえたことから住居跡が存在するとの確証に至った。

本跡は南側壁部分を第107号土坑、住居跡西側の大半を第8号住居跡により切られており、遺存状態は不良である。遺構確認面は黄褐色ローム層上面である。

遺構確認面における平面形態は、ほぼ正方形と推定され、遺存軸長は4 m72cmを測り、遺存軸の方位はN - 38° - Wである。壁の遺存は無く、黄褐色ロームを主体とする貼り床充填土が北・南側壁部分と東壁の一部に確認された。



第10図 第17号住居跡出土遺物

第2表 第17号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 甑	口径 — 底径 — 器高 (23.2)	口縁部は「く」字上に外反する。肩部に胴部最大径を有する。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目状工具による斜位ナデ。胴中位～下位ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴上位斜位ナデ、中位～下位木口状工具による横位ナデ。	片・白・Fe 中 角・雲 少 内—明赤褐色 外—明赤褐色	残:70% 刷毛目 6本/1cm
2	土師器 小型鉢	口径 13.3 底径 — 器高 8.8	口端部は丸い。口縁部はわずかに外反する。胴上位に最大径を持つ。丸底。	外面—口縁部ヨコナデ。胴～底部刷毛目状工具によるナデ。内面—口縁部ヨコナデ。底部横位・斜位ナデ。	片・白・Fe 中 角・雲 少 白針 微 内外—橙色	残:完形

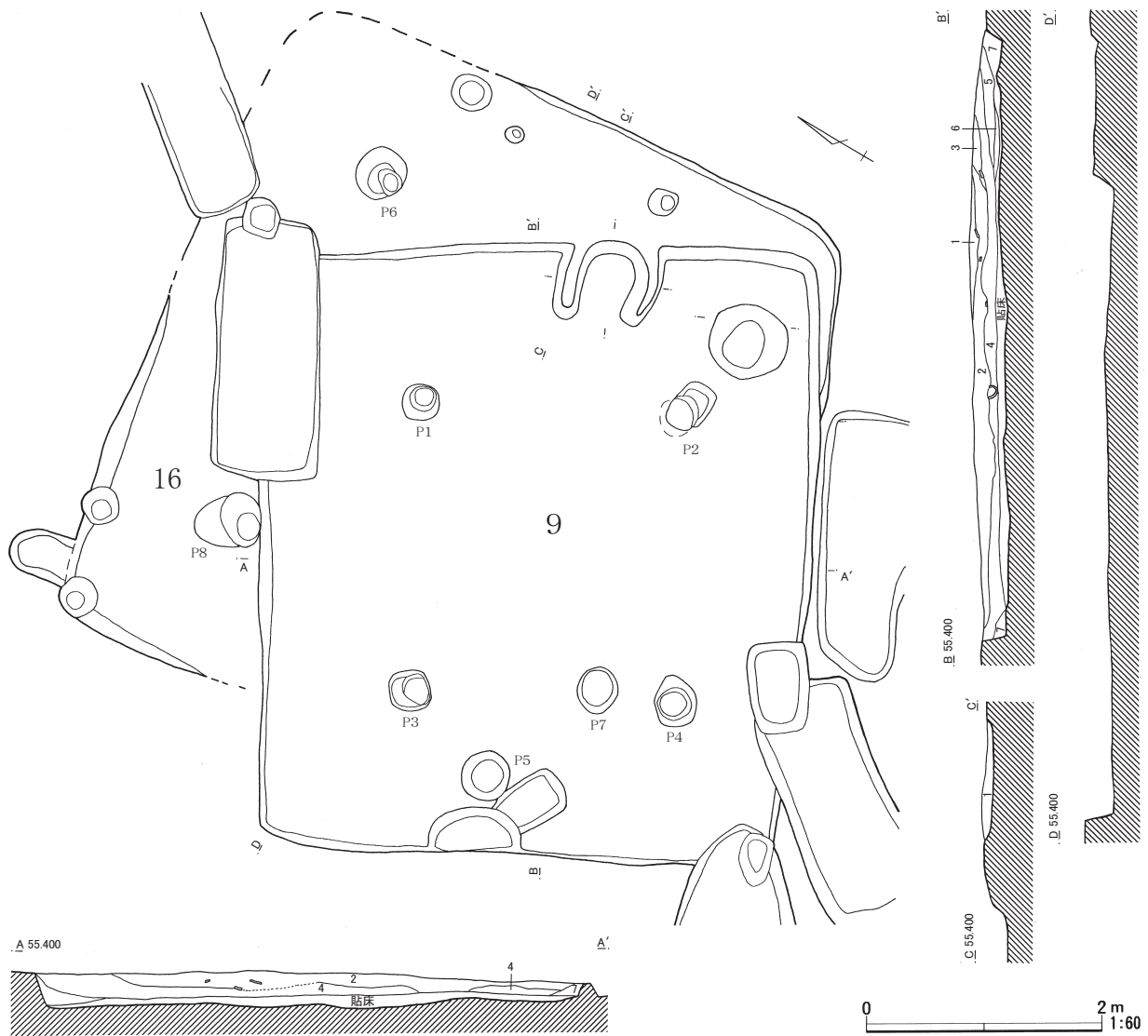
支柱穴は、Pit 5～Pit 8の4つである。柱穴の規模は、Pit 5が長軸31cm、短軸30cm、深さ31cm、Pit 6が長軸28cm、短軸27cm、深さ61cm、Pit 7が長軸26cm、短軸26cm、深さ56cm、Pit 8が長軸24cm、短軸24cm、深さ39cmを測る。カマドは袖はもとより、燃焼部底面も確認されなかった。貯蔵穴は本跡南東隅部において確認された。貯蔵穴の規模は、長軸1m、短軸94cm、深さ63cmを測る。掘り方は最浅部で1cm、最深部で16cmを測る。貯蔵穴内からは、甑と考えられる大型品と、鉢形土器が検出されている。本跡の帰属時期は、古墳時代和泉式期と考えられる。

第9号住居跡（第11～16図、第2～4表、図版4～6・36）

調査地点の中央南西寄りで検出した遺構である。南東隅部を攪乱されており、また北西隅部を第23・49号土坑により切られ、第16号住居跡を切って造られている。遺構確認面は黄褐色ローム層上面である。

遺構確認面における平面形態は、ほぼ正方形である。本住居跡の規模は、長軸長は5m17cm、短軸長は4m70cmを測る。主軸方位はN - 54° - Eである。壁の遺存状態が良好であり、やや角度を持って直線的に立ち上がる。壁高は、北・東・西壁が19cm、南壁が13cmである。壁溝は確認されなかった。黄褐色ロームを主体とした貼り床がなされ、硬化した床面は平坦である。

支柱穴は、Pit 1～Pit 4の4つである。柱穴の規模は、Pit 1が長軸31cm、短軸30cm、深さ62cm、Pit 2が長軸44cm、短軸30cm、深さ87cm、Pit 3が長軸42cm、短軸35cm、深さ52cm、Pit 4が長軸35cm、短軸34cm、深さ56cmを測る。Pit 5は、入り口部分に梯子を敷設するためのものと考えられる。Pit 5の規模は、長軸42cm、短軸42cm、深さ40cmを測る。



第11図 第9・16号住居跡平面・断面図

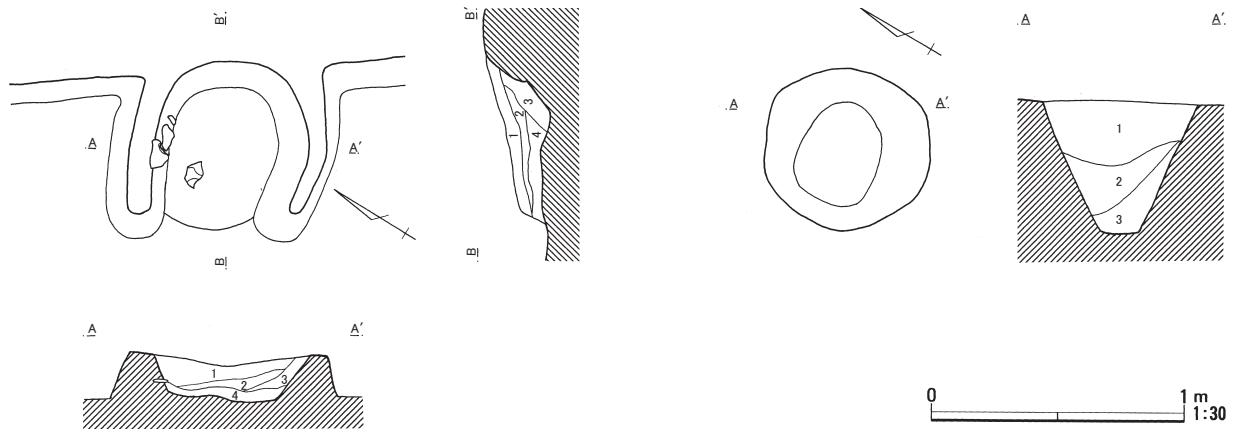
第9号住居跡土層説明

- 第1層 暗灰褐色土 暗褐色土を主体とし、浅間山系A軽石(～2mm)を中量含む暗灰褐色土小塊(～3cm)を少量斑状に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～2mm)を少量、焼土粒子・炭化物粒子(～1mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～0.5mm)を中量、焼土粒子(～2mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～1mm)・ローム小塊(～5cm)を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

- 第5層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～1mm)、ローム小塊(～5cm)を多量に、焼土小塊(～1cm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第6層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊(～1cm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第7層 暗褐色土(貼床) 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～1mm)を多量に、ローム小塊(～1cm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第16号住居跡土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～0.5mm)を少量、風化したローム小塊(～4cm)を少量斑状に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



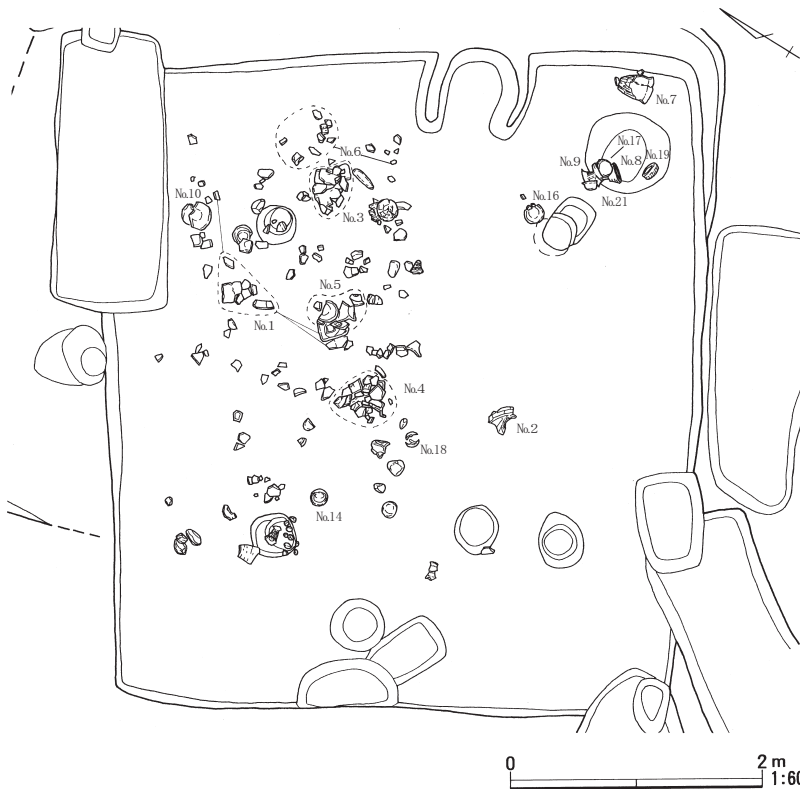
第12図 第9号住居跡カマド平面・断面図、貯蔵穴平面・断面図

第9号住居跡 カマド土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、焼土粒子（～2mm）を中量、粘土粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗赤褐色土 焼土粒子（～2mm）・焼土小塊（～8mm）を主体とする。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 明褐色土 ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～2cm）を主体とし、焼土粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗赤褐色土 焼土粒子（～2mm）を主体とする。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第9号住居跡 カマド土層説明

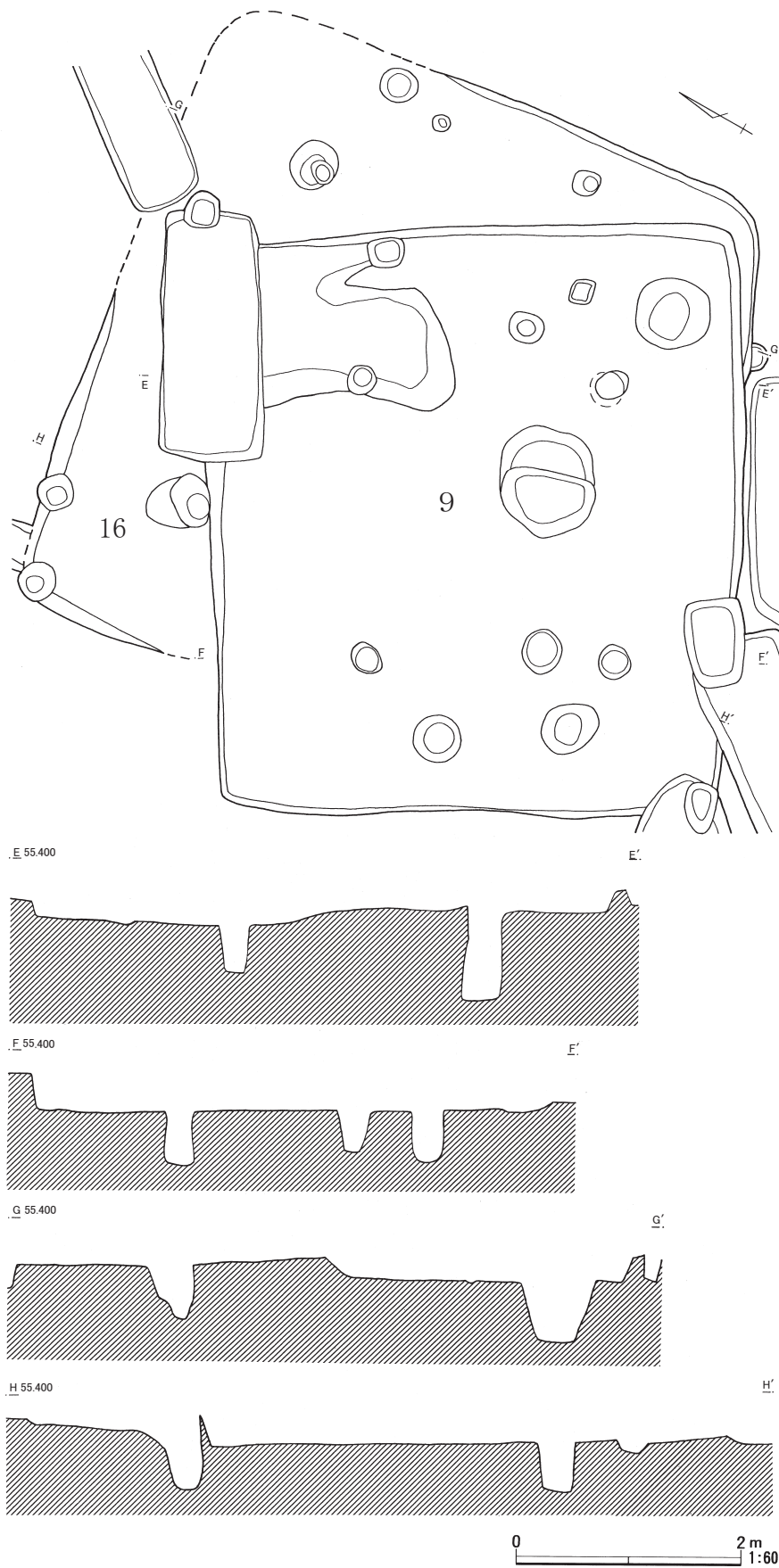
- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～4mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子・小塊（～2mm・～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子・小塊（～2mm・～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第13図 第9号住居跡遺物出土状況図

カマドは北壁中央の、やや南寄りに設けられている。袖部は共に中央の最大幅を有する弧状を呈している。袖の全長は64cm、最大幅は92cmを測る。燃烧部奥は緩やかな弧状をなし、わずかに北壁より突き出して掘り込まれている。袖内面の被熱による赤化は、顕著ではなかった。カマドの覆土は第3層が天井部崩壊土と考えられ、さらに上位に堆積する土層は、焼土粒子等の状態から、比較的長期に亘り徐々に埋没したもと考えられる。

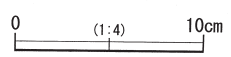
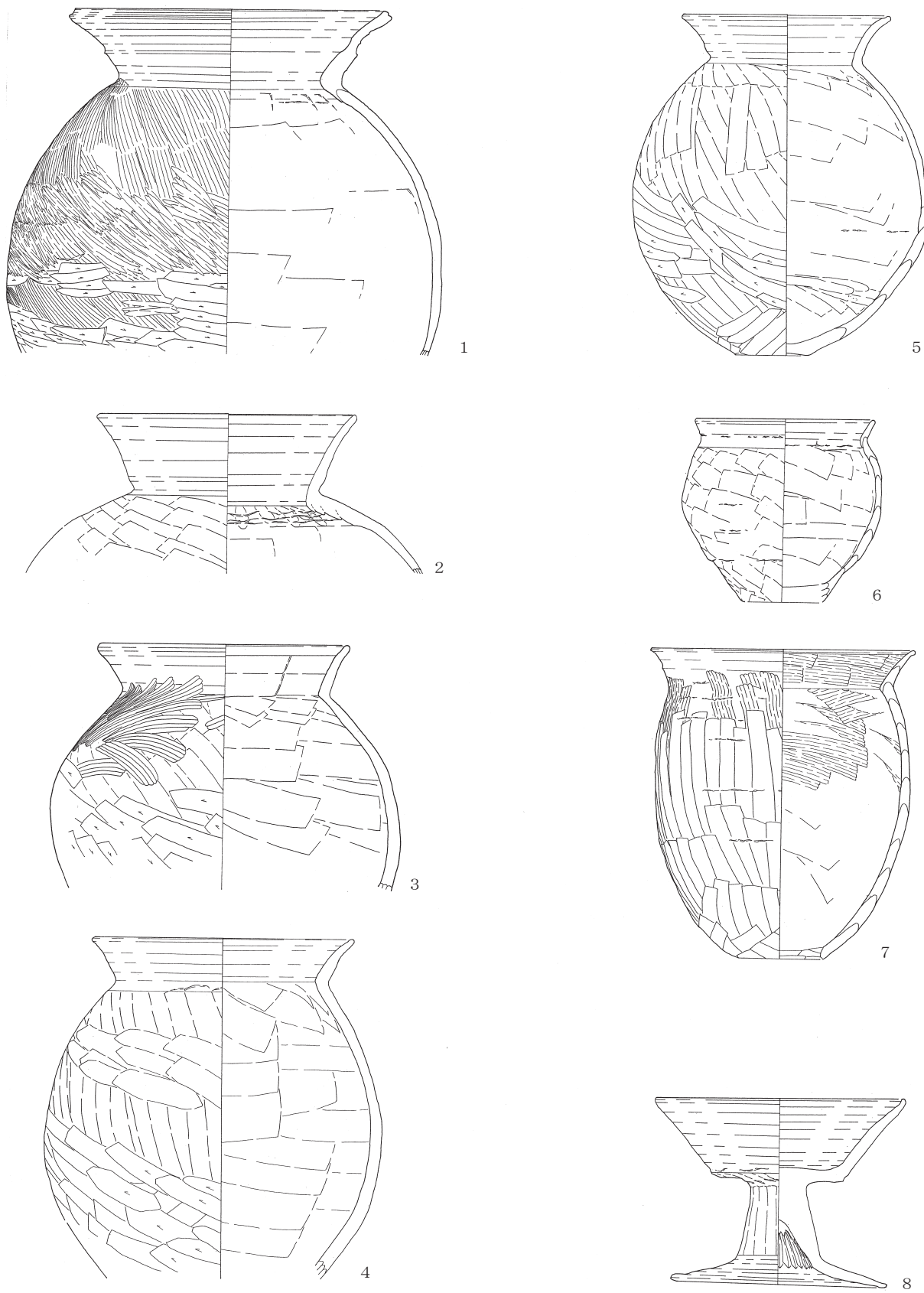
貯蔵穴は、住居南東隅部の壁からやや離れた位置に検出された。貯蔵穴の規模は、長軸66cm、短軸63cm、深さ49cmを測る。



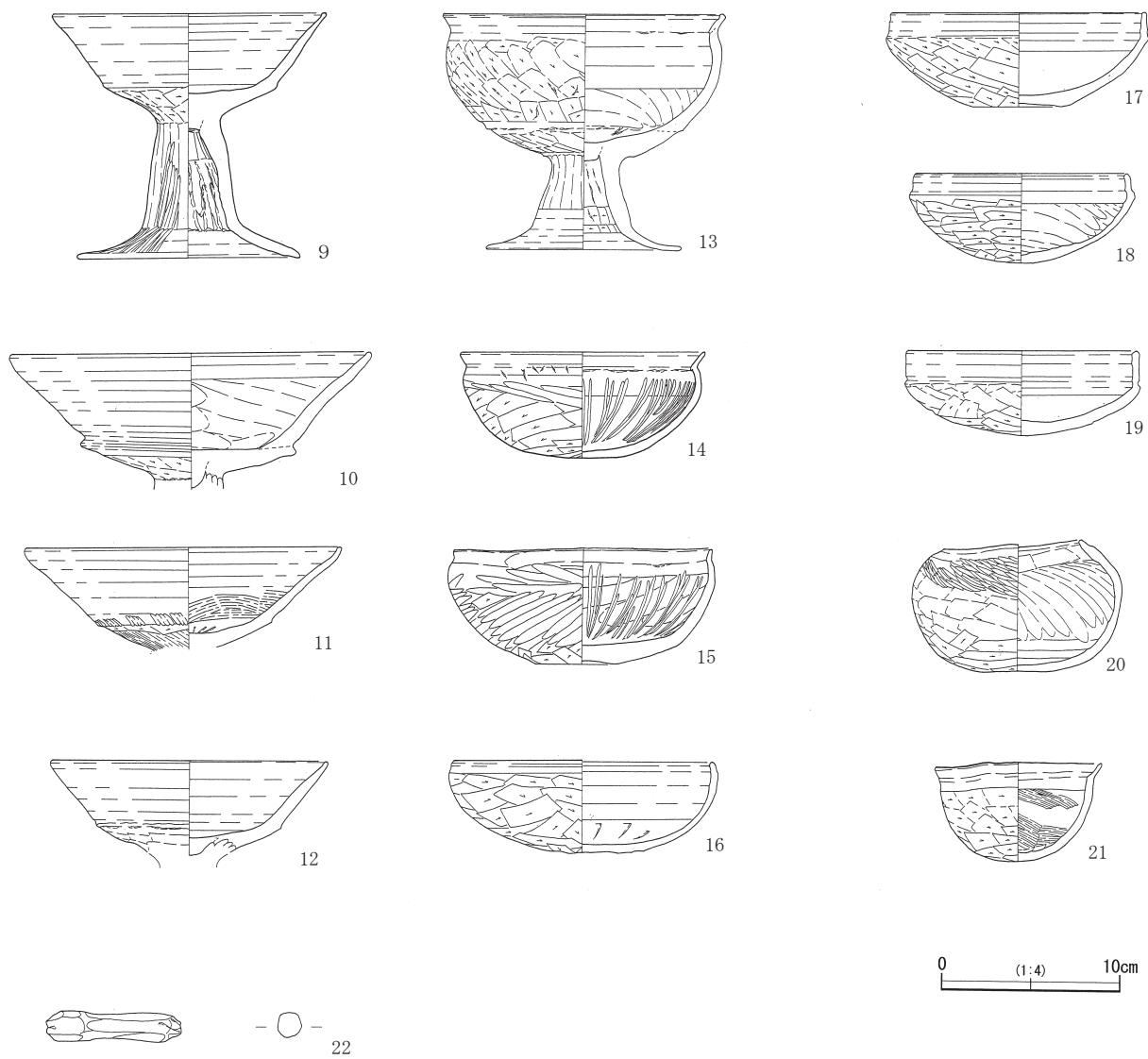
第14図 第9・16号住居跡掘り方平面・断面図

貯蔵穴内からは、高坏2個体（第15図8・第16図9）、坏1個体（第16図19）、小型の鉢（第16図21）が検出されている。これらの出土遺物から、本住居跡の帰属時期は古墳時代後期鬼高式期と考えられる。

覆土は7層に分層された。住居中央から北東にかけての上層の覆土には、多くの遺物が含まれていた。これらの遺物は、古墳時代和泉式期から白鳳期にかけてのものである。本遺構は前述のように、鬼高式期の住居跡であることから、より古い時期の遺物である和泉式期の遺物が、覆土上層中に存在することは時系列上ありえないことである。本住居跡の場合、第16号住居跡と切り合い関係にあることから、本跡構築にかかる掘削及び周堤帯の構築といった行為に伴い、より古い時期の遺物が本住居床面より高位に移動し、廃絶後に周堤帯の崩落・流入により覆土上層に移動することは考えられよう。あるいは本跡が廃棄の場として利用された場合が推定される。周辺の住居構築等の開発に伴い出土してしまった遺物が「片付け」行為により移動するケースが考えられる。



第 15 图 第 9 号住居跡出土遺物 (1)



第16図 第9号住居跡出土遺物(2)

第3表 第9号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 壺	口径 22.4 底径 — 器高 (23.2)	口端部外面に凹線を巡らす。口縁部は中位に稜を巡らす。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上半刷毛目状工具による斜位ナデ後斜位ミガキ、下半同工具による斜位ナデ後横位ヘラケズリ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部工具によるナデ後ナデ。	内-明赤褐色 外-黒色	残:50% 刷毛目 3本/1cm
2	土師器 甕	口径 18.1 底径 — 器高 (11.1)	口端部は尖り気味で、上方に立ち上がる。口縁部は大きく外反する。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ後ナデ。内面-口縁部ヨコナデ。胴部上位指頭による押圧ナデ、胴部工具によるナデ後ナデ。	内外-橙色	残:20%
3	土師器 甕	口径 17.7 底径 — 器高 (17.0)	口端部は丸い。口唇部はわずかに内傾する。	外面-口縁部ヨコナデ。胴部上半ヘラケズリ後刷毛目状工具による斜位ナデ、下半ヘラケズリ。内面-口唇部ヨコナデ。口縁部工具による横位ナデ後ヨコナデ。胴部工具によるナデ後ナデ。	片・白 多 角・雲・Mg・Fe中 内外-橙色 外-浅黄橙色	残:40% 刷毛目 3本/1cm

第4表 第9号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
4	土師器 甕	口径 18.1 底径 — 器高 (24.9)	口縁部は内側に肥厚する。口縁部は大きく外反し、口唇部は更に大きく開く。胴部中位に最大径を有する。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部上半ヘラケズリ後ナデ、下半ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部工具によるナデ後ナデ。	内—明赤褐色 外—赤褐色	残:60%
5	土師器 甕	口径 14.5 底径 5.1 器高 23.9	口端部は内側に肥厚する。口縁部は大きく外反する。胴部中位に最大径を有する。平底。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部上半ヘラケズリ後ナデ、下半ヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部工具による斜位ナデ後ナデ。底部ナデ。	内外—明赤褐色	残:90%
6	土師器 小型甕	口径 (12.6) 底径 — 器高 —	口端部は丸い。胴部上位に最大径を有する。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部斜位ヘラケズリ後ナデ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部工具による斜位ナデ後ナデ。	内外—にぶい橙色	残:30%
7	土師器 甕	口径 18.3 底径 — 器高 21.8	口端部は外側に肥厚する。口縁部は大きく外反する。胴部上位が張る。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部上位刷毛目状工具による縦位ナデ後ヘラケズリ、中位～下端部ヘラケズリ。内面—口唇部刷毛目状工具による斜位ナデ。胴部上半刷毛目状工具による斜位ナデ後ナデ、下半工具による斜位ナデ後ナデ。下端部ヘラケズリ。	片・白 中 角・石・Mg・Fe少 内—明赤褐色 外—赤褐色	残:60% 刷毛目 3本/1cm
8	土師器 高器	口径 17.4 底径 15.0 器高 13.1	口唇部は上方に立ち上がる。口縁部は直線的に開き、坏部下位に稜を有する。脚部は下方に向かって広がり、裾部は外反して開く。	外面—口辺部ヨコナデ、坏底部ヘラケズリ後ナデ。脚部工具による縦位ナデ後ナデ、脚裾部ヨコナデ。内面—口辺部ヨコナデ、坏底部ナデ。脚部ヘラケズリ、脚裾部ヨコナデ。	片・白・石・Fe少 角・雲・白針 微 内—橙色 外—橙色	残:略完形
9	土師器 高器	口径 15.5 底径 12.6 器高 13.8	口端部は内側に肥厚する。口縁部は線的に開き、坏部下位に稜を有する。脚部は下方に向かって広がり、裾部は外反して開く。	外面—口辺部ヨコナデ。脚部工具による縦位ナデ後縦位ミガキ、脚裾部ヨコナデ後縦位ミガキ。内面—口辺部ヨコナデ、坏底部ナデ。脚上位ヘラケズリ、脚裾部ヨコナデ。	片・白・Fe 少 雲・角 微 内—橙色 外—橙色	残:完形
10	土師器 高器	口径 20.5 底径 — 器高 (7.7)	口端部は内側に肥厚する。口縁部は直線的に開き、坏部下位に稜を有する。	外面—口辺部ヨコナデ、坏底部ヘラケズリ。内面—口唇部ヨコナデ、口辺部斜位指ナデ、坏底部ナデ。	片・白 中 角・雲・Fe 少 内外—明赤褐色	残:40%
11	土師器 高器	口径 18.6 底径 — 器高 (5.6)	口端部は丸く、口唇部はわずかに内傾する。口縁部は直線的に開き、坏部下位に稜を有する。	外面—口辺部ヨコナデ、坏底部上位刷毛目状工具による斜位ナデ後ヘラケズリ、下位同工具による斜位ナデ後ナデ。内面—口辺部上半ヨコナデ、口辺部下半～坏底部中位刷毛目状工具による斜位ナデ後ヨコナデ、坏底部工具によるナデ後ナデ。	片・白・Mg 少 角・雲・Fe 微 内—明赤褐色 外—明赤褐色	残:40% 刷毛目 4.5本/1cm
12	土師器 高器	口径 15.5 底径 (5.1) 器高 (5.2)	口端部は丸い。口唇部わずかに内傾する。口縁部は直線的に開き、坏部下位に稜を有する。	外面—口辺部ヨコナデ、坏底部ヘラケズリ後ナデ。内面—口辺部～坏底部上位ヨコナデ、坏底部ナデ。	片・白 少 角・雲・Fe 微 内—明赤褐色 外—明赤褐色	残:40%
13	土師器 脚付鉢	口径 16.0 底径 (10.0) 器高 (13.3)	口端部は丸く、内側上方へ突出する。口辺部は直線的に外反する。体部下位に明瞭な稜を有する。脚部は「ㄣ」字状に開き、裾部は大きく開く。	外面—口辺部ヨコナデ。体部上半ヘラケズリ後ナデ、下半ヘラケズリ。脚部上位～中位縦位ナデ、下位～裾端部ヨコナデ。内面—口辺部～体部中位ヨコナデ、下位斜位ナデ、底部ナデ。脚部下位横位ケズリ、裾部ヨコナデ。	片・白 中 角・雲・Fe 少 内—明赤褐色 外—にぶい赤褐色	残:70%
14	土師器 埴	口径 14.0 底径 — 器高 6.0	口端部は丸い。体部上位が張る。丸底。	外面—口辺部ヨコナデ。体部上位ヘラケズリ後ミガキ、中位～底部ヘラケズリ。内面—口辺部～体部上位ヨコナデ、中位～底部ナデ。体部上位～底部放射状ミガキ。	片・白 中 角・雲・Fe 少 内—赤褐色 外—明褐色	残:略完形
15	土師器 埴	口径 14.8 底径 4.5 器高 6.6	口端部は丸い。口辺部は直線的に外反する。体部上位に最大径を有し、底部は凹状を呈する。	外面—口辺部ヨコナデ。体部ヘラケズリ後斜位ミガキ。底部ヘラケズリ。内面—口辺部ヨコナデ。体部斜位ナデ後放射状ミガキ。底部ナデ。	片・白 中 角・雲・Fe 少 内—赤褐色 外—明赤褐色	残:略完形

第5表 第9号住居跡出土遺物観察表(3)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
16	土師器 坏	口径 15.0 底径 — 器高 5.2	口端部は尖り気味である。丸底。	外面—口辺部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内面—口辺部～底部上位ヨコナデ。底部工具によるナデ後ナデ。	片・白・Fe 中 角・雲 少 白針 微 内外—明赤褐色	残:略完形
17	土師器 坏	口径 14.5 底径 — 器高 5.1	口端部は丸い。口辺部は内傾する。底部は凹状を呈する。	外面—口辺部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内面—口辺部ヨコナデ。底部ナデ。	内—明赤褐色 外—橙色	残:完形
18	土師器 坏	口径 12.0 底径 — 器高 5.0	口端部は丸く、口唇部はわずかに内斜する。丸底。	外面—口辺部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内面—口辺部ヨコナデ。	片・白・Fe 中 角・雲 少 内外—明褐色	残:完形
19	土師器 坏	口径 12.6 底径 — 器高 4.9	口端部は丸い。口辺部はわずかに内傾する。丸底。	外面—口辺部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内面—口辺部ヨコナデ。底部工具によるナデ後ナデ。	片・白 多 石・雲・Fe 中 角 少 内外—橙色	残:完形
20	土師器 埴	口径 7.8 底径 — 器高 7.4	口端部は丸い。口辺部は内傾する。平底。	外面—口辺部ヨコナデ。体部上位ヘラケズリ後ナデ後斜位ミガキ、中位ヘラケズリ後ナデ、下位～底部ヘラケズリ。内面—口端部ヨコナデ。口辺部工具によるヨコナデ後ヨコナデ。体部上位～中位斜位ナデ、下位～底部ヨコナデ。	片・白 中 角・雲・Mg 少 内外—赤褐色	残:完形
21	土師器 鉢	口径 9.1 底径 — 器高 5.6	口端部は尖り気味で、口唇部はわずかに立ち上がる。丸底。	外面—口辺部～体部上位ヨコナデ、中位ヘラケズリ後ナデ。底部ヘラケズリ。内面—口辺部～体部上位ヨコナデ、中位～底部刷毛目状工具による斜位ナデ後ナデ。	内—明褐色 外—橙色	残:略完形
22	土 錘	長さ 3.7 径 0.7	中実。	外面—指頭ナデ。端部ツマミ。	内—明赤褐色 外—橙色	残:略完形

第16号住居跡(第11・14図、図版11・12)

調査地点の中央南西寄りで検出した遺構である。住居跡の大半は第9号住居によって、また第49・72号土坑によって住居北側を切られており、遺存状態は不良である。遺構確認面は黄褐色ローム層上面である。遺構確認面における平面形態は、ほぼ正方形と推定され、長軸長は5m70cm、短軸長は5m8cmを測る。主軸の方位は、N - 76.5° - Eである。壁高は北側8cm、東側6cm、南側2cm、西側8cmを測る。確認された支柱穴はPit6～8の3つであり、住居南東部の柱穴は、第9号住居跡貯蔵穴部分に存在したものと推定される。柱穴の規模は、Pit6が長軸45cm、短軸42cm、深さ49cm、Pit7が長軸39cm、短軸33cm、深さ44cm、Pit8が長軸57cm、短軸43cm、深さ67cmを測る。カマド及び貯蔵穴は第9号住居跡の構築に伴い消滅したものと考えられ、確認されなかった。覆土は1層のみであり、暗褐色土を主体とするものであった。貼床がなされており、掘り方は最浅部で5cm、最深部で20cmを測る。出土遺物は無く、帰属時期については第9号住居跡との切り合い関係から、古墳時代鬼高式期以前の時期が与えられよう。

第10号住居跡(第17・18図、図版7)

調査地点の中央南東寄りで検出した遺構である。住居跡の西側は第14号住居によって切られている。住居北及び東壁の一部が遺存していたが、南西部の大半は流出し、遺存状態は不良である。遺構確認面は黄褐色ローム層上面である。

遺構確認面における平面形態は、確認できた柱穴からほぼ正方形と推定される。本住居跡の規模は、長軸長推定5m60cm、短軸長推定5m33cmと考えられる。主軸方位はN - 25° - Wである。壁高は北



第17図 第10号住居跡平面・断面図



第18図 第10号住居跡掘り方平面図

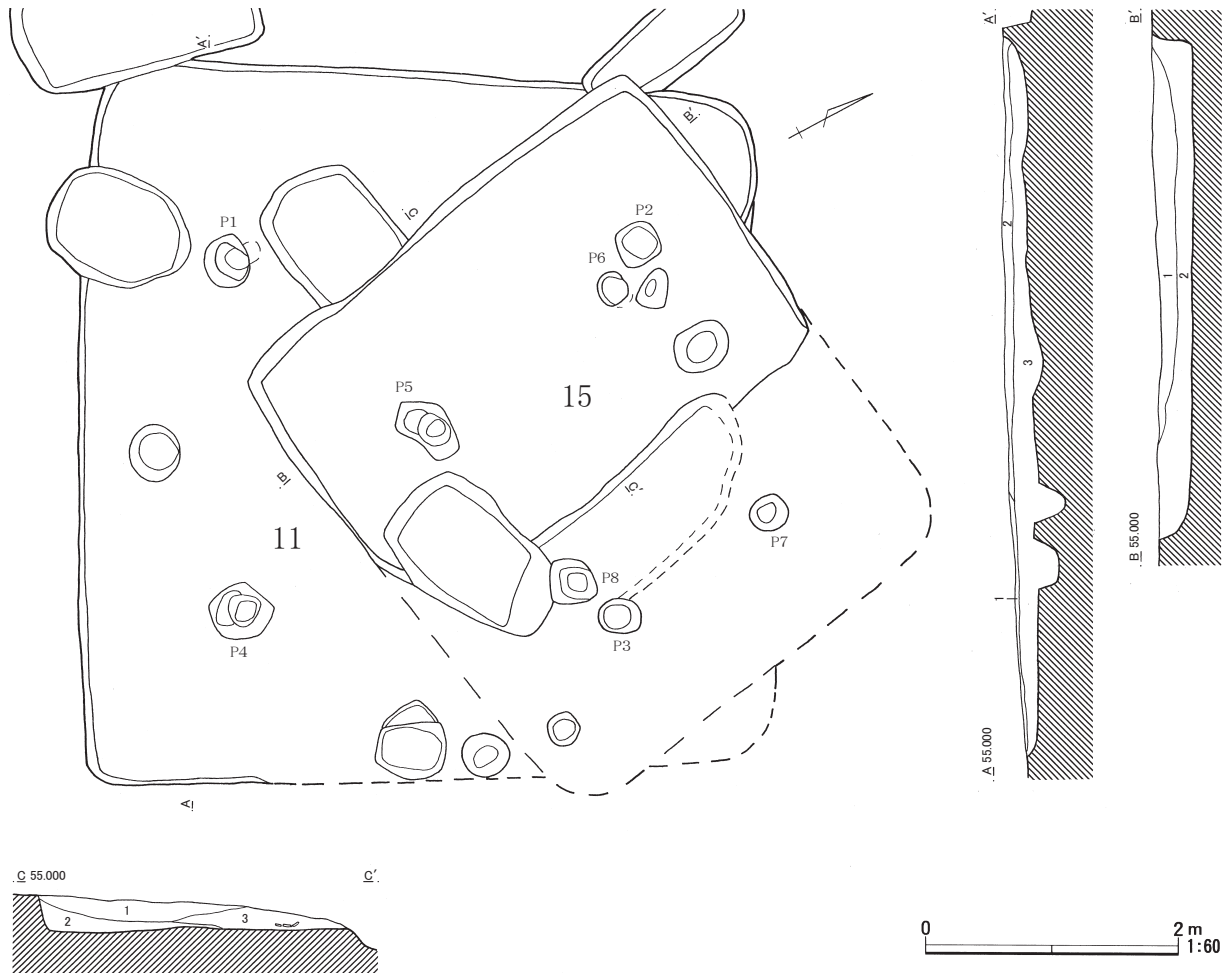
第10号住居跡土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～4cm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

側11cm、東側5cmを測る。確認された主柱穴はPit 1～3の3つであり、南東部のものは調査区外に存在すると考えられる。柱穴の規模は、Pit 1が長軸57cm、短軸34cm、深さ42cm、Pit 2が長軸24cm、短軸22cm、深さ40cm、Pit 3が長軸58cm、短軸39cm、深さ40cmを測る。掘り方は中央部を掘り残し、周囲のみを掘り込むタイプであり最浅部で1cm、最深部で6cmを測る。

第11号住居跡（第19～22図、第6表、図版7・37）

調査地点の東寄りで検出した遺構である。重複関係は、第15号住居跡、第111・116～118号土坑によって切られている。住居北東隅付近は流出し、遺存状態はやや不良である。遺構確認面は黄褐色ローム層と一部砂礫層上面である。遺構確認面における平面形態は、ほぼ正方形と推定され、長軸長は5 m68cm、短軸長は5 m23cmを測る。主軸方位はN - 30° - Eである。



第19図 第11・15号住居跡平面・断面図

第11号住居跡土層説明

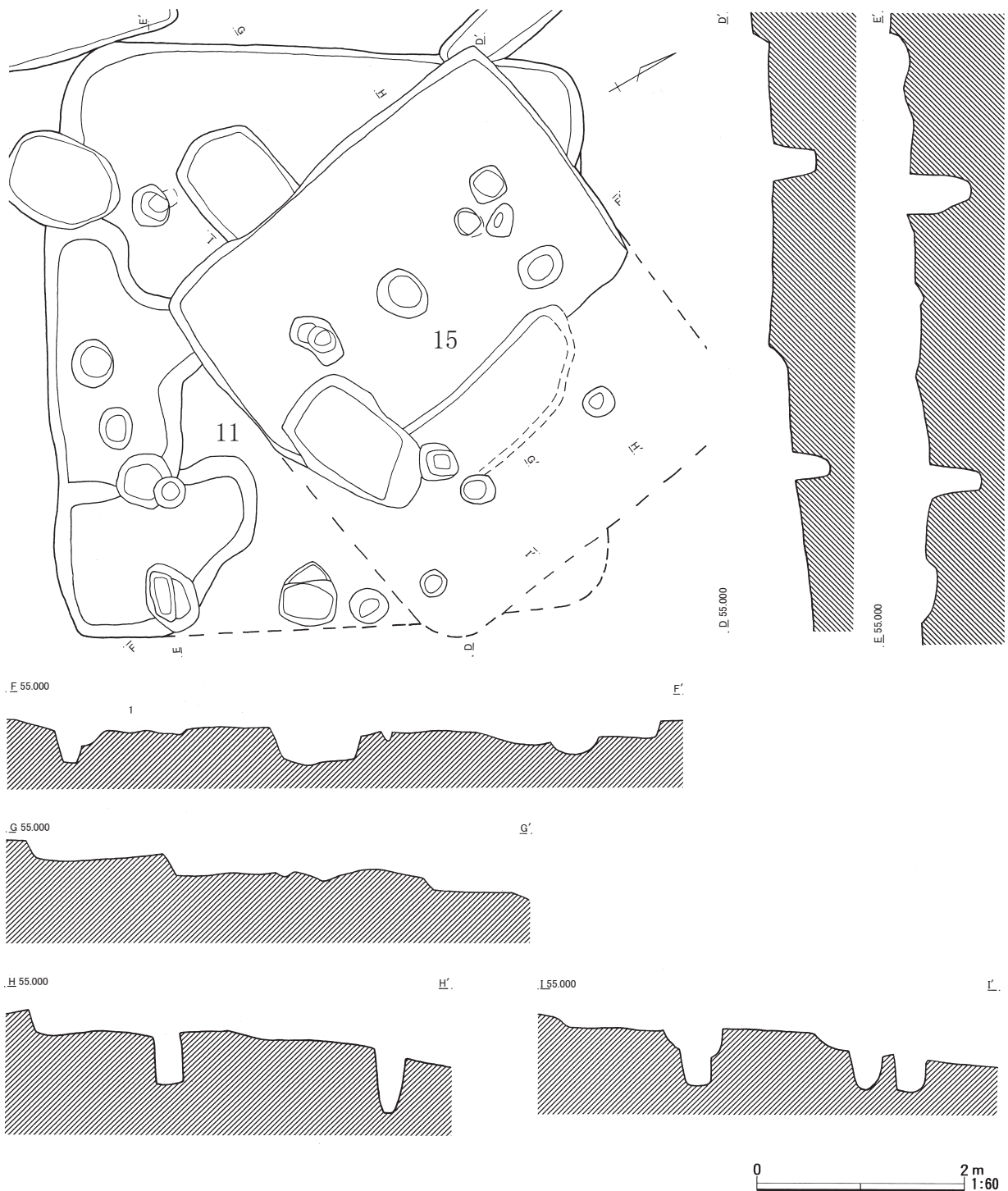
- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量、焼土粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）、ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第15号住居跡土層説明

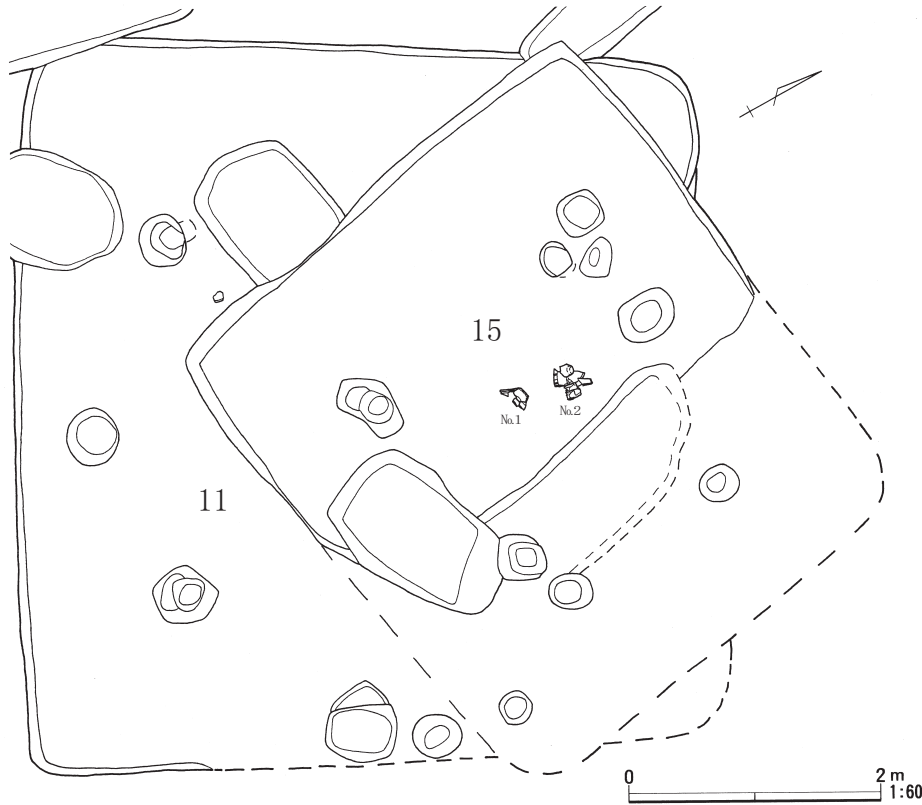
- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量、ローム小塊（～3cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

西壁の遺存が良好であり、やや角度を持って直線的に立ち上がる。壁高は北側10cm、東側4cm、南側1cm、西側23cmを測る。暗褐色土を主体とする貼床が施され、掘り方は最浅部で2cm、最深部で25cmを測る。

支柱穴はPit 1～Pit 4の4つが確認された。柱穴の規模は、Pit 1が長軸34cm、短軸33cm、深さ42cm、Pit 2が長軸36cm、短軸35cm、深さ39cm、Pit 3が長軸50cm、短軸45cm、深さ67cm、Pit 4が長軸41cm、短軸35cm、深さ72cmを測る。



第20図 第11・15号住居跡掘り方平面・断面図

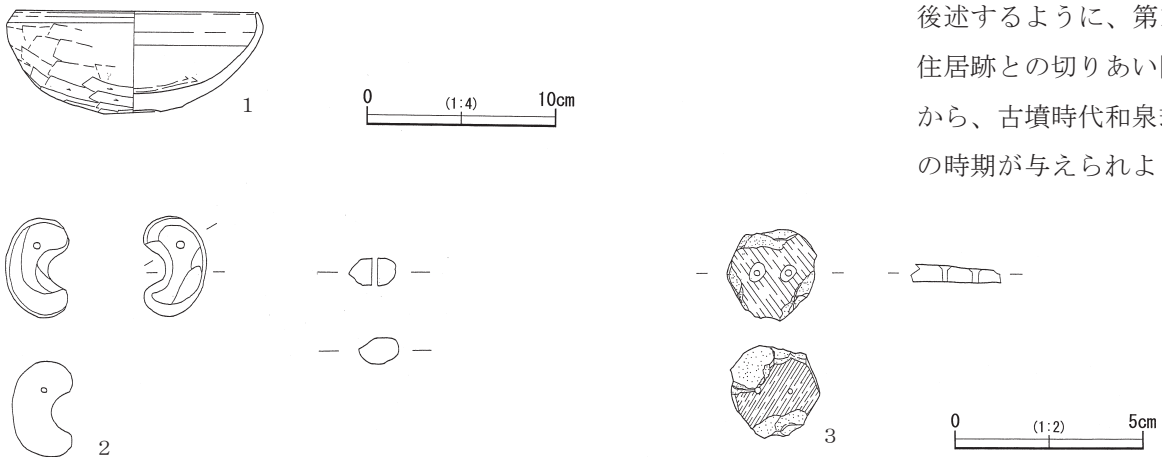


第21図 第11・15号住居跡遺物出土状況図

カマド及び貯蔵穴は、第15号住居の構築に伴い消滅したものと考えられ、確認されなかった。

覆土は暗褐色土を主体とするものであり、3層に分層された。堆積の状況は、自然埋没と考えられる。遺物の出土状況は、住居南壁寄りのほぼ中央床面において、滑石製の勾玉形石製模造品（第22図2）が検出されている。また、覆土中からは坏（第22図1）及び鏡形の石製模造品が確認されている。

本住居跡の帰属時期は、後述するように、第15号住居跡との切りあい関係から、古墳時代和泉式期の時期が与えられよう。



第22図 第11号住居跡出土遺物

第6表 第11号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 13.4 底径 — 器高 5.4	口端部は丸く、口辺部は内傾する。凹底。覆土中出土。	外面—口辺部ヨコナデ。底部上位ヘラケズリ後ナデ。底部下位ヘラケズリ。内面—口辺部～底部上位ヨコナデ。底部中位ナデ、下位工具によるナデ後ナデ。	片・石・Mg 中 白・角・雲・Fe少 白針 微 内外—橙色	残:70%
2	勾玉形 石製模造品	幅 13.4 長さ —	袂部を弧状に仕上げ、曲面の均整も取れている。	刀子ケズリ後研磨。穿孔は片側から。	淡緑色	残:完形
3	鏡形 石製模造品	幅 13.4 長さ —	外形やや不均整。	刀子ケズリ後研磨。穿孔は片側から。	淡緑色	残:80%

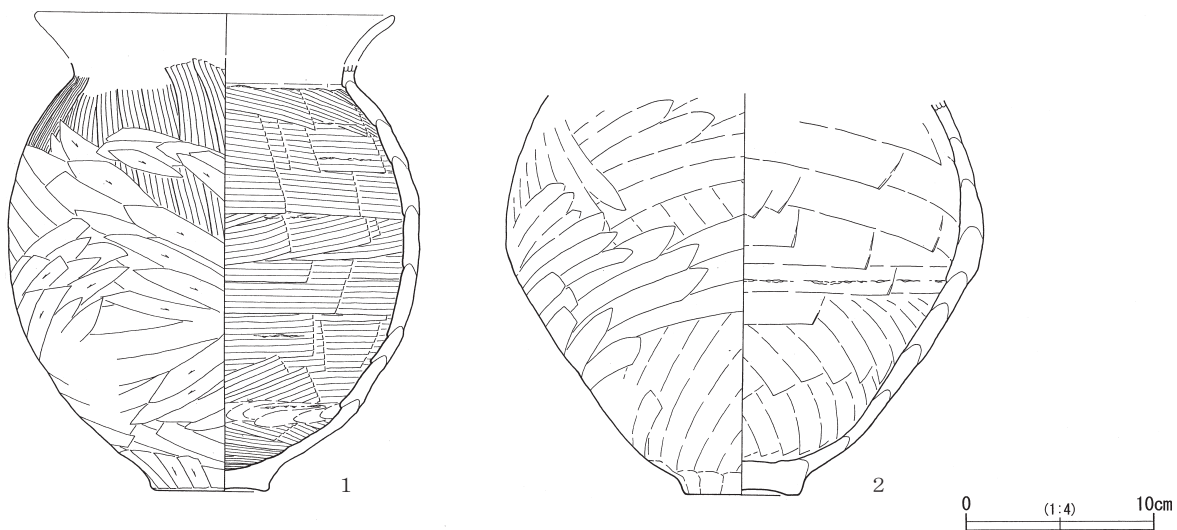
第15号住居跡（第19～21・23図、第7表、図版10・11・38）

調査地点の東寄りで検出した遺構である。重複関係は、第116・120・121号土坑によって切られ、第11号住居跡、第117号土坑を切って造られている。本跡の東側は段丘崖となり付近はやや急峻な傾斜を有している。このため住居東側の約半分は流出し、遺存状態はやや不良である。遺構確認面は黄褐色ローム層と一部砂礫層上面である。遺構確認面における平面形態は、支柱穴を勘案すると長方形と推定される。本住居跡の規模は、長軸長推定4m44cmと考えられ、短軸長3m93cmを測る。主軸方位はN-80°-Eである。床面は黄褐色ローム及び暗褐色土を主体とする貼床が施され、概ね平坦である。部分的には瘤状の硬化箇所も観察された。掘り方は最浅部で2cm、最深部で6cmを測る。

北及び西壁の遺存が良好であり、わずかな角度を有し直線的に立ち上がる。壁高は北側32cm、南側24cm、西側38cmを測る。支柱穴はPit5～Pit8の4つが確認された。柱穴の規模は、Pit5が長軸30cm、短軸28cm、深さ58cm、Pit6が長軸34cm、短軸28cm、深さ34cm、Pit7が長軸56cm、短軸32cm、深さ60cm、Pit8が長軸25cm、短軸23cm、深さ56cmを測る。

覆土は3層に分層された。暗褐色土層を主体とするものであり、自然堆積と考えられる。

遺物の出土状況は、住居中央からやや北寄りにかけての床面から浮いた状態で、2個体の甕（第23図1・2）が検出されている。2は底部を上位に、1は横位で出土し、ほぼ全容のつかめる口縁部を欠損した1は、古墳時代後期鬼高式期初頭に比定されるものである。



第23図 第15号住居跡出土遺物

第7表 第15号住居跡出土遺物観察表

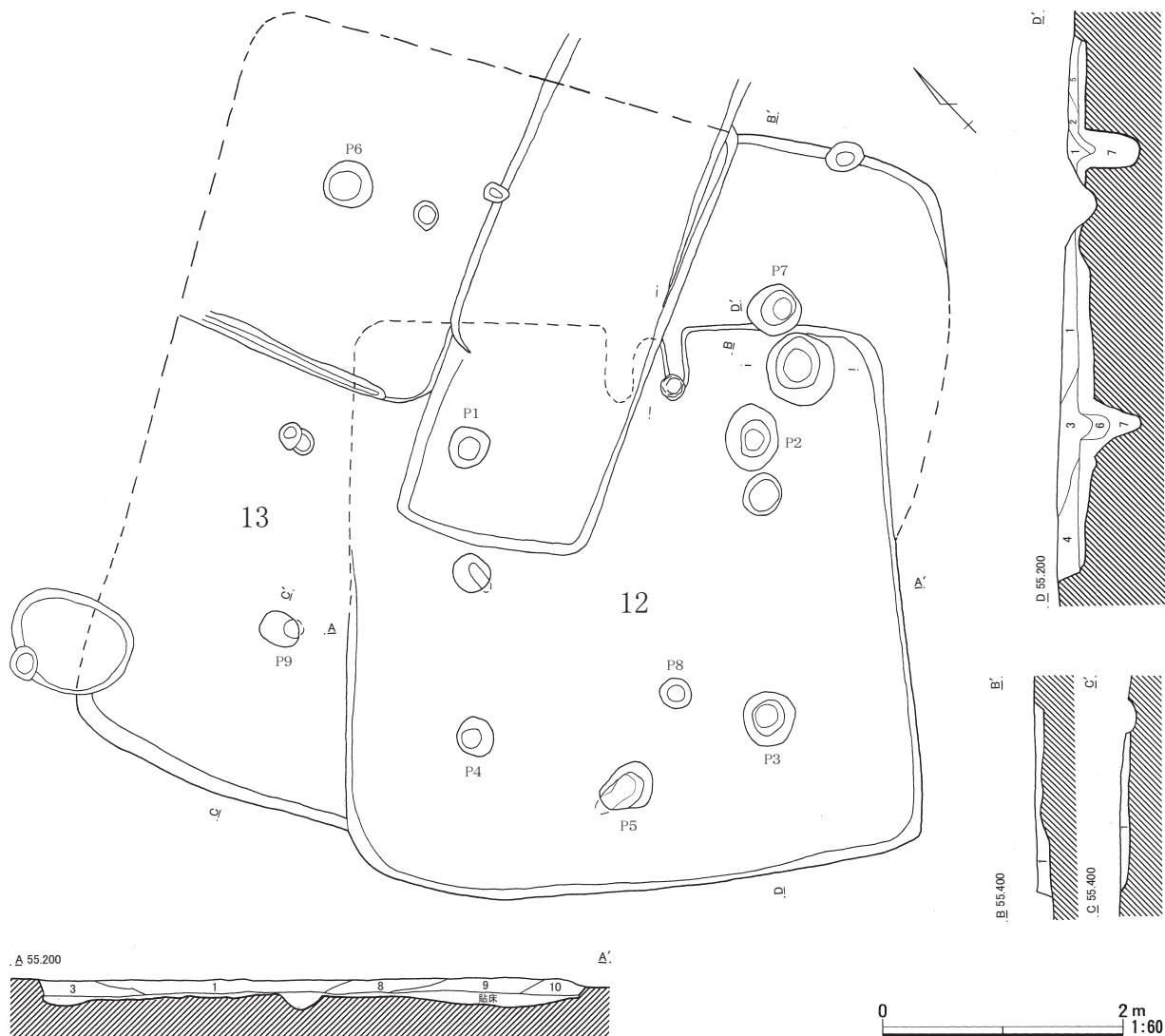
No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 甕	口径 — 底径 6.4 器高 (22.5)	胴中位に最大径を有する。やや凹底。	外面—口縁部ヨコナデ。胴上半刷毛目状工具による斜位ナデ、下半刷毛目状工具による斜位ナデ後ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部工具によるナデ後ナデ。胴部下位刷毛目状工具によるナデ。底部ナデ。	片・白 多 角・雲・Mg・Fe中 内外—淡褐色	残:70%
2	土師器 甕	口径 — 底径 6.2 器高 (20.8)	口端部は丸い。口唇部はわずかに内傾する。	外面—胴部木口状工具による斜位ナデ。胴中位～下位木口状工具による斜位ナデ後ヘラケズリ。内面—胴部木口状工具によるナデ後ナデ。	片・白 多 角・雲・Mg・Fe中 内—橙色 外—浅黄橙色	残:50%

第12号住居跡（第24～28図、第8・9表、図版8・9・38）

調査地点の中央南東寄りで検出した遺構である。重複関係は、第104号土坑によって切られ、第13・14号住居跡を切って造られている。遺構確認面は黄褐色ローム層上面である。遺構確認面における平面形体は、西側壁がやや長いものの、ほぼ正方形である。住居跡の規模は、長軸長4 m54cm、短軸長4 m57cmを測る。主軸方位はN - 40.5° - Eである。

壁はやや角度を有するものの、直線的に立ち上がる。壁高は東側16cm、南側18cm、西側2 cmを測る。黄褐色ローム小塊を主体とする貼床が施され、床面は概ね平坦に仕上げられている。カマド前面から、Pit 3・4 東側は瘤状の硬化面が観察された。掘り方は最浅部で2 cm、最深部で25cmを測る。

支柱穴はPit 1～Pit 4の4つである。Pit 3とPit 4のほぼ中央西壁寄りに位置するPit 5は、梯子敷設のためのものと考えられる。平面形態は不整形円形を呈し、北側にオーヴァーハングしていた。梯子の抜き取り行為に起因するものであろうか。柱穴の規模は、Pit 1が長軸34cm、短軸33cm、深さ30 cm、Pit 2が長軸55cm、短軸43cm、深さ50cm、Pit 3が長軸45cm、短軸42cm、深さ15cm、Pit 4が長軸33cm、短軸30cm、深さ52cm、Pit 5が長軸51cm、短軸37cm、深さ48cmを測る。



第24図 第12・13号住居跡平面・断面図

カマドは東側壁中央やや南寄りに設けられている。北側の約半分を第104号土坑によって攪乱されている。遺存する南袖の長さは、60cmを測る。先端部には逆位に据えた長胴甕（第28図1）を構築材として用いていた。袖内面は被熱を受け、顕著に赤化していた。

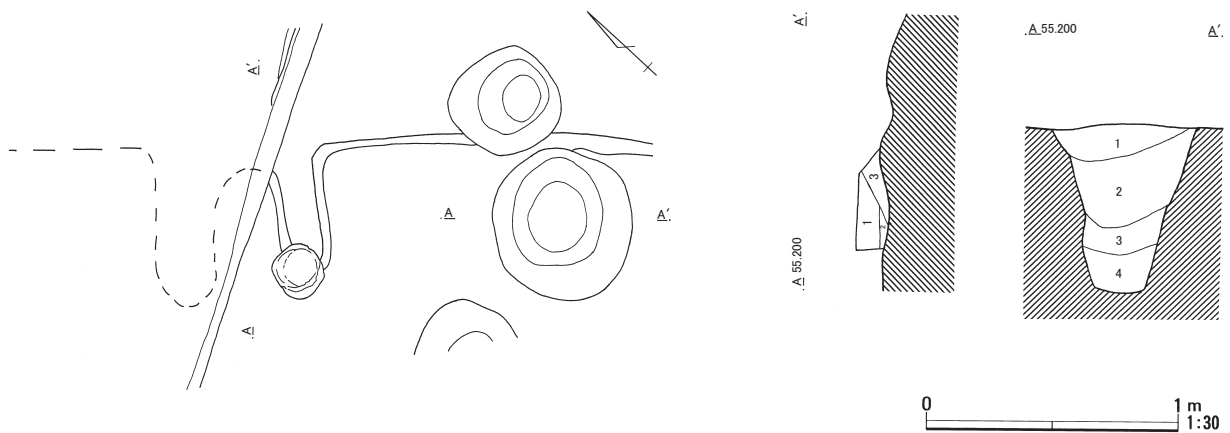
貯蔵穴は、カマド南袖と住居南東隅部のほぼ中央、東壁寄りに検出された。平面形態は、やや不整な円形である。長軸60cm、短軸56cm、床面からの深さは64cmを測る。

第12号住居跡土層説明

- 第1層 暗褐色土 ローム粒子（～1mm）を少量、ローム小塊（～3cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第6層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第7層 暗褐色土 暗褐色土小塊と、ローム小塊（～3cm）が斑状に混在する層。非常に堅緻であり、粘性は低い。
（柱穴充填土・貼床）
- 第8層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第9層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第10層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第13号住居跡土層説明

- 第1層 暗褐色土 ローム粒子（～1mm）を中量、風化ローム小塊（～3cm）を斑状に少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、風化したローム小塊（～4cm）を斑状に少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



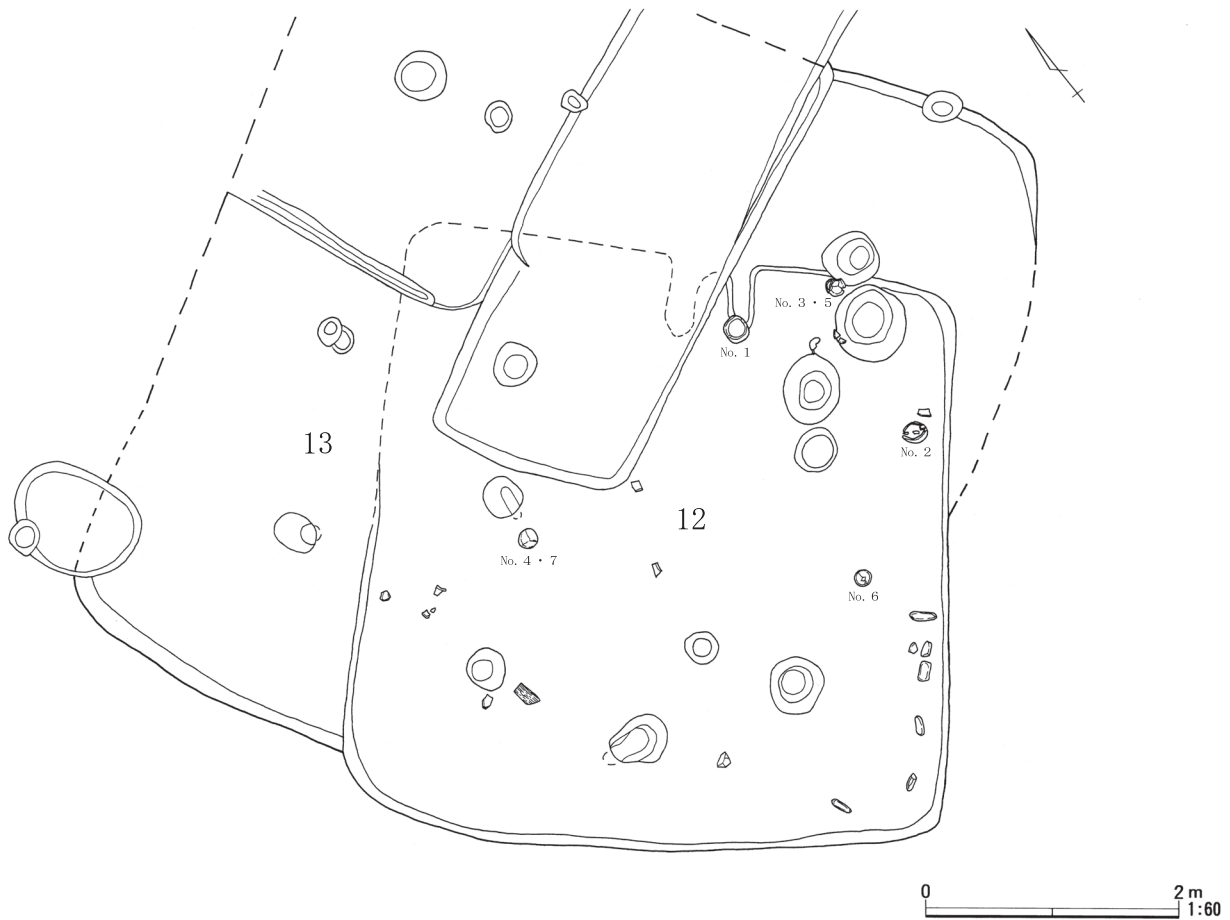
第25図 第12号住居跡カマド平面・断面図、貯蔵穴平面・断面図

第12号カマド土層説明

- 第1層 暗褐色土 焼土粒子（～1mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 焼土粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 焼土粒子（～1mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第12号住居跡貯蔵穴土層説明

- 第1層 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 ローム粒子（～2mm）、ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 明褐色土 ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 ローム粒子（～0.5mm）を中量、ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



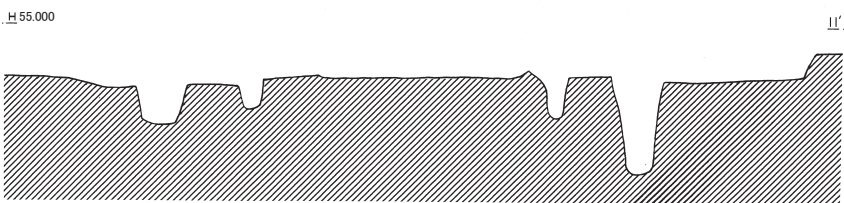
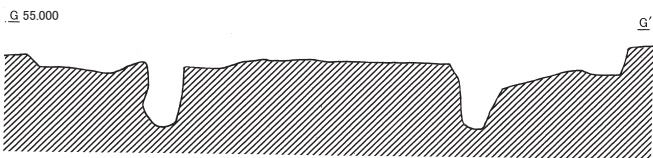
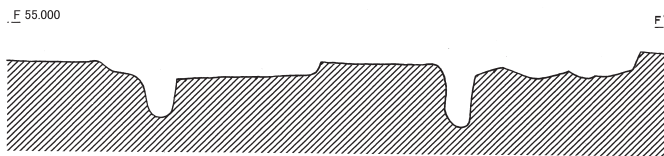
第26図 第12号住居跡遺物出土状況図

遺物の出土状態は、貯蔵穴北側床面より2個体の坏（第28図3・5）が、また貯蔵穴内より坏（第28図9）検出されており、さらにPit 2南側の南壁寄り床面において壺（第28図2）が出土している。これらの遺物から本住居跡の帰属時期は、古墳時代後期鬼高式期の所産である。

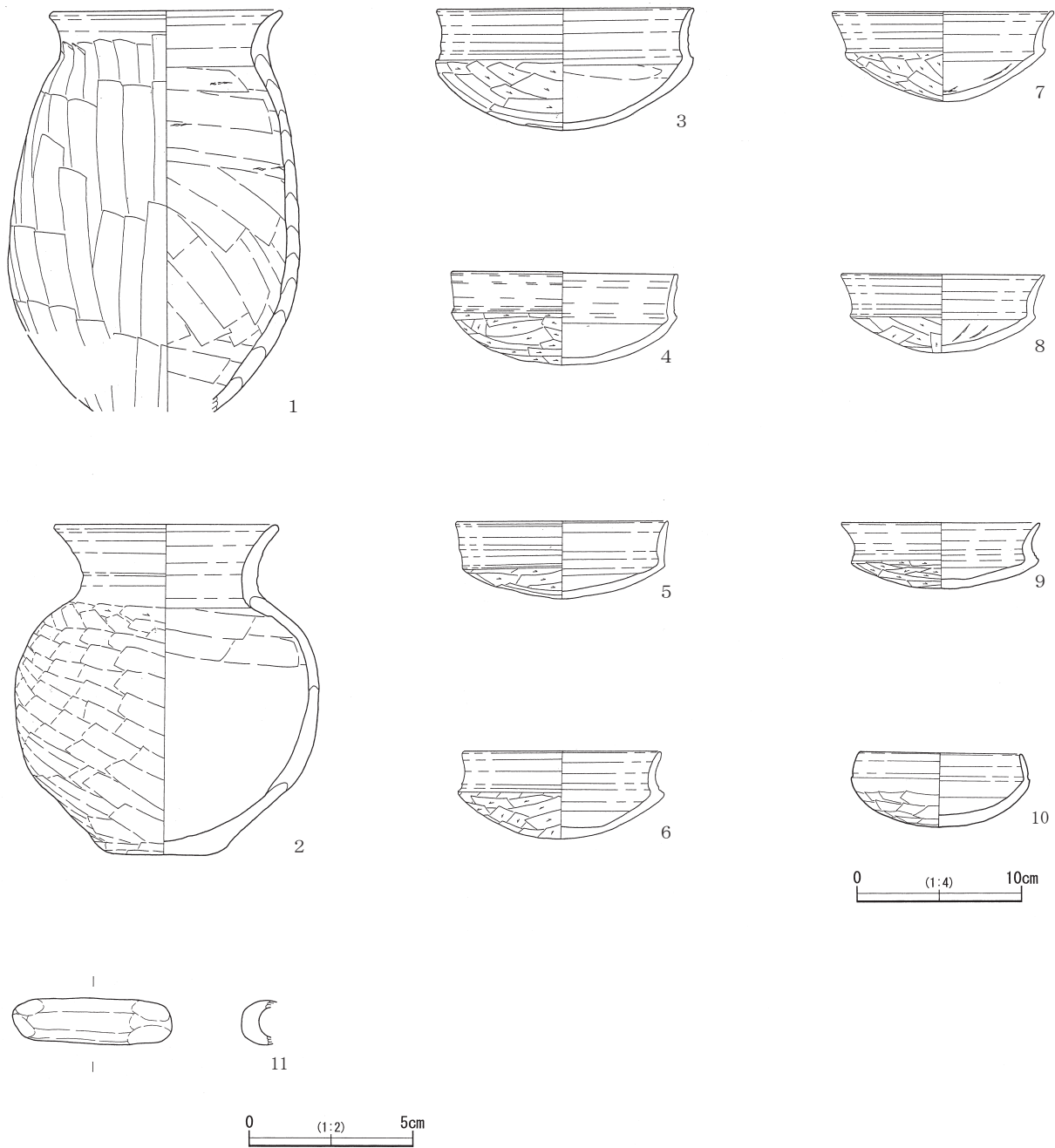
第13号住居跡（第24・26～27図、図版9）

調査地点の中央南東寄りで検出した遺構である。重複関係は、第96・104・105号土坑及び第12号住居跡によって切られている。このため本跡は、住居北西及び南東の隅部付近のみが確認されているにとどまり、遺存状態は不良である。遺構確認面は、黄褐色ローム層上面である。遺構確認面における平面形態は、概ね正方形を呈するものと推定される。本住居跡の規模は、長軸長現存値で3 m 53cmを測り、推定6 m 35cmと考えられる。短軸長推定6 mと考えられる。主軸方位はN - 60.5° - Eである。

壁は床面付近であり、斜位に立ち上がる。壁高は東側6 cm、西側10cmを測る。貼床は住居南東隅部の一部に確認され、他はローム面を平坦に掘り下げたものである。掘り方は最浅部で2 cm、最深部で48cmを測る。支柱穴はPit 6～Pit 9の4つである。穴柱穴の規模は、Pit 6が長軸25cm、短軸21cm、深さ23cm、Pit 7が長軸46cm、短軸43cm、深さ94cm、Pit 8が長軸27cm、短軸25cm、深さ37cm、Pit 9が長軸34cm、短軸17cm、深さ43cmを測る。本住居跡の帰属時期は、遺物の出土が無いため第12号住居跡との重複関係より求められよう。第12号住居跡は、鬼高式期においても後半に位置づけられるものであることから、本住居跡は、鬼高式期前半以前にされよう。



第 27 图 第 12・13 号住居跡掘り方平面・断面図



第 28 図 第 12 号住居跡出土遺物

第 8 表 第 12 号住居跡出土遺物観察表 (1)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 甕	口径 14.4 底径 — 器高 24.6	口端部は丸く、口唇部はわずかに立ち上がる。口縁部は大きく外反する。胴部下位に最大径を有する。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部縦位ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部上位工具による横位に近いナデ、中位工具による斜位ナデ、下位工具による横位に近いナデ。	片・白 多 赤・角・雲 中 内外—にぶい 橙色	残:70%
2	土師器 壺	口径 13.8 底径 8.0 器高 19.8	口端部は丸い。口縁部は大きく外反する。肩部はやや張り、胴部上位に最大径を有する。	外面—口縁部～頸部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ後ナデ。底部ヘラケズリ。内面—口縁部～頸部ヨコナデ。胴部上位工具による横位に近いナデ後ナデ、中位～底部ナデ。	片・白・Fe 少 角・雲 微 内外—橙色	残:60%

第9表 第12号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	土師器 坏	口径 16.0 底径 — 器高 7.4	口端部は丸く、わずかに外側に肥厚する。口辺部はゆるやかに外反する。丸底。	外面—口辺部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内面—口辺部ヨコナデ。底部上位斜位ナデ、中位～下位ナデ。	片・白・Fe 中 角・雲 少 内—明赤褐色 外—橙色	残:略完形
4	土師器 坏	口径 14.2 底径 — 器高 5.7	口端部は丸い。口辺部上位に明瞭な稜を有する。口辺部は直線的に立ち上がる。丸底。	外面—口辺部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内面—口辺部ヨコナデ。底部横位・斜位ナデ。	片・白・Fe 中 角・雲 少 白針 微 内外—橙色	残:30%
5	土師器 坏	口径 13.1 底径 — 器高 4.8	口端部は尖り気味である。口辺部は直線的に立ち上がる。丸底。	外面—口辺部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内面—口辺部～底部上位ヨコナデ、中位～下位ヘラケズリ。	片・白・石 中 角・雲 微 内—橙色 外—にぶい橙色	残:60%
6	土師器 坏	口径 12.3 底径 — 器高 5.4	口端部は丸い。口唇部は内傾する。丸底。	外面—口辺部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内面—口辺部～底部上半ヨコナデ、下半ナデ。	片・石・Fe 少 白・雲 微 内—灰褐色 外—にぶい赤褐色	残:80%
7	土師器 坏	口径 13.7 底径 — 器高 5.5	口端部は丸い。口辺部はやや外反する。丸底。	外面—口辺部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内面—口辺部～底部上位ヨコナデ、中位～下位工具による斜位ナデ後ナデ。	片・白・石 中 角・雲 少 内外—橙色	残:90%
8	土師器 坏	口径 12.6 底径 — 器高 4.8	口端部は尖り気味であり、口辺部はやや外反する。丸底。	外面—口辺部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内面—口辺部～底部上位ヨコナデ、中位～下位工具による斜位ナデ後ナデ。	片 中 白・石・Fe 少 角・雲 微 内外—明赤褐色	残:40%
9	土師器 坏	口径 12.2 底径 — 器高 4.0	口端部は丸い。口辺部は大きく外反する。丸底。	外面—口辺部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内面—口辺部～底部上位ヨコナデ、中位～下位ナデ。	片・白 中 角・雲・Fe 少 内外—橙褐色	残:略完形
10	土師器 坏	口径 10.2 底径 — 器高 4.4	口端部は丸い。口辺部は大きく内傾する。丸底。	外面—口辺部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。内面—口辺部～底部上位ヨコナデ、中位～下位ナデ。	片・白 中 角・雲・Fe 少 内外—橙褐色	残:30%
11	土 錘	長さ 4.9 径 1.2	棒状の芯を被覆し整形か。	外面—指頭ナデ。端部ツマミ。	片・白 中 角・雲 少 内外—褐色	残:50%

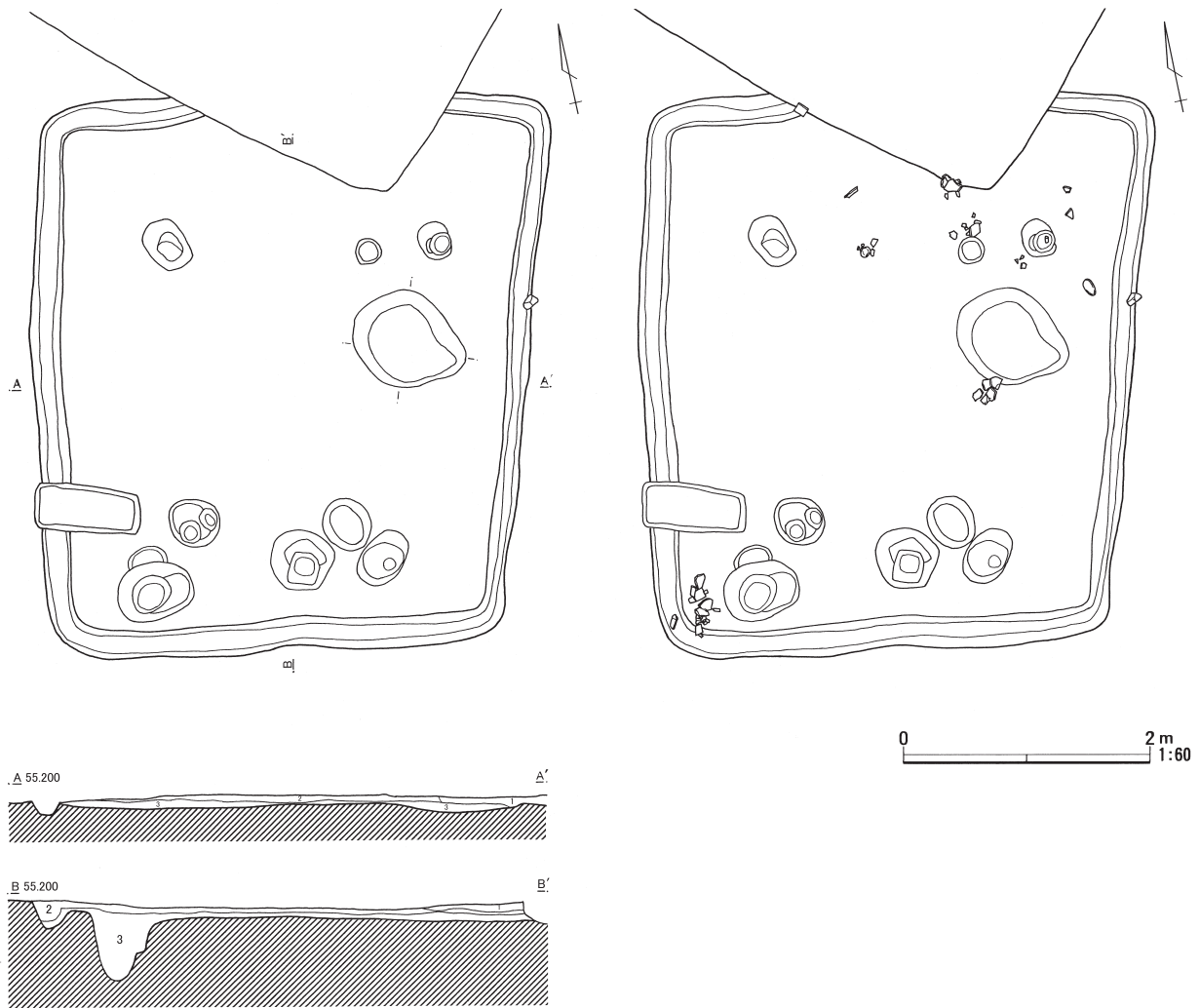
第14号住居跡(第29～32図、第10表、図版9・10)

調査地点の中央南寄りで検出した遺構である。住居跡の西側は第12号住居によって切られ、第10号住居跡を切って造られている。遺構確認面は黄褐色ローム層上面である。遺構確認面における平面形態は、南北方向に長軸を有する長方形を呈する。本住居跡の規模は、長軸長4m55cm、短軸長3m97cmを測る。主軸方位はN-10°-Eである。

四周に壁溝が巡り、黄褐色ロームを主体とした貼床が施されている。カマドが存在したと推定される北壁から、住居中央やや南にかけて、発達した瘤状の硬化面が観察された。壁高は北側15cm、東側12cm、南側18cm、西側11cmを測る。主柱穴はPit1～Pit4の4つである。柱穴の規模は、Pit1が長軸44cm、短軸30cm、深さ68cm、Pit2が長軸30cm、短軸26cm、深さ47cm、Pit3が長軸49cm、短軸34cm、深さ51cm、Pit4が長軸43cm、短軸40cm、深さ42cmを測る。

カマドは、北壁に存在したものと推定され第12号住居跡の掘削によって消滅していた。この掘削により南側の床面上には、カマドから流失し、堆積したと考えられる焼土粒子及び灰褐色粘土粒子が観察された。

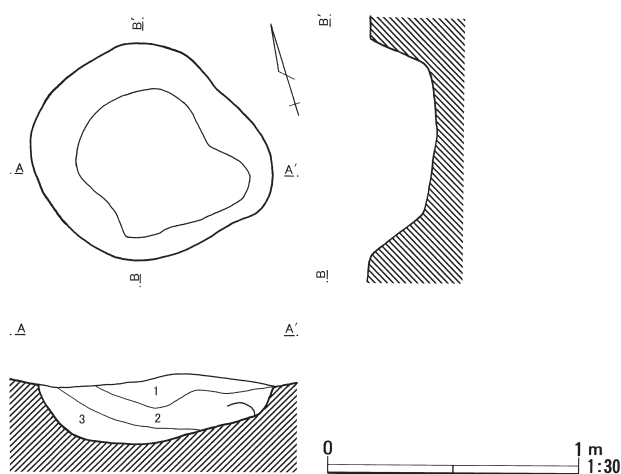
住居中央Pit2付近において床下土坑が確認されている。床面状での平面形態は、不整な楕円形を呈する。この床下土坑の規模は、長軸80cm、短軸74cm、深さ25cmを測る。掘り方は最浅部で2cm、最深部で32cmを測る。



第29図 第14号住居跡平面・断面図、遺物出土状況図

第14号住居跡土層説明

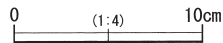
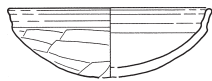
- 第1層 灰暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～8mm）、ローム小塊（～2cm）を多量に含む。しまりは非常に硬く、粘性は低い。



第30図 第14号住居跡床下土坑平面・断面図

第14号住居跡 床下土坑土層説明

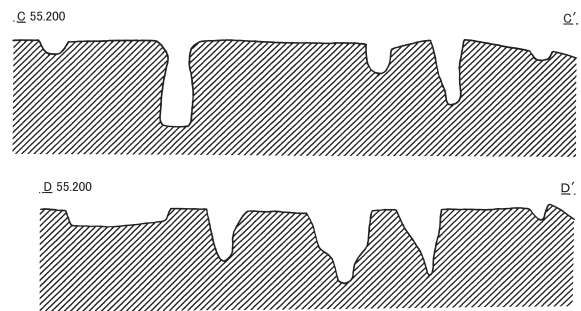
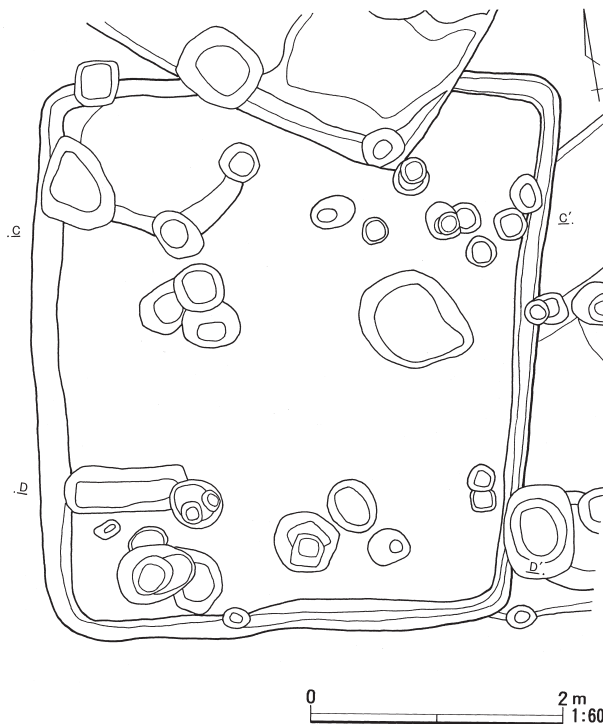
- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、粘土粒子・焼土粒子（～0.5mm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は高い。
- 第2層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）、ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第31図 第14号住居跡出土遺物

第10表 第14号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 杯	口径 13.6 底径 — 器高 4.8	口端部は尖り気味である。口辺部は直線的に内傾する。丸底。	外面—口辺部ヨコナデ。体部～底部へラケズリ。内面—口辺部～底部上位ヨコナデ。底部下位ナデ。	片・白 多 角・雲・Mg・Fe中 内外—橙褐色	残:30%



覆土は2層に分層された。上層土中には多量の焼土粒子が観察されたものの、炭化材及び床面の被熱は確認されなかった。

遺物の出土状態は、住居南東隅部及び住居中央から北東隅部にかけて検出されている。いずれも破片資料であり、床面から浮いた状態での出土である。

第32図 第14号住居跡掘り方平面・断面図

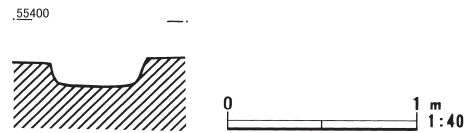
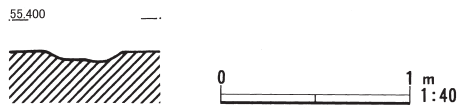
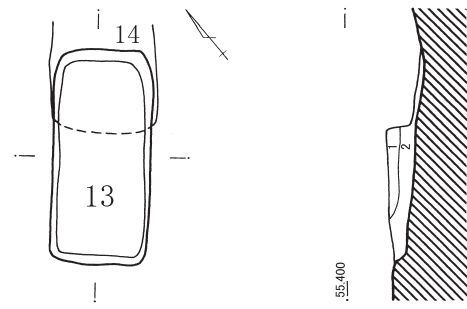
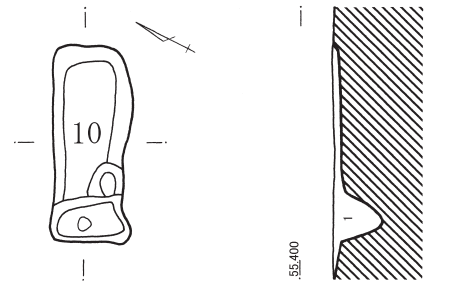
2. 土 坑

第10号土坑 (第33図)

調査地点の南西部南壁際に検出した遺構である。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長1 m3cm、短軸長38cmを測る。主軸方位はN - 65° - Eである。深さは最浅部で3 cm、最深部で18cmを測る。

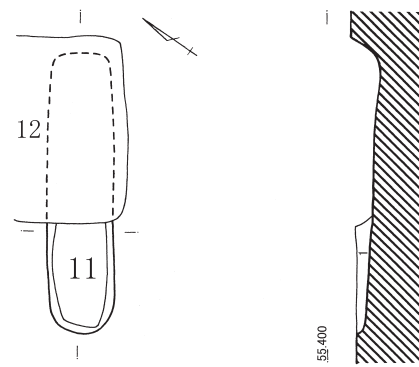
第11号土坑 (第33図、図版13)

調査地点の南西部南壁寄りに検出した遺構である。重複関係は、遺構の北側の約半分を第12号土坑によって切られている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長現存値で85cmを測り、推定2 m22cmと考えられる。短軸長52cmを測る。主軸方位はN - 55° - Eである。深さは最浅部で6 cm、最深部で18cmを測る。



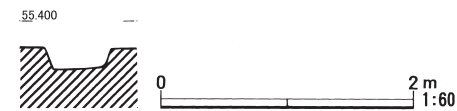
第10号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第11号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



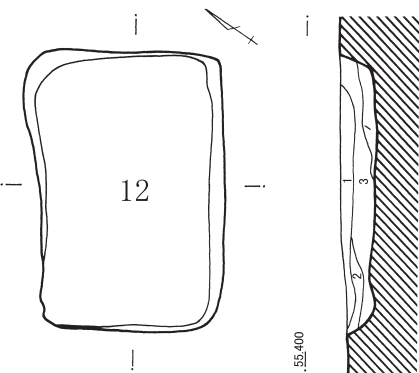
第12号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

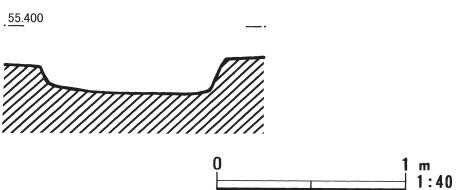
第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第13号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第33図 第10～13号土坑平面・断面図

第12号土坑（第33図、図版13）

調査地点の南西部南壁寄りに検出した遺構である。重複関係は、第11号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長1m47cm、短軸長98cmを測る。長軸方位はN - 53° - Eである。深さは最浅部で2cm、最深部で17cmを測る。

第13号土坑（第33図）

調査地点の南西部西壁寄りに検出した遺構である。重複関係は、第14号土坑によって切られている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長1m15cm、短軸長52cmを測る。主軸方位はN - 41° - Eである。深さは最浅部で6cm、最深部で15cmを測る。

第14号土坑（第34図、図版13・14）

調査地点の南西部西壁寄りに検出した遺構である。重複関係は、第13号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長2m6cm、短軸長52cmを測る。主軸方位はN - 42° - Eである。深さは最浅部で10cm、最深部で21cmを測る。

第15号土坑（第34図）

調査地点の南西部西壁寄りに検出した遺構である。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長98cm、短軸長41cmを測る。主軸方位はN - 7° - Wである。深さは最浅部で2cm、最深部で7cmを測る。

第16号土坑（第34図）

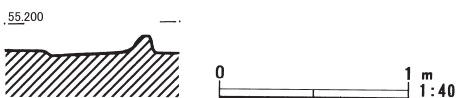
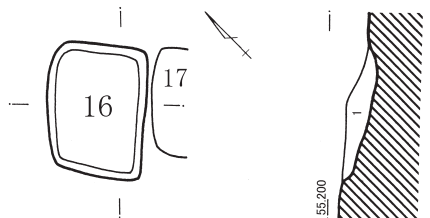
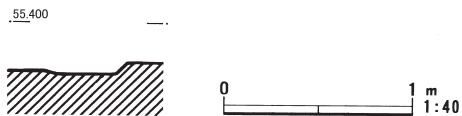
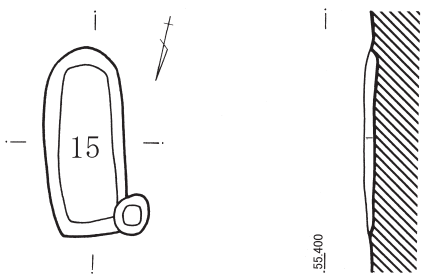
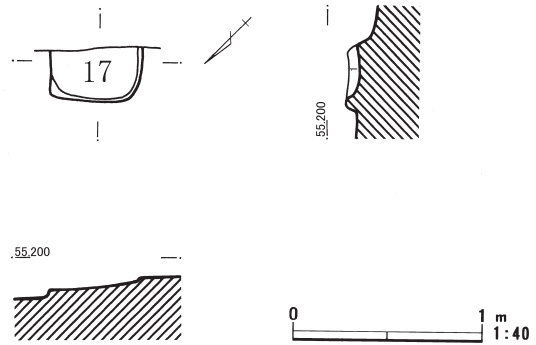
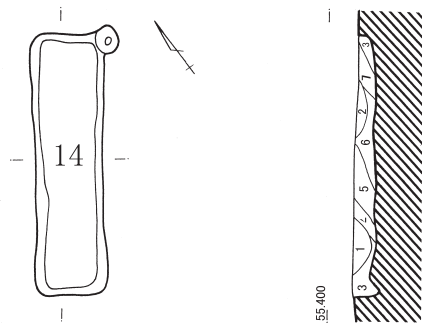
調査地点の南西部西壁寄りに検出した遺構である。遺構確認面における平面形態は、やや不整な長方形を呈する。本址は、他に検出されている多数の長方形の土坑中であって、正方形に近い形態を持つものである。本土坑の規模は、長軸長69cm、短軸長51cmを測る。主軸方位はN - 49° - Eである。深さは最浅部で3cm、最深部で13cmを測る。

第17号土坑（第34図）

調査地点の南西部西壁寄りに検出した遺構である。重複関係は、第18号土坑によって切られている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長現存値で29cm、短軸長48cmを測る。主軸方位はN - 42° - Wである。深さは最浅部で3cm、最深部で6cmを測る。

第18号土坑（第35図、図版14）

調査地点の南西部西壁寄りに検出した遺構である。重複関係は、第17・19・34・35号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈するものであるが、検出されている他の多数の土坑の中においても、長い部類のうちの一つといえよう。本土坑の規模は、長軸長3m33cm、短軸長48cmを測る。主軸方位はN - 48° - Eである。深さは最浅部で5cm、最深部で17cmを測る。



第14号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第6層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第7層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第15号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～4mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第16号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第17号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～8mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第34図 第14～17号土坑平面・断面図

第19号土坑（第35図）

調査地点の南西部西壁寄りに検出した遺構である。重複関係は、西側を第18号土坑によって切られ、南側は比較的新しい時期の土坑により、攪乱されている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長1 m69cm、短軸長現存値で53cmを測る。主軸方位はN - 52° - Eである。深さは最浅部で6 cm、最深部で11cmを測る。

第20号土坑（第35図）

調査地点の南西部に検出した遺構である。本土坑の規模は、長軸長現存値で44cm、短軸長56cmを測る。主軸方位はN - 41° - Eである。深さは最浅部で5 cm、最深部で9 cmを測る。

第21号土坑（第35図、図版14）

調査地点の南西部、第20号土坑の東側に検出した遺構である。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。重複関係は、第28・32号土坑を切っている。本土坑の規模は、長軸長3 m53cm、短軸長55cmを測る。主軸方位はN - 55.5° - Eである。深さは最浅部で15cm、最深部で26cmを測る。

第22号土坑（第36図）

調査地点の南西部南壁寄り、第21号土坑の南側に検出した遺構である。本土坑の規模は、長軸長2 m19cm、短軸長57cmを測る。主軸方位はN - 62° - Eである。深さは最浅部で7 cm、最深部で13cmを測る。

第23号土坑（第36図）

調査地点の南西部南壁寄りに検出した遺構である。重複関係は、第9号住居跡を切っている。遺構確認面における平面形態は、隅丸の台形状を呈する。本土坑の規模は、長軸長1 m46cm、短軸長1 m34 cmを測る。主軸方位はN - 66° - Eである。深さは最浅部で24cm、最深部で30cmを測る。

第24号土坑（第36図）

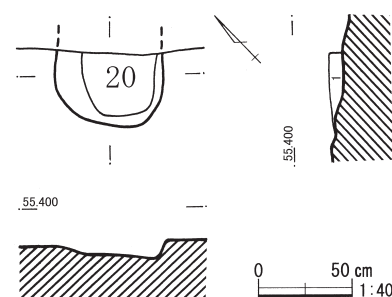
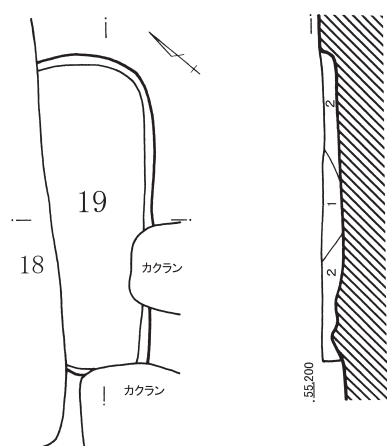
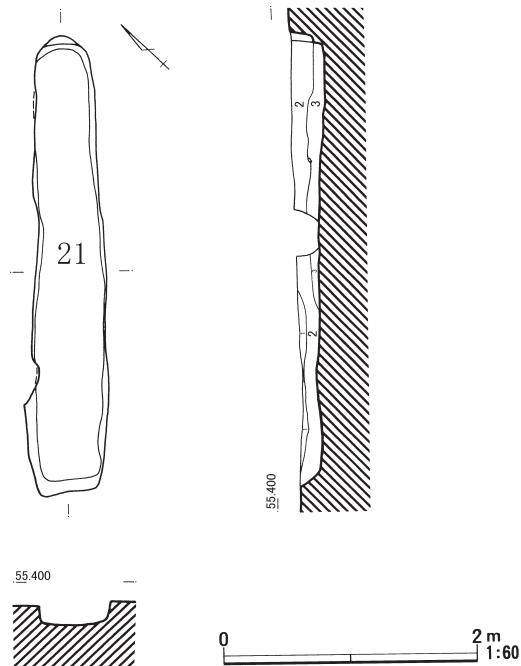
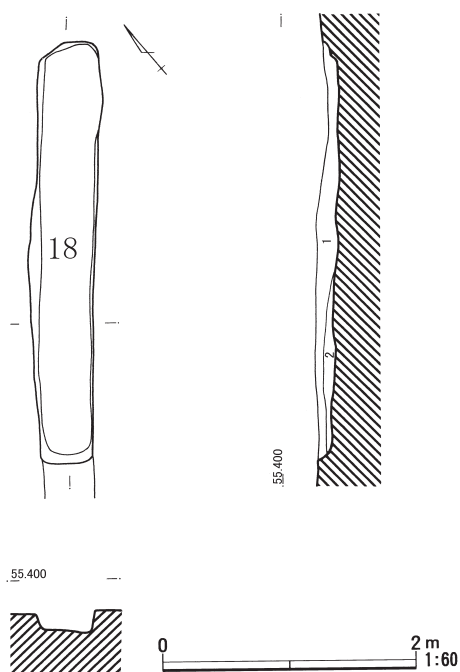
調査地点の南西部、第23号土坑の北側に検出した遺構である。重複関係は無く、隣接する第23・25号土坑との間にやや距離を保ち、単独状に存在している。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長2 m42cm、短軸長59cmを測る。主軸方位はN - 61° - Eである。深さは最浅部で4 cm、最深部で14cmを測る。

第25号土坑（第36図、図版15）

調査地点の南西部、第24号土坑の西側にはほぼ平行し、やや距離をおいて検出した遺構である。重複関係は、第26・27・28号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長1 m65cm、短軸長50cmを測る。主軸方位はN - 55° - Eである。深さは最浅部で8 cm、最深部で18cmを測る。



第18号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は普通。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第19号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～4mm）・ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

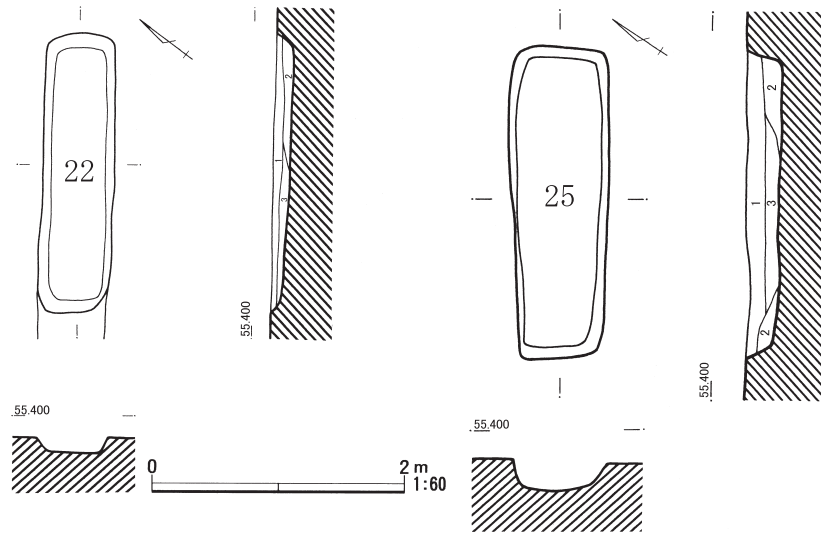
第20号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第21号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）、ローム小塊（～8mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は普通。

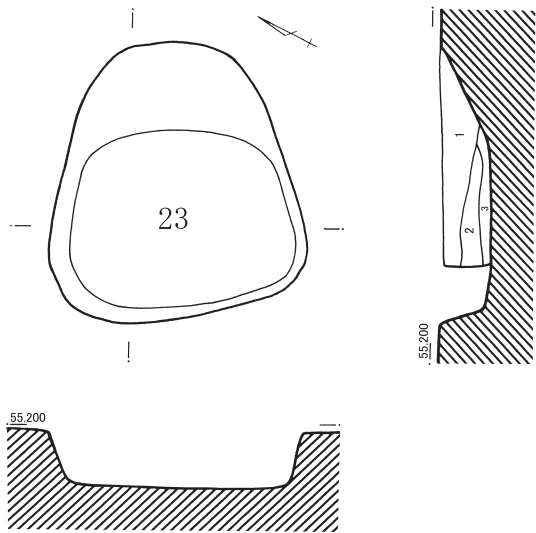
第35図 第18～21号土坑平面・断面図



第22号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第23号土坑土層説明

第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は普通。

第23号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

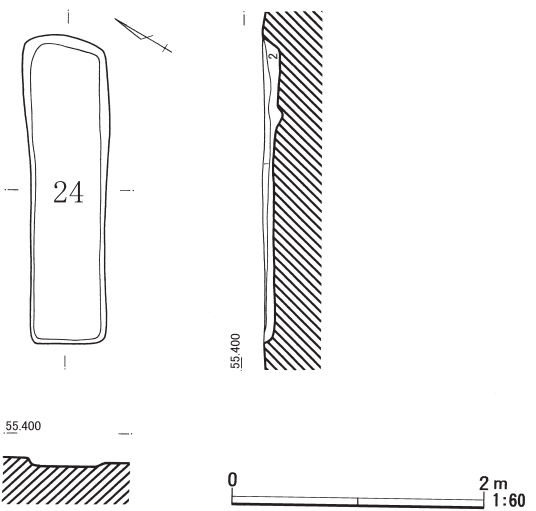
第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第3層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～8mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第24号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量、ローム小塊（～5cm）中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～5cm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第25号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。

第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は普通。

第36図 第22～25号土坑平面・断面図

第26号土坑（第37図、図版15）

調査地点の南西部に検出した遺構である。第25号土坑によって切られている。

本土坑の規模は、長軸長現存値で30cm、短軸長53cmを測る。主軸方位はN - 53° - Eである。深さは最浅部で12cm、最深部で21cmを測る。

第27号土坑（第37図）

調査地点の南西部、第25・29号土坑の間に検出した遺構である。第25号土坑によって切られている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長1 m48cm、短軸長41cmを測る。ほぼ平行している第25・29号土坑とは異なり、主軸方位をN - 45.5° - Eにとっている。深さは最浅部で2 cm、最深部で13cmを測る。

第28号土坑（第37図、図版15）

調査地点の南西部に検出した遺構である。第21・25号土坑によって切られ、第32号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長現存で2 m9 cm、短軸長51cmを測る。主軸方位はN - 47.5° - Wである。深さは最浅部で14cm、最深部で15cmを測る。

第29・30号土坑（第37図）

調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第29号土坑が第30号土坑を切り、また第29・30号土坑はともに第31号土坑を切っている。第30号土坑に対し、第29号土坑は斜位に主軸を有し、そのあり方と切りあい関係は、第25・27号土坑との関係と類似するものである。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。第30号土坑の規模は、長軸残存値で1 m89cm、短軸残存最大幅49cmを測る。主軸方位はN - 41° - Eである。深さは10cmを測る。第29号土坑の規模は、長軸長2 m7 cm、短軸長49cmを測る。主軸方位はN - 57.5° - Eである。深さは最浅部で3 cm、最深部で22cmを測る。

第31号土坑（第38図）

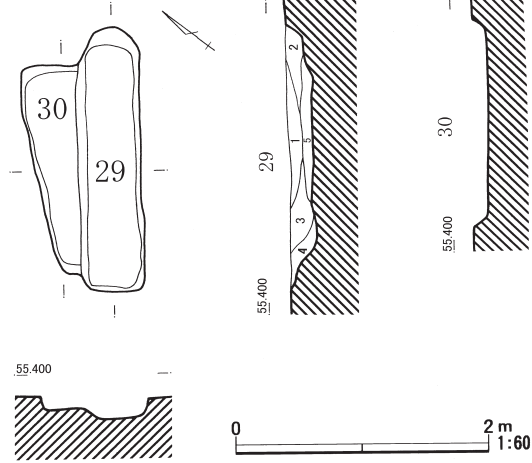
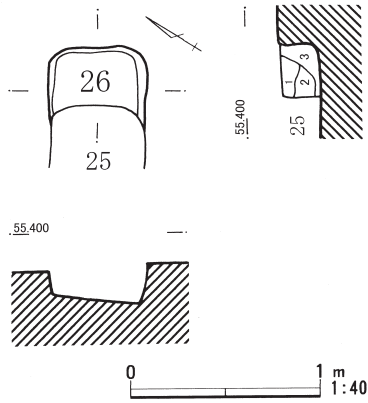
調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第29・30号土坑によって切られ、第32・35・36号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長1 m60cm、短軸長34cmを測る。主軸方位はN - 57.5° - Eをなし、第27号土坑に類する。深さは最浅部で10cm、最深部で11cmを測る。

第32号土坑（第38図、図版16）

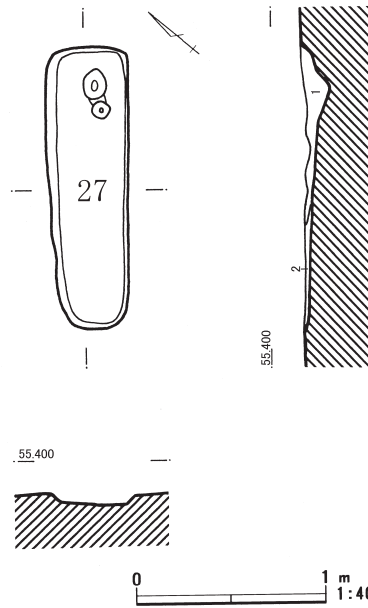
調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第28・31号土坑によって切られている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長2 m38cm、短軸長68cmを測る。主軸方位はN - 40.5° - Wをなし、第27・30号土坑に類する。深さは最浅部で2 cm、最深部で24cmを測る。



第26号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～3mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を中量、ローム小塊（～2cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

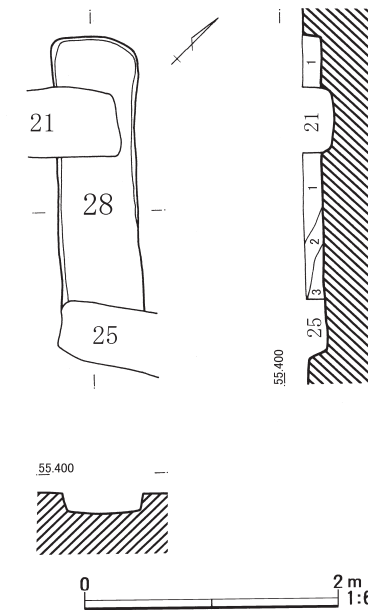


第27号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～8mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～8mm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第28号土坑土層説明

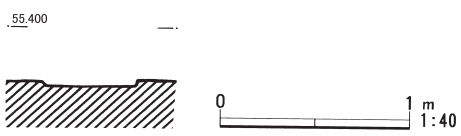
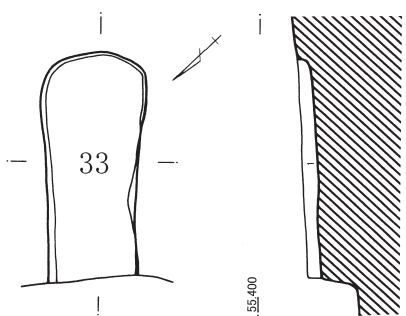
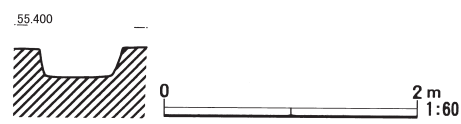
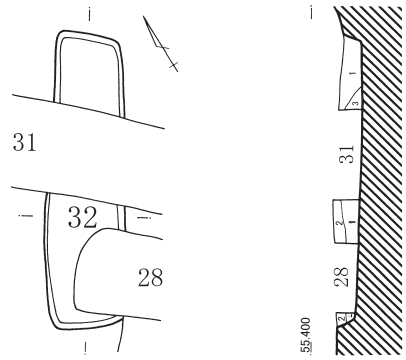
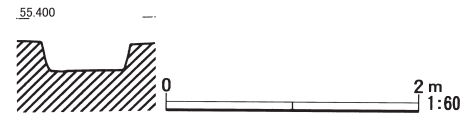
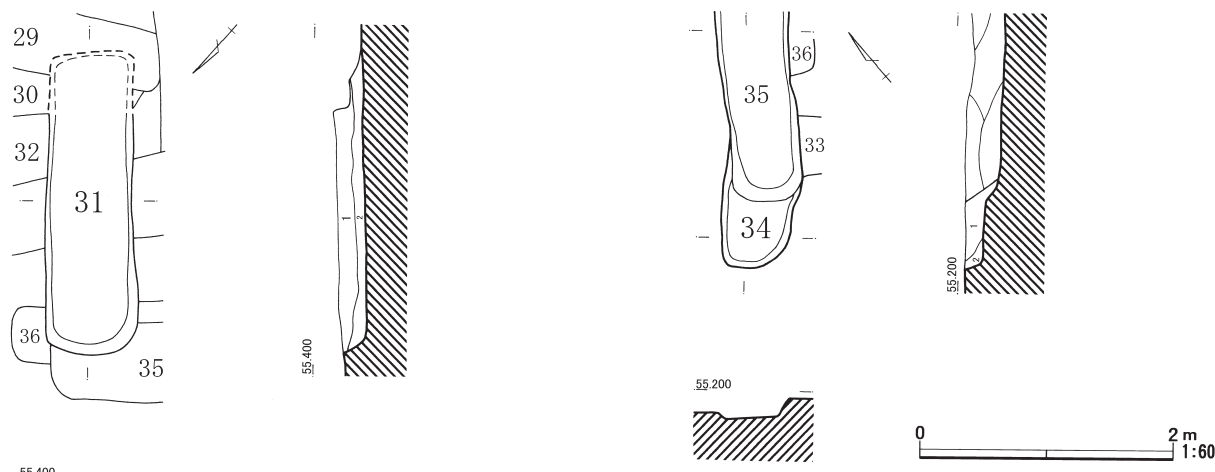
- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）・ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第29号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～8mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第37図 第26～30号土坑平面・断面図



第31号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～1cm）少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第32号土坑土層説明

- 第1層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（1cm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は普通。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を多量、ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は普通。

第33号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～3mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第34号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～8mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第38図 第31～34号土坑平面・断面図

第33号土坑（第38図）

調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第35号土坑によって切られている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長残存値で1 m20cm、短軸長48cmを測る。主軸方位はN - 39.5° - Wである。深さは最浅部で2 cm、最深部で9 cmを測る。

第34号土坑（第38図、図版16）

調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第18・35号土坑によって切られている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長現存値で56cm、短軸長54 cmを測る。主軸方位はN - 53° - Eである。深さは最浅部で2 cm、最深部は9 cmを測る。

第35号土坑（第39図、図版16）

調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第18号土坑によって切られ、第33・34・36号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。覆土は暗褐色土を主体とするものであるが、未風化のローム小塊が偏在することや堆積状態の様子から、埋め戻されたものと考えられるものである。本土坑の規模は、長軸長2 m58cm、短軸長58cmを測る。主軸方位はN - 49° - Eである。深さは最浅部で6 cm、最深部で30cmを測る。

第36号土坑（第39図）

調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第31・35号土坑によって切られている。本土坑の規模は、長軸現在値で29cm、短軸長47cmを測る。主軸方位はN - 49° - Eである。深さは最浅部で10cm、最深部で18cmを測る。

第37号土坑（第39図）

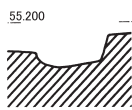
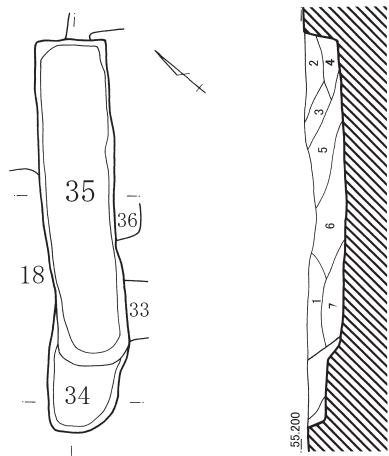
調査地点の南西部西壁寄りに検出した遺構である。重複関係は、第38・42号土坑によって切られている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長現存値で1 m28 cm、短軸長65cmを測る。主軸方位はN - 51° - Eである。深さは最浅部で3 cm、最深部で15cmを測る。

第38号土坑（第39図、図版16）

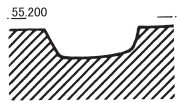
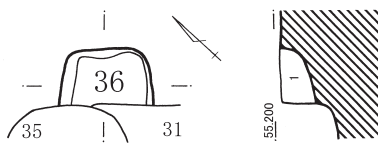
調査地点の南西部西壁寄りに検出した遺構である。重複関係は、第37号土坑を切り、覆土上層を第39号土坑に、また41～43号土坑によって切られている。本土坑の規模は、長軸長現存値で1 m60cm、短軸長60cmを測る。主軸方位はN - 51° - Eを測る。深さは最浅部で4 cm、最深部で6 cmを測る。

第39号土坑（第40図、図版17）

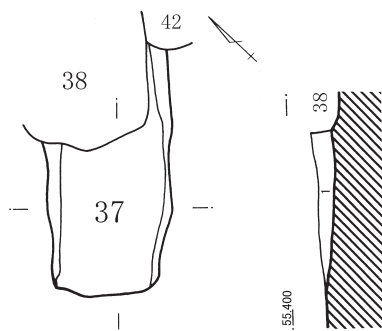
調査地点の南西部西壁寄りに検出した遺構である。重複関係は、第38号土坑の覆土上層を切り、第40・41号土坑によって切られている。本土坑の規模は、長軸長現存値で1 m60cm、短軸長現存値で60 cmを測る。主軸方位はN - 51° - Eを測る。深さは最浅部で14cm、最深部で21cmを測る。



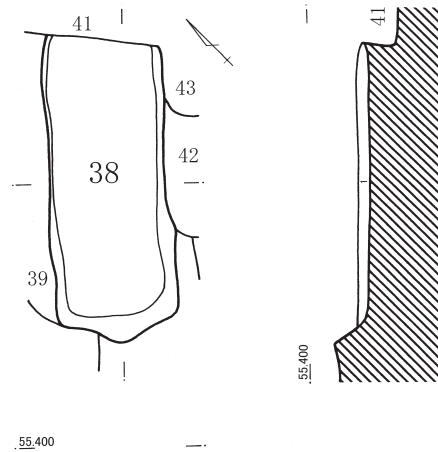
0 2 m 1:60



0 1 m 1:40



0 1 m 1:40



55.400



0 1 m 1:40

第35号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）を中量、ローム小塊（～8mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第6層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～2cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第7層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第36号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

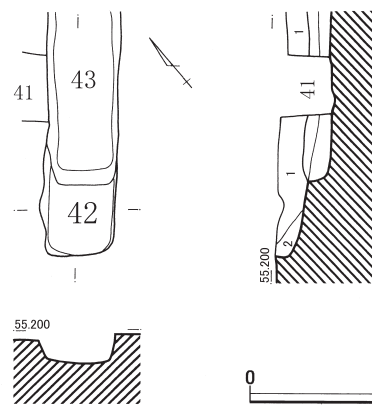
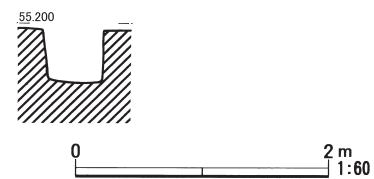
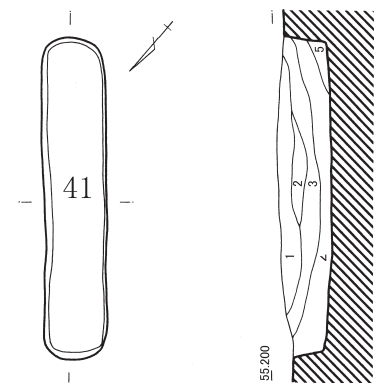
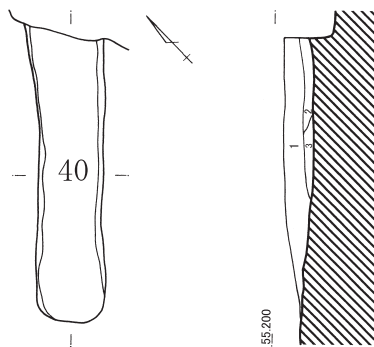
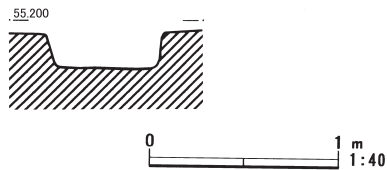
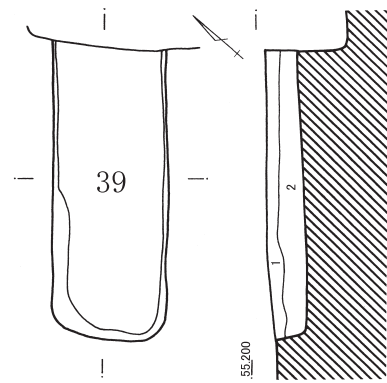
第37号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～8mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第38号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～8mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第39図 第35～38号土坑平面・断面図



第39号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第40号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊（～1cm）を少量、ローム粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第41号土坑土層説明

- 第1層 明褐色土 ローム粒子（～1mm）・ローム小塊（～3cm）を主体とし、暗褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 明褐色土 ローム粒子（～1mm）を主体とし、ローム小塊（～1cm）を少量、暗褐色土粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 明褐色土 ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～3cm）を主体とし、暗褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 ローム粒子（～1mm）・ローム小塊（～3cm）を主体とし、暗褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 明褐色土 ローム小塊（～8mm）主体とし、ローム粒子（～1mm）を中量、暗褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第42号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、暗灰色粒子（～0.5mm）・ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第40図 第39～42号土坑平面・断面図

第40号土坑（第40図、図版16）

調査地点の南西部西壁寄りに検出した遺構である。重複関係は、第39・41号土坑によって切られている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長現存値で2m24cm、短軸長51cmを測る。主軸方位はN - 46.5° - Eである。深さは最浅部で2cm、最深部で24cmを測る。

第41号土坑（第40図）

調査地点の南西部西壁寄りに検出した遺構である。周辺にある土坑群とは主軸をほぼ直交させ、第31・47号土坑と軸を同じくするものである。重複関係は、45号土坑によって切られ、38～40、43・44号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長2m53cm、短軸長48cmを測る。主軸方位はN - 41° - Wである。深さは最浅部で24cm、最深部で43cmを測る。

第42号土坑（第40図、図版17）

調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第38・43号土坑を切っている。第43号土坑とは、ほぼ同軸を成して重複しているが、本土坑はわずかに南に寄って掘削されている。

本土坑の規模は、長軸長1m90cm、短軸長58cmを測る。主軸方位はN - 46° - Wである。深さは最浅部で24cm、最深部で43cmを測る。

第43号土坑（第41図、図版17）

調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第41・42号土坑によって切られ、第38・53号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長で2m11cm、短軸長58cmを測る。主軸方位はN - 46° - Eである。深さは最浅部で40cm、最深部で42cmを測る。

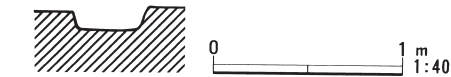
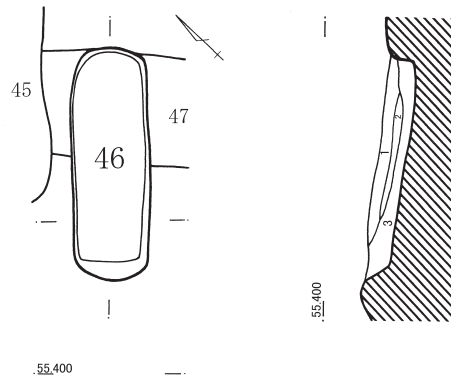
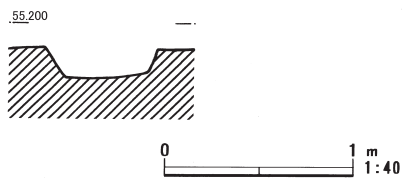
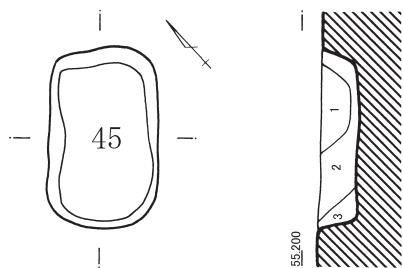
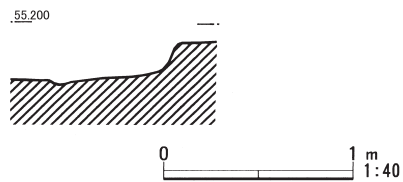
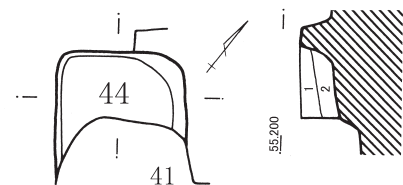
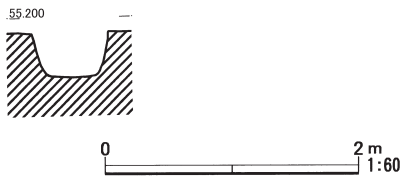
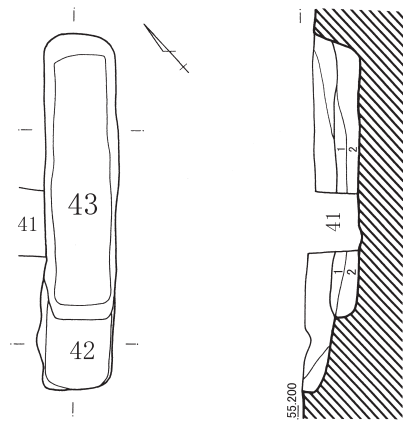
第44号土坑（第41図）

本調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第41・45号土坑によって切られている。本土坑の規模は、長軸長現存値で35cm、短軸長57cmを測る。主軸方位はN - 41° - Wである。深さは最浅部で16cm、最深部で21cmを測る。

第45号土坑（第41図）

本調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第41・44・47号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈するが、周辺の土坑群に比べ、長軸長が短いものである。

本土坑の規模は、長軸長98cm、短軸長58cmを測る。主軸方位はN - 54° - Eである。深さは最浅部で16cm、最深部で20cmを測る。



第43号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～2cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第44号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第45号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～3mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～3mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～3mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第46号土坑土層説明

- 第1層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第41図 第43～46号土坑平面・断面図

第46号土坑（第41図）

調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第47号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長1m23cm、短軸長41cmを測る。主軸方位はN - 46° - Eである。深さは最浅部で9cm、最深部で15cmを測る。

第47号土坑（第42図）

調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第36・44・46号土坑によって切られ、西側の大半が消失している。本土坑の規模は、長軸長現存値で1m8cmを測り、推定1m88cmと考えられる。短軸長60cmを測る。主軸方位はN - 39° - Wである。深さは最浅部で5cm、最深部で18cmを測る。

第48号土坑（第42図、図版17）

調査地点の南西部に、群集する土坑群とやや距離をおき検出した遺構である。第16号住居址の北壁を切っている。遺構確認面における平面形態は、不整な長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長72cm、短軸長40cmを測る。主軸方位はN - 17° - Wである。深さは最浅部で8cm、最深部で13cmを測る。

第49号土坑（第42図、図版18・19）

調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第9・16号住居跡を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長2m23cm、短軸長83cmを測る。主軸方位はN - 57° - Eである。深さは最浅部で15cm、最深部で34cmを測る。

第50号土坑（第42図、図版18）

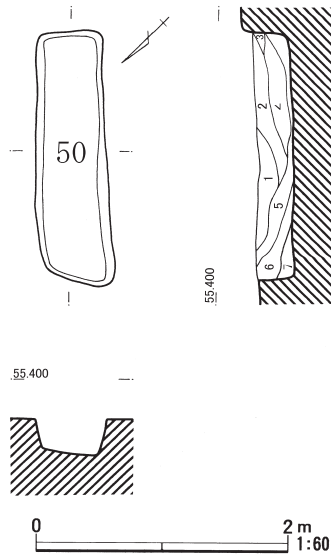
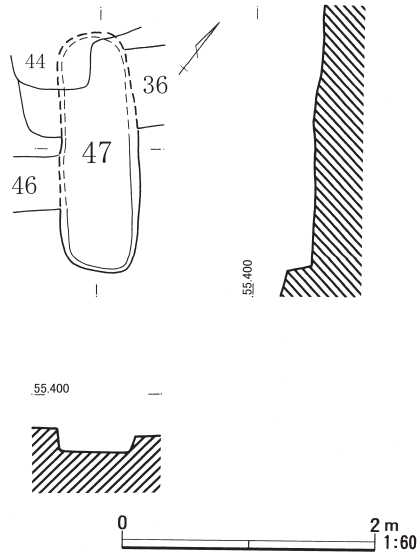
調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第51・52号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、やや不整な長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長1m95cm、短軸長56cmを測る。主軸方位はN - 34° - Wである。深さは最浅部で22cm、最深部で29cmを測る。

第51号土坑（第43図、図版18）

調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第50号土坑によって切られている。本土坑の規模は、長軸長1m89cm、短軸長現存値で50cmを測る。主軸方位はN - 35° - Wである。深さは最浅部で12cm、最深部で23cmを測る。

第52号土坑（第43図、図版18）

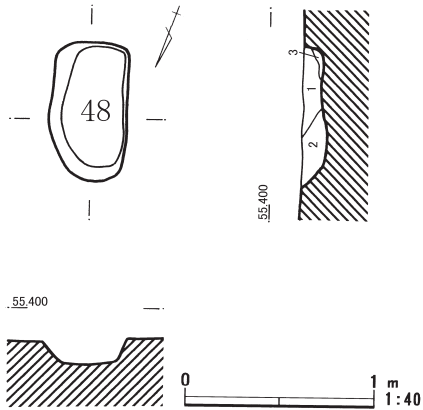
調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第50・56号土坑によって切られ、第53号土坑を切っている。本土坑の規模は、長軸長現存値で1m62cm、短軸長現存値で50cmを測る。主軸方位はN - 40° - Wである。深さは最浅部で18cm、最深部で58cmを測る。



第48号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第49号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第3層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、暗褐色土粒子（～0.5mm）を少量斑状に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第50号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 明褐色土 ローム粒子（～5mm）、ローム小塊（～1cm）を主体とし、暗褐色土粒子を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

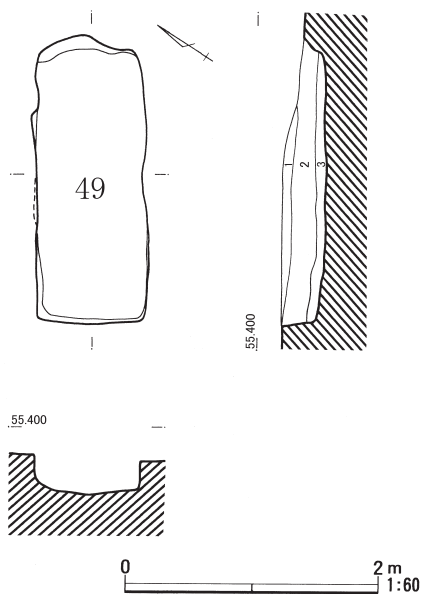
第3層 暗褐色土 ローム粒子（～5mm）、ローム小塊（～1cm）を主体とし、暗褐色土粒子を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）・ローム小塊（2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

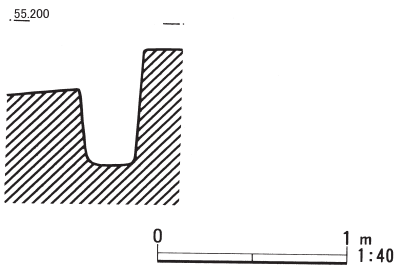
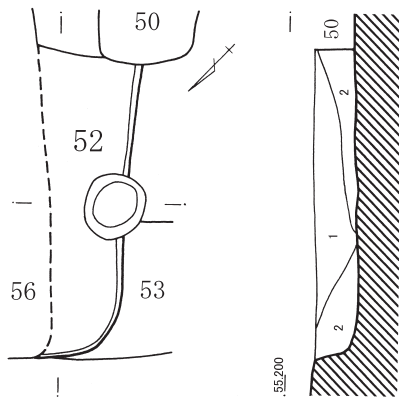
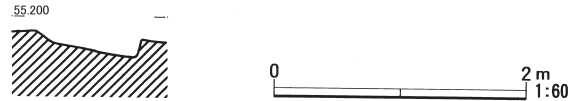
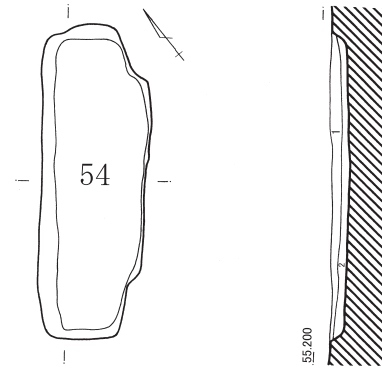
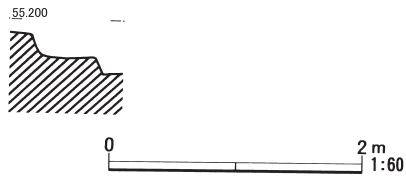
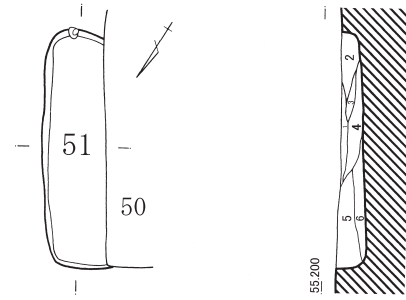
第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～3mm）を多量に、ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第6層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）・ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第7層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～3mm）を多量に、ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第 42 図 第 47 ～ 50 号土坑平面・断面図



第51号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～5mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量、ローム小塊（～5mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第6層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～5mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第52号土坑土層説明

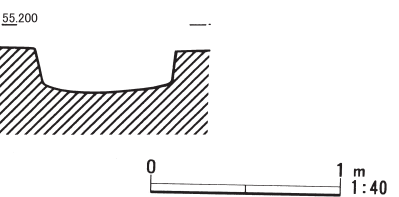
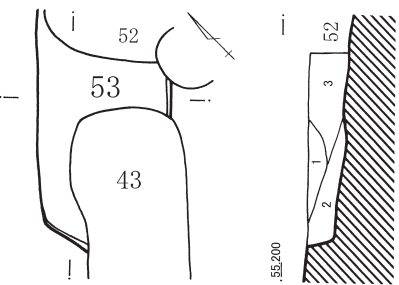
- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第53号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第54号土坑土層説明

- 第1層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を多量に、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～1cm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第43図 第51～54号土坑平面・断面図

第53号土坑（第43図）

調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第43・52号土坑によって切られており、遺存状態は不良である。

本土坑の規模は、長軸長現存値で1 m 5 cm、短軸長70cmを測る。主軸方位はN - 47° - Eである。深さは最浅部で15cm、最深部で23cmを測る。

第54号土坑（第43図、図版19）

調査地点の南西部、西壁寄りに検出した遺構である。重複関係は、第55号土坑によって切られている。本土坑の規模は、長軸長2 m 48cm、短軸長82cmを測る。主軸方位はN - 47.5° - Eである。深さは最浅部で7 cm、最深部で14cmを測る。

第55号土坑（第44図、図版19）

調査地点の南西部、西壁寄りに検出した遺構である。重複関係は、第54号土坑を切っている。本土坑の規模は、長軸長1 m 99cm、短軸長62cmを測る。主軸方位はN - 48° - Eである。深さは最浅部で11cm、最深部で26cmを測る。

第56号土坑（第44図、図版19）

調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、覆土上層の一部を第59号土坑によって切られ、第52・57・58号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する

本土坑の規模は、長軸長2 m 60cm、短軸長53cmを測る。主軸方位はN - 44° - Wである。深さは最浅部で10cm、最深部で28cmを測る。

第57・58号土坑（第44図）

調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、両土坑とも第56・62号土坑によって切られているため、遺存状態は不良である。第57号土坑底面と第56・62号土坑底面のレベルはほぼ同一である。

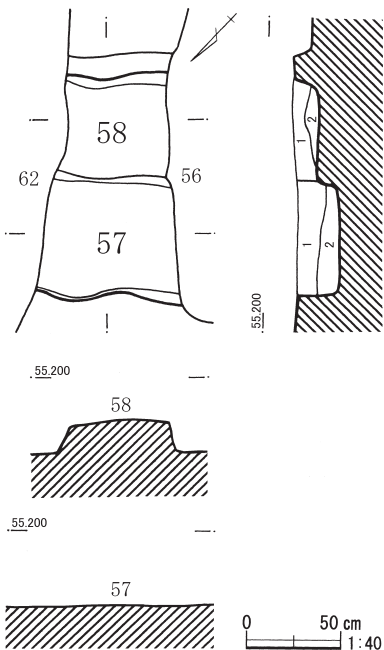
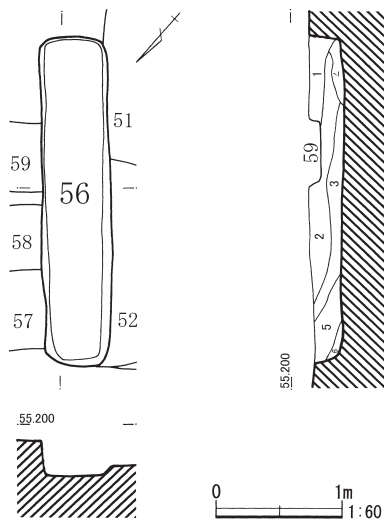
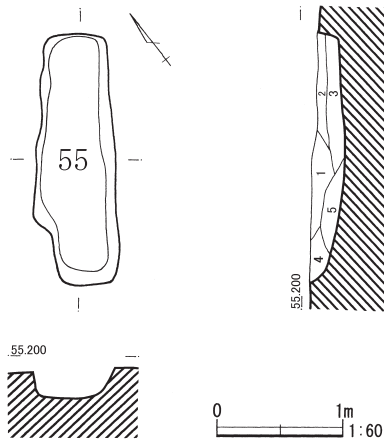
第57号土坑の規模は、長軸長現存値で57cm、短軸長60cmを測る。主軸方位はN - 48° - Eである。深さは最浅部で19cm、最深部で22cmを測る。

第58号土坑の規模は、長軸長現存値で51cm、短軸長48cmを測る。主軸方位はN - 48° - Eである。深さは最浅部で10cm、最深部で13cmを測る。

第59号土坑（第46図、図版20）

調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第63号土坑によって切られ、第56・60号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長形状を呈する。

本土坑の規模は、長軸長現存値で1 m 20cm、短軸長53cmを測る。主軸方位はN - 48° - Wである。深さは最浅部で4 cm、最深部で9 cmを測る。



第55号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量、ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量、ローム小塊（～8mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～3mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量、ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第56号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～2cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～2cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～2cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第6層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～2cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第57号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第58号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～8mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～5mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第44図 第55～58号土坑平面・断面図

第60号土坑（第45・46図、図版20・39）

調査地点の南西部に検出した遺構である。重複関係は、第59・62号土坑によって切られ、57・58・63号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。遺構南側の東壁寄り底面からは、逆位の状態で志野焼の丸皿が検出された。

本土坑の規模は、長軸長2m95cm、短軸長58cmを測る。主軸方位はN - 35° - Wである。深さは最浅部で20cm、最深部で24cmを測る。



第 45 図 第 60 号土坑出土遺物

第11表 第60号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	志野焼丸皿	口径 11.7 底径 6.4 器高 2.6	口端部は丸い。体部は内傾して立ち上がる。底部はケズリダシにより逆台形の高台を造り出す。	内外面—ロクロ整形、全面施釉薬	内外—灰白色	残:略完形

第61号土坑（第46図、図版20）

調査地点の南西部、やや北寄りに検出した遺構である。重複関係は、第62号土坑によって切られている。本土坑の規模は、長軸長1m75cm、短軸長58cmを測る。主軸方位はN - 41° - Wである。深さは最浅部で9cm、最深15cmを測る。

第62号土坑（第46図、図版21）

調査地点の南西部、やや北寄りに検出した遺構である。重複関係は、第60・61・63号土坑を切っている。本土坑の主軸方向は、重複する第60・61号土坑とはやや角度を異にしている。さらに北側の土坑群に目を転じると、本土坑の主軸とこれらの土坑群の主軸はほぼ同一の角度を成していることが分かる。このことからこれらの土坑群は、ある一定の空間利用意識の規制下に掘削されたものとみなされ、南側の土坑群さらには、主軸をほぼ直交させる群との間には空間利用における意識の変化を見出せよう。

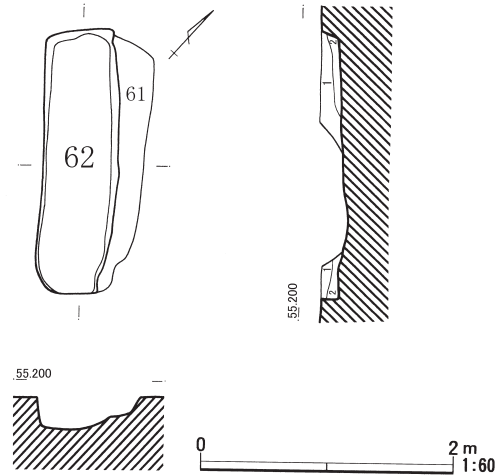
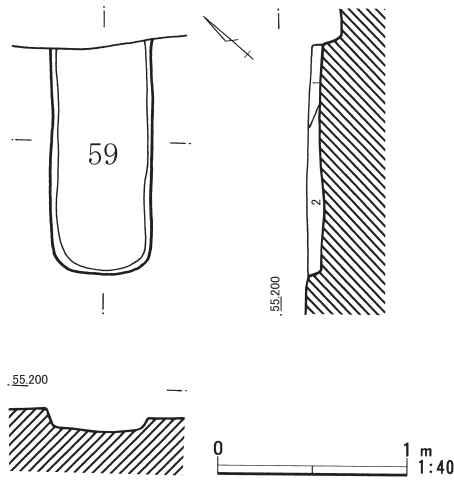
本土坑の規模は、長軸長2m11cm、短軸長58cmを測る。主軸方位はN - 58° - Wである。深さは最浅部で7cm、最深部で25cmを測る。

第63号土坑（第47図、図版21）

調査地点の南西部、やや北寄りに検出した遺構である。重複関係は、第60・62号土坑によって切られている。本土坑の規模は、長軸長現存値で1m30cm、短軸長57cmを測る。主軸方位はN - 57° - Wである。深さは最浅部で11cm、最深部で17cmを測る。

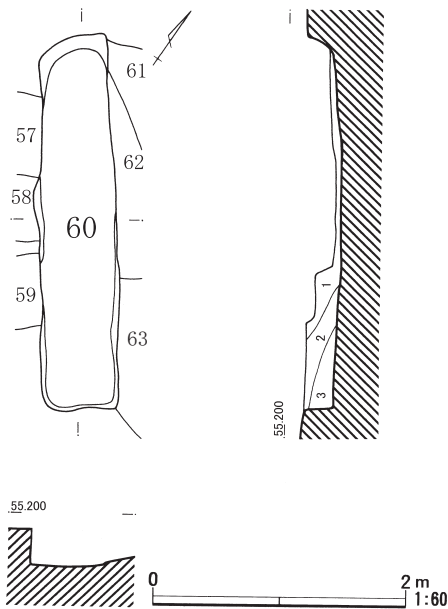
第64号土坑（第47図、図版21）

調査地点の南西部北寄りに検出した遺構である。重複関係は、第65号土坑によって切られている。本土坑の規模は、長軸長1m47cm、短軸長現存値で29cmを測る。主軸方位はN - 59° - Wである。深さは最浅部で4cm、最深部で10cmを測る。



第59号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～8mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

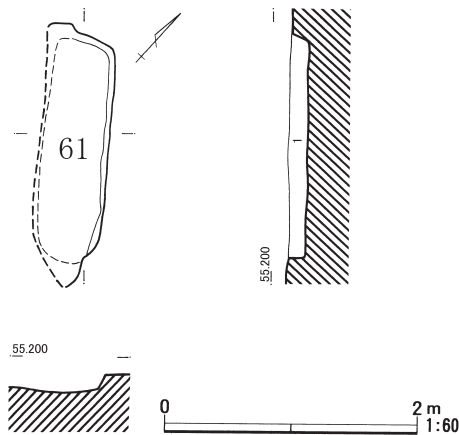


第60号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～3cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～4cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第61号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第62号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～8mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第46図 第59～62号土坑平面・断面図

第65号土坑（第47図、図版21・22）

調査地点の南西部北寄りに検出した遺構である。重複関係は、第64・66号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。しっかりと掘り込まれており、壁は垂直に近く、直線的に立ち上がる。底面は平坦である。覆土の堆積状態は、小塊状のロームを偏在的に多く含むものであり、埋め戻されたものと考えられる。本土坑の規模は、長軸長2m63cm、短軸長59cmを測る。主軸方位はN - 58° - Wである。深さは最浅部で35cm、最深部で41cmを測る。

第66号土坑（第47図、図版22）

調査地点の南西部北寄りに検出した遺構である。重複関係は、第67号土坑を切り、第65号土坑によって切られている。遺構確認面における平面形態は、長形状を呈する。

本土坑の規模は、長軸長1m57cm、短軸長53cmを測る。主軸方位はN - 59° - Wである。深さは最浅部で7cm、最深部で15cmを測る。

第67号土坑（第48図）

調査地点の南西部の、北東寄りに検出した遺構である。重複関係は、第66号土坑によって切られている。遺構確認面における平面形態は、長形状を呈する。

本土坑の規模は、長軸長1m55cm、短軸長54cmを測る。主軸方位はN - 47° - Wである。深さは最浅部で7cm、最深部で15cmを測る。

第68号土坑（第48図、図版22）

調査地点の南西部の、北東寄りに検出した遺構である。重複関係は、第69・70号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長形状を呈する。

本土坑の規模は、長軸長2m3cm、短軸長66cmを測る。主軸方位はN - 48° - Wである。深さは最浅部で20cm、最深部で33cmを測る。

第69号土坑（第48図、図版23）

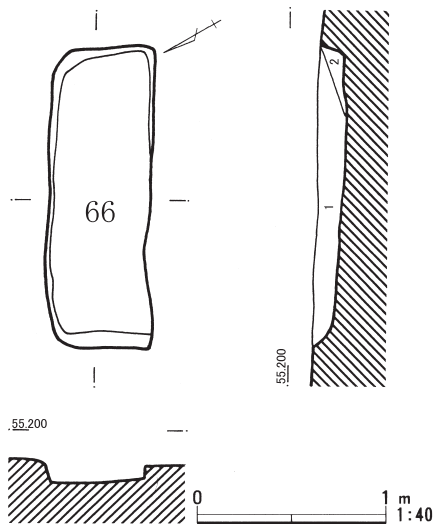
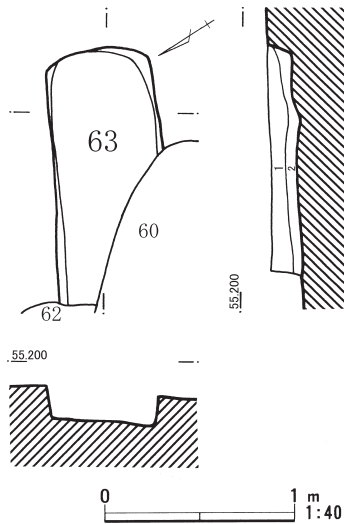
調査地点の南西部の、北東寄りに検出した遺構である。重複関係は、第68・70号土坑によって切られている。遺構確認面における平面形態は、長形状を呈する。

本土坑の規模は、長軸長2m2cm、短軸長60cmを測る。主軸方位はN - 33.5° - Eである。深さは最浅部で8cm、最深部で18cmを測る。

第70号土坑（第48図、図版23）

調査地点の南西部の、北東寄りに検出した遺構である。重複関係は、第68・71号土坑によって切られ、第69号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長形状を呈する。

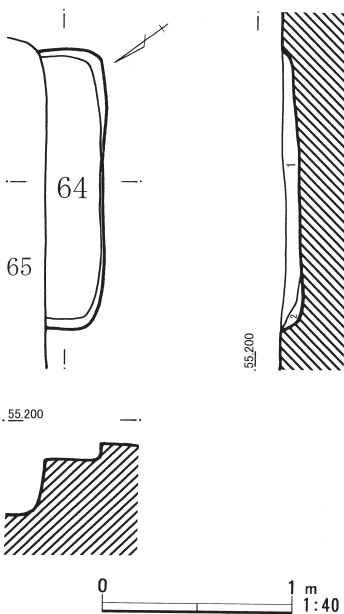
本土坑の規模は、長軸長1m23cm、短軸長53cmを測る。主軸方位はN - 30.5° - Wである。深さは最浅部で8cm、最深部で10cmを測る。



第63号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）・ローム小塊（～5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

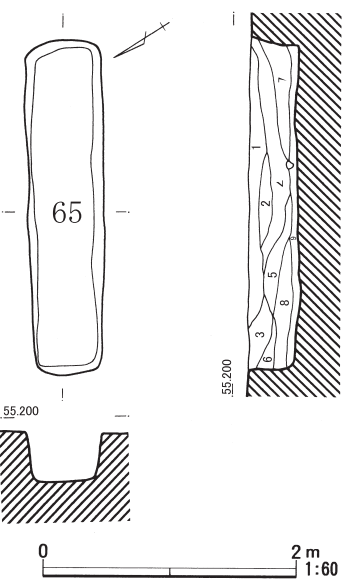
第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～8mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第64号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～3mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第65号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 明褐色土 ローム粒子（～5mm）、ローム小塊（～1cm）を主体とし、暗褐色土粒子を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第3層 暗褐色土 ローム粒子（～5mm）、ローム小塊（～1cm）を主体とし、暗褐色土粒子を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）・ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第6層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第7層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第8層 暗褐色土 ローム粒子（～5mm）、ローム小塊（～1cm）を主体とし、暗褐色土粒子を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

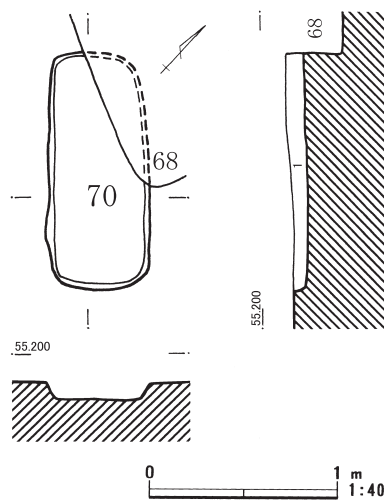
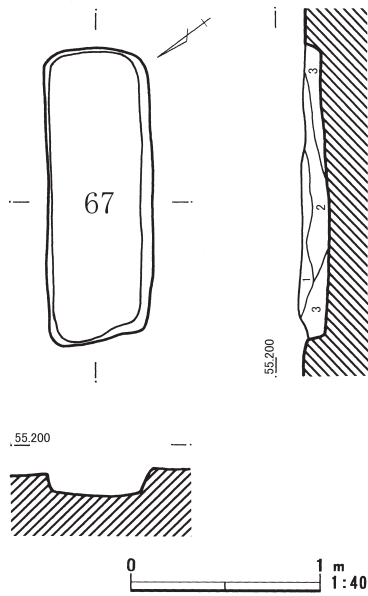
第9層 暗褐色土 ローム粒子（～5mm）、ローム小塊（～1cm）を主体とし、暗褐色土粒子を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第66号土坑土層説明

第1層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 明褐色土 ローム粒子（～2mm）を主体とし、暗褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第47図 第63～66号土坑平面・断面図

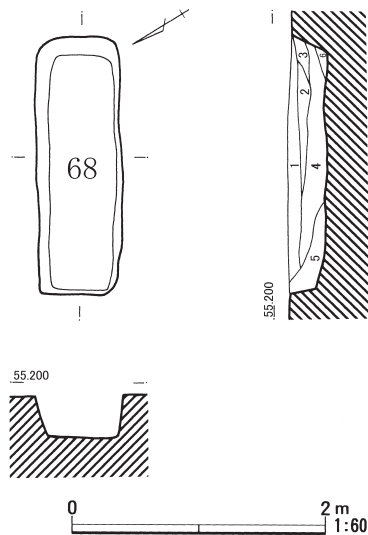


第67号土坑土層説明

第1層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～2cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第68号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～8mm）を少量・ローム小塊（～2cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

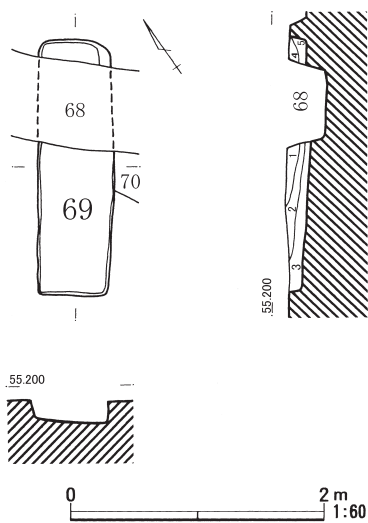
第2層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～8mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～8mm）を少量・ローム小塊（～2cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第6層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第69号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～8mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第70号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量、ローム小塊（～2cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第48図 第67～70号土坑平面・断面図

第71号土坑（第49図）

調査地点の南西部の、北東寄りに検出した遺構である。重複関係は、第75号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。底面は平坦であり、壁はやや傾きを有するものの垂直に近い角度で、直線的に立ち上がる。

本土坑の規模は、長軸長1 m78cm、短軸長57cmを測る。主軸方位はN - 48° - Eである。深さは最浅部で22cm、最深部で31cmを測る。

第72号土坑（第49図、図版23）

調査地点の南西部の、北東寄りに検出した遺構である。重複関係は、第73号土坑によって切られている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。底面は平坦であり、壁はやや傾きをもって直線的に立ち上がる。本土坑の規模は、長軸長2 m66cm、短軸長68cmを測る。主軸方位はN - 33° - Eである。深さは最浅部で16cm、最深部で32cmを測る。

第73号土坑（第49図、図版23）

調査地点の南西部の、北東寄りに検出した遺構である。重複関係は、第72号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。底面は平坦であり、壁はやや傾きをもって直線的に立ち上がる。本土坑の規模は、長軸長2 m3 cm、短軸長57cmを測る。主軸方位はN - 42° - Eである。深さは最浅部で18cm、最深部で32cmを測る。

第74号土坑（第50図）

調査地点の南西部の、北東寄りに検出した遺構である。重複関係は、第75号土坑によって切られている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長1 m73cm、短軸長61cmを測る。主軸方位はN - 44° - Eである。深さは最浅部で5 cm、最深部で38cmを測る。

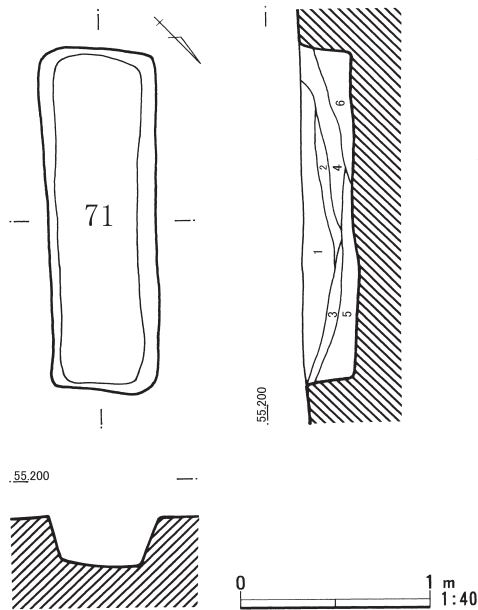
第75号土坑（第50図）

調査地点の南西部の、北東寄りに検出した遺構である。重複関係は、第71・81号土坑によって切られ、第74号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、不整な長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長2 m30cm、短軸長63cmを測る。主軸方位はN - 49° - Wである。深さは最浅部で14cm、最深部で30cmを測る。

第76号土坑（第50図、図版24・25）

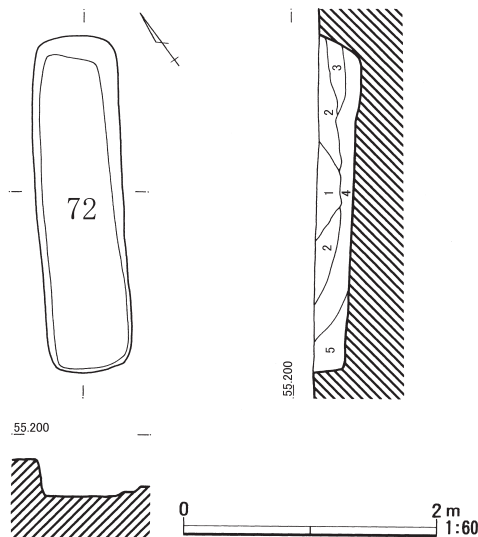
調査地点の南西部の、北東寄りに検出した遺構である。重複関係は、第79号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長1 m33cm、短軸長49cmを測る。主軸方位はN - 52° - Wである。深さは最浅部で9 cm、最深部で15cmを測る。



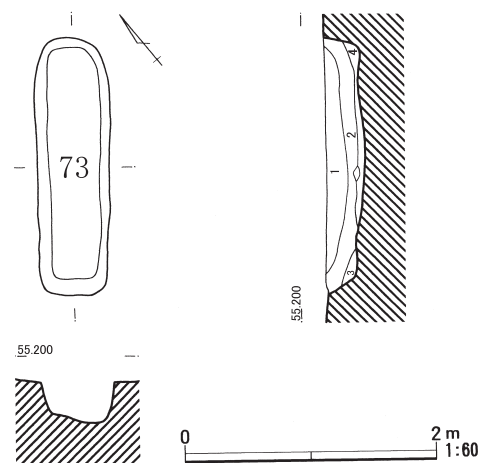
第71号土坑土層説明

- 第1層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第6層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第72号土坑土層説明

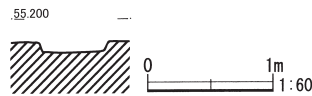
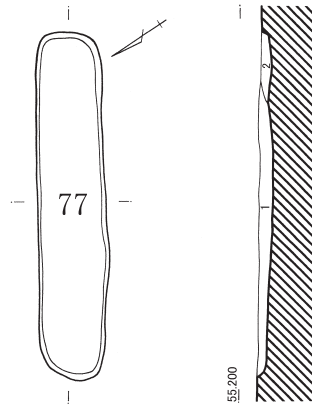
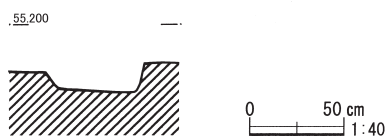
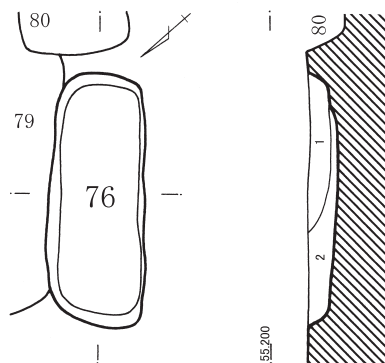
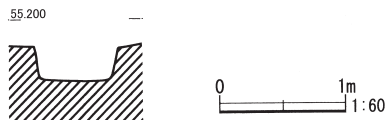
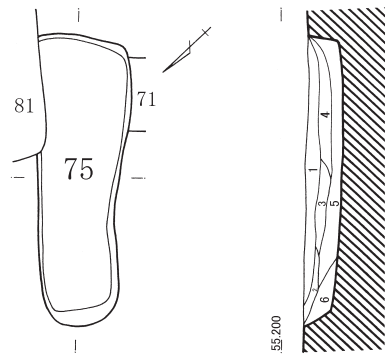
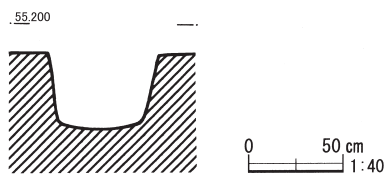
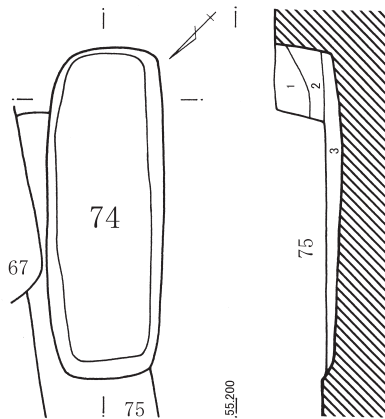
- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）・ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第73号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～2cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 明褐色土 ローム粒子・ローム小塊を主体とし、暗褐色土粒子を少量斑状に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第49図 第71～73号土坑平面・断面図



第74号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～3mm）を中量、ローム小塊（～8mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第75号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～2cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第3層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）を中量、ローム小塊（～8mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量、ローム小塊（～8mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～2cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第6層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第76号土坑土層説明

第1層 明褐色土 ローム粒子（～5mm）・ローム小塊（～3cm）を主体とし、暗褐色土小塊（～5cm）を少量斑状に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第77号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量、ローム小塊（～2cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第50図 第74～77号土坑平面・断面図

第77号土坑（第50図、図版24）

調査地点の南西部北寄りに検出した遺構である。本土坑と、第83・94号土坑を結んだラインが、群集する土坑群の北限となっている。重複関係は、第78・79号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長2m73cm、短軸長54cmを測る。主軸方位はN - 55° - Wである。深さは最浅部で5cm、最深部で9cmを測る。

第78号土坑（第51図、図版24）

調査地点の南西部北寄りに検出した遺構である。重複関係は、第77号土坑によって切られている。本土坑の規模は、長軸長1m39cm、短軸長現存値で18cmを測る。主軸方位はN - 56° - Wである。深さは最浅部で6cm、最深部で10cmを測る。

第79号土坑（第51図、図版25）

調査地点の南西部北寄りに検出した遺構である。重複関係は、第76・77・80・83号土坑によって切られている。本土坑の規模は、長軸長2m42cm、短軸長51cmを測る。主軸方位はN - 48° - Wである。深さは最浅部で4cm、最深部で7cmを測る。

第80号土坑（第51図、図版25）

調査地点の南西部北寄りに検出した遺構である。重複関係は、第79号土坑を切り、第81号土坑によって切られている。遺構確認面における平面形態は、周辺の土坑と比べ長軸長が短い長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長99cm、短軸長現存値で51cmを測る。主軸方位はN - 53° - Wである。深さは最浅部で10cm、最深部で15cmを測る。

第81号土坑（第51図、図版25）

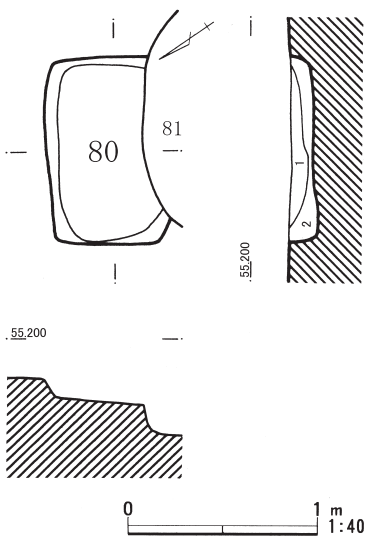
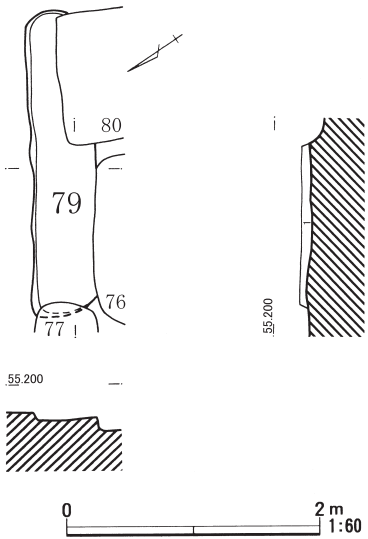
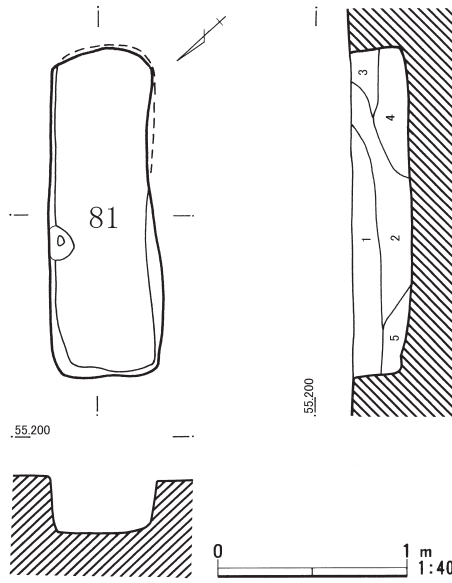
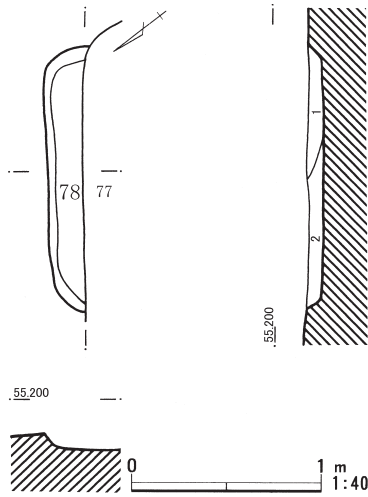
調査地点の南西部北寄りに検出した遺構である。重複関係は、第75・80号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長1m71cm、短軸長55cmを測る。主軸方位はN - 48° - Wである。深さは最浅部で24cm、最深部で31cmを測る。

第82号土坑（第52図）

調査地点の南西部北寄りに検出した遺構である。重複関係は、第83号土坑によって切られている。本土坑の規模は、長軸長2m18cm、短軸長43cmを測る。主軸方位はN - 45° - Wである。深さは最浅部で3cm、最深部で8cmを測る。

第83号土坑（第52図、図版26）

調査地点の南西部北寄りに検出した遺構である。重複関係は、第79・82号土坑を切っている。本土坑の規模は、長軸長2m10cm、短軸長58cmを測る。主軸方位はN - 40.5° - Wである。深さは最浅部で22cm、最深部で31cmを測る。



第78号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第79号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

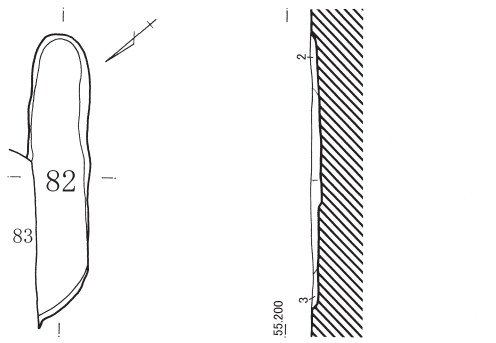
第80号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～1cm）微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第81号土坑土層説明

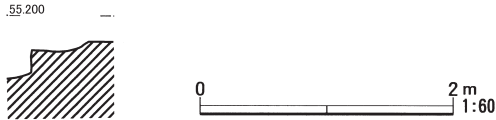
- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～8mm）を少量・ローム小塊（～2cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～8mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～8mm）を少量、ローム小塊（～2cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第51図 第78～81号土坑平面・断面図



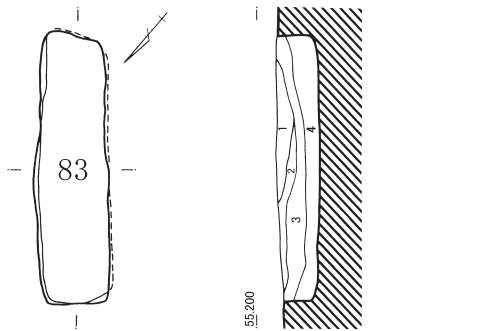
第82号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 明褐色土 ローム粒子・ローム小塊を主体とし、暗褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



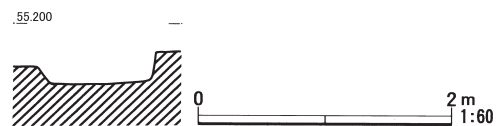
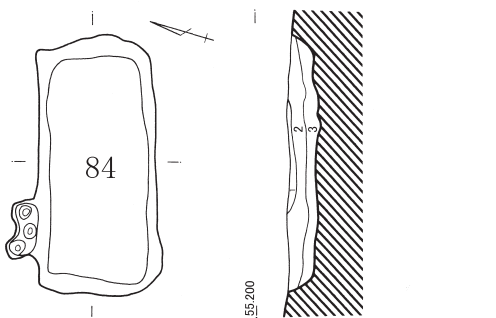
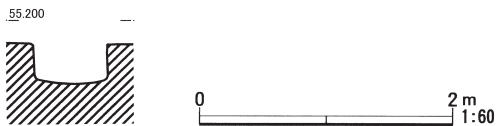
第83号土坑土層説明

- 第1層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）・ローム小塊（～2cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）・ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）を少量・ローム小塊（～2cm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 明褐色土 黄褐色土を主体とし、暗褐色土粒子を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第84号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土・黒褐色土が斑状に混在する層。ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、黒褐色土を少量斑状に、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、黒褐色土を少量斑状に、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第 52 図 第 82 ～ 84 号土坑平面・断面図

第84号土坑（第52図、図版26）

調査地点の北西部南寄りに検出した遺構である。調査地点南西部の土坑群とはやや距離をおいて掘削されている。本土坑の長軸長は、西側の土坑群のものと比較しやや短いもので、短軸長は逆に長いことから、異なる意識・使用意図のもとに掘削されたものと考えられる。

本土坑の規模は、長軸長2m3cm、短軸長91cmを測る。主軸方位はN - 75° - Eである。深さは最浅部で15cm、最深部で26cmを測る。

第85号土坑（第53・54図、図版27）

調査地点の北西部北寄りに検出した遺構である。重複関係は、第86・87・89号土坑を切り、中央やや北側の両壁をピットによって切られている。調査区中央東寄りに検出された第105号土坑と同規模であり、本調査地点検出の土坑の中では、大型のものである。遺構確認面における平面形態は、緩斜面の影響を受けたためやや不整な、長辺がわずかに弧を描く長形状を呈する。底部は平坦であり、緩やかな弧状を呈しながら壁へと移行し、壁はやや角度を有し、直線的に立ち上がる。図示していないが、西壁を穿つピット周辺の、ほぼ遺構確認面に相当する覆土上層からは、15cm前後の礫石（亜角・円礫）12個、覆土中からは、カワラケ（第53図1）が出土している。

本土坑の規模は、長軸長5m77cm、短軸長1m19cmを測る。主軸方位はN - 43° - Eである。深さは最浅部で24cm、最深部で43cmを測る。



第53図 第85号土坑出土遺物

第12表 第85号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	カワラケ	口径 — 底径 6.5 器高 (2.2)	口辺部は中位からやや大きく開く。	内外面—ロクロ整形。	雲・白 少 内外—暗褐色	残:80%

第86号土坑（第54図）

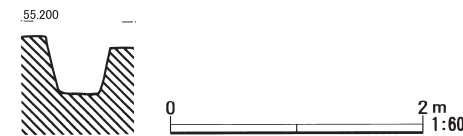
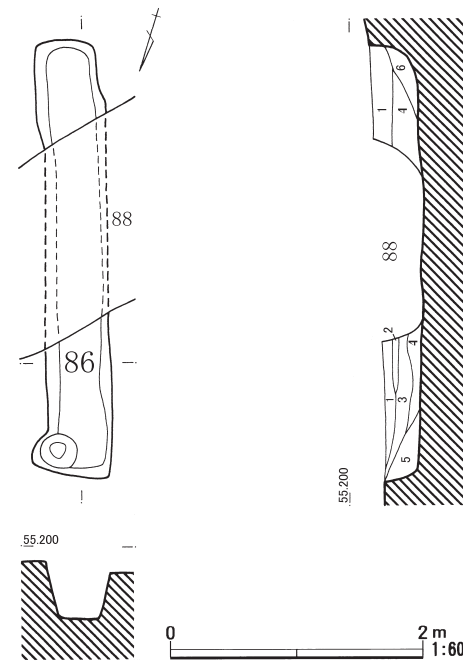
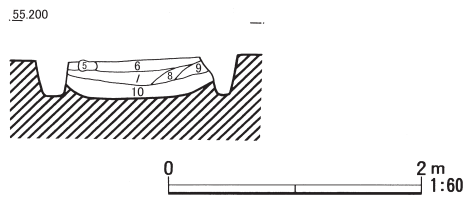
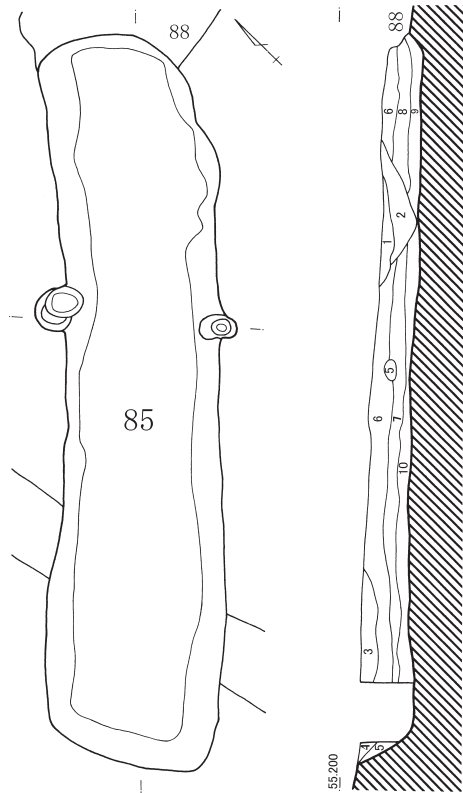
調査地点の北西部北寄りに検出した遺構である。重複関係は、第85号土坑によって切られ南北の端部付近のみ検出されている。西側に群集する土坑の、北限に位置する土坑群とは主軸方位を異にし、東側に位置する、第87・123号土坑とほぼ同様の軸をとる。

本土坑の規模は、長軸長3m43cm、短軸長50cmを測る。主軸方位はN - 14° - Wである。深さは最浅部で14cm、最深部で37cmを測る。

第87号土坑（第56図）

調査地点の北西部北寄りに検出した遺構である。重複関係は、第85号土坑によって切られ、第123号土坑を切っている。

本土坑の規模は、長軸長現存値で95cm、短軸長54cmを測る。主軸方位はN - 16.5° - Wである。深さは最浅部で34cm、最深部で40cmを測る。



第85号土坑土層説明

- 第1層 暗灰褐色土 暗灰褐色土を主体とし、浅間山系A軽石（～2mm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性無し。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、浅間山系A軽石（～2mm）を多量に含む。暗灰褐色土を斑状に含む。しまりは軟らかく、粘性無し。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量、ローム小塊（～5mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 明褐色土 ローム粒子（～2mm）を主体とし、暗褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 明褐色土 ローム粒子（～2mm）を主体とし、暗褐色土粒（～0.5mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第6層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子・ローム小塊が斑状に混在する層。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第7層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第8層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第9層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第10層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第86号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を小塊状（～2cm）に中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を小塊状（～2cm）に中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第6層 暗褐色土 ローム粒子・ローム小塊を主体とし、暗褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第54図 第85・86号土坑平面・断面図

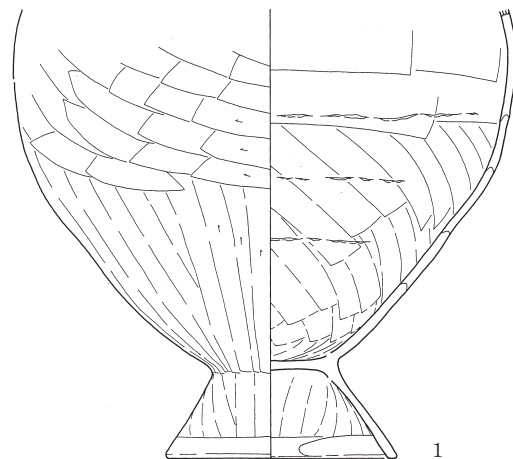
第123号土坑（第56図）

調査地点の北西部北寄りに検出した遺構である。重複関係は、第87号土坑によって切られている。

本土坑の規模は、長軸長現存値で1 m65cm、短軸長55cmを測る。主軸方位はN - 16.5° - Wである。深さは最浅部で15cm、最深部で36cmを測る。

第88号土坑（第55・56図、図版27）

調査地点の北西部北寄りに検出した遺構である。第89号土坑の下に検出された。第89号土坑と併せ、本土坑は住居跡の貯蔵穴の可能性が考えられるものである。その場合は、住居跡の南西隅部に相当しよう。しかしながら、さらに北側は消失し、住居跡との確証が得られなかったため、土坑として報告する。底面からやや浮いたレベルにおいて、横位に倒れた状態の台付甕の下半部（第55図1）が検出されている。



0 (1:4) 10cm

第55図 第88号土坑出土遺物

本土坑の規模は、長軸長74cm、短軸長51cmを測る。主軸方位はN - 83° - E である。深さは最浅部で32cm、最深部で46cmを測る。

第13表 第88号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 台付甕	口径 — 底径 10.9 器高 (23.6)	胴部中位やや上に最大径を有する。台部は直線的に「ハ」字状に開く。	外面—胴部上半木口状工具によるナデ後ヘラケズリ。胴部下位木口状工具によるナデ後ナデ。内面—胴部刷毛目状工具によるナデ後ナデ。胴部工具によるナデ後ナデ。	片・白 多 角・雲・Mg・Fe中 内外—暗赤褐色	残:60%

第89号土坑（第56図、図版27）

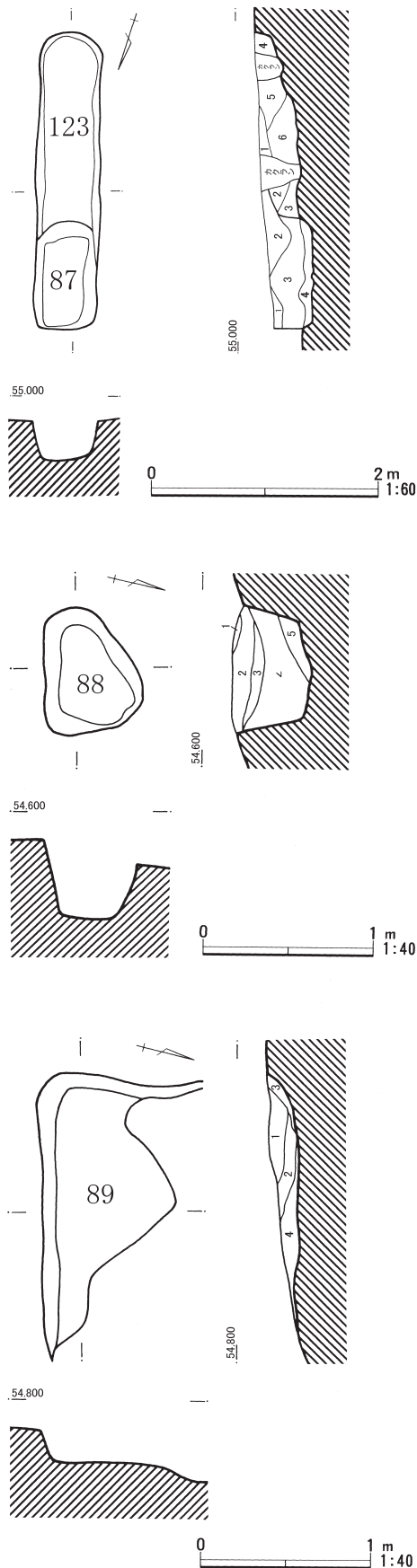
調査地点の北西部北寄りに検出した遺構である。遺構下より貯蔵穴と考えられる、第88号土坑が検出されており、本土坑が住居跡の南西隅部となる可能性が考えられる。しかしながら、検出部分が限られ、また北側が消失していることから住居跡との確証に至らず、ここに土坑として報告する。重複関係は、第85号土坑に切られている。

本土坑の規模は、長軸長現存値で1 m63cm、短軸長現存値で77cmを測る。主軸方位はN - 78° - E である。深さは最浅部で3cm、最深部で16cmを測る。

第90号土坑（第57図、図版28）

調査地点の中央北東寄りに検出した遺構である。遺構確認面における平面形態は、隅丸の長方形を呈する。ほぼ同軸をなし、同規模の第91号土坑とやや距離をおいて、単独状に掘削されている。底面は平坦であり、壁はやや角度を持って立ち上がる。

本土坑の規模は、長軸長1 m86cm、短軸長83cmを測る。主軸方位はN - 52° - E である。深さは最浅部で9cm、最深部で18cmを測る。



第87号土坑土層説明

- 第1層 暗灰褐色土 暗灰褐色土を主体とし、浅間山系A軽石（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第123号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～2cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を多量に、ローム小塊（～2cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を小塊状（～2cm）に少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第6層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第88号土坑土層説明

- 第1層 暗赤褐色土 暗褐色土を主体とし、焼土粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗赤褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～8mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 黄褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊が斑状に混在する層。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。

第89号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗赤褐色土 暗褐色土を主体とし、焼土粒子（～0.5mm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第56図 第87・123・88・89号土坑平面図

第91号土坑（第57図）

調査地点の中央北東寄りに検出した遺構である。重複関係は、第92号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、隅丸の長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長1 m77cm、短軸長72cmを測る。主軸方位はN - 65° - Eである。深さは最浅部で5 cm、最深部で10cmを測る。

第92号土坑（第57図）

調査地点の中央北東寄りに検出した遺構である。重複関係は、第91号土坑によって切られている。本土坑の規模は、長軸長1 m14cm、短軸長89cmを測る。主軸方位はN - 44.5° - Wである。深さは最浅部で5 cm、最深部で13cmを測る。

第93号土坑（第57図、図版28）

調査地点の中央北寄りに検出した遺構である。遺構確認面における平面形態は、円形を呈する。底面は平坦であり、壁は垂直的に立ち上がり一段のテラスに至り、再び立ち上がる。本土坑の規模は、最大径97cmを測る。深さは最浅部で3 cm、最深部で30cmを測る。

底面からは、三方に均等に配された角礫が検出されている。これらの礫石は、桶或るいは曲げ物といった円形状のものの埋設の際の、水平をとるために据え置かれたものと推定される。

第94号土坑（第58図）

調査地点の中央の、やや西寄りに検出した遺構である。調査区南西部土坑群の分布の北東限となっている土坑である。遺構確認面における平面形態は、長形状を呈する。本土坑の規模は、長軸長2 m44cm、短軸長59cmを測る。主軸方位はN - 35° - Wである。深さは、最深部で38cmを測る。

第95号土坑（第58図）

調査地点の中央に検出した遺構である。遺構確認面における平面形態は、円形状を呈する。本土坑の規模は、最大径85cmを測る。深さは最浅部で5 cm、最深部で18cmを測る。

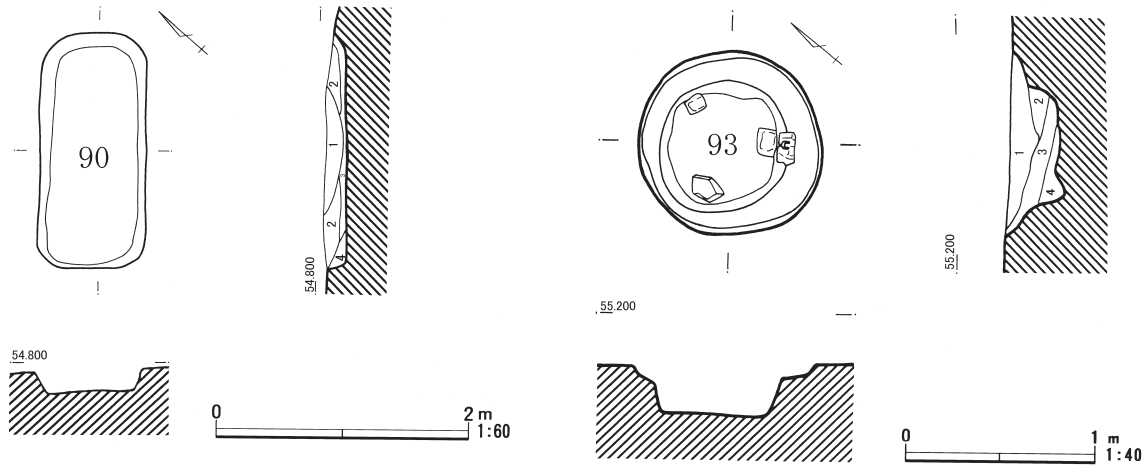
第96号土坑（第58図、図版28）

調査地点の中央の、東寄りに検出した遺構である。第13号住居跡を切っている。遺構確認面における平面形態は、楕円形状を呈する。

本土坑の規模は、長軸長1 m1 cm、短軸長81cmを測る。主軸方位はN - 18.5° - Wである。深さは最浅部で12cm、最深部で19cmを測る。

第97号土坑（第58図）

調査地点の中央の、南西寄りに検出した遺構である。遺構確認面における平面形態は、不整な台形状を呈する。本土坑の規模は、長軸長2 m16cm、短軸長89cmを測る。主軸方位はN - 64° - Eである。深さは最浅部で3 cm、最深部で9 cmを測る。



第90号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～8mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第91号土坑土層説明

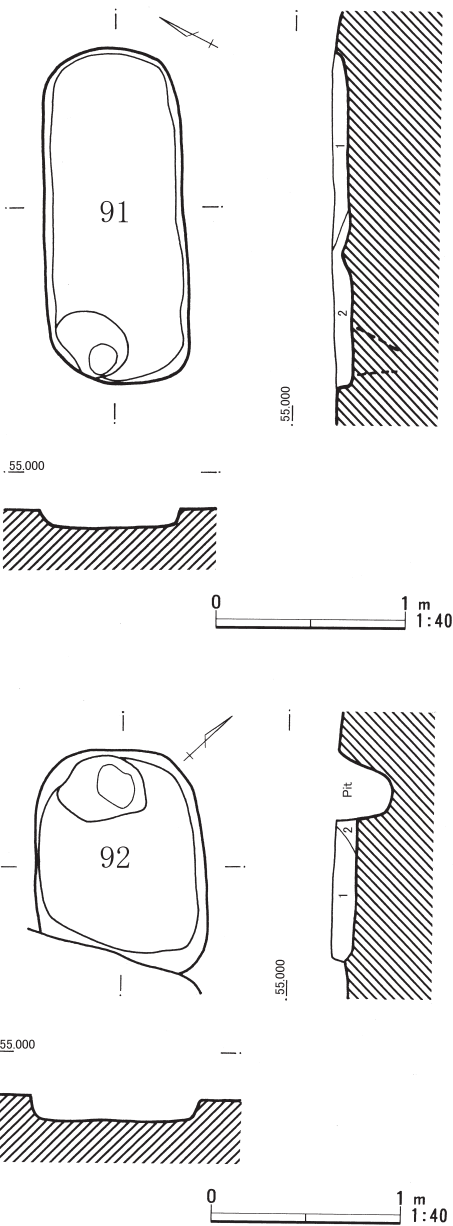
- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～8mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第92号土坑土層説明

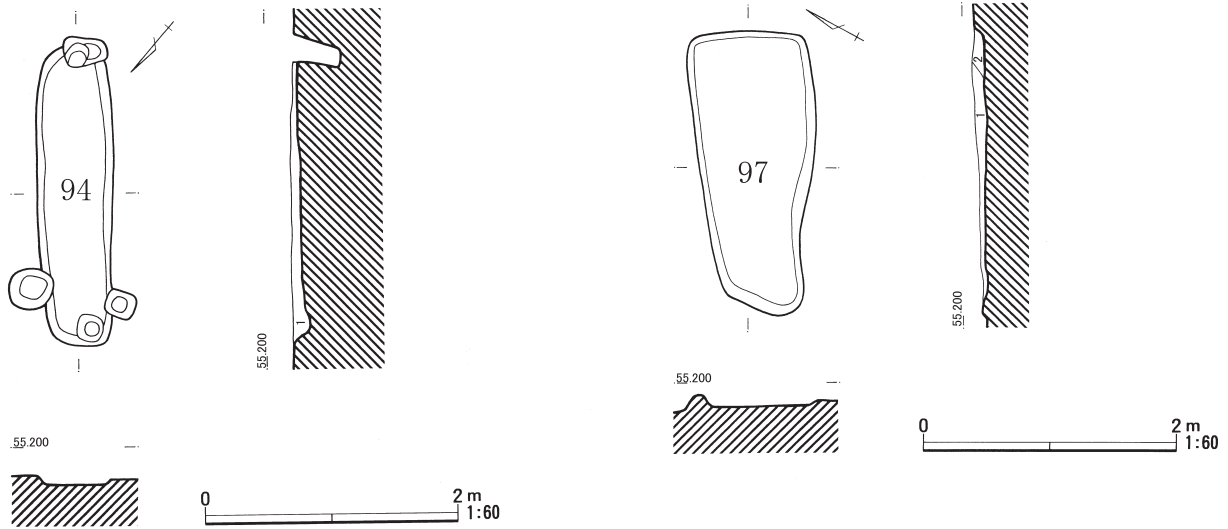
- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第93号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

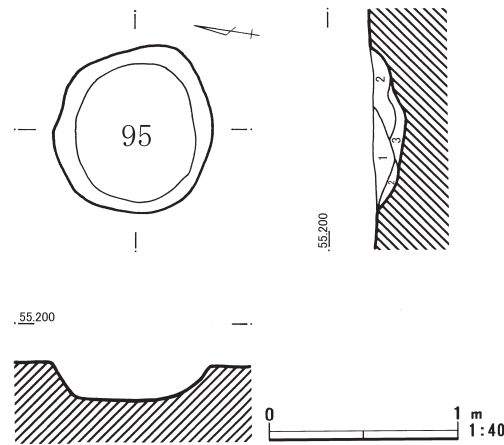


第 57 図 第 90 ～ 93 号土坑平面・断面図



第94号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

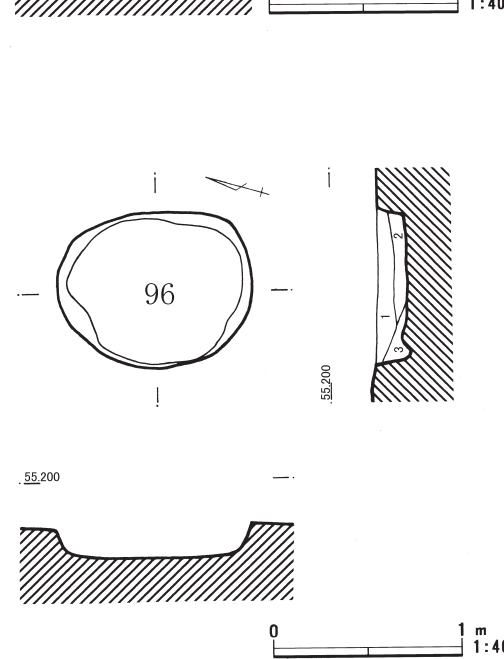


第95号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 明褐色土 ローム粒子・ローム小塊を主体とし、暗褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

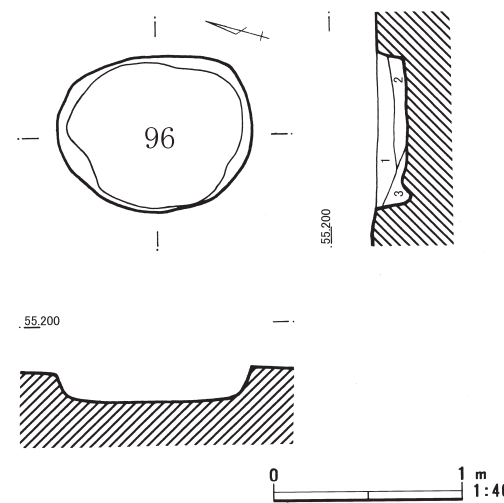


第96号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第97号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 明褐色土 ローム粒子・ローム小塊を主体とし、暗褐色土粒子（～0.5mm）を少量斑状に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第58図 第94～97号土坑平面・断面図

第98号土坑（第59図、図版29）

調査地点の中央南西寄りに検出した遺構である。重複関係は、第99号土坑によって切られている。

本土坑の規模は、長軸長2m91cm、短軸長83cmを測る。主軸方位はN - 29° - Wである。深さは最浅部で4cm、最深部で12cmを測る。

第99号土坑（第59図、図版29）

調査地点の中央南寄りに検出した遺構である。重複関係は、第98号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長3m32cm、短軸長1m10cmを測る。主軸方位はN - 29° - Wである。深さは最浅部で5cm、最深部で20cmを測る。

第100号土坑（第59図、図版29）

調査地点の中央南寄り、南壁にかかり検出した遺構である。重複関係は、第101号土坑を切っている。

本土坑の規模は、長軸長1m9cm、短軸長81cmを測る。主軸方位はN - 18° - Wである。深さは最浅部で6cm、最深部で16cmを測る。

第101号土坑（第59図、図版30）

調査地点の中央南寄り、南壁にかかり検出した遺構である。重複関係は、第100・102号土坑によって切られている。本土坑の規模は、長軸長現存値で1m88cm、短軸長1m8cmを測る。主軸方位はN - 79° - Eである。深さは最浅部で17cm、最深部で24cmを測る。

第102号土坑（第60図、図版30）

調査地点の中央南寄り、南壁近くに検出した遺構である。重複関係は、第101号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長3m69cm、短軸長86cmを測る。主軸方位はN - 14° - Wである。深さは最浅部で6cm、最深部で34cmを測る。

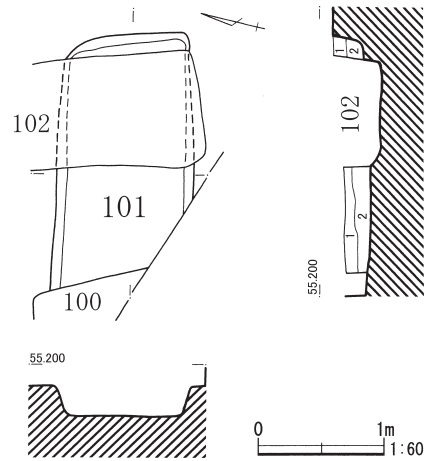
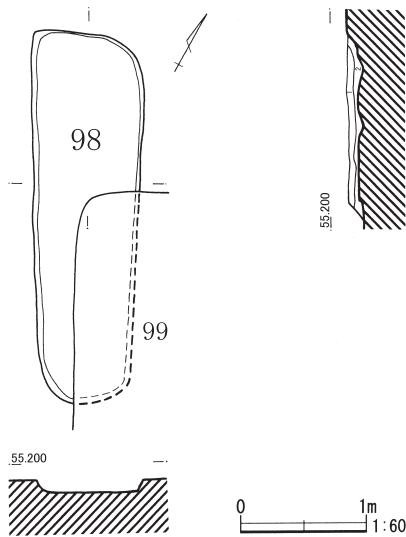
第103号土坑（第60図）

調査地点の中央南東寄り、南壁にかかり検出した遺構である。本土坑の規模は、長軸長89cm、短軸長62cmを測る。主軸方位はN - 75° - Wである。深さは最浅部で20cm、最深部で35cmを測る。

第104号土坑（第60図）

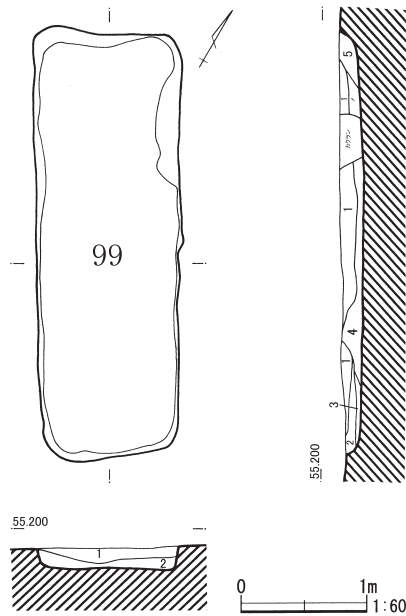
調査地点の中央東寄りに検出した遺構である。重複関係は、第8・12・13号住居跡を切り、第105号土坑によって切られている。遺存する南壁から、第105号土坑よりやや長軸長の短いものであったと考えられるものであるが、本調査地点検出土坑においては、最大規模のものの一つである。

本土坑の規模は、長軸長現存値で3m77cm、短軸長1m66cmを測る。主軸方位はN - 67° - Eである。深さは最浅部で8cm、最深部で46cmを測る。



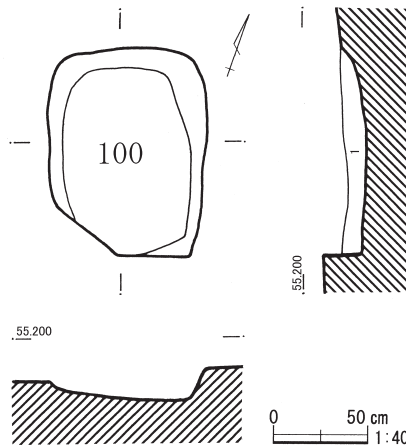
第98号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 明褐色土 ローム粒子・ローム小塊を主体とし、暗褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第99号土坑土層説明

- 第1層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～8mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量、ローム小塊（～2cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～2cm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）・ローム小塊（～2cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



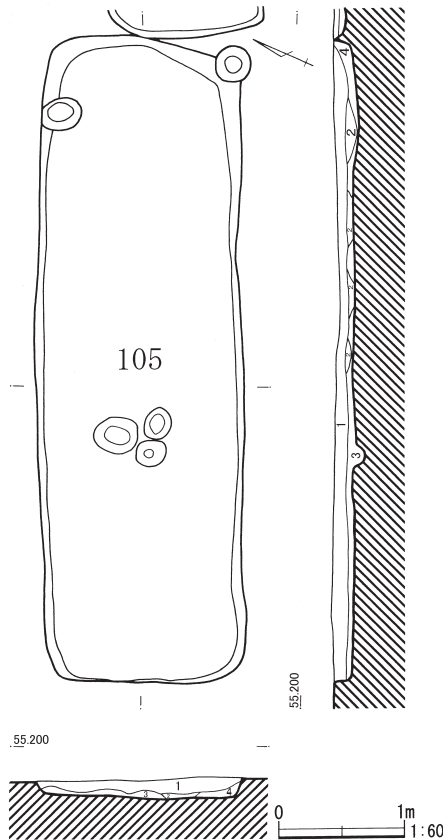
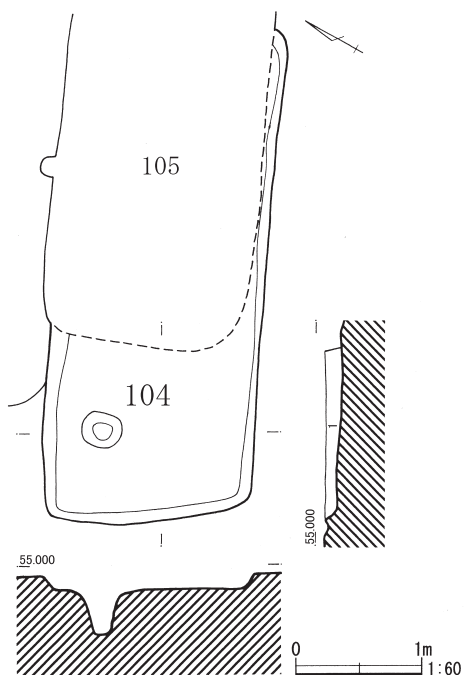
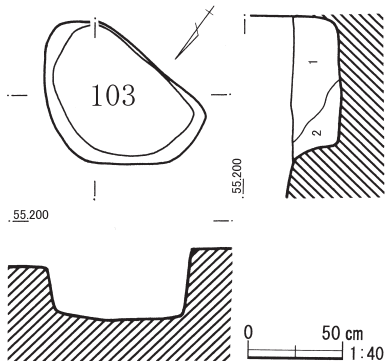
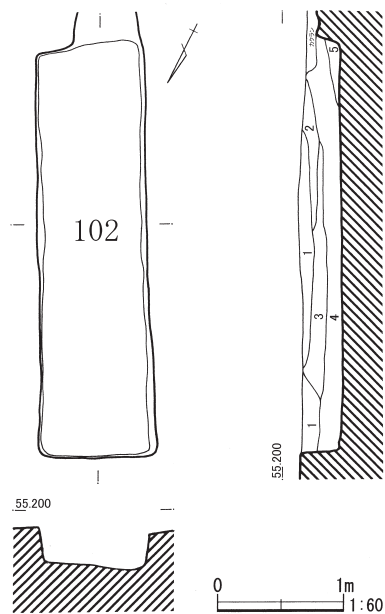
第100号土坑土層説明

- 第1層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第101号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）・ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第59図 第98～101号土坑平面・断面図



第102号土坑土層説明

第1層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～2mm)・ローム小塊(～3cm)を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～2mm)を少量含む。しまりは軟らかく粘性は低い。

第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～5mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～8mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第5層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～1mm)を中量、ローム小塊(～8mm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第103号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～2mm)・ローム小塊(～1cm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～2mm)・ローム小塊(～1cm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第104号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～2mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第105号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～0.5mm)を少量、ローム小塊(～1cm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 明褐色土 ローム粒子(～0.5mm)を主体とし、暗褐色土粒子(～0.5mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊(～2cm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第4層 明褐色土 ローム小塊(～2cm)を主体とし、暗褐色土粒子(～0.5mm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第60図 第102～105号土坑平面・断面図

第105号土坑（第60図、図版30）

調査地点の中央東寄りに検出した遺構である。第104号土坑と軸を同じくし、さらに東寄りに掘削されている。重複関係は、第8・12・13号住居跡及び第104号土坑を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長5m9cm、短軸長1m64cmを測る。主軸方位はN - 71° - Eである。深さは最浅部で9cm、最深部で24cmを測る。

第106号土坑（第61図、図版31）

調査地点の中央東寄り、第105号土坑の東側に接して検出した遺構である。遺構確認面における平面形態は、不整な楕円形状を呈する。本土坑の規模は、長軸長1m21cm、短軸長61cmを測る。主軸方位はN - 21° - Wである。深さは最浅部で7cm、最深部で10cmを測る。

第107号土坑（第61図、図版31）

調査地点の中央東寄り、第8号住居跡東側に検出した遺構である。重複関係は、第17号住居跡を切っている。本土坑の規模は、長軸長2m16cm、短軸長93cmを測る。主軸方位はN - 32° - Wである。深さは最浅部で14cm、最深部で34cmを測る。

第108号土坑（第61図、図版31・32）

調査地点の中央東寄り、第8号住居跡内に検出された遺構である。重複関係は、第8号住居跡を切り、第109号に切られている。本土坑の規模は、長軸長2m5cm、短軸長1m16cmを測る。主軸方位はN - 17° - Wである。深さは最浅部で18cm、最深部で24cmを測る。

第109号土坑（第61図、図版32）

調査地点の南東部、第10号住居跡東壁近くに検出された遺構である。重複関係は、第8号住居跡・第108号土坑を切っている。本土坑の規模は、長軸長3m26cm、短軸長1m10cmを測る。主軸方位はN - 23° - Wである。深さは最浅部で8cm、最深部で27cmを測る。

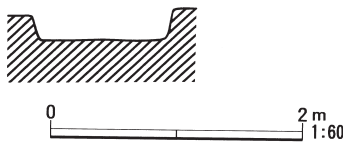
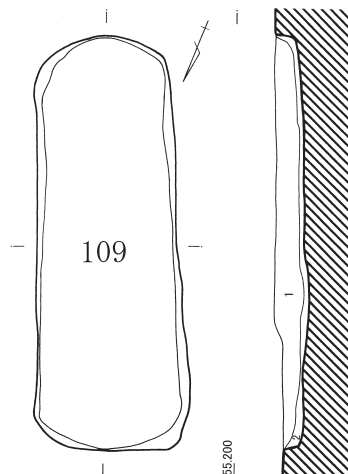
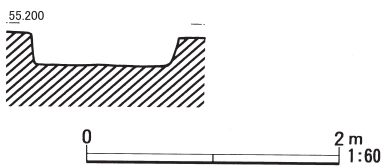
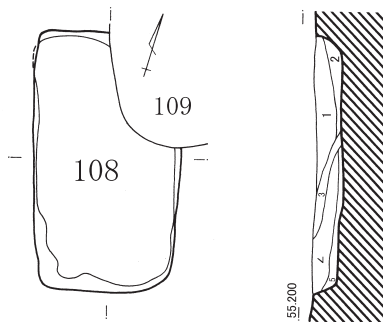
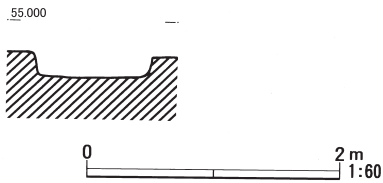
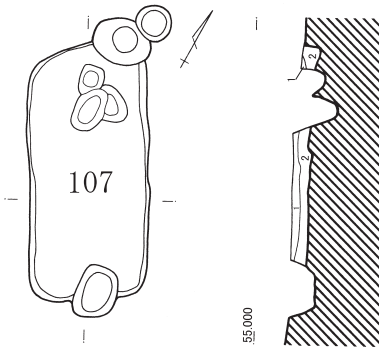
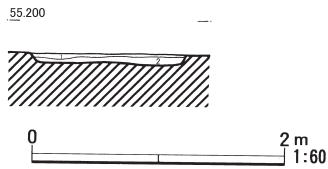
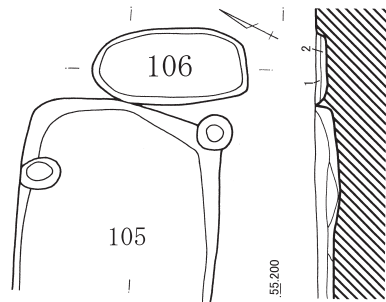
第110号土坑（第62図、図版32）

調査地点の南東部、第10号住居跡東壁近くに検出された遺構である。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。本土坑の規模は、長軸長1m83cm、短軸長66cmを測る。主軸方位はN - 60° - Eである。深さは最浅部で10cm、最深部で27cmを測る。

第111号土坑（第62図）

調査地点の東側に検出された遺構である。重複関係は、第11号住居跡の南西隅部を切っている。遺構確認面における平面形態は、長方形を呈する。

本土坑の規模は、長軸長1m78cm、短軸長83cmを測る。主軸方位はN - 13° - Eである。深さは最浅部で19cm、最深部で27cmを測る。



第106号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～0.5mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 明褐色土 ローム粒子・ローム小塊を主体とし、暗褐色土粒子(～0.5mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第107号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～0.5mm)・ローム小塊(～2mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～0.5mm)・ローム小塊(～1cm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第108号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～0.5mm)を微量、粘土粒子(～3mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は普通。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～0.5mm)・ローム小塊(～2cm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～0.5mm)・ローム小塊(～8mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～0.5mm)・ローム小塊(～2cm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

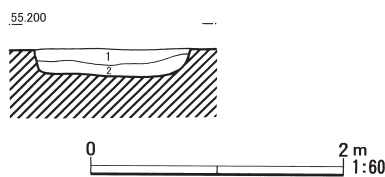
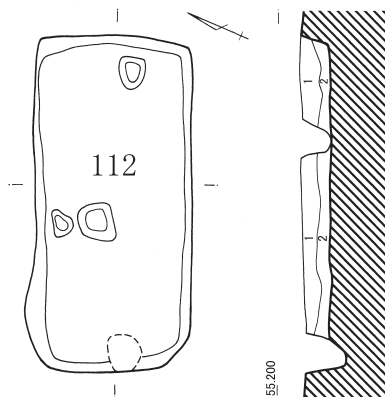
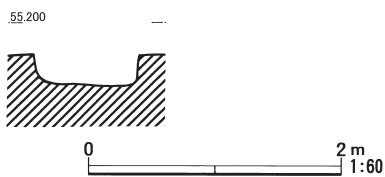
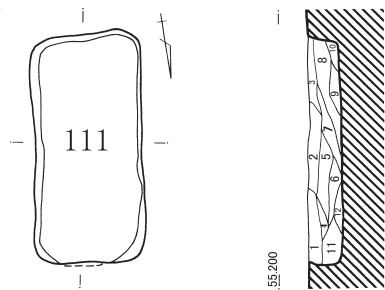
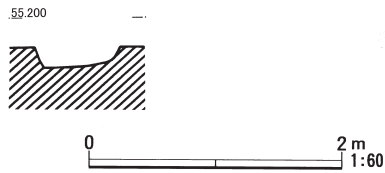
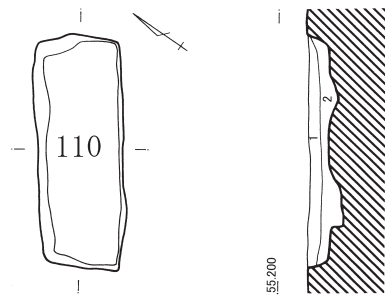
第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～2mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第109号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～5mm)を中量、ローム小塊(～2cm)を微量、やや風化した粘土小塊(～2cm)を少量、焼土粒子(～2mm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は普通。

第2層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子(～5mm)・ローム小塊(～2cm)を多量に、やや風化した粘土小塊(～2cm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は普通。

第 61 図 第 106 ～ 109 号土坑平面・断面図



第110号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊（～2 cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 明褐色土 ローム粒子・ローム小塊を主体とし、暗褐色土粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第111号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1 mm）を中量、ローム小塊（～5 mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 ローム粒子（～1 mm）、ローム小塊（～1 cm）を主体とし、暗褐色土粒子を少量斑状に含む。しまりは軟らかく粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1 mm）を中量、ローム小塊（～5 mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 ローム粒子（～1 mm）、ローム小塊（～5 mm）を主体とし、暗褐色土粒子（～1 mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第5層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1 mm）を中量、ローム小塊（～5 mm）・粘土小塊（～1 cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。
- 第6層 暗褐色土 暗褐色土粒子・ローム粒子が斑状に混在する層。ローム小塊（～2 cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第7層 明褐色土 ローム粒子・ローム小塊を主体とし、暗褐色土粒子を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第8層 明褐色土 ローム粒子・ローム小塊を主体とし、暗褐色土粒子を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第9層 明褐色土 ローム粒子・ローム小塊を主体とし、暗褐色土粒子を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第10層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1 mm）を中量、ローム小塊（～5 mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第11層 明褐色土 ローム粒子（～1 mm）、ローム小塊（～1 cm）を主体とし、暗褐色土粒子を少量斑状に含む。しまりは軟らかく粘性は低い。
- 第12層 暗褐色土 ローム粒子（～1mm）、ローム小塊（～1 cm）を主体とし、暗褐色土粒子を少量斑状に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第112号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～3 mm）・ローム小塊（～5 cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～3 mm）・ローム小塊（～2 cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第 62 図 第 110 ～ 112 号土坑平面・断面図

第112号土坑（第62図、図版33）

調査地点の東部に検出された遺構である。遺構確認面における平面形態は、長方形状を呈する。

本土坑の規模は、長軸長 2 m65cm、短軸長 1 m23cmを測る。主軸方位はN - 71° - Eである。深さは最浅部で15cm、最深部で31cmを測る。

第113号土坑（第63図、図版33）

調査地点の北東部に検出された遺構である。遺構確認面における平面形態は、不整な多角形状を呈する。

本土坑の規模は、長軸長 1 m71cm、短軸長 1 m32cmを測る。主軸方位はN - 64° - Eである。深さは最浅部で10cm、最深部で28cmを測る。

第114号土坑（第63図、図版33）

調査地点の北東部に検出された遺構である。重複関係は、遺構の南東隅部付近を現代の掘り込みにより攪乱されている。遺構確認面における平面形態は、不整な長方形状を呈する。南東側に隣接する、同規模の第115号土坑とほぼ同標高に、地形に沿って掘削されたものである。遺存状態が良くないものの、第121号土坑もほぼ同標高でかつ地形に沿っているため、これらの土坑は、比較的短期間のうちに一定の意識の元に掘削されたものと考えられる。

本土坑の規模は、長軸長現存値で 1 m36cm、短軸長 1 m4 cmを測る。主軸方位はN - 33° - Wである。深さは最浅部で 7 cm、最深部で16cmを測る。

第115号土坑（第63図、図版34）

調査地点の北東部に検出された遺構である。遺構確認面における平面形態は、不整な長方形状を呈する。本土坑の規模は、長軸長 2 m22cm、短軸長 1 m15cmを測る。主軸方位はN - 19° - Wである。深さは最浅部で 6 cm、最深部で30cmを測る。

第116号土坑（第63図、図版34）

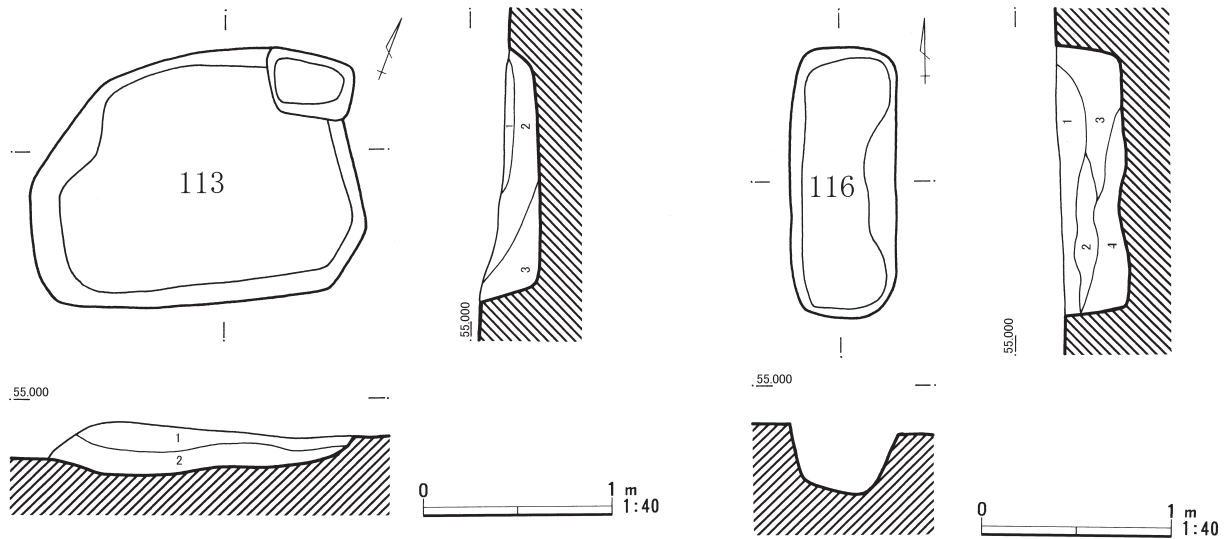
調査地点の北東部に検出された遺構である。重複関係は、第11・15号住居跡を切っている。遺構確認面における平面形態は、不整な長方形状を呈する。掘り込みは深く、しっかりとしており、壁は直線的に立ち上がる。覆土は、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

本土坑の規模は、長軸長 1 m42cm、短軸長56cmを測る。主軸方位はN - 2° - Wである。深さは最浅部で25cm、最深部で36cmを測る。

第117号土坑（第64図）

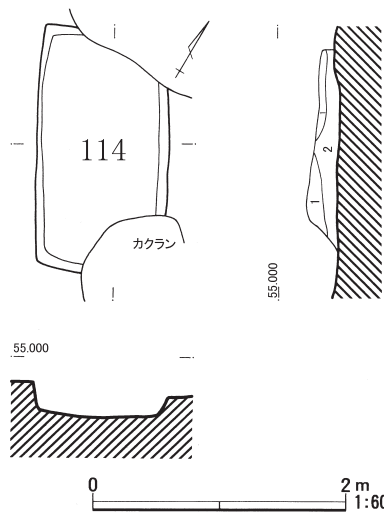
調査地点の東部に検出された遺構である。遺構確認面における平面形態は、不整な長方形状を呈する。重複関係は、第11号住居跡を切り、第15号住居跡によって切られている。

本土坑の規模は、長軸長現存値で 1 m1 cm、短軸長90cmを測る。主軸方位はN - 84° - Wである。深さは最浅部で14cm、最深部で20cmを測る。



第113号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 明褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）を少量、ローム小塊（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

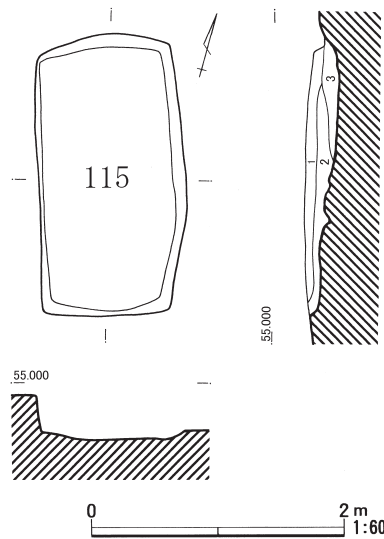


第114号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第115号土坑土層説明

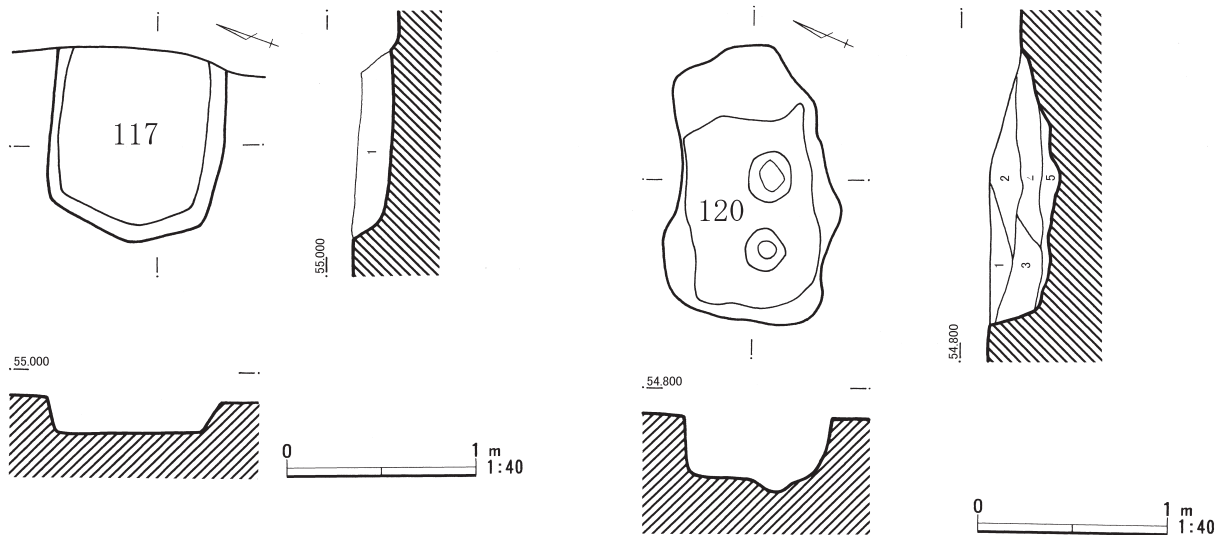
- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第116号土坑土層説明

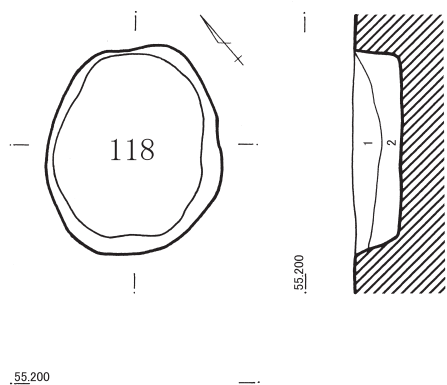
- 第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第63図 第113～116号土坑平面・断面図



第117号土坑土層説明

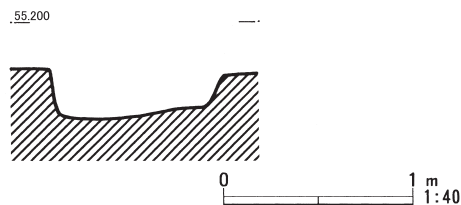
第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第118号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量、ローム小塊（～8mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

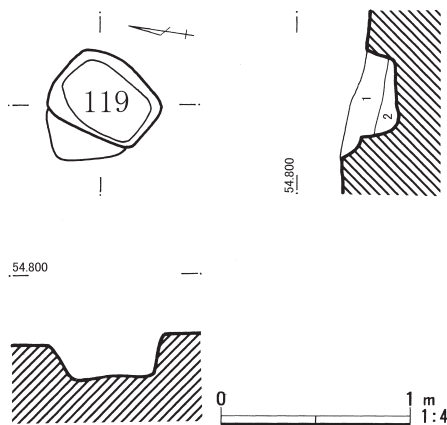
第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量、ローム小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第119号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～1mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）を中量、焼土粒子（～1mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。



第120号土坑土層説明

第1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

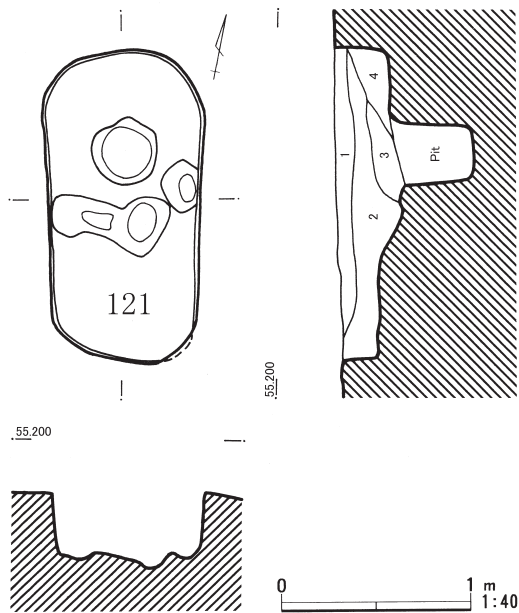
第2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量斑状に含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第4層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～8mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第5層 明褐色土 ローム粒子（～0.5mm）を主体とし、暗褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。

第64図 第117～120号土坑平面・断面図



第 65 図 第 121 号土坑平面・断面図

第121号土坑土層説明

- | | | |
|-----|------|--|
| 第1層 | 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）、粘土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は普通。 |
| 第2層 | 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～1cm）を少量、粘土粒子（～2mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性はやや高い。 |
| 第3層 | 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）・粘土粒子（～0.5mm）・焼土粒子（～2mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は普通。 |
| 第4層 | 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）、粘土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は普通。 |
| Pit | 黄褐色土 | ローム粒子（砂質）・小礫を主体とし、暗褐色土粒子を少量含む。 |

第118号土坑（第64図、図版34）

調査地点の南東部に検出された遺構である。遺構確認面における平面形態は、不整な楕円形状を呈する。重複関係は、第11号住居跡南壁西寄りの一部を切っている。

本土坑の規模は、長軸長1m7cm、短軸長89cmを測る。主軸方位はN - 43° - Eである。深さは最浅部で17cm、最深部で26cmを測る。

第119号土坑（第64図、図版35）

調査地点の南東部に検出された遺構である。遺構確認面における平面形態は、不整な長方形形状を呈する。本土坑の規模は、長軸長60cm、短軸長55cmを測る。主軸方位はN - 32° - Eである。深さは最浅部で15cm、最深部で21cmを測る。

第120号土坑（第64図、図版35）

調査地点の東部に検出された遺構である。重複関係は、第15号住居跡を切っている。遺構確認面における平面形態は、壁上位の崩落により不整形を呈するが、本来は長方形だったものと考えられる。

本土坑の規模は、長軸長1m45cm、短軸長78cmを測る。主軸方位はN - 73° - Eである。深さは最浅部で25cm、最深部で44cmを測る。

第121号土坑（第65図、図版35）

調査地点の東部に検出された遺構である。重複関係は、第15号住居跡を切っている。遺構確認面における平面形態は、不整な長方形形状を呈する。

本土坑の規模は、長軸長1m63cm、短軸長79cmを測る。主軸方位はN - 12° - Wである。深さは最浅部で19cm、最深部で73cmを測る。

3. 遺構外出土遺物

本調査地点においては、遺構に伴わず表土中或いは遺構覆土に混入していた他時期の遺物や、該期の遺物が確認されている。縄文および弥生時代については、小島本伝遺跡B地点（松本他 2009）同様に、遺構は検出されていない状況である。ここに遺構外出土遺物として項を設け報告する。

1. 縄文土器（第66図、図版39）

1～4は縄文時代前期諸磯6式土器である。いずれも深鉢形土器の破片である。1は胴部上半部、4は胴部下位の底部付近の破片である。色調は1～3が橙褐色、4が淡褐色を呈し、焼成はいずれも良好である。

1はRLの単節縄文、2～3はLRの単節縄文を、4はRの無節の縄文を施文している。

2. 弥生土器（第66・67図、図版39・40）

5～7は縄文晩期から弥生時代初頭に位置付けられようか。5は横位の条痕およびやや幅の広い沈線が施されている。色調は暗黄褐色を呈し、胎土中には雲母片、角閃石、石英粒等の砂粒を中量含む。焼成は良好であるが、器表面はやや風化している。6は縄文と沈線および刺突が施されている。LRの単節縄文施文後、四条の平行沈線が施されている。最上段の沈線の上は、逆「ハ」字状の沈線が施され、その直下には二点のやや斜位の刺突が右上方向から施されており、この刺突部が区画の起点となっているのであろう。沈線部分は硬質の工具によってなでられているためか、光沢を有している。色調は暗赤褐色を呈し、胎土には雲母粒、片岩粒が少量含まれている。焼成は良好で、堅緻である。7は壺の口縁部のように見えるものであるが、径から甕の口縁部の可能性が考えられる。横位の条痕が施されている。条痕はやや深くはっきりとしている。口端部は、器外面に人さし指を添えつつ、器内面側を親指の指頭から側面によって押圧し凹部を創出しつつ、端部の器内面側を肥厚させている。この肥厚部は、隣の凹部と接続し、波状を呈している。この押圧部はまた、器表面に細かな葉脈状の凸部が観察されることから、かなりの湿った状態において押圧が行われたものと考えられる。色調は暗黄褐色を呈し、胎土中には、石英粒、角閃石、雲母粒が少量含まれる。

8～13は条痕が施されたものである。8・13は小型の壺となろうか。8は横位の条痕を、9は横位の条痕を施してから斜位の条痕を施している。10はやや斜位の条痕を、11は斜位の条痕であり、凹部は浅くやや弱い条痕である。12は縦位および斜位の条痕を施している。順序は縦位を施し、一度下から上へ斜位に搔揚げ、手首を返して小さな弧を描きつつ、斜位の下方へと搔下ろしている。13は左右の斜位および横位の条痕を施している。色調は8・13が暗橙褐色、9・10が淡橙褐色、11が暗黄褐色、12が暗褐色を呈している。焼成は11がやや風化しているものの、いずれも良好であり、胎土は8・12・13は雲母粒・片岩粒を少量、9・10・11は片岩粒・雲母粒・角閃石・鉄斑粒等を多く含むものである。

14から35は沈線の施されたものである。14・15沈線と縄文が施された壺口縁部の破片である。14は上下に向かい合う弧状の沈線を、15は平行沈線を施している。14はLRの単節、15はLの無節の縄文を施している。色調は14は暗黄褐色、15は暗橙褐色を呈している。焼成はともに良好であり、胎土中には石英粒、片岩粒、雲母粒、鉄斑粒を多く含む。



第 66 图 遺構外出土遺物 (1)

0 (1:3) 10cm

16は器表面に光沢面を形成している。刺突、弧状および棒状の沈線を施す。色調は暗黄褐色を呈し、焼成は良好で堅緻である。胎土中には片岩粒、角閃石粒、雲母粒を中量含む。

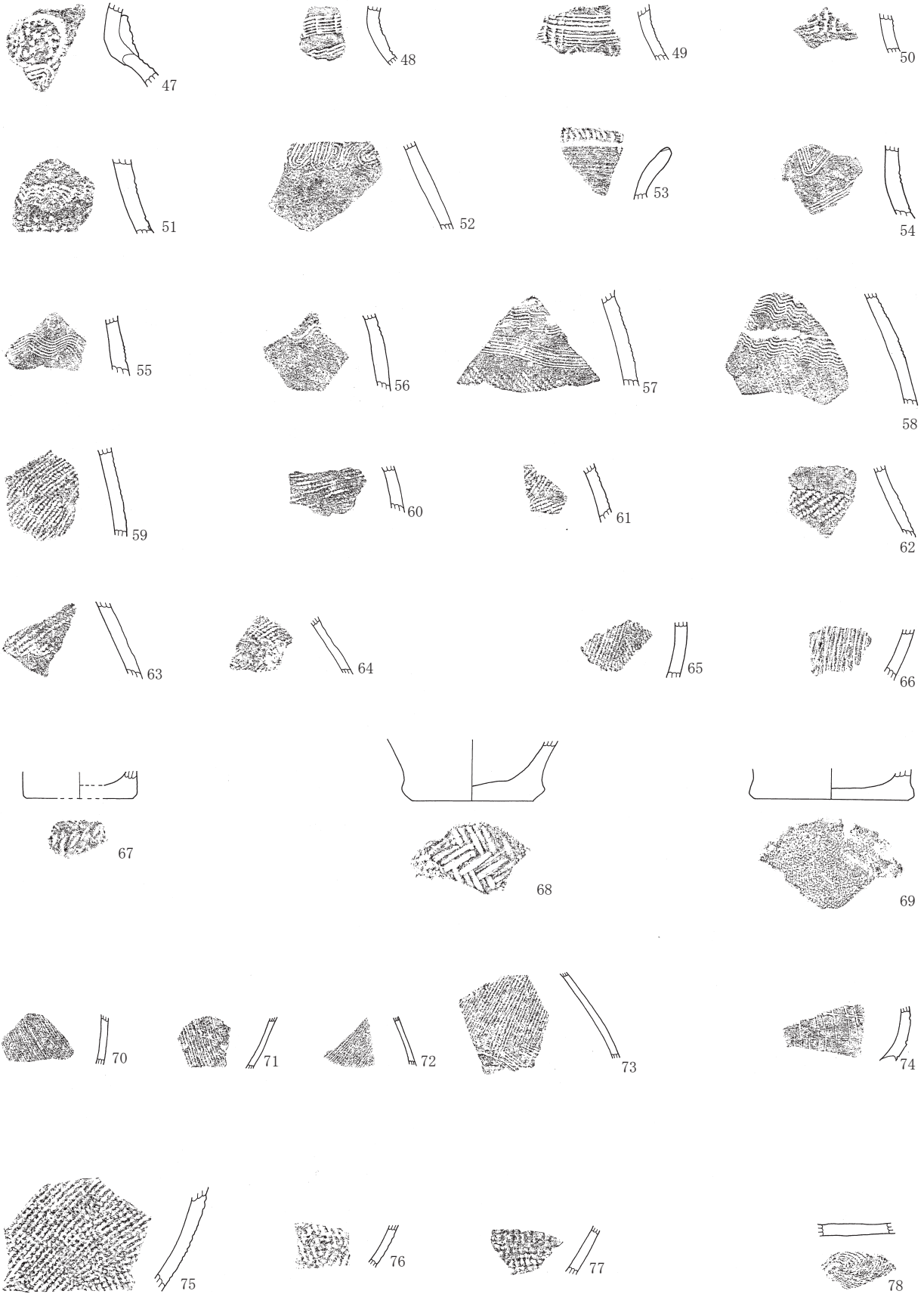
17～20は沈線による区画内に刺突を充填するものと考えられる。17は二条の波状の沈線を施し、同一の工具の端部により断面「D」字状の刺突を施している。18は三重の沈線を鋭角的に接続させ、逆三角形を基調とする区画内に刺突を充填するものと考えられる。区画の沈線は二回の動作によって描出され、隅部は鋭角的である。刺突はその幅から、区画を描出したものと同じのものと考えられ、その端部側面を使用しているものと思われる。19はやや角度を持った横位の沈線三角形を基調とすると考えられる区画内に刺突を充填している。20は弧状の沈線を描出し刺突を施している。17はLの無節縄文、20は非常に細かいLRの単節縄文が施されている。色調は19が暗橙褐色、他は暗褐色を呈する。焼成はいずれも良好であり、胎土中には片岩粒、石英粒、雲母粒が多く含まれる。21は、区画外あるいは区画間に施文するものと考えられる。二重の弧状沈線と三条の斜位の沈線が施されている。色調は暗褐色を呈する。胎土中には片岩粒、石英粒、雲母粒が多く、また角閃石粒が少量含まれる。

22～32は沈線と縄文が施される壺頸、胴部破片である。22は三条の横位の沈線、23は横位の沈線の下位にやや角度の緩い逆「ハ」字状の沈線、24は二条の沈線の下位に斜位の直線的な沈線、25は一条の横位の沈線の上位に斜位の直線的な沈線、また下位には向き合う弧状の沈線が施されている。26は縦位に向き合う「U」字状の沈線およびやや離れて縦位の沈線が見られる。「H」字状、或るいは、上下に向き合う横位の「L」字状の文様を構成するものか。28は二重ないし三重の三角形の区画となるものと思われる。29は二条の平行沈線とその下位に角度の浅い斜位の沈線、30はほぼ平行する三条の沈線とその上位に直立気味の斜位の沈線、31・32は横位の沈線が施されている。24・27・29・30はLの無節縄文、他はLRの単節縄文が施され、26は部分的に斜・横方向に施文されている。23の横位沈線の上位の縄文は磨り消されている。色調は、22～25・29が暗黄褐色、26・28が暗橙褐色、他は暗褐色を呈する。ともに焼成は良好であり、また胎土中には石英粒、片岩粒、鉄斑粒等を多く含む。

33～35は小型の筒型と考えられるものである。いずれも縄文と沈線が施されている。沈線は直線と曲線からなっている。33は暗褐色、他は淡暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中には、やや荒い片岩粒が見られ、他は角閃石、雲母粒、鉄斑粒が少量含まれる。

36～45は、縄文のみが施文されているもの。36～38・43・44はLRの単節縄文、39・41はRLの単節縄文、40・42はRの無節縄文が施されている。色調は36・41・42・44は暗黄褐色、37は暗赤褐色、38・40・43・45は暗褐色、38は淡橙褐色を呈する。46は条痕の施された壺胴部と考えられ、図の上方から左側にかけて研磨を受け、滑らかになっている。時期の特定は困難であるが、二次的な再利用がなされたものである。

47～66は中期後半から後期にかけてのものである。47は円形浮文を貼り付け、細い竹管状の工具によって刺突を施している、その下位にはコンパス文に近い波状文を施している。色調は淡褐色を呈し、焼成はやや不良である。胎土中にはやや粒の荒い片岩粒、鉄斑粒が少量含まれる。48～50は簾状文を施文するものである。48はピッチの短い、ほぼ等間隔幅の三ヶ所の止めが、また49・50は三連止めである。49・50は時計周り、48は反時計回りであり、48の簾状文の下位にはやや間隔を空け、また49は簾状文の下位に重なって、波状文が施文されている。色調は48が淡褐色、他は淡橙褐色を呈し、焼成は48は良好であるが49・50はやや不良であり、器表面の風化が認められる。胎土中にはともに片岩粒、



0 (1:3) 10cm

第 67 図 遺構外出土遺物 (2)

雲母粒、角閃石粒が含まれる。

51から58は櫛描波状文の施されたものである。51・52はコンパス文に近い波状文を施し、51は波状文の下位に二段の、やや間隔をあけた刺突列をめぐらしている。53は上方の口縁端部に刻み目を施している。54から56は鋸歯文に近い波状文が施されている。57はやや間隔をあけたか二条の波状文が施され、下位は細かい刷毛目が施されている。58は波状文と横位の櫛描文が施され、下位はR Lの単節縄文が施されている。色調は51が淡白褐色、52が橙褐色、53～56・59が淡褐色、58が淡暗褐色を呈する。

59から64は縄のみ施文されたもの。59はL Rの単節縄文、60はLの無節縄文、61はR Lの単節縄文、が施されている。62はL Rの単節縄文が施されているが、上位は細かな刷毛目が施されている。63はL Rの単節縄文 縄の端末の折り返し部分、64はL Rの単節縄文原体端末の結束部は「Z」字状のものである。65・66は刷毛目が施されたもの。ともにやや荒い刷毛目が縦位、斜位に施されている。

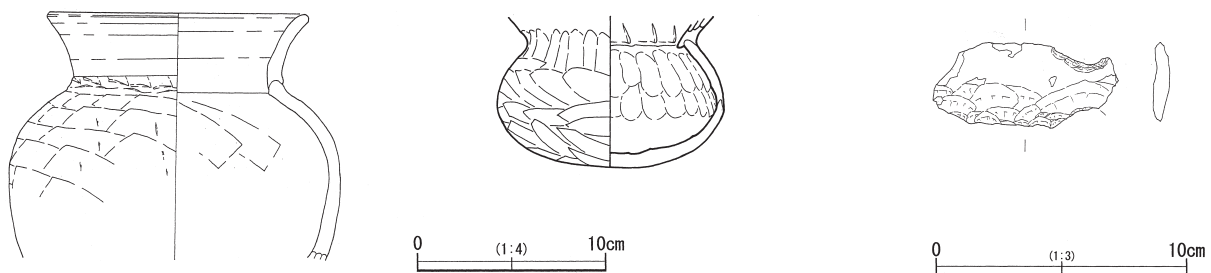
67から69は底部の破片をまとめた。67・68は網代圧痕が認められる。67は底部外縁のみであるため、編み方は不詳である。68は6本超え6本潜り2本送りを基調としているようであるが、部分的に1本送りや3本送りの乱れが認められる。原体の幅は3・4mmである。69には布目圧痕が認められる。

3. 古墳時代以降の遺物（第67・68図、図版40）

70から78は、古墳時代以降のものである。70から73は、S字状口縁台付甕の胴部破片であり幅の狭い刷毛目が施されている。74は器種は不明であるが、5mm前後の間隔の縦位の沈線を多数描出し、後にやや間隔をあけた3条の沈線を施している。図右下の二つの矩形中には斜位の沈線が施されている。暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。75から77は須恵器甕胴部であり、ともに格子目状の叩きが施されている。色調は暗灰褐色を呈する。78は須恵器坏底部破片である。焼成は酸化焰焼成である。

4. 石器（第68図）

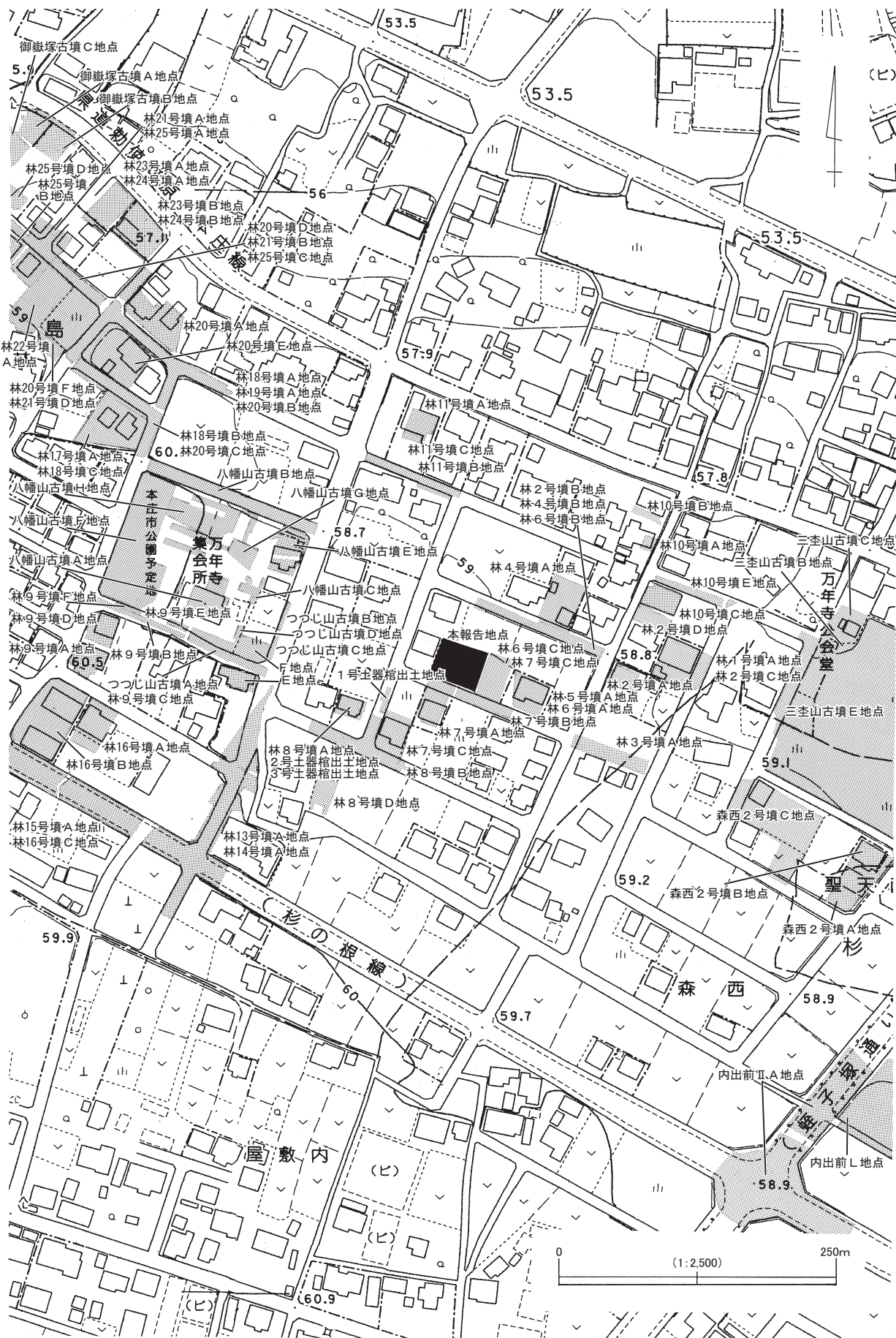
第67図3は縄文時代の縦長の石匙、あるいは熊谷市北島遺跡274・348号住居跡で確認されているような刃器となろうか。



第 68 図 遺構外出土遺物（3）

第14表 遺構外出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器壺	口径 14.0 底径 — 器高 13.1	口端部は丸い。口縁部は大きく外反する。肩部に最大径を有する。	外面—口縁部縦位ナデ後ヨコナデ。胴部斜位ヘラケズリ後ナデ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部工具による斜位ナデ後ナデ。	片・石 中 白・角・Fe 少 内外—明赤褐色	
2	土師器埴	口径 — 底径 — 器高 8.0	口端部は丸い。口縁部はわずかに外反する。胴上位に最大径を持つ。丸底。	外面—口縁部ヨコナデ。胴部上位木口状工具による縦位ナデ。胴部中位～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ。胴部～底部ナデ。	片・白・Fe 中 角・雲 少 白針 微 内外—橙色	残:60%



第 69 図 調査地点の位置

第IV章 旭・小島古墳群 林6・7号墳D地点の調査

第1節 遺跡の概要

旭・小島古墳群は古くから知られる古墳群であり、『武蔵国児玉郡誌』（小暮 1927）編纂に先立つ資料調査の様子が『上毛及上毛人 丙寅五月号』（岩澤 1926）に紹介されている。ここでは、大正14年1月31日に、新町駅から中山道を東進し本庄駅に至る途中の、旭・小島古墳群の様子について語られている。まず直径23～25.5m、高さ5.5mの「八幡塚」について触れ、その南及び南東側にも直径11～13m、高さ3mほどの円墳が3～4基あると記載されている。この「八幡塚」は位置や規模、そして呼称から「万年寺八幡山古墳」と考えられる。また八幡塚の北東方向に直径55m、高さ4mの「新町塚」があるとされている。この「新町塚」は、方向とその突出した規模から、三壘山古墳と考えられる。さらに中仙道を進み小島の集落に入ると、その南方に古墳群があるとされ、この中の一基を「手長塚」と呼ぶとし、塚頂に手長明神を祀る小祠があるとしている。これは御手長山古墳をさしているものであろう。また、この「手長塚」の北側には、高さ5.5mの円墳があり、一部に円筒埴輪が露出していると記されている。

『武蔵国児玉郡誌』においては、第三章第五節「古墳の分布」中に記載されている。ここでは、字万年寺より小島原に亘り多数が散在しており、円墳とされている。またこれらの多くは発掘され、埴輪、直刀、玉類、環等が出土しているとされ、さらに脚注には大正10年に、土製の軛が発見されているとしている。『埼玉史談』の「児玉郡古墳分布調査」（金鑽 1932）における児玉郡古墳所在並員数表では、旭村における古墳の総数を27基とし、昭和26年刊行の『埼玉縣史』における児玉郡各町村古墳所在地並員数表中の旭村には、27基の古墳が確認されている。ここでは大字毎には小島10基、下ノ堂17基とされ、さらに小字毎に詳述されている。やや煩雑ではあるが参考のために列記すると、大字小島字二子塚3基・同字堂塚1基・同字森西2基・同字森下2基・同字小島境2基、大字下ノ堂字二子塚3基・蛭子塚5基・前原6基・鳶山1基・林2基となっている。

上記のように、古くから注目されてきた旭・小島古墳群は、本庄台地北縁部に所在し、東は小島5丁目から西の児玉群上里町大字神保原にかけての約1600m、南は小島南4丁目から北の万年寺に至る1450mの範囲に分布している。これまでの試掘調査及び発掘調査の成果から、分布域の中央部には南南西から北北東方向へと伸びる埋没谷の存在が明らかとなっており、この区域は現在でも微低地状を呈している。群域はこの埋没谷によって東西の二群に画されている。西群中には前方後円墳・帆立貝式古墳・円墳・方形墳（方墳）といった多彩な墳形が認められ、これに対し、東群は現在のところ円墳を主体としており、墳形構成の相違は注目される。また造営期間は、4世紀代から7世紀代に至る、およそ300年以上の長きに亘り、かつ断続的に営まれた古墳群である。

本書で報告する林地区は、直径43mの万年寺八幡山古墳及び、一辺の長さが25mを測る方墳である万年寺つつじ山古墳の東方に位置している。今回報告する林6・7号墳周辺は、これまでの発掘調査の成果から、円墳及び方墳の小群が交錯するように隣接して営まれていることが判明している。方墳の林6号墳と同林7号墳はほぼ同軸を有して肩を並べ、また、同じく方墳の林4号墳は、主軸をやや転じるものの近接して営まれている。

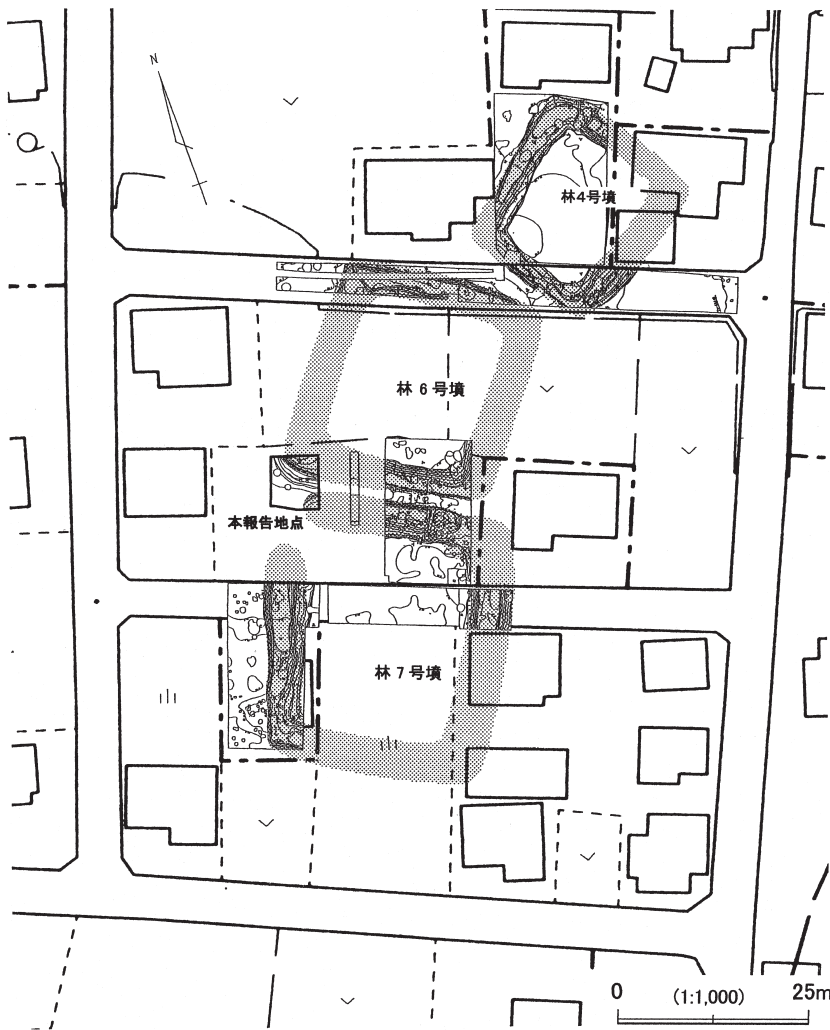
今回報告する調査地点は、林6・7号墳C地点の西側に、また林7号墳A・B地点の北側に位置している。本調査区では、林6号墳周溝南西隅部外縁と同7号墳周溝北西隅部外縁が検出されている。周溝内においては、6基のピットも確認され木製樹物の敷設も予想される。また、古代のものと考えられる土坑3基が検出されている。

第2節 検出された遺構と遺物

1. 古墳

林6号墳（第72～74図、図版41～43）

調査地点北西部に検出された遺構である。遺構確認面は黄褐色ローム層上面である。一辺約23mの規模を誇る方墳である林6号墳の、南西隅部から南辺の一部にかけての周溝外側の立ち上がり部分に相当する。重複関係は、第1号土坑に切られている。遺構確認面における平面形態は、緩やかな弧状を呈していた。検出部分の規模については、立ち上がり上位部分は崩落しており正確さを欠くため、立ち上がり下端の数値を示す。検出されたのは、約3m50cmを測る南辺から約1m60cmの南西隅

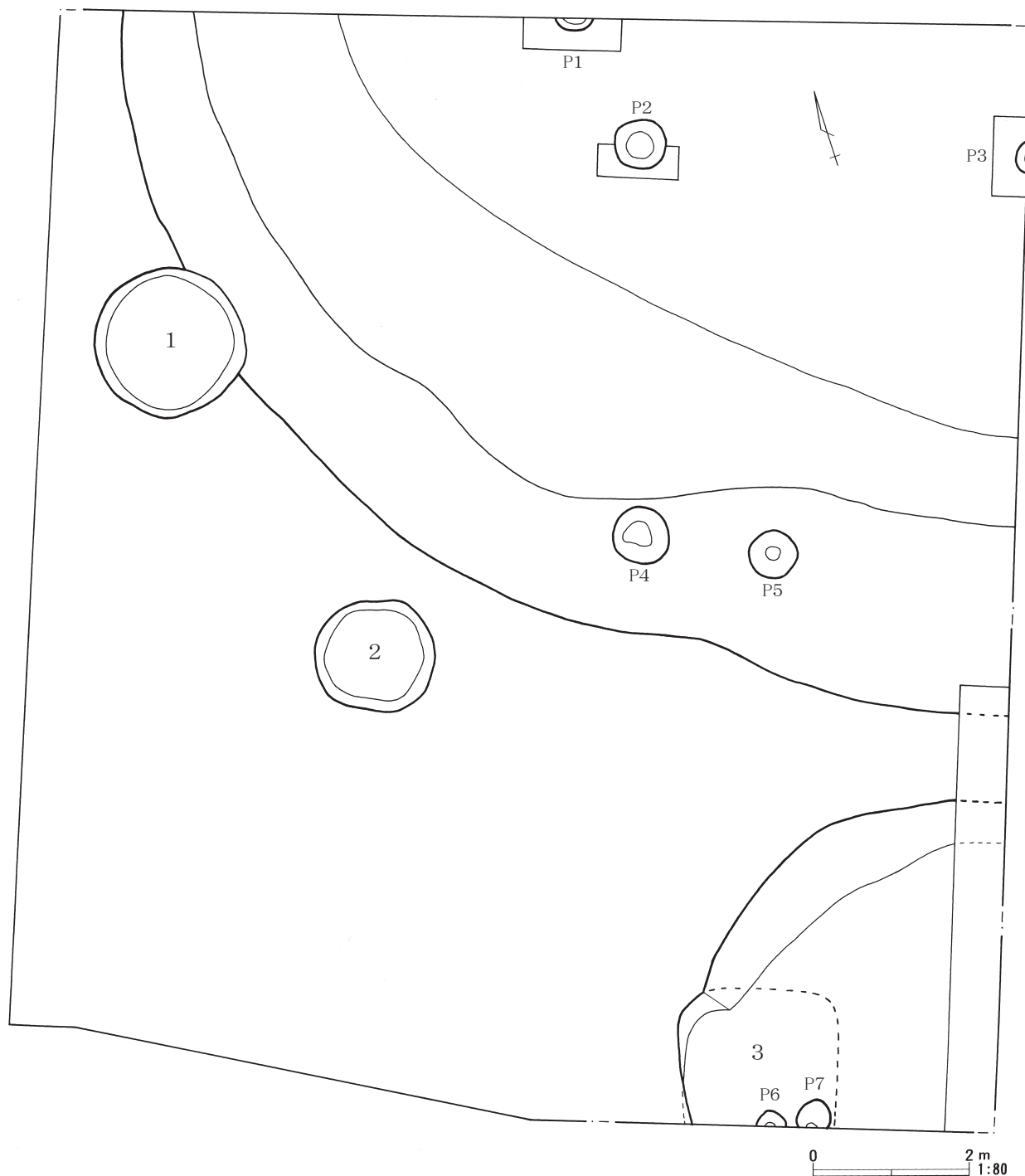


第70図 林4・6・7号墳位置図

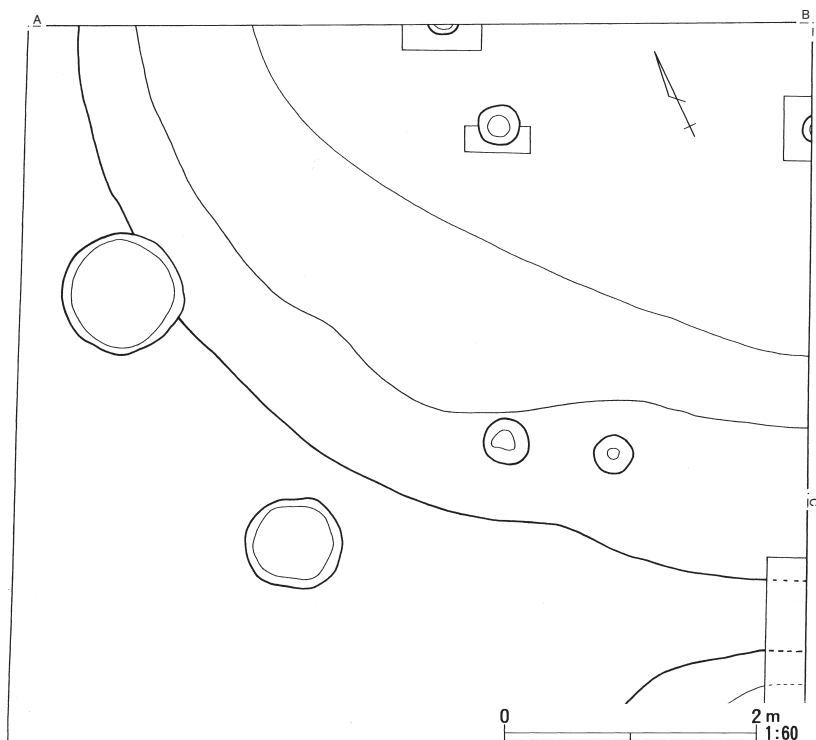
部である。底面で確認された部分の最大幅は2m55cmを測る。遺構確認面からの深さは、90cmから1mを測り、礫層直上の肌色味がるローム層（基本土層 第VIII層）まで掘削されている。底面はほぼ平坦であり、61°の角度をもって、比高差で36cmほど直線的に立ち上がり、さらに角度を転じている。この上位部分は崩落によって消失した部分であり、緩やかな傾斜を持って確認面へと続いている。

覆土は、35層に分層された。立ち上がり付近は三角堆積、中央部分は水平堆積を基調とし、崩落・流入といった自然堆積の様相を示すものである。上層の黒褐色土を主体とする層には、淡橙褐色を呈する浅間山系

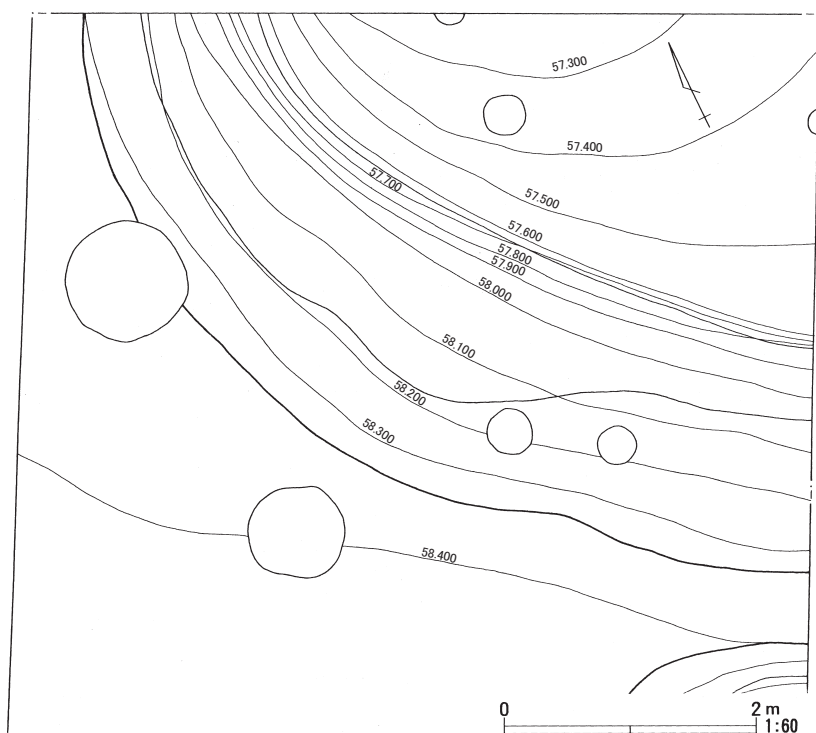
B軽石（以下単にB軽石と呼称する）が認められた。特に第6層中には、多量のB軽石が観察された。このことから本周溝は、天仁元年（1108年）頃には、わずかな窪み状となっていたものと考えられる。さて土層堆積から見た林6号墳と林7号墳の重複関係であるが、調査区東壁土層断面（第74図SPB-C）において一部切り合い関係状をなす土層の堆積が観察される。林6号墳周溝覆土の第4・18層は、林7号墳周溝覆土第1・9層を被覆している土層である。ここで先に記したB軽石に注目すると、林6号墳において漆黒を呈する黒褐色土主体層は第6層とこれを挟む第5・9層である。第6層には先に記したように、B軽石が多量に含まれ、概ね天仁元年爆裂時の堆積と考えられる。これに対



第71図 調査区全測図



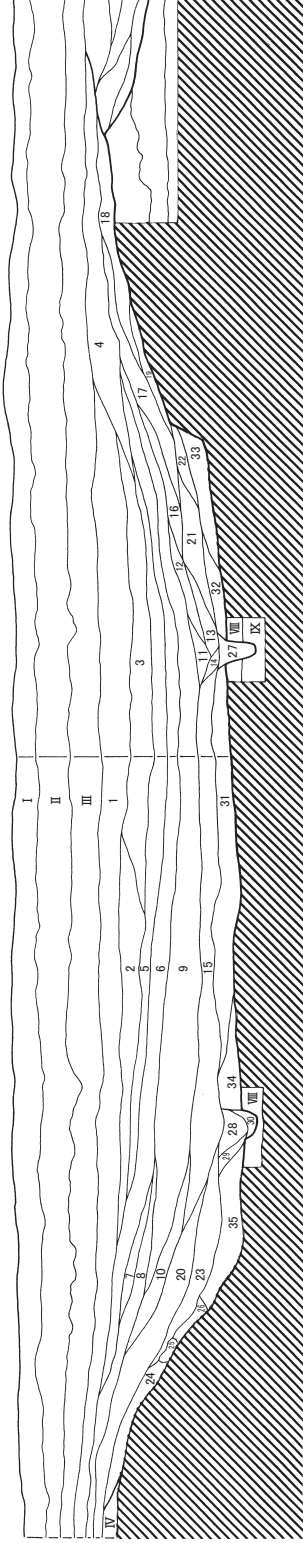
第 72 図 林 6 号墳周溝平面図



第 73 図 林 6 号墳周溝等高線図

し林 7 号墳においては、明確な B 軽石の堆積は認められなかったが、漆黒を成す黒褐色土層は第 3・5 層であり、これらの層が B 軽石降灰前後の堆積とみなされよう。さらに同層の堆積のレベルを比較すると、林 6 号墳において最上位となる第 5 層中央部上面で標高 58 m 前後であり、これに対し第 7 号墳において最下位となる第 3 層中央下面は標高 58m10cm となり、最上位の第 3 層中央上面は標高 58m30cm である。さらに切り合い状に堆積する林 6 号墳周溝第 4 層に被覆される、暗茶褐色を呈する林 7 号墳周溝第 1 層に注目すると、この暗茶褐色土層の層厚はおよそ 20cm であり、先に記した漆黒の同墳第 3・5 層上に堆積する土層であることから、浅間山の天仁元年の爆裂・降灰からの一定の期間の経過が窺えよう。土層の被覆現象を、素直に掘削の前後関係として捉えるならば、林 7 号墳周溝の埋没完了後に林 6 号墳周溝が掘削されたこととなろう。し

かし、林 7 号墳周溝が B 軽石降灰後に掘削されることは一般的にはありえず、上記で検討した B 軽石降灰前後の土層レベルと、林 6 号墳周溝外側の立ち上がり部分の崩落・流失に伴い形成された緩斜面をを考慮し、かつ切り合い状に堆積する林 6 号墳周溝第 4 層の堆積角度を加味するならば、同層の堆積は人為的な掘削を表すものではなく、高位から低位への土壌の流失の結果と解釈されるものである。ここで注意を要するのは、この流失時に林 7 号墳周溝は概ね埋没を完了（林 7 号墳周溝第 1 層上面）



第74図 林6号墳周溝断面図

基本土層 土層説明

- 第I層 暗灰褐色土 暗灰褐色土を主体とし、灰褐色の浅間山系A層石（～1.5mm）を多量に、ローム粒子（～8mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第II層 暗黄灰褐色土 暗灰褐色土を主体とし、黄色味がかる浅間山系A層石（～1.5mm）を多量に、暗茶褐色土粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第III層 暗茶褐色土 小塊状の暗茶褐色土（～2cm）を主体とし、明茶褐色土小塊（～1cm）を斑状に少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第IV層 明茶褐色土 小塊状の明茶褐色土（～2cm）を主体とし、暗茶褐色土粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第V層 黄褐色土 ソフトローム
- 第VI層 黄褐色土 ハードローム
- 第VII層 灰黄褐色土 灰色がかるハードローム
- 第VIII層 淡黄褐色土 肌色がかるハードローム
- 第IX層 黄褐色砂礫層

林6号墳周溝 土層説明

- 第1層 明茶褐色土 黒褐色土を主体とし、暗茶褐色土粒子（～5mm）・ローム小塊（～2cm）を少量、ローム粒子（～0.5mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第2層 暗褐色土 暗茶褐色土小塊（～4cm）を主体とし、黒褐色土小塊（～1cm）を斑状に少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第3層 黒茶褐色土 暗茶褐色土粒子（～0.5mm）・黒褐色土粒子（～1cm）を主体とする層（風化粒子主体）。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第4層 暗茶褐色土 暗茶褐色土小塊（～2cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第5層 黒褐色土 やや灰色味がかる黒褐色土を主体とし、暗茶褐色土小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第6層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、淡褐色の浅間山系B層石（～0.8m）・淡赤灰シルト（～0.3mm）を多量に含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第7層 黒褐色土 暗茶褐色土小塊（～5cm）を少量、ローム粒子（～2mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第8層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、暗茶褐色土小塊（～1cm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第9層 黒褐色土 ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第10層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、暗茶褐色土小塊（～3cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第11層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、暗茶褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。（ピット部分流入土）
- 第12層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、暗茶褐色土粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。（ピット部分流入土）
- 第13層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、黒褐色土粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。（ピット部分流入土）
- 第14層 黒褐色土 暗茶褐色土小塊（～3cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。（ピット部分流入土）

- 第15層 明黒褐色土 黒褐色土を主体とし、暗茶褐色土粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第16層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、黒褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第17層 明茶褐色土 明茶褐色土を主体とし、暗茶褐色土小塊（～1cm）・ローム小塊（～1cm）を斑状に少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第18層 明茶褐色土 明茶褐色土を主体とし、暗茶褐色土小塊（～1cm）・ローム小塊（～1cm）を斑状に微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第19層 明黄褐色土 ローム小塊（～3cm）・ローム粒子（～0.5mm）を主体とし、黒褐色土粒子（～0.5mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第20層 暗褐色土 暗茶褐色土を主体とし、黒褐色土粒子（～0.5mm）・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第21層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、暗茶褐色土小塊（～3cm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第22層 明黄褐色土 ローム小塊（～4cm）・ローム粒子（～8mm）を主体とし、黒褐色土粒子・暗茶褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第23層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、ローム粒子（～5mm）を中量、風化したローム小塊（～2cm）を少量、暗茶褐色土小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第24層 明茶褐色土 明茶褐色土を主体とし、ローム小塊（～3cm）・ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第25層 明黄褐色土 ローム小塊（～1cm）・ローム粒子（～8mm）を主体とし、黒褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第26層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、風化したローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第27層 明茶褐色土 明茶褐色土を主体とし、暗茶褐色土小塊・ローム小塊（～1cm）を少量、肌色のローム小塊（～3cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第28層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子（～8mm）を主体とし、黒褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第29層 明黄褐色土 明黄褐色土を主体とし、ローム粒子（～8mm）を主体とし、黒褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第30層 淡黄褐色土 肌色のローム小塊（～1cm）・ローム粒子（～8mm）を主体とし、黒褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第31層 明黒褐色土 黒褐色土を主体とし、明茶褐色土粒子・ローム粒子（～0.5mm）を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第32層 明黒褐色土 黒褐色土を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を中量、風化した明茶褐色小塊・ローム小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第33層 明茶褐色土 ローム小塊（～4cm）・ローム粒子（～8mm）を主体とし、明茶褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第34層 暗黄褐色土 ローム小塊（～2cm）・ローム粒子（～8mm）を主体とし、黒褐色土小塊（～1cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第35層 明黄褐色土 ローム小塊（～2cm）・ローム粒子（～8mm）を主体とし、黒褐色土粒子（～0.5mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。

していること、また林6号墳周溝は埋没途中の窪状地であったことである。これらの現象もまた、周溝幅や深さ、或いは周辺環境等の要素により埋没進度が一定でないことが予想される。さらに後述するが林7号墳周溝は、全周せずに北西隅部を掘り残し土橋状となる可能性、或いは林6号墳周溝を避けて掘削されている可能性が考慮され、このため本調査区検出の部位は、周溝幅及び深さが他所に比し減じていることも予想される。埋没進度を俄かに時系列に置き換えることには、慎重に成らざるを得ないが、林7号墳が6号墳周溝をさけている場合は林7号墳が後出との予想もされよう。

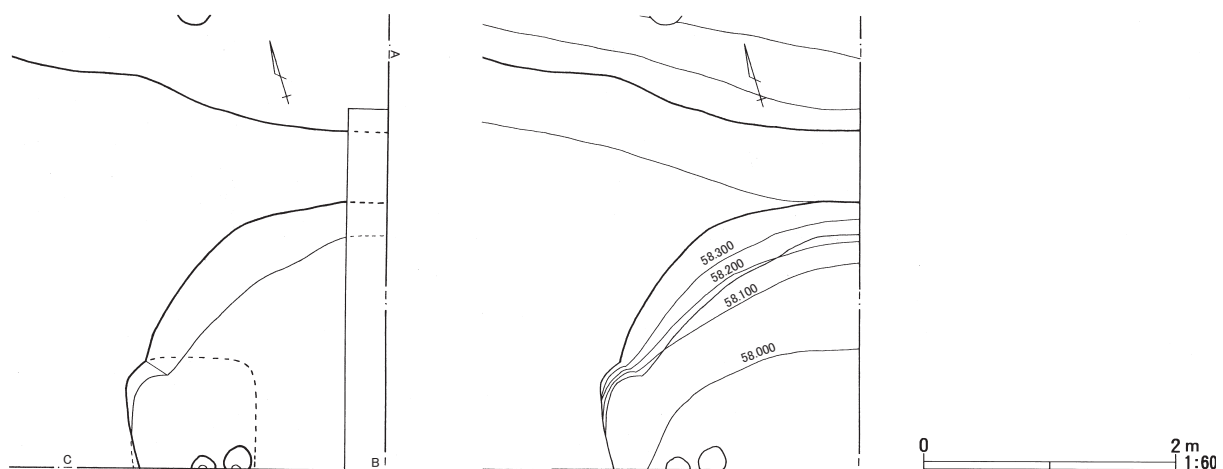
出土遺物は、上層のB軽石降灰前後の堆積層である黒褐色土を主体とする土層のみ検出されている。これらの遺物は、いずれも外面に一次調整縦位刷毛目を施す普通円筒埴輪の破片であった。本墳の築造時期は、出土遺物から古墳時代前期末葉前後と推測される（太田、2006）ことから、これらの遺物は本古墳に伴うものではなく、他所から流入したものと考えられる。

林7号墳（第75～76図、図版41・44）

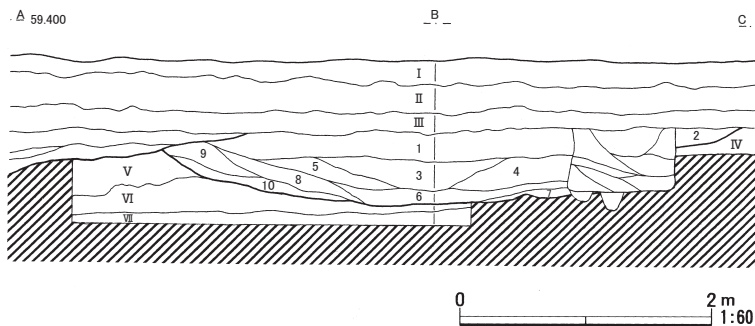
調査地点南東部に検出された遺構である。遺構確認面は黄褐色ローム層上面である。長辺30m、短辺25mを測り、南北の辺がやや短い長方形を呈する方墳である林7号墳の、北辺西側端部に相当する。

発掘調査時に本遺構は、周溝北西隅部外側立ち上がりと考えられていたが、既調査地点と整合させたところ、南辺に比し異常に北辺が短くなってしまうことが判明した。このため、周溝は北西隅部において連続させずに掘り残し、土橋状に形成されていたか、林6号墳をさけ、周溝外側がゆがんでいる可能性が高いことが明らかとなった。

重複関係は、第3号土坑によって西側の立ち上がり部分を切られている。検出規模は、遺構確認面における立ち上がり外縁で2m70cmを測る。遺構確認面からの深さは、最深部で44cmを測り、黄褐色のハードローム層（基本土層第VI層）を掘り込んでいる。底面は中央に最深部を有し、弧を描きながら上昇し、明確な変換点を介さずに緩やかに立ち上がる。覆土は10層に分層され、三角状の堆積が目立つものの自然堆積とされよう。今回観察された土層群には、明確なB軽石は確認されなかったが第6号墳周溝覆土との対比から、本墳における天仁元年前後の堆積は第3・5層が相当するものと考えられる。本検出部位においては、遺物は出土しなかった。



第75図 林7号墳周溝平面・等高線図



第76図 林7号墳周溝断面図

林7号墳周溝土層説明

第1層 暗褐色土 黒褐色土を主体とし、暗茶褐色土小塊（～3cm）を中量含む（上層は多く、下層に行くほど少ない）。しまりは軟らかく、粘性は無し。

第2層 明茶褐色土 明茶褐色土を主体とし、暗茶褐色及び黒褐色土小塊（～1cm）を少量斑状に含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。

- 第3層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、暗茶褐色土小塊（～1cm）を微量、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第4層 明茶褐色土 明茶褐色土を主体とし、暗茶褐色及び黒褐色土小塊（～1cm）を少量斑状に含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
黒褐色土を主体とし、暗茶褐色土小塊（～1cm）を微量、ローム粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第5層 明茶褐色土 黒褐色土を主体とし、暗茶褐色土小塊（～1cm）・ローム粒子（～0.5mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第6層 明褐色土 ローム小塊（～2cm）・ローム粒子（～2mm）を主体とし、黒褐色土小塊（～4cm）を斑状に少量含む。しまりは軟らかく、粘性は低い。
- 第7層 褐色土 ローム粒子（～8mm）を主体とし、黒褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第8層 明茶褐色土 斑状に混在する黒褐色土・暗茶褐色土粒子を主体とし、ローム粒子（～0.5mm）を少量、ローム小塊（～1cm）微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第9層 明茶褐色土 斑状に混在する暗茶褐色土・ローム小塊（風化・粒子状～4cm）を主体とし、黒褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第10層 明黄褐色土 未風化のローム小塊（～4cm）・ローム粒子（～0.5mm）を主体とし、黒褐色土粒子（～0.5mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。

2. 土 坑

第1号土坑（第77図、図版45・47）

調査地点の西壁寄りの北側で、検出した遺構である。重複関係は、林6号墳周溝を切っている。遺構確認面は黄褐色ローム層上面である。遺構確認面における平面形態は、ほぼ円形を呈する。底面は平坦であり、壁は垂直に近い角度で直線的に立ち上がる。

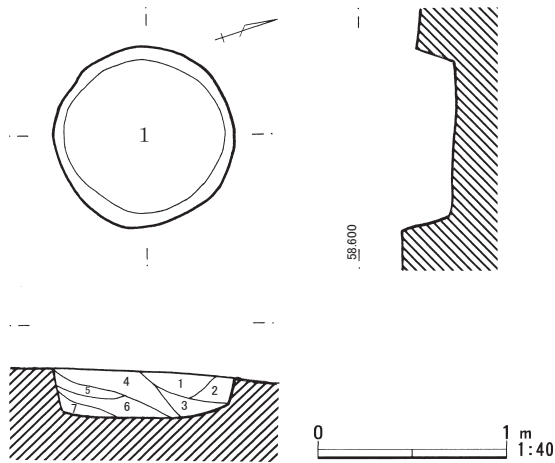
本土坑の規模は、長径97cm、短径93cmを測り、遺構確認面からの深さは、最深部で26cmである。主軸方位はN-14°-Wである。

覆土は7層に分層され、風化粒子状の小塊が観察され、また水平基調を乱すことから一定期間の経過が推察された後に、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

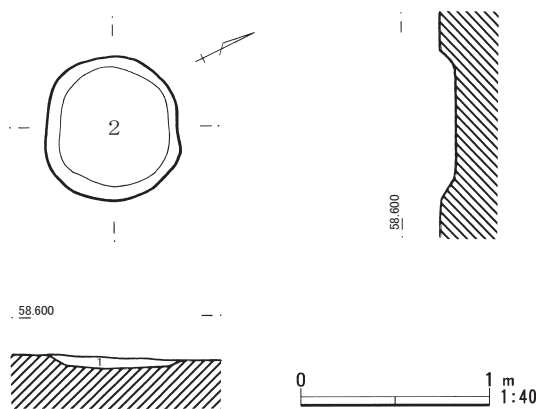
本遺構からの遺物の出土は、無かった。

第2号土坑（第78図、図版45・46）

調査地点の中央南西寄り、検出した遺構である。遺構確認面は黄褐色ローム層上面である。遺構確認面における平面形態は、短径部中央がやや窪み瓢形状を呈する。底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。



第 77 図 第 1 号土坑平面・断面図



第 78 図 第 2 号土坑平面・断面図

第 1 号土坑土層説明

- 第 1 層 暗茶褐色土 黒褐色土を主体とし、ローム粒子 (~1mm) を中量、黒褐色土粒子 (~0.5mm) を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第 2 層 明茶褐色土 斑状に混在する黒褐色土・ローム小塊 (風化・粒子状 ~2cm) を主体とする。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第 3 層 暗茶褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊 (風化粒子状~1cm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第 4 層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子 (~0.5mm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第 5 層 黄褐色土 風化したローム粒子を主体とし、暗茶褐色土粒子 (~0.5mm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第 6 層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子 (~5mm) を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第 7 層 明茶褐色土 暗褐色土を主体とし、ローム小塊 (~1cm) を中量、ローム粒子 (~2mm) 少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。

第 2 号土坑土層説明

- 第 1 層 暗茶褐色土 暗茶褐色土を主体とし、ローム粒子 (~1mm) ・黒褐色土粒子 (~0.5mm) を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。

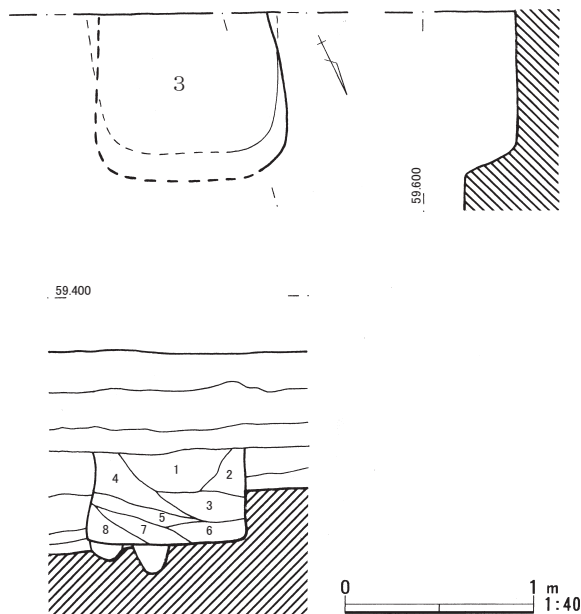
本土坑の規模は、長径77cm、短径69cmを測り、遺構確認面からの深さは、最深部で7cmである。主軸方位はN-28°-Wである。

第 3 号土坑 (第 79 図、図版 46・47)

調査地点の南東部で検出した遺構である。検出当初は、7号墳周溝覆土との判別がつかず、立ち上がり部分が崩落して乱れている部分と考えられた。7号墳周溝掘り下げ後の土層観察により、その存在が認識された遺構である。本重複関係は、林7号墳周溝を切っている。遺構確認面は黄褐色ローム層上面である。遺構確認における平面形態は、断面観察と合わせ方形を基調とするものと推定される。底面は平坦であり、壁は内傾しつつ直線的に立ち上がる。

確認部分における本土坑の規模は、推定最大幅98cm、推定最小幅88cmであり、遺構確認面からの深さは、最深部で28cmを測る。主軸方位はN-25°-Eである。

土層は8層に分層され、小塊状を成すものが多く、人為的に埋め戻されたものと考えられる。



第79図 第3号土坑平面・断面図

第3号土坑土層説明

- 第1層 暗褐色土 小塊状の暗茶褐色土（～4cm）を主体とし、黒褐色土小塊（～3cm）・ローム粒子（～2mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第2層 暗褐色土 暗茶褐色土小塊（～3cm）を主体とし、黒褐色土小塊（～1cm）を斑状に少量、ローム粒子（～4mm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第3層 暗褐色土 暗褐色土小塊（～3cm）を主体とし、ローム粒子（～8mm）を中量、黒褐色土小塊（～2cm）を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第4層 暗褐色土 暗茶褐色土小塊（～4cm）を主体とし、黒褐色土小塊（～1cm）を斑状に中量、ローム粒子（～8mm）を少量、ローム小塊（～1cm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第5層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、暗茶褐色土小塊（～1cm）を少量、ローム粒子（～2mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。

- 第6層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、暗茶褐色土小塊（～3cm）を少量、ローム粒子（～8mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第7層 黒褐色土 黒色土を主体とし、暗茶褐色土小塊（3cm）を少量、ローム粒子（～0.5mm）微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第8層 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、暗茶褐色土小塊（～1cm）・ローム粒子（～2mm）を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。

3. ピット

第1～5号ピット（第80図、図版47）

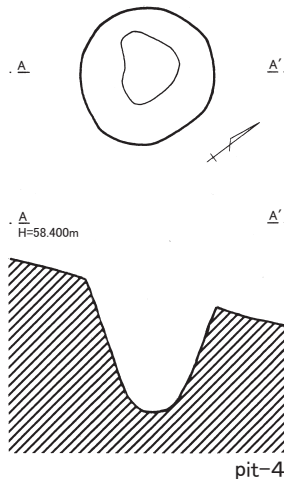
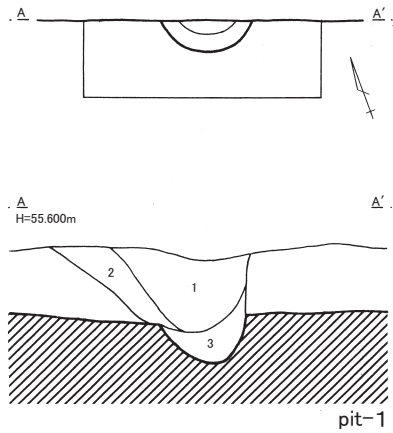
調査地点の林6号墳周溝内で検出遺構である。いずれも黒褐色土層を覆土に有し、同墳と一連のものと考えられるものであるが、本調査区内における規則性は明確ではない。第1・3号ピットの土層堆積の状態は、周溝底面付近の覆土が二次的に流入している状態であり、周溝底面付近の土層堆積時には、何らかの柱状物が遺存していた可能性が考えられるものである。

第1号ピットの壁における幅は24cm、深さは13cmを測る。第2号ピットの規模は、長径33cm、短径30.5cmを測り、周溝底面からの深さは、25cmを測る。第4号ピットの規模は、径約36cmを測り、周溝立ち上がり高位部からの深さは35cmを測る。第5号ピットの規模は、径約30cm、溝立ち上がり高位部からの深さは、35mを測る。

第6～7号ピット（第80図）

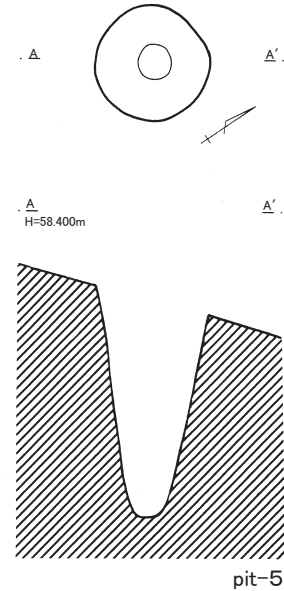
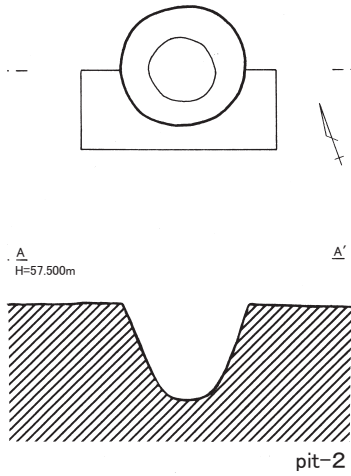
調査地点の林7号墳周溝内の、南壁にかかり検出遺構である。重複関係は、上位を第3号土坑によって切られている。いずれも黒褐色土層を覆土に有し、同墳と一連のものと考えられるものである。

第6号ピットの壁における幅は18cm、周溝底面からの深さは、16cmを測る。第7号ピットの幅は22cm、周溝底面からの深さは、10cmを測る。



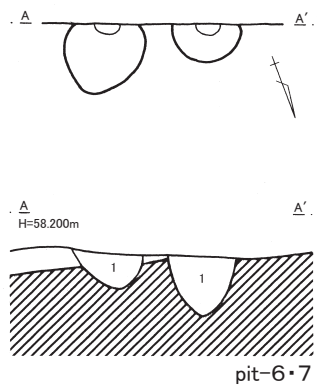
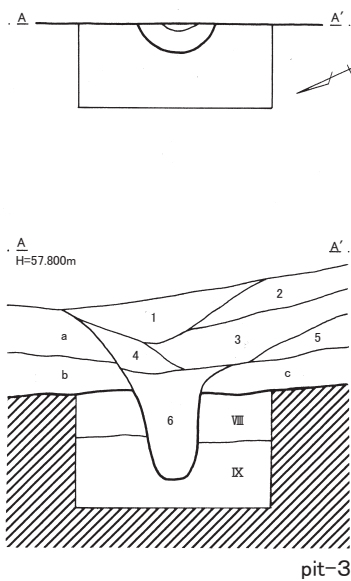
林地区第1号ピット土層説明

- 第1層 暗茶褐色土 ローム粒子(～8mm)・ローム小塊(～2cm)・黒褐色土粒子(～0.5mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第2層 明黄褐色土 ローム小塊(～2cm)・ローム粒子(～8mm)を主体とし、黒褐色土粒子(～0.5mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第3層 淡黄褐色土 肌色のローム小塊(～1cm)・ローム粒子(～8mm)を主体とし、黒褐色土粒子(～0.5mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。



林地区第3号ピット土層説明

- 第1層 黒褐色土 暗茶褐色土粒子(～0.5mm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第2層 黒褐色土 茶褐色土粒子(～0.5mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第3層 暗茶褐色土 黒褐色土粒子(～0.5mm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第4層 黒褐色土 暗茶褐色土小塊(～3cm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第5層 黒褐色土 暗茶褐色土小塊(～3cm)を少量、ローム小塊(～1cm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。
- 第6層 明茶褐色土 暗茶褐色土小塊・ローム小塊(～1cm)を少量、肌色のローム小塊(～3cm)を微量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。

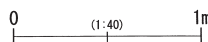


林地区第6号ピット土層説明

- 第1層 黒褐色土 未風化のローム小塊(～2cm)を少量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。

林地区第7号ピット土層説明

- 第1層 黒褐色土 未風化のローム小塊(～1cm)を中量含む。しまりは軟らかく、粘性は無し。



第80図 第1～6号ピット平面・断面図

第V章 ま と め

本報告の小島本伝遺跡は、JR高崎線本庄駅の北西約2.1km、本庄台地の北端に立地する。遺跡の範囲は神流川扇状地の扇端部が、緩やかな舌上に張り出した段丘崖上を占め、低地との比高差は本報告地点において、およそ10mを有する。本遺跡の南西には、旭・小島古墳群が展開している。

今回の発掘調査では、古墳時代中期から後期にかけての10軒の竪穴住居跡が検出された。小島本伝遺跡では、これまでの発掘調査と併せ合計17軒の竪穴住居跡が確認され、集落の一部ではあるがその様相が明らかとなってきた。以下小島本伝遺跡B・C地点において確認された古墳時代集落のあり方について触れておきたい。

検出された竪穴住居跡は、南北方向の一定の空闲地を介しながら集中して群在する傾向が看取され、重複した状態で検出されている（第4・5図 SI-9・16、SI-8・10・12～14、SI-11・15）。このような一定の区域に偏在する竪穴住居址群の在り方は、B地点においても、重複しない（同図 SI-7）、もしくはその可能性を残す住居址（同図SI-3）はあるものの、同様と指摘でき（同図SI-4～6）、B・C地点全体で、四つの群として捉えることができよう。古墳時代後期の集落の例となるが、このような一定の空闲地を有し、その空闲地間において重複して住居が構築される在り方は、本庄市今井川越田遺跡（磯崎 1995・伴瀬 1996・滝瀬 1997）や金佐奈遺跡（徳山他 1999）においても確認され、本地域における該期集落の一般的な特徴としてあげることができる。このような住居址群を、一家族における継続的な居住行為の累積として捉えるならば、その空間は、古墳時代集落内において一定の集団の占有し得る居住空間とみなす事ができ、なおかつ空闲地が維持されていることに注目するならば、空闲地を自己の占有地として獲得しえない、集落内における規律の存在が推定され、さらにその持続性が予想される。

このような土地占有あるいは土地区画の秩序は、墓域においてはどうかであろうか。林6・7号墳に目を向けてみよう。報文中に述べたように林7号墳周溝は、周辺の調査区との整合において整然とした方形とらならないことが予想され土橋状を呈するか、あるいは林6号墳周溝を回避し掘削されていると考えられるものである。林6・7号墳は、旭・小島古墳群の群形成においても開始期に近いものとされるものであることから、林7号墳周溝は全周するものの、周溝外側立ち上がり林6号墳周溝を避けて掘削されている可能性が高いものと推定される。この場合林7号墳の築造時には、林6号墳が築造されていることが前提となる。ここで前述の前提のもとにおいて林7号墳の築造が行われた場合、周溝を回避する行為は何に起因するであろうか。ここで先述した集落内における土地占有の在り方に注目すれば、墓域における占有可能な空間が限定されていることが想起されよう。つまり一定範囲内における造墓活動において、土地の有効活用を志向した結果として、周溝の回避がなされたものと考えられる。このように、土地占有あるいは土地利用において一定範囲の占有を堅持するが、共同体成員としての要件であると同時に、このような規範の存在が共同体、換言すれば集落の維持・存続を可能にさせる一要因となったものと考えられる。

本項では小島本伝遺跡という集落遺跡と、旭・小島古墳群林6・7号墳という古墳群の、一見異なる空間における該期の土地利用の在り方から、その背景にある秩序について推定してみた。このような規律または秩序とその存続のもとで、古墳時代集落が安定して営まれ、また長期に亘る造墓活動がなされたものと考えられよう。

<引用・参考文献>

- 赤熊浩一他 (1988) 『将監塚・古井戸―古墳・歴史時代Ⅱ―』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
- 礪崎 一他 (1995) 『今井川越田遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第171集
- 礪崎 一他 (1997) 『今井川越田遺跡Ⅲ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集
- 井上尚明他 (1986) 『将監塚・古井戸―古墳・歴史時代Ⅰ―』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
- 岩澤正作 (1926) 「児玉郡々志資料視察雑記(一)」 『上毛及上毛人』 丙寅二月号
- 岩澤正作 (1926) 「児玉郡々志資料視察雑記(二)」 『上毛及上毛人』 丙寅五月号
- 岩田明広 (1998) 『今井条里遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集
- 太田博之 (2006) 『旭・小島古墳群 - 林地区Ⅰ - 』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第3集
- 太田博之 (2007) 『旭・小島古墳群 - 林地区Ⅱ - 』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第6集
- 太田博之 (2008) 『旭・小島古墳群 - 杉ノ根・屋敷内・三杓山・森西・森ノ下地区 - 』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第11集
- 太田博之 (2008) 『雌濠遺跡』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第12集
- 太田博之・
松本 完 (2009) 『雌濠Ⅱ・笠ヶ谷戸・小島本伝』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第15集
- 柿沼幹夫他 (1979) 『下田・諏訪』 埼玉県遺跡発掘調査報告書21集
- 金鑽武城 (1932) 「児玉郡古墳分布調査」 『埼玉史談』 第四巻 第一号
- 恋河内昭彦 (1989) 『共和小学校校庭遺跡』 児玉町文化財調査報告書第10集
- 恋河内昭彦 (1993) 『川越田遺跡Ⅱ』 児玉町遺跡調査会報告第5集
- 恋河内昭彦 (1995) 『飯玉東Ⅱ・高縄田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴時・毛無し屋敷・石橋』 児玉町文化財調査報告書第17集
- 恋河内昭彦 (1996) 『辻堂遺跡Ⅰ』 児玉町文化財調査報告書第19集
- 恋河内昭彦 (1996) 『辻堂Ⅱ・南街道・宮田遺跡』 児玉町文化財調査報告書第20集
- 恋河内昭彦 (1997) 『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』 児玉町文化財調査報告書第23集
- 恋河内昭彦 (1998) 『向田A・向田B・壺丁田遺跡』 児玉町文化財調査報告書第27集
- 恋河内昭彦 (2008) 『七色塚遺跡Ⅱ - B1地点 - 北堀新田前遺跡 - A1地点 - 』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第15集
- 小久保徹他 (1977) 『塚本山古墳群』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集
- 小暮秀雄 (1927) 『武蔵国児玉郡誌』 (1973年復刻) 名著出版
- 坂本和俊他 (1981) 『金屋遺跡群』 児玉町文化財調査報告書第2集
- 坂本和俊他 (1986) 『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室
- 菅谷浩之 (1984) 『北武蔵における古式古墳の成立』 児玉町史資料報告・古代第1集
- 鈴木徳雄 (1984) 『阿知越遺跡Ⅱ』 児玉町文化財調査報告書第4集
- 鈴木徳雄 (1987) 『秋山東遺跡』 児玉町遺跡調査会報告書第2集
- 鈴木徳雄 (1989) 『真下境東遺跡』 児玉町文化財調査報告書第9集
- 鈴木徳雄 (1991) 「塩谷氏館跡と児玉党の形成」 『真鏡寺後遺跡Ⅲ』 児玉町文化財調査報告書第14集
- 鈴木徳雄 (1991) 『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第15集
- 鈴木徳雄 (1996) 『東鹿沼・藤塚B1・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第21集
- 瀧瀬芳之他 (1997) 『今井川越田遺跡Ⅲ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集
- 徳山寿樹他 (1994) 『平塚・左口・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第16集
- 徳山寿樹他 (1995) 『堀向・藤塚・柿島・内手・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第18集
- 徳山寿樹他 (1996) 『藤塚遺跡 - B2地点の調査 - 』 児玉町文化財調査報告書
- 徳山寿樹他 (1995) 『堀向・藤塚・柿島・内手・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第18集
- 徳山寿樹他 (1996) 『藤塚遺跡 - B2地点の調査 - 』 児玉町文化財調査報告書第22集
- 富田和夫他 (1981) 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告46集
- 長谷川 勇 (1987) 『社具路遺跡発掘調査報告』 本庄市教育委員会
- 伴瀬宗一 (1996) 『今井川越田遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第178集
- 増田逸朗他 (1982) 『後張』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告26集
- 増田一裕 (1987) 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第9集 第一分冊
- 増田一裕 (1989) 『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第14集
- 松本 完 (2002) 『久下前遺跡第3地点発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告 第25集
- 松本 完 (2002) 『九反田・観音塚遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第28集
- 松本 完 (2002) 『大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区(第2次)・北堀前山古墳群(第2・3次) 発掘調査報告書』 本庄市遺跡調査会報告第6集
- 松本 完 (2009) 『浅見山Ⅰ遺跡(Ⅲ次)・久下東遺跡(Ⅲ次) A1・B1地点・北堀久下塚北遺跡』 本庄市埋蔵文化財調査報告書 第13集

写 真 图 版

図版1 小島本伝遺跡



小島本伝遺跡C地点遠景（1）
（北東から）



小島本伝遺跡C地点遠景（2）
（北東から）



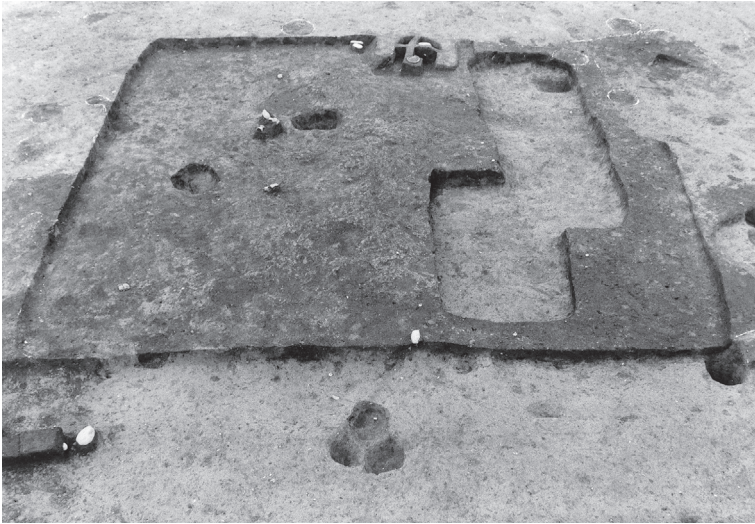
小島本伝遺跡C地点遠景（3）
（東から）



小島本伝遺跡C地点全景（1）（南から）



小島本伝遺跡C地点全景（2）（北西から）



第8号住居跡遺物出土状況（1）
（南から）



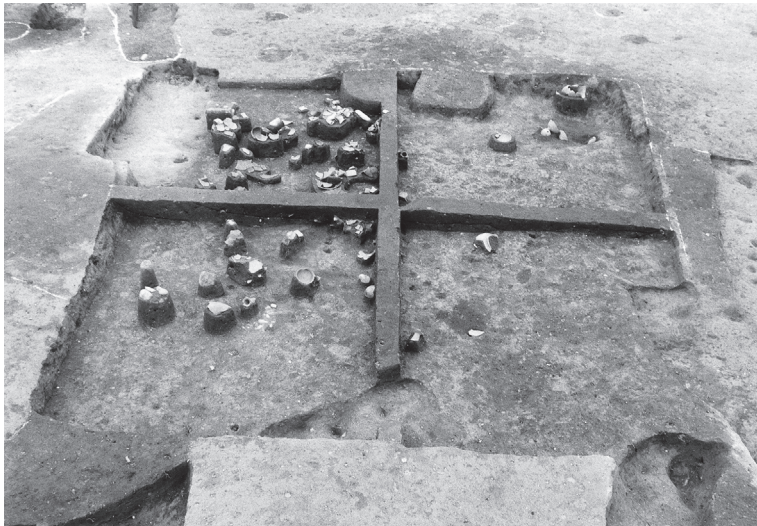
第8号住居跡遺物出土状況（2）
（東から）



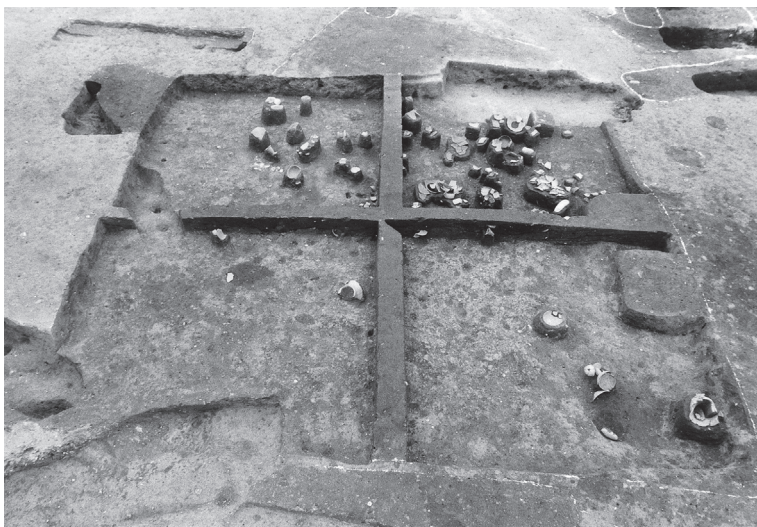
第8号住居跡カマドA-A' 断面
（南から）



第8号住居跡カマド遺物出土状況
(南から)



第9号住居跡カマドA-A' 断面
(西から)



第9号住居跡B-B' 断面
(南から)



第9号住居跡遺物出土状況（1）
（西から）



第9号住居跡遺物出土状況（2）
（南から）



第9号住居跡遺物出土状況（3）
（東から）



第9号住居跡遺物出土状況（4）
（南から）



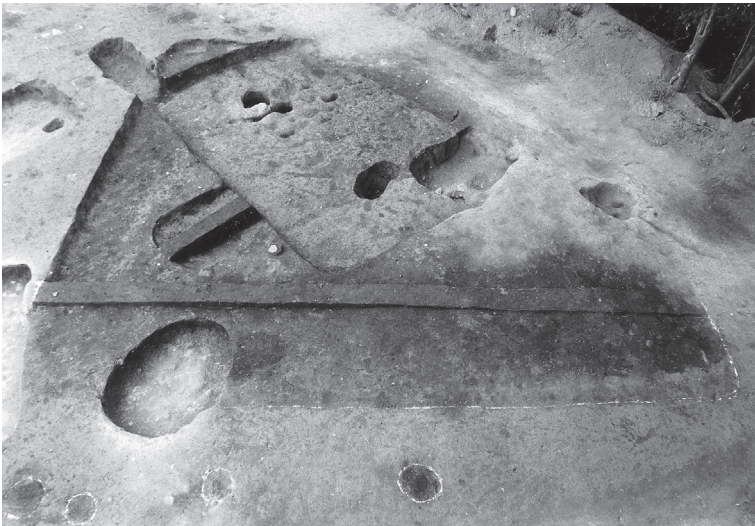
第9号住居跡完掘状況（1）
（西から）



第9号住居跡完掘状況（2）
（西から）



第10・14号住居跡完掘状況
(西から)



第11号住居跡A-A' 断面
(南から)



第11号住居跡遺物出土状況
(西から)



第12号住居跡遺物出土状況（1）
（南から）



第12号住居跡遺物出土状況（2）
（東から）



第12号住居跡カマド遺物出土状況
（南から）



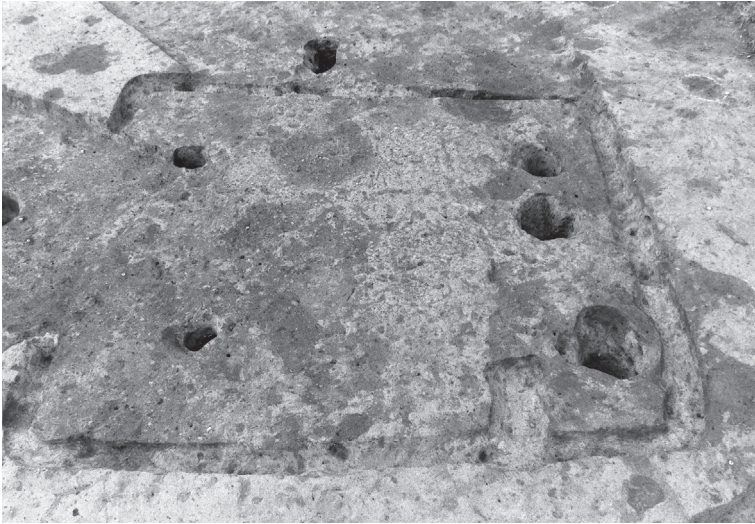
第12・13号住居跡完掘状況
(南から)



第14号住居跡A-A' 断面
(南から)



第14号住居跡B-B' 断面
(東から)



第14号住居跡完掘状況
(西から)



第15号住居跡遺物出土状況 (1)
(東から)



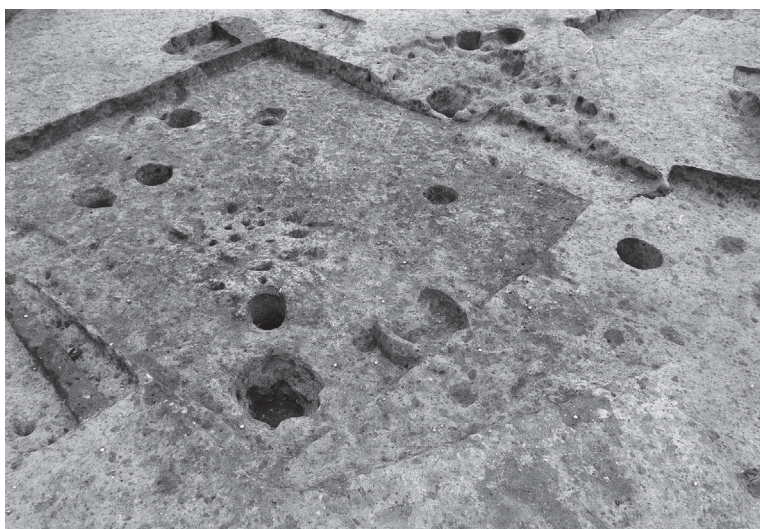
第15号住居跡遺物出土状況 (2)
(南から)



第15号住居跡遺物出土状況 (3)
(東から)



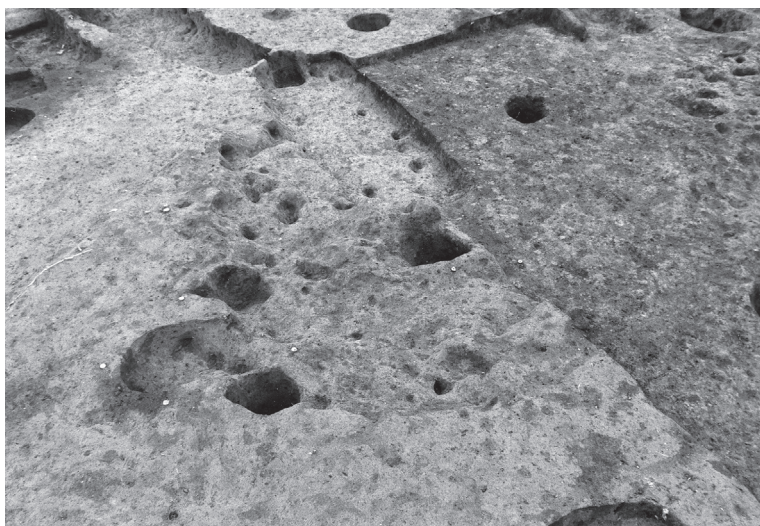
第16号住居跡完掘状況 (1)
(西から)



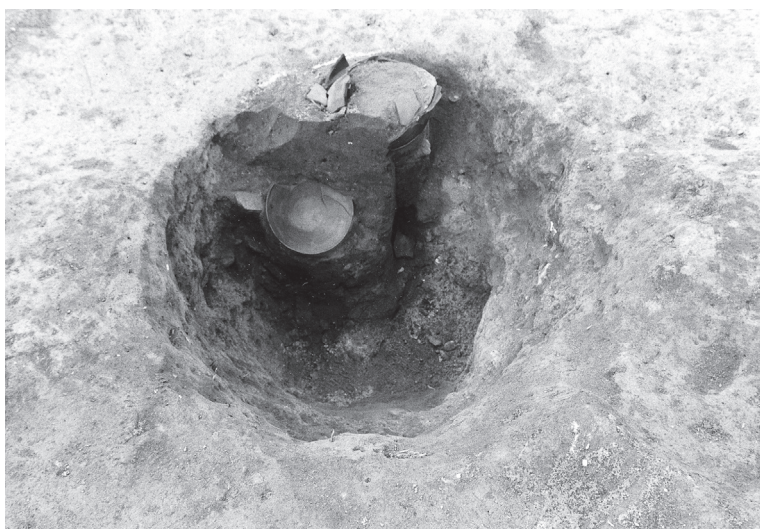
第16号住居跡完掘状況 (2)
(東から)



第16号住居跡完掘状況 (3)
(南から)



第16号住居跡完掘状況 (4)
(西から)



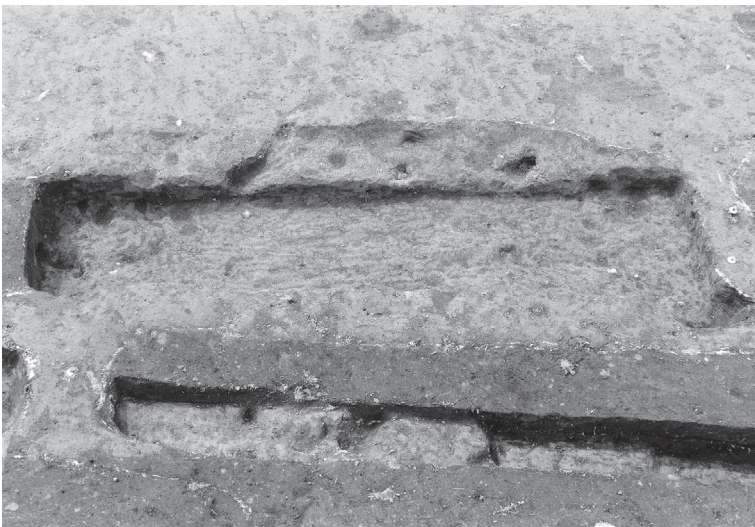
第17号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
(東から)



土坑群遠景（西から）



第11・12号土坑完掘状況
（東から）



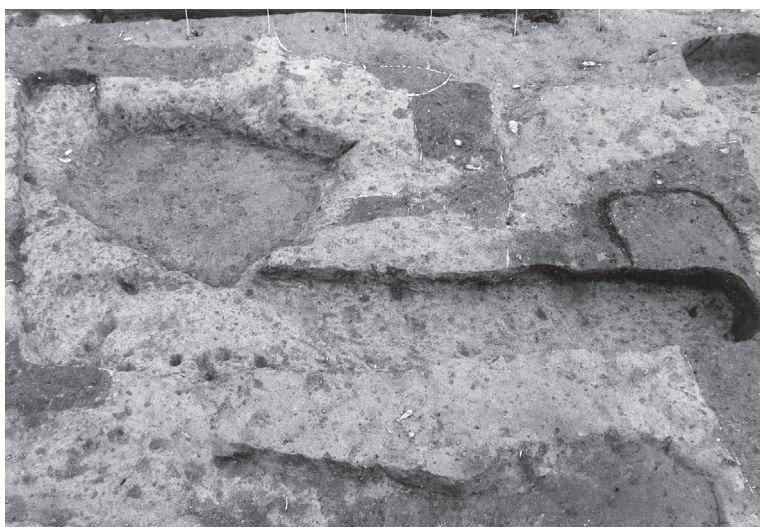
第14号土坑完掘状況（1）
（東から）



第14号土坑完掘状況 (2)
(南から)



第18号土坑完掘状況
(東から)



第21号土坑完掘状況
(東から)



第25号土坑完掘状況
(東から)



第26号土坑完掘状況 (東側)
(東から)



第28号土坑完掘状況
(南から)



第32号土坑完掘状況
(南から)



第34(左)・35(右)号土坑完掘状況
(南から)



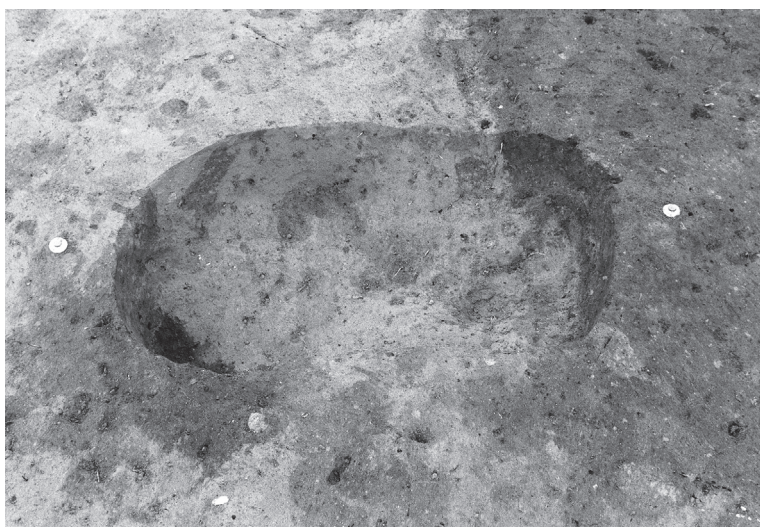
第38(前)・40(奥)号土坑完掘状況
(東から)



第39号土坑完掘状況
(東から)



第42(左)・43(右)号土坑完掘状況
(東から)



第48号土坑完掘状況
(西から)



第49号土坑完掘状況
(南から)



第50(前)・51(奥)号土坑完掘状況
(南から)



第52号土坑完掘状況 (中央奥)
(南から)



第49号土坑完掘状況
(南から)



第54(右)・55(左)号土坑完掘状況
(南から)



第56号土坑完掘状況
(南から)



第59号土坑完掘状況
(東から)



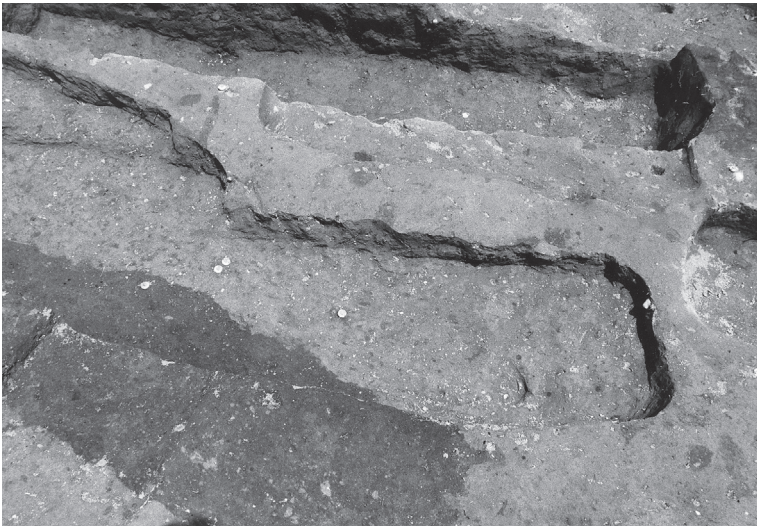
第60号土坑完掘状況
(南から)



第61号土坑完掘状況
(南から)



第62号土坑完掘状況
(南から)



第63号土坑完掘状況
(南から)



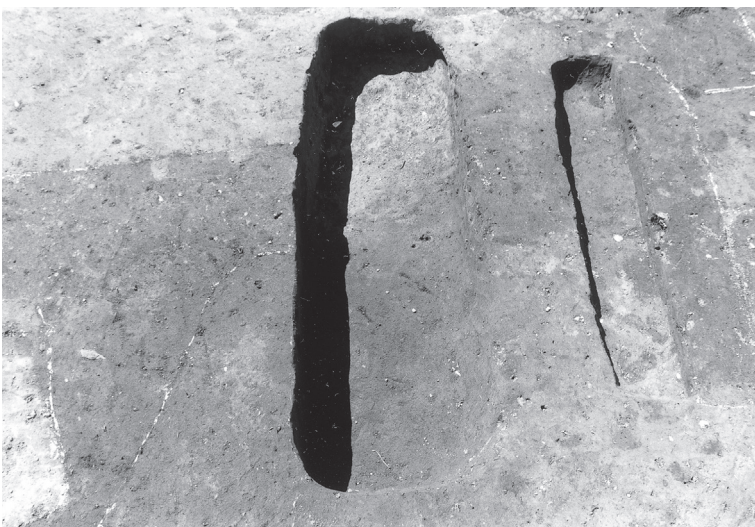
第64(前)・65(奥)号土坑完掘状況
(南から)



第65号土坑完掘状況
(南から)



第66号土坑完掘状況
(南から)



第68号土坑完掘状況
(東から)



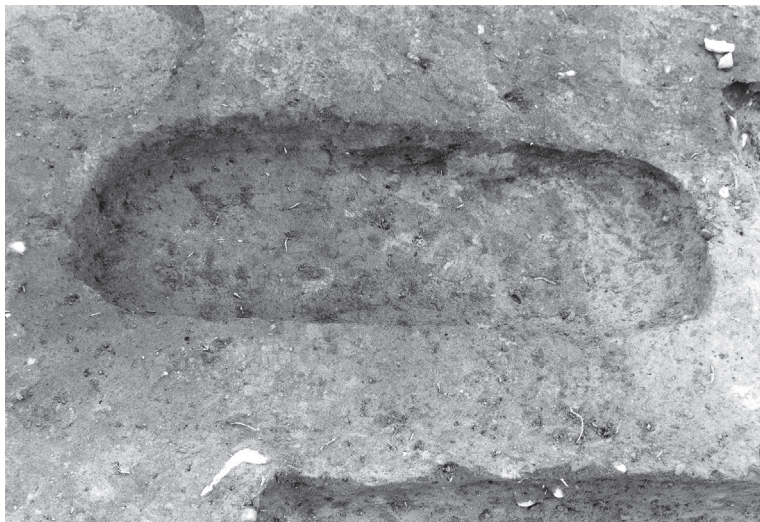
第69号土坑完掘状況（中央縦位）
（南から）



第70号土坑完掘状況
（南から）



第72・73(右奥)号土坑完掘状況
（南から）



第76号土坑完掘状況
(南から)



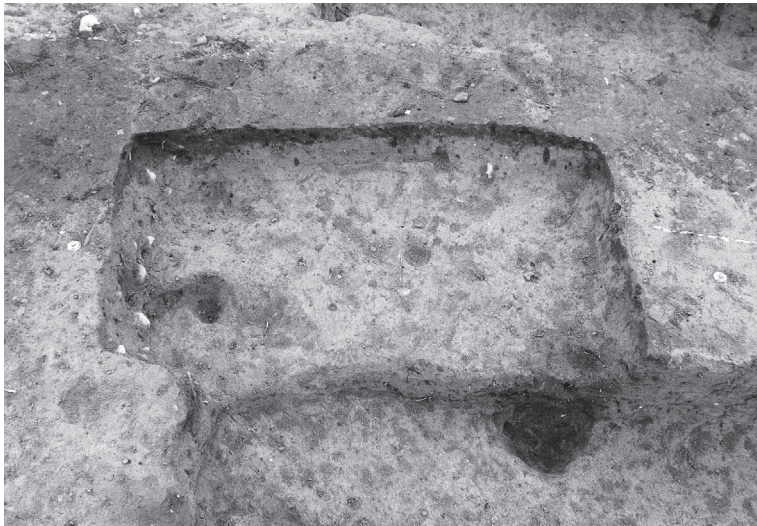
第77号土坑完掘状況
(南から)



第78号土坑完掘状況
(東から)



第79(中央)・80(前右)・76(前左)号
土坑完掘状況 (南から)



第80号土坑完掘状況
(南から)



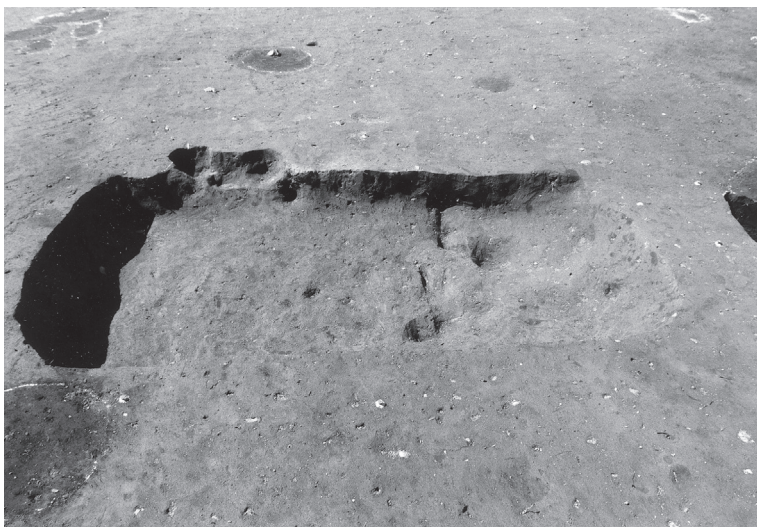
第81号土坑完掘状況
(南から)



第83号土坑完掘状況
(南から)



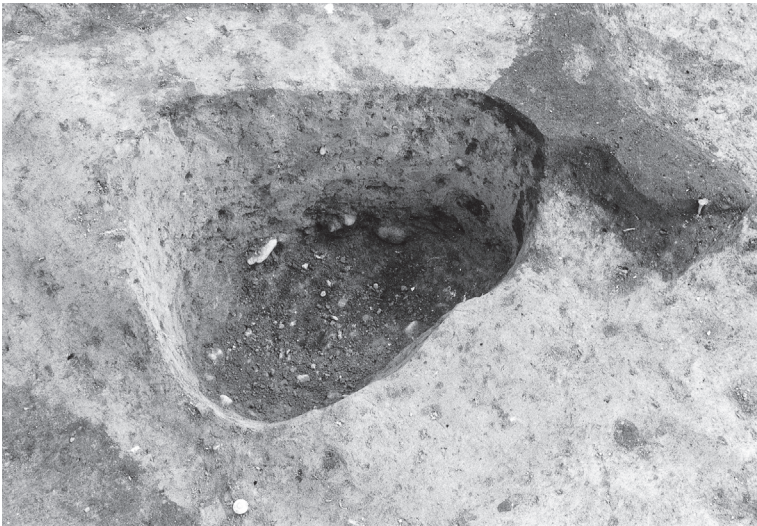
第84号住居跡A-A' 断面
(東から)



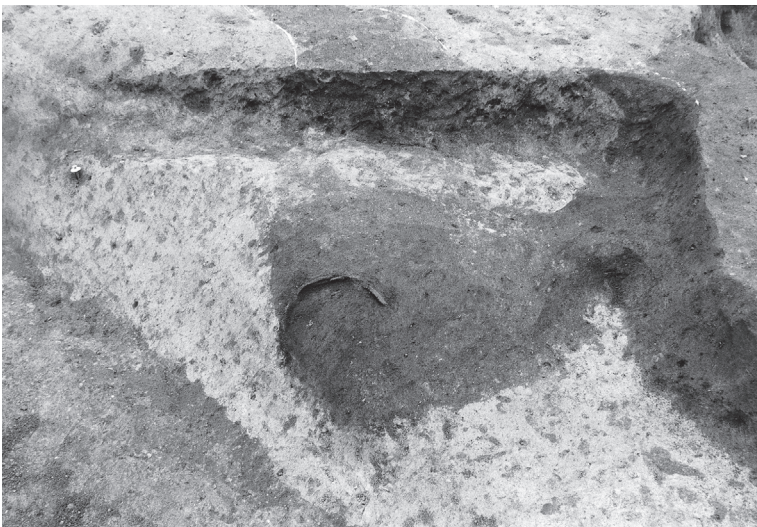
第84号土坑完掘状況
(東から)



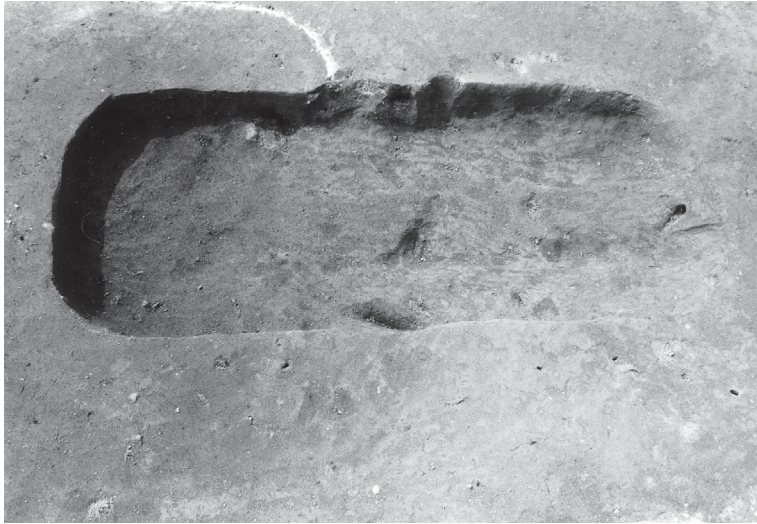
第85号土坑遺物出土状況
(東から)



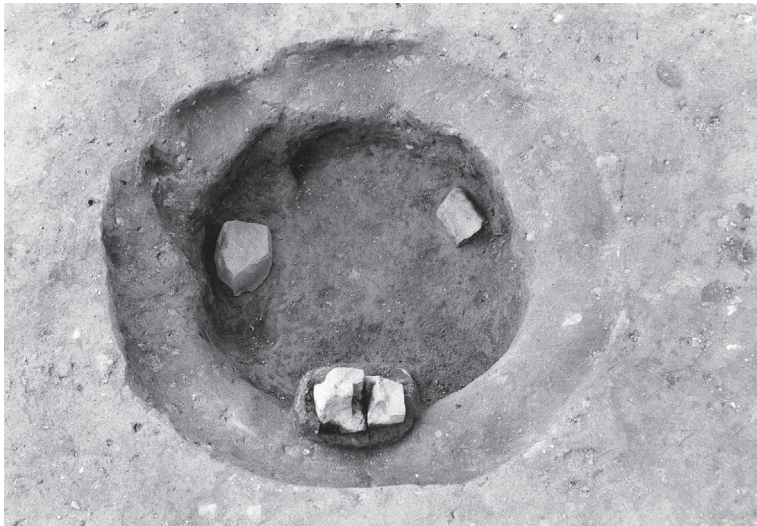
第88号土坑完掘状況
(南から)



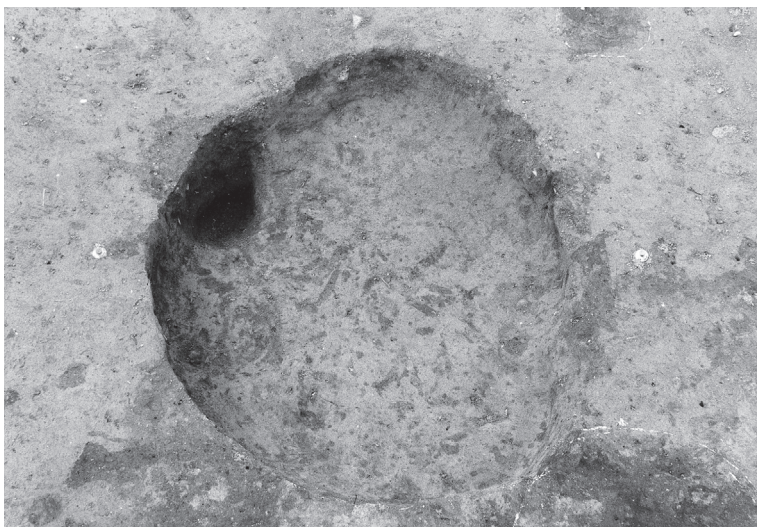
第89号土坑完掘状況
(北から)



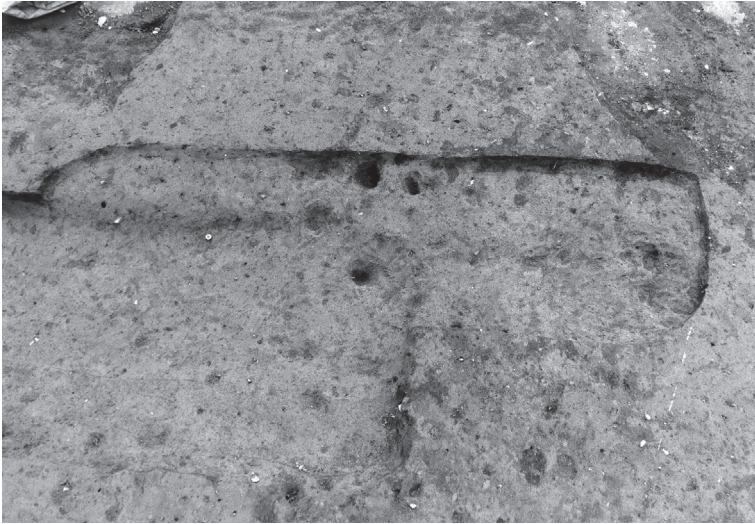
第90号土坑完掘状況
(東から)



第93号土坑遺物出土状況
(南から)



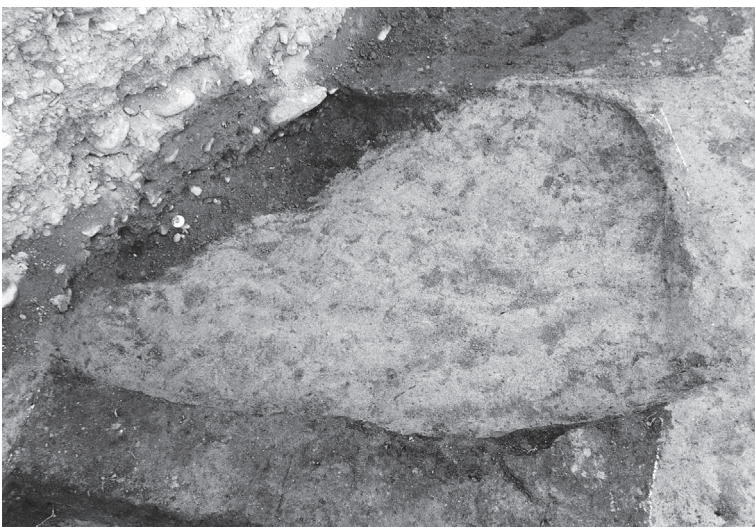
第96号土坑完掘状況
(南から)



第98号土坑完掘状況
(東から)



第99号土坑完掘状況
(南から)



第100号土坑完掘状況
(北から)



第101号土坑完掘状況
(南から)



第102号土坑完掘状況
(東から)



第105号土坑完掘状況
(西から)



第106号土坑完掘状況
(南から)



第107号土坑完掘状況
(南から)



第108号土坑A-A' 断面
(東から)



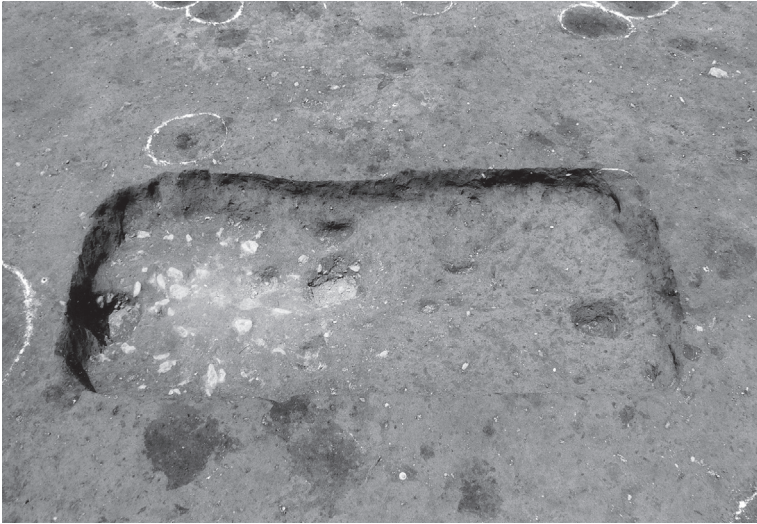
第108(前)・109(奥)号土坑完掘状況
(南から)



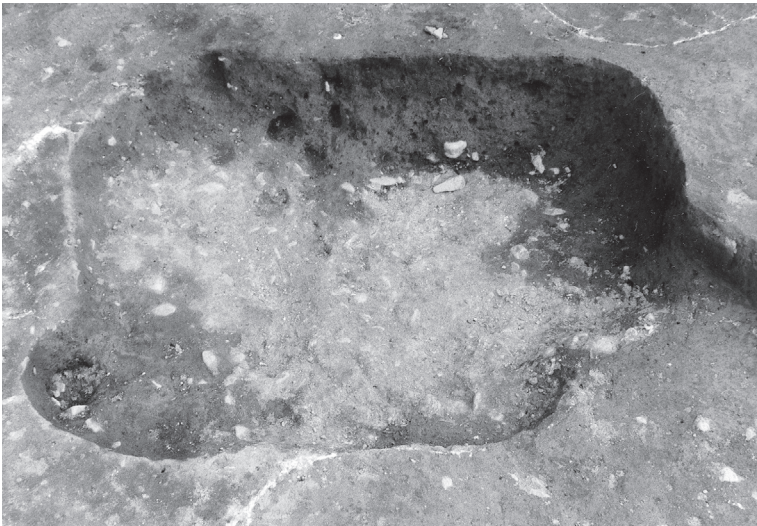
第109号土坑完掘状況
(南から)



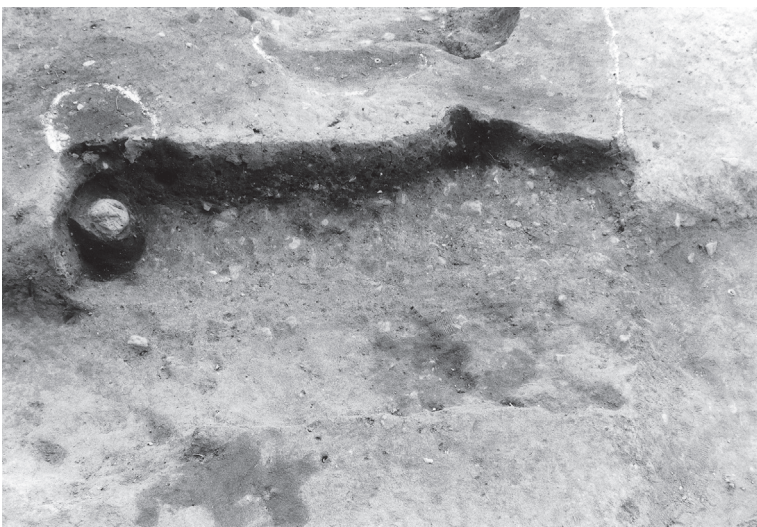
第110号土坑完掘状況
(西から)



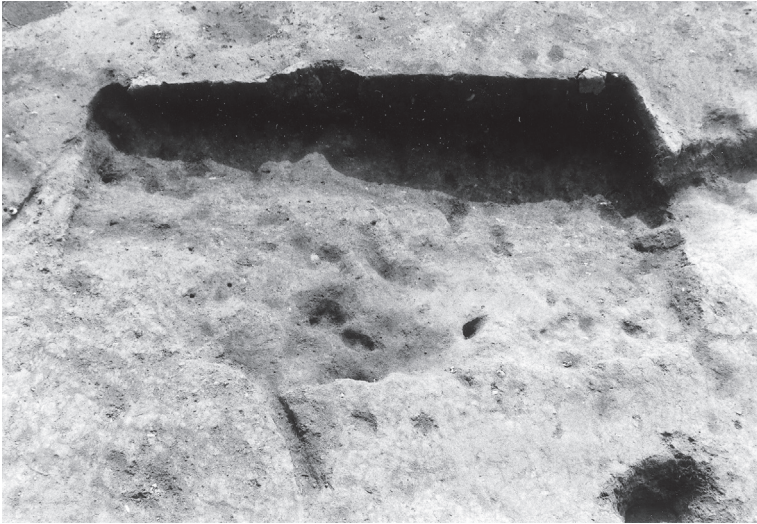
第112号土坑完掘状況
(南から)



第113号土坑完掘状況
(東から)



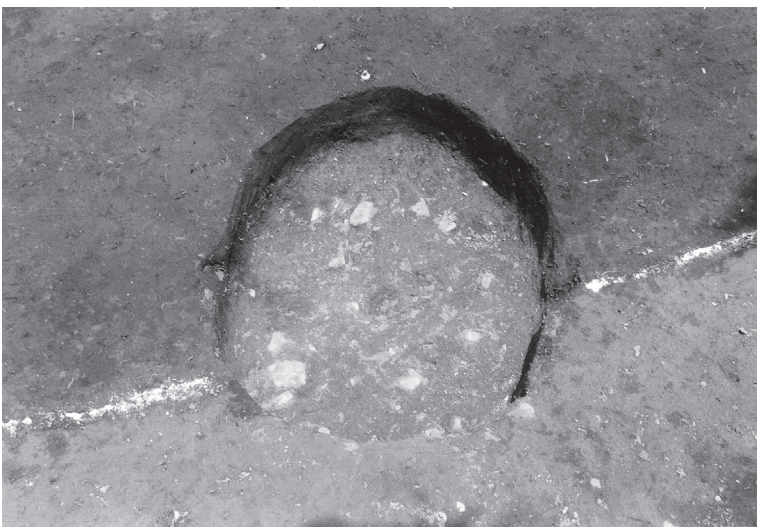
第114号土坑完掘状況
(東から)



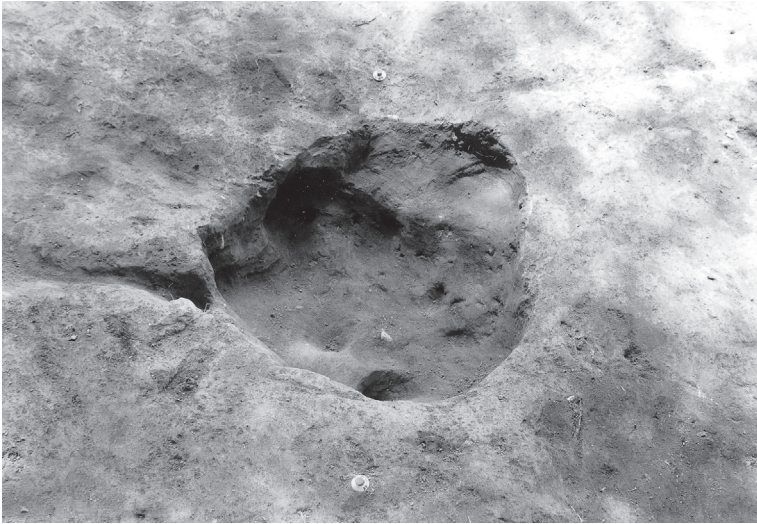
第115号土坑完掘状況
(東から)



第116号土坑完掘状況
(南から)



第118号土坑完掘状況
(南から)



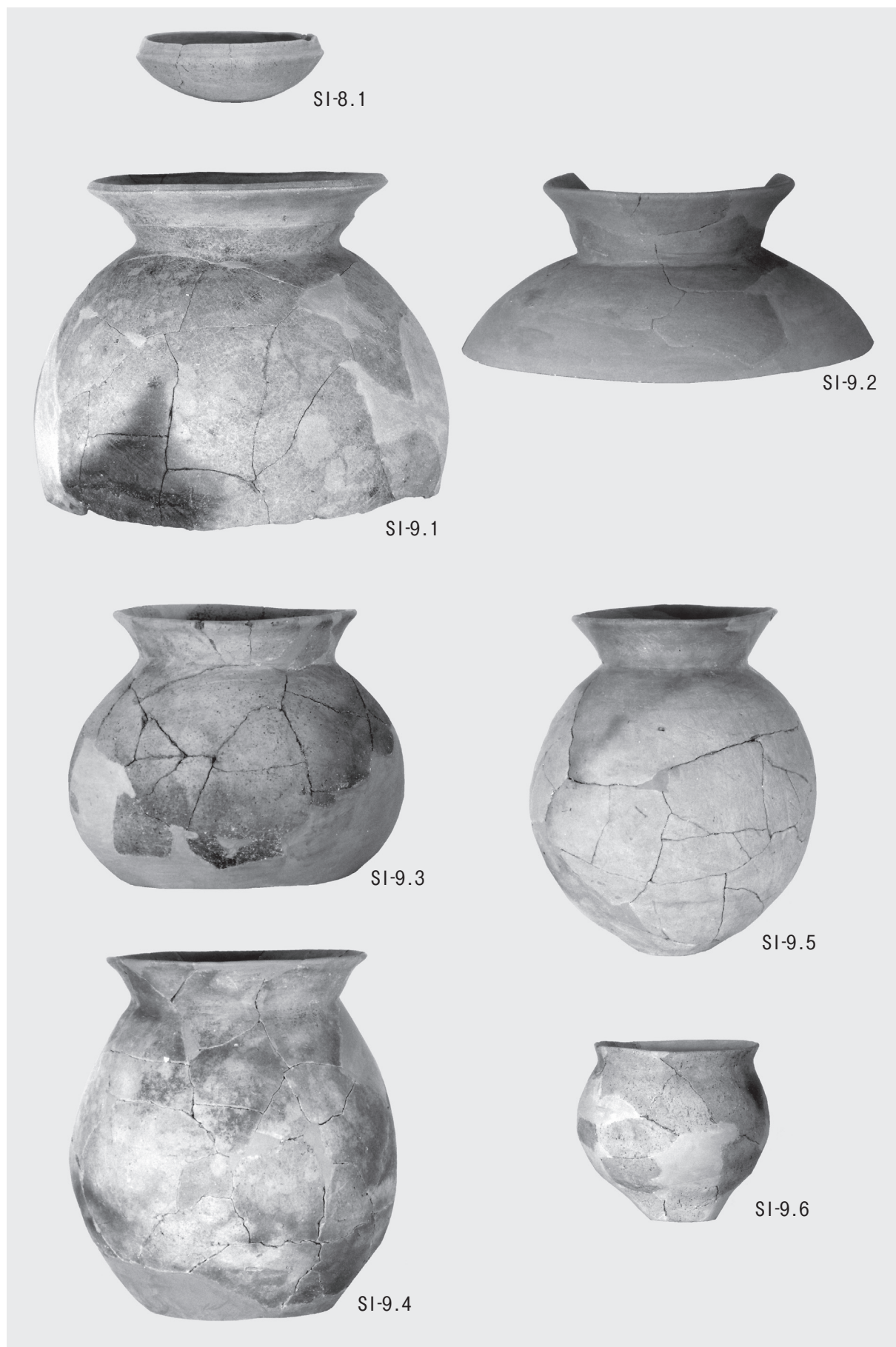
第119号土坑完掘状況
(東から)



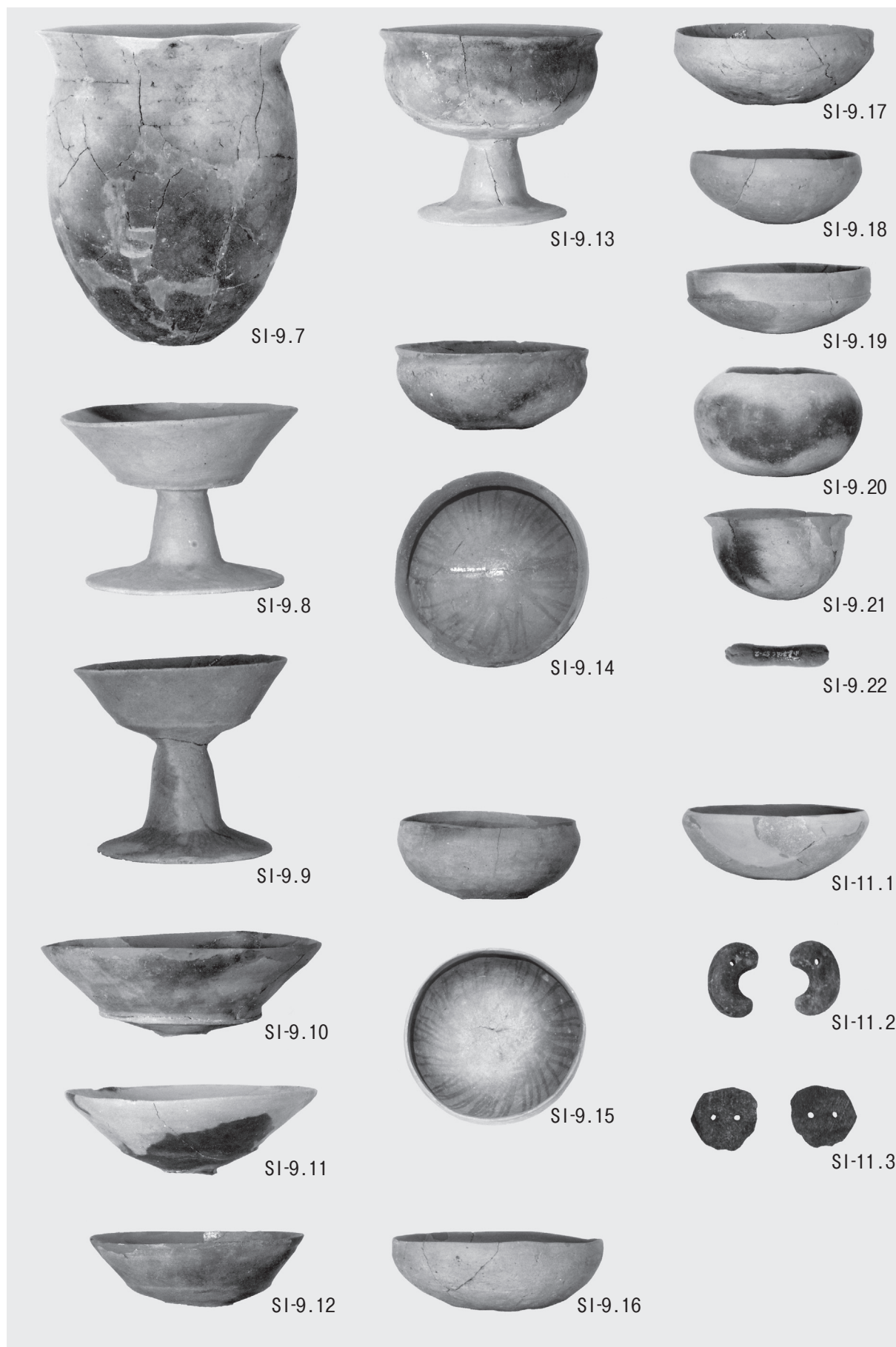
第120号土坑完掘状況
(南から)



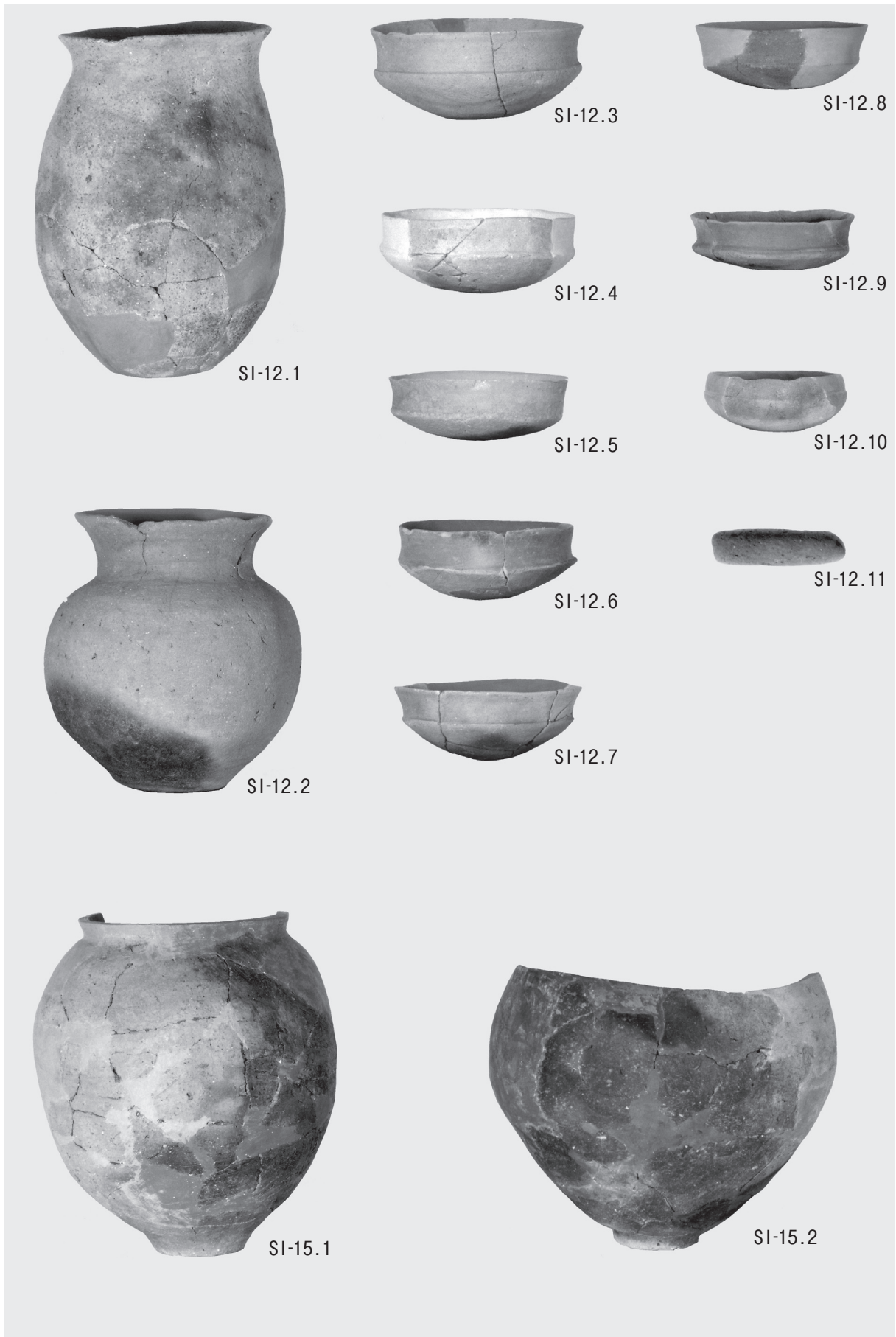
第121号土坑完掘状況
(南から)



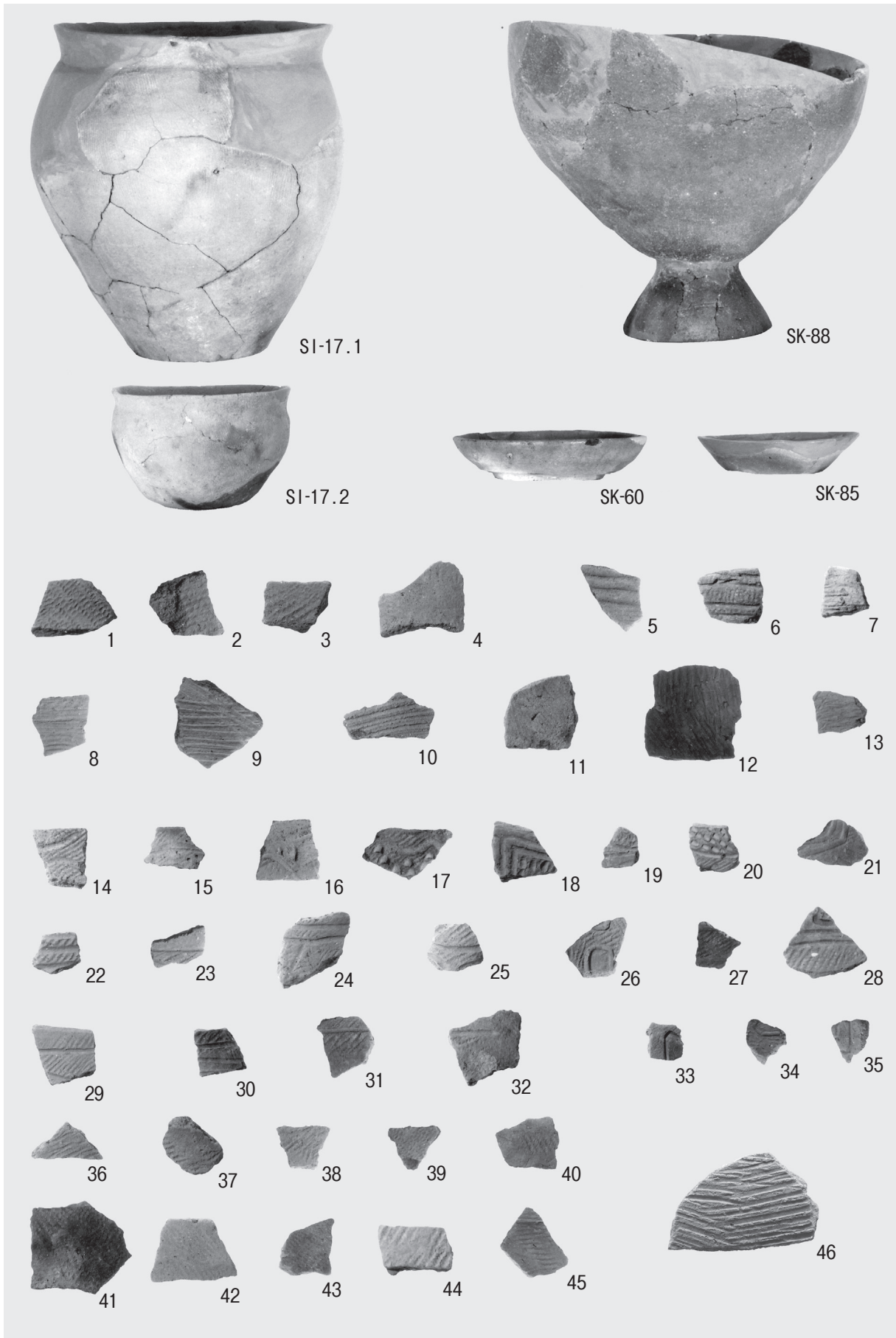
第8・9号住居跡出土遺物



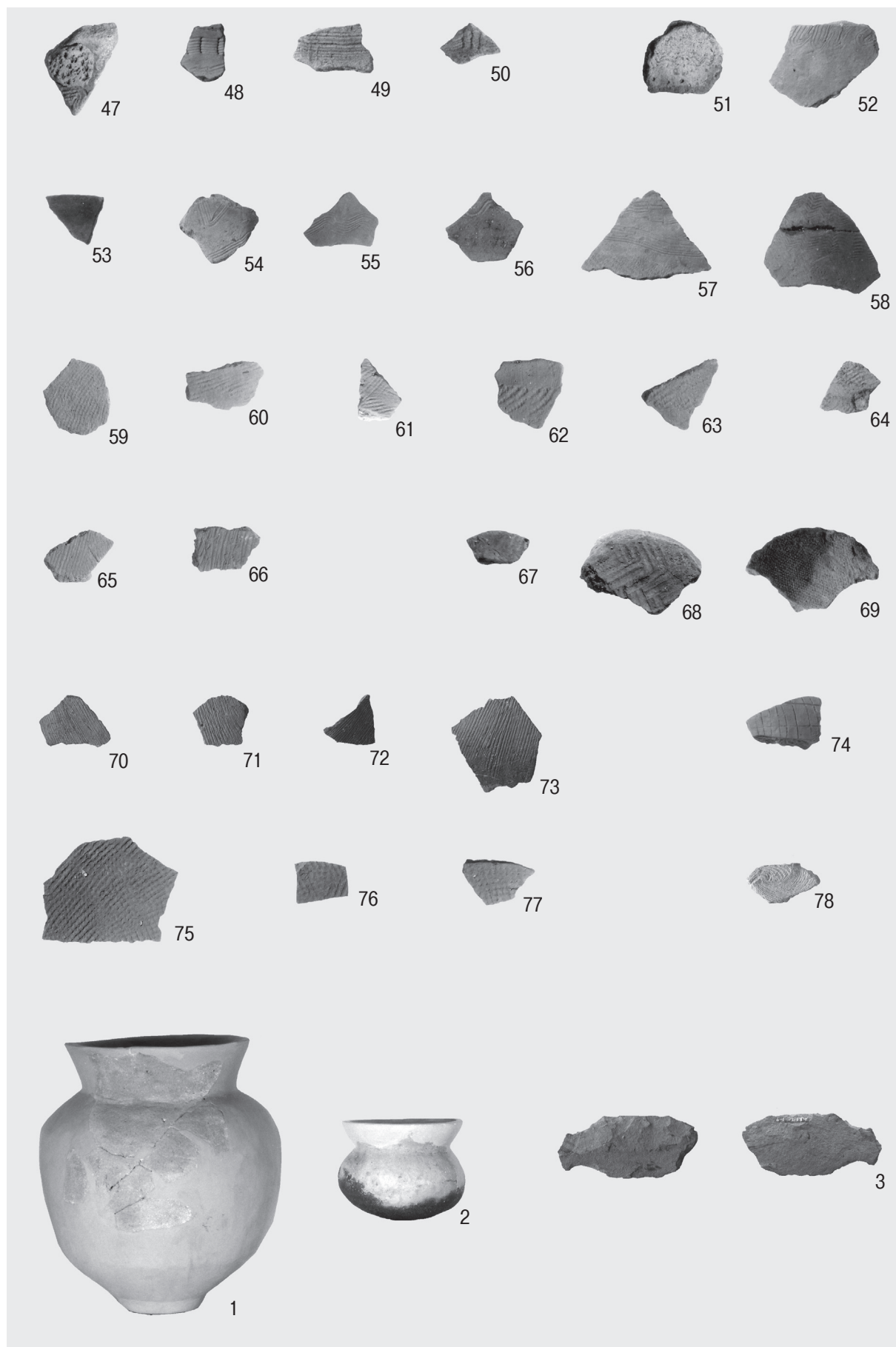
第9・11号住居跡出土遺物



第 12・15 号住居跡出土遺物



第 17 号住居跡・土坑・遺構外出土遺物 (1)



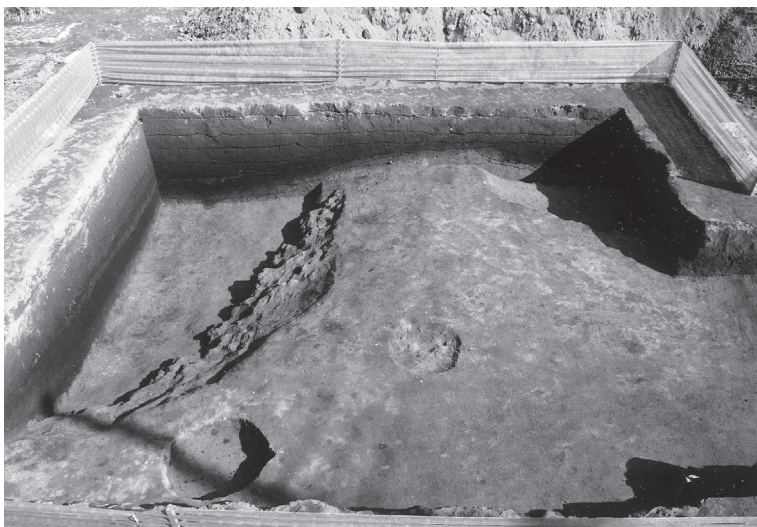
遺構外出土遺物 (2)



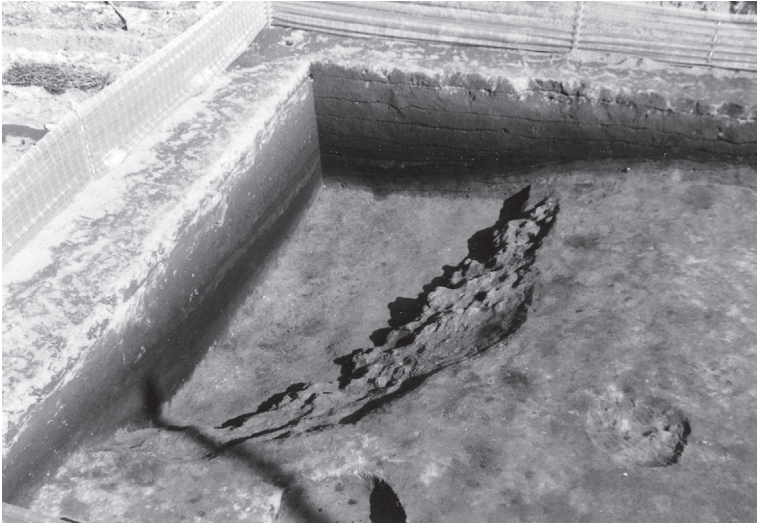
表土除去作業風景
(北東から)



遺構確認状況
(東から)



調査区全景
(西から)



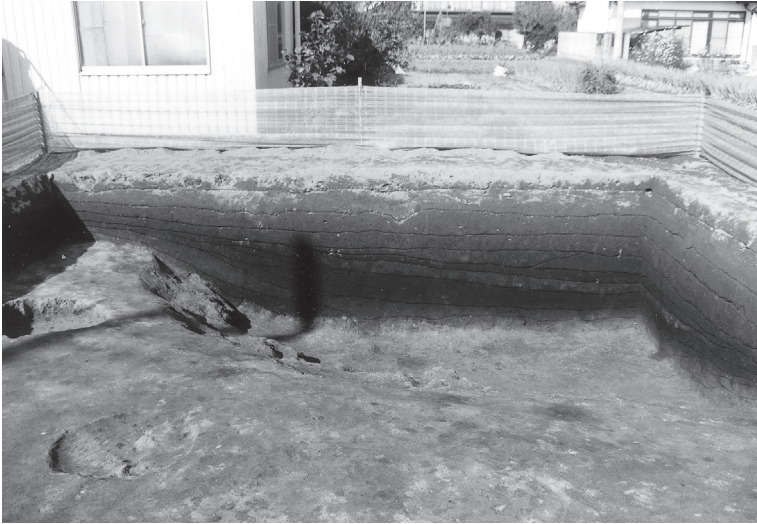
林6号墳周溝完掘状況 (1)
(西から)



林6号墳周溝完掘状況 (2)
(南西から)



林6号墳周溝完掘状況 (3)
(南西から)



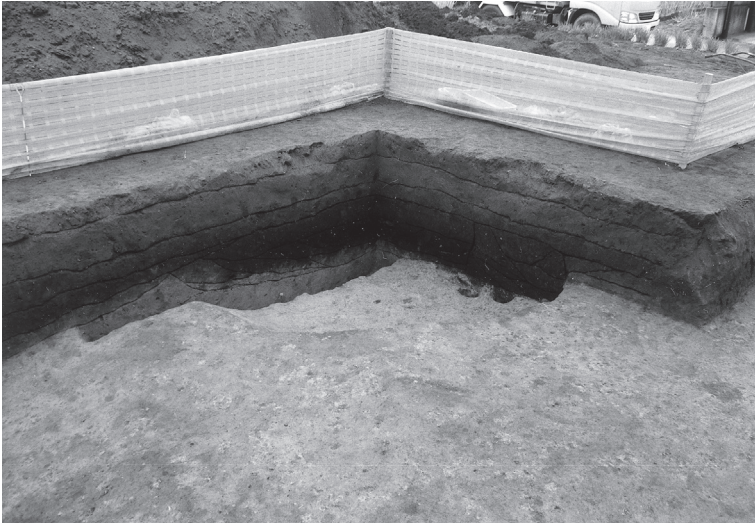
林6号墳周溝A-B断面(1)
(南から)



林6号墳周溝A-B断面(2)
(南から)



林6号墳周溝B-C断面
(西から)



林7号墳周溝完掘状況（1）
（北西から）



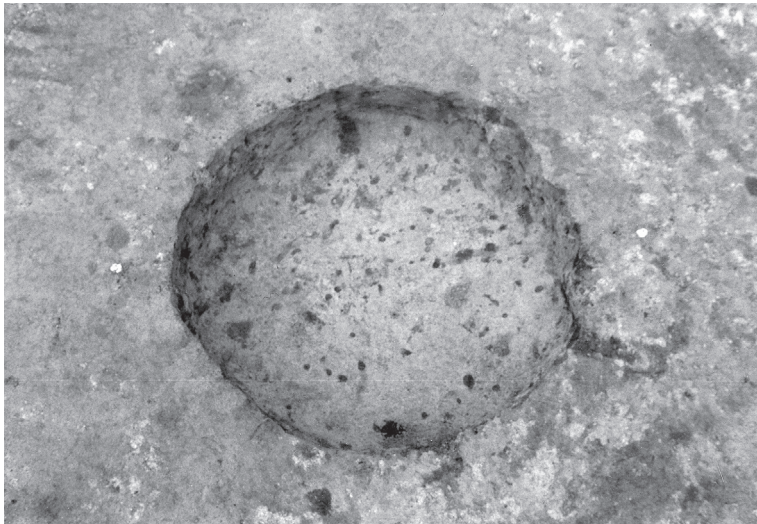
林7号墳周溝完掘状況（2）
（西から）



林7号墳周溝完掘状況（3）
（北から）



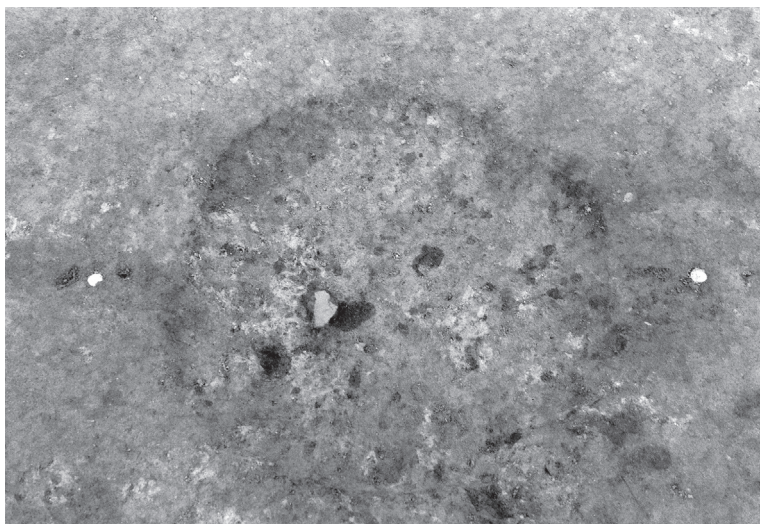
第1号土坑A-A' 断面
(東から)



第1号土坑完掘状況
(東から)



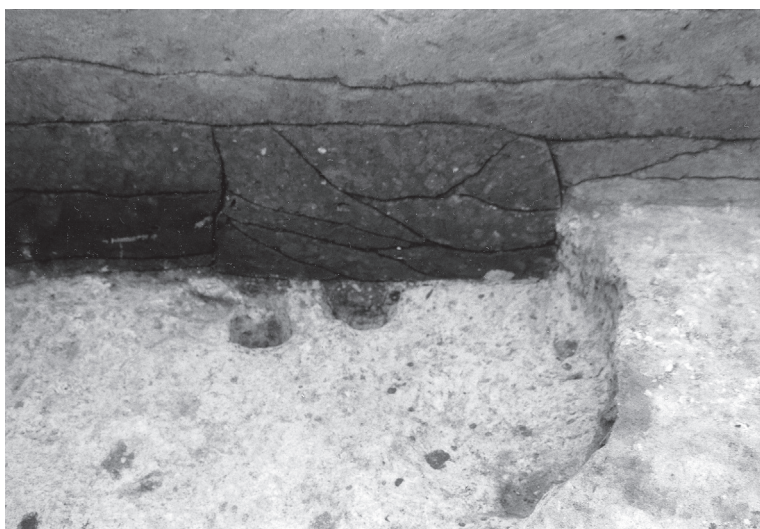
第2号土坑A-A' 断面
(東から)



第2号土坑遺物出土状況
(東から)



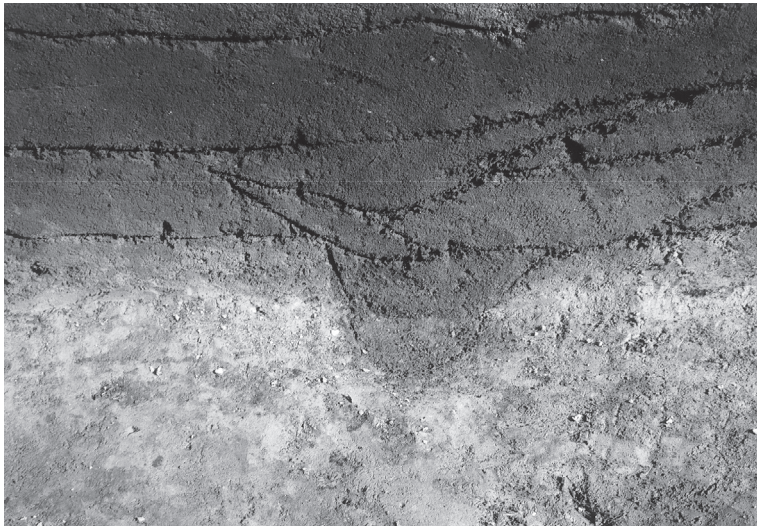
第2号土坑完掘状況
(東から)



第3号土坑A-A' 断面
(北から)



第1号ピットA-A' 断面
(南から)



第3号ピットA-A' 断面
(西から)



調査風景
(南西から)

報 告 書 抄 録

フリガナ	オジマホンデンイセキⅡ-Cチテン、アサヒ・オジマコフンダン-ハヤシ6・7ゴウワンDチテン							
書名	小島本伝遺跡Ⅱ-C地点、旭・小島古墳群-林6・7号墳D地点							
副書名								
シリーズ	本庄市埋蔵文化財調査報告書	巻次	第20集					
編著者	大熊 季広							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495-25-1185							
発行日	西暦2010年(平成22年) 3月 26日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コ ー ド 市町村	ド 遺跡	北 緯 (° ' ")	東 経 (° ' ")	調査期間	調査 面積	調査 原因
オジマホンデンイセキ 小島本伝遺跡Ⅱ C地点	ホンジョウシオジマ 本庄市小島 アサヒズミザカ パンチネカ 字泉坂876番地他	112119	53-008	36° 15' 06" (世界測地系)	139° 10' 23" (世界測地系)	20070521 ～ 20070828	695.68 m ²	個人住宅建設
アサヒ オジマコフンダン 旭・小島古墳群 ハヤシゴウワンチテン 林6・7号墳D地点	ホンジョウシオジマ 本庄市小島 アサヒハヤシ パンチ 字林77番地の一部	112119	53-171	36° 14' 54" (世界測地系)	139° 10' 00" (世界測地系)	20080924 ～ 20081003	41.75 m ²	〃
所収遺跡	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
オジマホンデンイセキ 小島本伝遺跡Ⅱ C地点	集 落	古墳時代 中・後期	竪穴住居跡10軒・土坑1基	土師器、石製模造品、 土製品				
		中・近世	土坑111基	カワラケ、陶器				
		縄文時代 古墳時代		縄文土器、弥生土器、須恵器、 石器				
アサヒ オジマコフンダン 旭・小島古墳群 ハヤシゴウワンチテン 林6・7号墳D地点	古墳	古墳時代	周溝2条、土坑3基、 ピット7基					

本庄市埋蔵文化財調査報告書第 20 集

小 島 本 伝 遺 跡 II

- C地点 -

旭・小島古墳群

- 林6・7号墳D地点 -

平成 22 年 3 月 26 日 印刷

平成 22 年 3 月 26 日 発行

発行／本庄市教育委員会

埼玉県本庄市本庄 3 丁目 5 番 3 号

印刷／山進社印刷株式会社

埼玉県本庄市本庄 3 丁目 3 番 36 号